日语注释读物

雪国

ゆきぐに

〔日〕川端康成 著

书
馆



日 语 注 释 读 物

雪　国

〔日〕川端康成　著
尚永清　译解



商 务 印 书 馆
1997·北京

图书在版编目(CIP)数据

雪国/(日)川端康成著. －北京:商务印书馆,1997
(日语注释读物)
ISBN 7-100-01941-9

I.雪… II.川… III.日语－语言教学－语言读物
IV.H 369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(95)第 09180 号



日语注释读物

XUĚ GUÓ

雪 国

〔日〕川端康成 著

尚永清 译解

商 务 印 书 馆 出 版
(北京王府井大街 36 号 邮政编码 100710)
新华书店总店北京发行所发行
河北省香河县第二印刷厂印刷
ISBN 7-100-01941-9/H·563

1997 年 10 月第 1 版 开本 787×1092 1/32
1997 年 10 月北京第 1 次印刷 字数 240 千
印数 3 000 册 印张 $11\frac{3}{4}$

定价:13.40 元

前　言

《雪国》是一篇文字优美，情节动人的悲剧故事。它的作者川端康成（1899～1972）属于日本大正末年兴起的新感觉派的作家。《雪国》在 1937 年开始陆续刊登在这一派的杂志《文学界》上。这部小说以日本东北地方降雪量最大，号称雪国的地方为背景，通过一个不务正业的男子岛村同一个出入在雪国温泉旅馆的艺妓驹子和另外一个美少女叶子这三人之间的心理纠葛而细腻生动地描写人生宿命的悲惨结局。这部小说全篇完成于 1948 年。1968 年《雪国》和川端的另外两篇小说：《古都》、《千只鹤》一并获得诺贝尔文学奖。

所谓新感觉派是在日本大正末年与日本的普罗文学运动同时诞生的文学流派，属于这一派的作家还有知名的横光利一、片冈铁兵、中河与一等人。这一流派深受第一次世界大战后在西方兴起的艺术运动——未来派、表现派等的影响，是在美国机械主义压力下兴起并试图打破旧传统的一个文学运动。同时也是针对当时流行的所谓“私小说”（以作者本人的生活素材为主题的小说）的一个挑战。

新感觉派在形式上注重优美的风格和新颖的笔调。它试图从感觉上描写事物，因而它也带有一种象征主义的味道。《雪国》的开篇头两句就可以算作最好的例子：

“国境の长いトンネルを拔けると，雪国であった。夜の底が白くなった。”

第一句的“名词＋であった。”和第二句的“形容词连用形＋なった。”都是从感觉上发现事物的已经实现和变化的。其中第二句的「夜の底」是一个新奇的词组。这个“夜的底部”从字面看，无论日语还是汉语都是不好理解的。其实，它想表达的是：在列车上观看车外的景物时，车窗就是一幅风景画，而它的底部当然是指大地而言了。因此这个句子就是说“大地变成了白色。”而言外之意，列车开入隧道之前的大地，没有雪因而是黑的，而列车穿过隧道一进入雪国，大地便是白雪皑皑了。这就是新感觉派的一种手法。总的说来，《雪国》对大自然的描写是优美的；人物的心理描述是细腻出色的。读者在阅读中自然会体会到这一点。

本书出版的目的是为日语专业高年级学员和同等以上学力的同志提供一个直接阅读名著原文的辅导读物。在本书的注释部分对于一些较难的语法问题以及风俗习惯上难于理解的词句，都作了较为详细的解说。当然，限于译注者的水平，缺点和挂漏在所难免。深望广大读者和专家不吝金玉给以指正。

尚永清

1996年5月

[redacted]

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった①。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

向側の座席から娘が立って来て，島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いっぱいに乗り出して，遠くへ叫ぶように

「駅長さあん，駅長さあん。」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は，襟巻で鼻の上まで包み，耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると，鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒寒と散らばっているだけで，雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた②。

「駅長さん，私です，御機嫌よろしゅうございます。」

「ああ，葉子さんじゃないか，お帰りかい。また寒くなったよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいておりますのですってね。お世話さまですわ。」

「こんなところ，今に寂(さび)しくて参(まい)るだろうよ。若(わか)いのに可哀想(かわいそう)だな。」

「ほんの子供ですから，駅長さんからよく教(おし)えてやっていただいて，よろしくお願(ねが)いいたしますわ③。」

「よろしい。元気で働(はたら)いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だったよ。よく雪崩(なだ)れてね，汽車が立往生(たちおうじょう)するんで，村(むら)も焚出(たきだ)しがいそがしかったよ。」

「駅長さんずいぶん厚着(あつぎ)に見えますわ。弟の手紙には，まだチョッキも着ていないようなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重(よんまいかさ)ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでいるよ。それでごろごろあすこにぶっ倒(たお)れてるのさ，風邪(かぜ)をひいてね④。」

駅長は官舎の方へ手の明りを振(ふ)り向(む)けた。

「弟もお酒をいただきますでしょうか」。

「いや。」

「駅長さんもうお帰りですの?」

「私は怪我(けが)をして，医者に通(かよ)ってるんだ。」

「まあ，いけませんわ。」

和服(わふく)に外套の駅長は寒い立話(たちばなし)をさっさと切(き)り上(あ)げた

いらしく，もう後姿を見せながら，

「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」

「駅長さん，弟は今出ておりませんの?」と，葉子は雪の上を目捜しして，

「駅長さん，弟をよく見てやって，お願いです⑤。」

悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうだった⑥。

汽車が動き出しても，彼女は窓から胸を入れなかった。そうして線路の下を歩いている駅長に追いつくと，

「駅長さあん，今度の休みの日に家へお帰りって，弟に言ってやって下さあい。」

「はあい。」

葉子は窓をしめて，赤らんだ頬に両手をあてた。

ラッセルを三台備えて雪を待つ，国境の山であった。トンネルの南北から，電力による雪崩報知線が通じた。除雪人夫延人員五千名に加えて消防組青年団の延人員二千名の出動の手配がもう整っていた。

そのような，やがて雪に埋れる鉄道信号所に，葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分かると，島村は一層彼女に興味を強めた⑦。

しかし，ここで「娘」と言うのは，島村にそう見えたからであって，連れの男が彼女のなんであるか，無論島村の知るはずはなかった。二人のしぐさは夫婦じみていたけれども，男は明らかに病人だった。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ，まめまめしく世話すればするほど，夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上の男をいたわる女の幼ない母ぶりは，遠目に夫婦とも思われよう⑧。

島村は彼女一人だけを切り離して，その姿の感じから，自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。でもそれには，彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果，彼自らの感傷が多分に加わってのことかも知れない⑨。

もう三時間も前のこと，島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては，結局この指だけが，これから会いに行く女をなまなましく覚えている，はっきり思い出そうとあせればあせるほど，つかみどころなくぼやけていく記憶の頼りなさのうちに，この指だけは女の触感で今も濡れていて，自分を遠くの女へ引き寄せるかのようだと，不思議に思いながら，鼻につけて

匂いを嗅いでみたりしていたが，ふとその指で窓ガラスに線を引くと，そこに女の片眼がはっきり浮き出たのだった⑩。彼は驚いて声をあげそうになった。しかしそれは彼が心を遠くへやっていたからのことで，気がついてみればなんでもない⑪，向側の座席の女が写ったのだった。外は夕闇がおりているし，汽車のなかは明りがついている。それで窓ガラスが鏡になる。けれども，スチームの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れているから，指で拭くまでその鏡はなかったのだった。

娘の片眼だけは反って異様に美しかったものの，島村は顔を窓に寄せると，夕景色見たさという風な旅愁顔を俄かづくりして，掌でガラスをこすった。

娘は胸をこころもち傾けて，前に横たわった男を一心に見下していた。肩に力が入っているところから，少しいかつい眼も瞬きさえしないほどの真剣さのしるしだと知れた⑫。男は窓の方を枕にして，娘の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。島村の真横ではなく，一つ前の向側の座席だったから，横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので，じかにだって見られるのだが，彼女等が汽車に乗り込んだ時，なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端⑬，娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから，島村は二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。

鏡の中の男の顔色は，ただもう娘の胸のあたりを見ているゆえに安らかだという風に落ちついていた。弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた⑭。襟巻を枕に敷き，それを鼻の下にひっかけて口をぴったり覆い，それからまた上になった頬を包んで，一種の頬かむりのような工合だが，ゆるんで来たり，鼻にかぶさって来たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに，娘はやさしい手つきで直してやっていた⑮。見ている島村がいら立って来るほど幾度もその同じことを，二人は無心に繰り返していた。また，男の足をつつんだ外套の裾が時時開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ気がついて直してやっていた。これがまことに自然であった。このようにして距離というものを忘れながら，二人は果てしなく

遠くへ行くものの姿のように思われたほどだった⑯。それゆえ島村は悲しみを見ているというつらさはなくて，夢のからくりを眺めているような思いだった。不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう。

鏡の底には夕景色が流れていて，つまり写るものと写す鏡とが，映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人物は透明のはかなさで，風景は夕闇のおぼろな流れで，その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた⑰。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には，島村はなんともいえぬ美しさに胸が顫えたほどだった。

遥かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだったから，窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはいなかった。しかし色はもう失われてしまっていて，どこまで行っても平凡な野山の姿が尚更平凡に見え，なにものも際立って注意を惹きようがないゆえに，反ってなにかぼうっと大きい感情の流れであった。無論それは娘の顔をそのなかに浮べていたからで

ある。姿(すがた)が写る部分だけは窓の外が見えないけれども，娘の輪郭(りんかく)のまわりを絶(た)えず夕景色が動いているので，娘の顔も透明のように感(かん)じられた。しかしほんとうに透明かどうかは，顔の裏(うら)を流れてやまぬ夕景色が顔の表(おもて)を通(とお)るかのように錯覚(さつかく)されて，見極(みきわ)める時がつかめないのだった⑱。

汽車のなかもさほど明(あか)るくはなし，普通の鏡のように強くはなかった⑲。反射(はんしや)がなかった。だから，島村は見(み)入(い)っているうちに，鏡のあることをだんだん忘れてしまって，夕景色の流れのなかに娘が浮(うか)んでいるように思われて来た。

そういう時彼女の顔のなかにともし火がともったのだった。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかった。ともし火も映像を消(け)しはしなかった。そうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだった。しかし彼女の顔を光(ひか)り輝(かがや)かせるようなことはしなかった。冷(つめ)たく遠い光であった。小さな瞳(ひとみ)のまわりをぼうっと明(あか)るくしながら，つまり娘の眼と火とが重(かさ)なった瞬間(しゆんかん)，彼女の眼は夕闇(ゆうやみ)の波間(なみま)に浮(うか)ぶ，妖(あや)しく美しい夜光虫(やこうちゆう)であった⑳。

こんな風に見られていることを，葉子は気づくはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪われていたが，たとえ島村の方へ振り向いたところで，窓ガラスに写る自分の姿は見えず，窓の外を眺める男など目にも止まらなかっただろう。

島村が葉子を長い間盗見しながら，彼女に悪いということを忘れていたのは，夕景色の鏡の非現実な力にとらえられていたからだろう㉑。

だから彼女が駅長に呼びかけて，ここでもなにか真剣過ぎるものを見せた時にも，物語めいた興味が先に立ったのかも知れない㉒。

その信号所を通るころは，もう窓はただ闇であった。向うに景色の流れが消えると，鏡の魅力も失われてしまった。葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども，その温かいしぐさにかかわらず，島村は彼女のうちになにか澄んだ冷たさを新しく見つけて，鏡の曇って来るのを拭おうともしなかった㉓。

ところがそれから半時間ばかり後に，葉子達も思いがけなく島村と同じ駅に下りたので，彼はまたなにか起こるかと自分にかかわりがあるかのように振り返ったが，

プラット・フォームの寒さに触れると，急に汽車のなかの非礼が恥ずかしくなって，後も見ずに機関車の前を渡った㉔。

男が葉子の肩につかまって線路へ下りようとした時に，こちらから駅員が手を上げて止めた。

やがて闇から現われて来た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうにものものしい雪装束だった㉕。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいてゐた。待合室の窓から線路の方を眺めて立ってゐる女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶってゐた。

島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そとのほんとうの寒さをまだ感じなかったけれども、雪国の冬は初めてだから、土地の人のいでたちに先づおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」

「へい、もうすっかり冬支度です。雪の後でお天気になる前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷點を下ってをりますでせうね。」

「これが氷點以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱

を眺めながら、宿の番頭と自動車に乗った。雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底(そこ)に沈(しず)んでゐ(イ)るや(ヨ)うだった。

「なるほどなににさは(ワ)っても冷(つめ)たさがちがふ(ウ)よ。」

「去年は氷點下二十何度といふのが一番でした。」

「雪は?」

「さあ、普通七八尺ですけれど、多い時は一丈を二三尺超えてますでせ(ショウ)うね。」

「これからだね。」

「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降ったのが、だいぶ解けて来たところです。」

「解けることもあるのかね。」

「もういつ大雪になるか分りません。」

十二月の初めであった。

島村はしつつこい風邪心地(かぜここち)でつまってゐる鼻が、頭のしんまですっといわどきに通って、よごれものが洗ひ落されるや(ヨ)うに、水洟(みずばな)がしきりと落ちて来た。

「お師匠(ししよう)さんとこの娘はまだゐ(イ)るかい。」

「へえ、を(オ)りますを(オ)ります。驛にを(オ)りましたが、御覧になりませんでしたか、濃い青いマントを着て。」

「あれがさ(ソ)うだったの?——後(あと)で呼べるだらう。」

「今夜ですか。」

「今夜だ。」

「今の終列車でお師匠さんの息子が帰るとか言って、迎へに出てゐましたよ。」

夕景色の鏡のなかで葉子にいたはられてゐた病人は、島村が會ひに来た女の家の息子だったのだ[26]。

さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じたけれども、このめぐりあはせを、彼はさほど不思議と思ふことはなかった。不思議と思はぬ自分を不思議と思ったくらゐのものであった。

指で覚えてゐる女と眼にともし火をつけてゐた女との間に、なにがあるのかなにが起るのか、島村はなぜかそれが心のどこかで見えるやうな気持もする。まだ夕景色の鏡から醒め切らぬせゐだらうか。あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徴であったかと、彼はふとそんなことを呟いた[27]。

スキイの季節前の温泉宿は最も客の少い時で、島村が内湯から上って来ると、もう全く寝静まってゐた。古びた廊下は彼の踏む度にガラス戸を微かに鳴らした。その長いはづれの帳場の曲り角に、裾を冷え冷えと黒

光りの板の上へ擴げて、女が高く立ってゐた。

たうとう藝者に出たのであらうかと、その裾を見てはっとしたけれども、こちらへ歩いて来るでもない、体のどこかを崩して迎へるしなを作るでもない、じっと動かぬその立ち姿から、彼は遠目にも真面目なものを受け取って、急いで行ったが、女の傍に立っても黙ってゐた。女も濃い白粉の顔で微笑まうとすると、反って泣き面になったので、なにも言はずに二人は部屋の方へ歩き出した[28]。

あんなことがあったのに、手紙も出さず、會ひにも来ず、踊りの型の本など送るといふ約束も果さず、女からすれば笑って忘れられたとしか思へないだらうから、先づ島村の方から詫びかいひわけを言はねばならない順序だったが、顔を見ないで歩いてゐるうちにも、彼女は彼を責めるどころか、体いっぱいになつかしさを感じてゐることが知れるので、彼は尚更、どんなことを言ったにしても、その言葉は自分の方が不真面目だといふ響きしか持たぬだらうと思って、なにか彼女に氣押される甘い喜びにつつまれてゐたが、階段の下まで来ると、

「こいつが一番よく君を覚えてゐたよ。」と、人差指だ

け伸した左手の握拳を、いきなり女の目の前に突きつけた。

「さう?」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないで手をひくやうに階段を上って行った。㉙

火燵の前で手を離すと、彼女はさっと首まで赤くなって、それをごまかすためにあわててまた彼の手を拾ひながら、

「これが覚えてゐてくれたの?」

「右ぢゃない、こっちだよ。」と、女の掌の間から右手を抜いて火燵に入れると、改めて左の握拳を出した。彼女はすました顔で、

「ええ、分ってるわ。」

ふふと含み笑ひしながら、島村の掌を擴げて、その上に顔を押しあてた。

「これが覚えてゐてくれたの?」

「ほう冷たい。こんな冷たい髪の毛初めてだ。」

「東京はまだ雪が降らないの?」

「君はあの時、ああ言ってたけれども、あれはやっぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか㉚。」

あの時は――雪崩の危険期が過ぎて、新緑の登山季節に入った頃だった。

あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる㉛。

無為徒食の島村は自然と自身に対する真面目さも失ひがちなので㉜、それを呼び戻すには山がいいと、よく一人で山歩きをするが、その夜も国境の山々から七日振りで温泉場へ下りて来ると、藝者を呼んでくれと言った。ところが、その日は道路普請の落成祝ひで、村の繭倉兼芝居小屋を宴会場に使ったほどの賑かさだから、十二三人の藝者では手が足りなくて、たうてい貰へないだらうが、師匠の家の娘なら宴会を手傳ひに行ったにしろ、踊を二つ三つ見せただけで帰るから、もしかしたら来てくれるかも知れないとのことだった。島村が聞き返すと㉝、三味線と踊の師匠の家にゐる娘は藝者といふわけではないが、大きい宴会などには時たま頼まれて行くこともある、半玉がなく、立って踊りたがらない年増が多いから、娘は重宝がられる、宿屋の客の座敷へなど滅多に一人で出ないけれども、全くの素人とも言へない、ざっとこんな風な女中の説明だった。

怪しい話だとたかをくくってゐたが㉞、一時間ほどして女が女中に連れられて来ると、島村はおやと居住ひを直した㉟。直ぐ立ち上って行かうとする女中の袖を女がとらへて、またそこに坐らせた。

女の印象の不思議なくらゐ清潔であった。足指の裏の窪みまできれいであらうと思はれた。山々の初夏を見て来た自分の眼のせゐかと、島村は疑ったほどだった㊱。

着つけにどこか藝者風なところがあったが㊲、無論裾はひきずってゐないし、やはらかい単衣をむしろきちんと着てゐる方であった。帯だけは不似合に高価なものらしく、それが反ってなにかいたましく見えた㊳。

山の話などはじめたのをしほに㊴、女中が立って行ったけれども、女はこの村から眺められる山々の名もろくに知らず、島村は酒を飲む気にもなれないでゐると、女はやはり生れはこの雪国、東京でお酌をしてゐるうちに受け出され、ゆくすゑ日本踊の師匠として身を立てさせてもらふつもりでゐたところ、一年半ばかりで旦那が死んだと、思ひの外素直に話した。しかしその人に死

別れてから今日までのことが、恐らく彼女のほんとうの身の上話かもしれないが、それは急に打ち明けさうもなかった。十九だと言った。嘘でないなら、この十九が二十一二に見えることに島村ははじめてくつろぎを見つけ出して㊵、歌舞伎の話などしかけると、女は彼よりも俳優の藝風や消息に精通してゐた。さういふ話相手に飢ゑてゐてか、夢中でしゃべってゐるうち、根が花柳界出の女らしいうちとけやうを示して来た㊶。男の氣心を一通り知ってゐるやうでもあった。それにしても彼は頭から相手を素人ときめてゐるし、一週間ばかり人間とろくに口をきいたこともない後だから、人なつかしさが温かく溢れて、女に先づ友情のやうなものを感じた。山の感傷が女の上にまで尾をひいて来た㊷。

女は翌日の午後、お湯道具を廊下の外に置いて、彼の部屋へ遊びに寄った。

彼女が坐るか坐らないうちに、彼は突然藝者を世話してくれと言った。

「世話するって㊸?」

「分ってるぢゃないか。」

「いやあねえ。私そんなこと頼まれるとは夢にも思っ

て来ませんでしたわ。」と、女はぷいと窓へ立って行って国境の山々を眺めたが、そのうち頬を染めて、

「ここにはそんな人ありませんわよ。」

「嘘をつけ。」

「ほんたうよ。」と、くるっと向き直って、窓に腰をおろすと、

「強制することは絶対にありませんわ。みんな藝者さんの自由なんですわ。宿屋でもさういふお世話は一切しないの。ほんたうなのよ。これ。あなたが誰か呼んで直接話してごらんになるといいわ。」

「君から頼んでみてくれよ。」

「私がどうしてそんなことしなければならないの?」

「友だちだと思ってるんだ。友だちにしときたいから、君は口説かないんだよ㊹。」

「それがお友達ってものなの?」と、女はつい誘われて子供っぽく言ったが㊺、後はまた吐き出すやうに、

「えらいと思ふわ㊻。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」

「なんでもないことぢゃないか。山で丈夫になって来たんだよ。頭がさっぱりしないんだ。君とだって、からっとした気持ちで話が出来やしない㊼。」

女は瞼を落して黙った。島村はかうなればもう男の厚かましさをさらけ出してゐるだけなのに㊽、それを物分りよくうなづく習はしが女の身にしみてゐるのだらう。その伏目は濃い睫毛のせゐか、ぽうっと温かく艶めくと島村が眺めてゐるうちに、女の顔はほんの少し左右に揺れて、また薄赤らんだ㊾。

「お好きなのをお呼びなさい。」

「それを君に聞いてるんぢゃないか。初めての土地だから、誰がきれいだか分らんさ。」

「きれいって言ったって。」

「若いのがいいね。若い方がなにかにつけてまちがひが少いだらう。うるさくしゃべらんのがいい。ぼんやりしてゐて、よごれてないのが。しゃべりたい時は君としゃべるよ。」

「私はもう来ませんわ。」

「馬鹿言へ。」

「あら。来ないわよ。なにしに来るの?」

「君とさっぱりつきあひたいから、君を口説かないんぢゃないか。」

「あきれるわ。」

「さういふことがもしあったら、明日はも君の顔を見るのもいやになるかもしれん。話に気乗りするなんてことがなくなるよ。山から里へ出て来て、せっかく人なつっこいんだからね。君は口説かないんだ。だって、僕は旅行者ぢゃないか。」

「ええ、ほんたうね。」

「さうだよ。君にしたって、君が厭だと思ふ女となら、後で會ふのも胸が悪いだらうが、自分が選んでやった女ならまだましだらう。」

「知らないっ。」と、強く投げつけてそっぽを向いたものの㊿、

「それはさうだけれど。」

「なにしたらおしまひさ。味氣ないよ。長続きしないだらう。」

「さう。ほんたうにみんなさうだわ。私の生れは港なの。ここは温泉場でせう。」と、女は思ひがけなく素直な調子で、

「お客はたいてい旅の人なんですもの。私なんかまだ子供ですけれど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は好きだとも言はなかった人の方が、

いつまでもなつかしいのね。忘れないのね[51]。別れた後ってさうらしいわ。向うでも思ひ出して、手紙をくれたりするのは、たいていさういふんですわ。」

女は窓から立ち上ると、今度は窓の下の畳に柔かく坐った。遠い日々を振り返るやうに見えながら、急に島村の身辺に坐ったといふ顔になった。

女の声にあまり實感が溢れてゐるので、島村は苦もなく女を騙したかと、反ってうしろめたいほどだった。

しかし彼は嘘を言ったわけではなかった。女はとにかく素人である。彼の女ほしさは、この女にそれを求めるまでもなく、罪のない手軽さですむことだった。彼女は清潔過ぎた。一目見た時から、これと彼女とは別にしてゐた。

それに彼は夏の避暑地を選び迷ってゐる時だったので、この温泉村へ家族づれで来ようかと思った。さうすれば女はさいはひ素人だから、細君にもいい遊び相手になってもらへて、退屈まぎれに踊の一つも習へるだらう。本氣にさう考へてゐた。女に友情のやうなものを感じたといっても、彼はその程度の淺瀬を渡ってゐた

のだった[52]

無論ここにも島村の夕景色の鏡はあったであらう。今の身の上が曖昧な女の後腐れを嫌ふばかりでなく[53]、夕暮の汽車の窓ガラスに写る女の顔のやうに、非現実的な見方をしてゐたのかもしれない。

彼の西洋舞踊趣味にしてもそうだった[54]。島村は東京の下町育ちなので、子供の時から歌舞伎芝居になじんでいたが、学生の頃は好みが踊や所作事に片寄って来て、そうなると一通りのことを究めぬと気のすまないたちゆえ、古い記録を漁ったり、家元を訪ね歩いたりして、やがては日本踊の新人とも知り合い、研究や批評めいた文章まで書くやうになった。そうして日本踊の伝統の眠りにも新しい試みのひとりよがりにも、当然なまなましい不満を覚えて、もうこの上は自分が実際運動のなかへ身を投じて行くほかないという気持に狩り立てられ[55]、日本踊の若手からも誘いかけられた時に、彼はふいと西洋舞踊に鞍替えしてしまった。日本踊は全く見ぬようになった。その代り西洋舞踊の書物と写真を集め、ポスタアやプログラムの類まで苦労して外国から手に入れた。異国と未知とへの好奇心ばかりでは決してなかっ

た。ここに新しく見つけた喜びは[56]、目のあたり西洋人の踊を見ることが出来ないというところにあった。その証拠に島村は日本人の西洋舞踊は見向きもしないのだった。西洋の印刷物を頼りに西洋舞踊について書くほど安楽なことはなかった。見ない舞踊などこの世ならぬ話である。これほど机上の空論はなく、天国の詩である。研究とは名づけても勝手気侭な想像で、舞踊家の生きた肉体が踊る芸術を鑑賞するのではなく、西洋の言葉や写真から浮ぶ彼自身の空想が踊る幻影を鑑賞しているのだった。見ぬ恋にあこがれる[57]ようなものである。しかも、時時西洋舞踊の紹介など書くので文筆家の端くれに数へられ、それを自ら冷笑しながら職業のない彼の心休めとなることもあるのだった。

そういう彼の踊の話が、女を彼に親しませる助けとなったのは、その知識が久し振りで現実に役立ったともいうべきありさまだったけれども、やはり島村は知らず識らずのうちに、女を西洋舞踊扱いにしていたのかもしれない。

だから、自分の淡い旅愁じみた言葉が[58]、女の生活の急所に触れたらしいのを見ると、女を騙したかとうし

ろめたいぐらいだったが、

「そうしておけば、今度僕が家族を連れて来たって、君と気持ちよく游べるさ。」

「ええ、そのことはもうよく分りましたわ。」と、女は声を沈めて微笑むと、少し芸者風にはしゃいで、

「私もそんなのが大好き、あっさりしたのが長続きするわ[59]。」

「だから呼んでくれよ。」

「今？」

「うん。」

「驚きますわ。こんな真昼間になんにもおっしゃれないでしょう[60]。」

「屑が残るといやだよ[61]。」

「あんたそんなこと言ふの、この土地を荒稼ぎの温泉場と考えちがいしていらっしゃるのよ。村の様子を見ただけでも分らないかしら。」と、女はいかにも心外らしく真剣な口振りで、ここにはそういう女のいないことを繰返して力説した。島村が疑うと、女はむきになって、しかし一歩譲って、それはどうしようと芸者の勝手だけれども、ただ、うちへことわらずに泊れば芸者の責任で、どうなろうとかまってはくれないが、うちへことわつ

とけば抱主の責任で、どこまでも後を見てくれる、それだけのちがいだと言う[62]。

「責任てなんだ。」

「子供が出来たり、体が悪くなったりすることですわ。」

島村は自分の頓馬な質問に苦笑いしながら、そのようにのんきな話も、この山の村にはあるかも知れないと思った。

無為徒食の彼は自然と保護色を求める心があってか、旅先の土地の人気には本能的に敏感だが、山から下りて来ると直ぐこの里のいかにもつましい眺めのうちに、のどかなものを受け取って、宿で聞いてみると、果してこの雪国でも最も暮しの楽な村の一つだとのことだった。つい近年鉄道の通じるまでは、主に農家の人人の湯治場だったという。芸者のいる家は料理屋とかしるこ屋とか色褪せた暖簾をかけているが、古風な障子のすすけたのを見ると、これで客があるのやら、そして日用雑貨の店や駄菓子屋にも、抱えをたった一人置いているのがあって、その主人達は店のほかに田畑で働くらしかった。師匠の家の娘だからではあろうが、鑑札のない娘がたまに宴会などの手伝いに出ても、咎め立てる芸者がないのだろう。

「それでどのくらいいるの。」

「芸者さん? 十二三人かしら。」

「なんていう人がいいの?」と、島村が立ち上ってベルを押すと、

「私は帰りますわね?」

「君は帰っちゃ駄目だよ。」

「厭なの。」と、女は屈辱を振り払うように⑥③、

「帰りますわ。いいのよ。なんとも思やしませんわ。また来ますわ。」

しかし女中を見ると、なにげなく坐り直した。女中が誰を呼ぼうかと幾度聞いても、女は名指しをしなかった。

ところが間もなく来た十七八の芸者を一目見るなり、島村の山から里へ出た時の女ほしさは味気なく消えてしまった。肌の底黒い腕が骨張っていて、どこか初初しく人がよさそうだから、つとめて興醒めた顔をすまいと芸者の方を向いていたが、実は彼女のうしろの窓の新緑の山山が目についてならなかった。ものを言うのも気だるくなった。いかにも山里の芸者だった。島村がむっつりしているので、女は気をきかせたつもりらしく黙って立ち上って行ってしまうと、一層座が白けて、それで

ももう一時間くらいは経っただろうから[64]、なんとか芸者を帰す工夫はないかと考えるうちに、電報為替の来ていたことを思ひ出したので郵便局の時間にかこつけて、芸者といっしょに部屋を出た。

しかし、島村は宿の玄関で若葉の匂いの強い裏山を見上げると、それに誘われるように荒っぽく登って行った。

なにがおかしいのか、一人で笑いが止まらなかった[65]。

ほどよく疲れたところで、くるっと振り向きざま浴衣の尻からげして[66]、一散に駈け下りて来ると、足もとから黄蝶が二羽飛び立った。

蝶はもつれ合いながら、やがて国境の山より高く、黄色が白くなってゆくにつれて、遥かだった。

「どうなすったの。」

女が杉林の陰に立っていた。

「うれしそうに笑ってらっしゃるわよ。」

「止めたよ。」と、島村はまたわけのない笑いがこみ上げて来て、

「止めた。」

「そう?」

女はふいとあちらを向くと、杉林のなかへゆっくり入った。彼は黙ってついて行った。

神社であった。

苔のついた狛犬の傍の平な岩に女は腰をおろした[67]。

「ここが一等涼しいの。真夏でも冷たい風がありますわ。」

「ここの芸者って、みなあんなのかね。」

「似たようなものでしょう。年増にはきれいな人がありますわ。」と、うつ向いて素気なく言った。その首に杉林の小暗い青が映るやうだった。

島村は杉の梢を見上げた。

「もういいよ。体の力がいっぺんに抜けちゃって、をかしいようだよ。」

その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の届かぬ高さ、しかも実に一直線に幹が立ち並び、暗い葉が空をふさいでいるので、しいんと静けさが鳴っていた[68]。島村が背を寄せている幹は、なかでも最も年古りたものだったが、どうしてか北側の枝だけが上まですっかり枯れて、その落ち残った根元は尖った杭を逆立ちに

幹へ植え連ねたと見え、なにか恐しい神の武器のようであった。

「僕は思いちがいしてたんだな。君を初めて山から下りて来て見たもんだから、ここの芸者はきれいなんだろうと、うっかり考えてたらしい。」と、笑いながら、七日間の山の健康を簡単に洗濯しようと思いついたのも[69]実は初めにこの清潔な女を見たからだったろうかと、島村は今になって気がついた。

西日に光る遠い川を女はじっと眺めていた。手持無沙汰になった。

「あら忘れてたわ。お煙草でしょう[70]。」と、女はつとめて気軽に、

「さっきお部屋へ戻ってみたら、もういらっしゃらないんでしょう。どうなすったかしらと思うと、えらい勢いでお一人山へ登ってらっしゃるんですもの。窓から見えたの。おかしかったわ。お煙草を忘れていらしたらしいから、持って来てあげたんですわ。」

「あの子に気の毒したよ。」

「そんなこと、お客さんの随意じゃないの、いつ帰そうと。」

石の多い川の音が圓い甘さで聞えて来るばかりだっ

た。杉の間から向うの山襞の陰るのが見えた。

「君とそう見劣りしない女でないと、後で君と会った時心外じゃないか(71)。」

「知らないわ。負け惜みの強い方ね。」と、女はむっと嘲るように言ったけれども、芸者を呼ぶ前とは全く別な感情が二人の間に通っていた。

はじめからただこの女がほしいだけだ、それを例によって遠廻りしているのだと、島村ははっきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて来た。杉林の陰で彼を呼んでからの女は、なにかすっと抜けたように涼しい姿だった(72)。

細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のやうに伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、もし皺があったり色が悪かったりすると、不潔に見えるはずだが、そうではく濡れ光っていた。目尻が上りも下りもせず、わざと真直ぐに描いたような眼はどこかおかしいようながら(73)、短い毛の生えつまった下り気味の眉が、それをほどよくつつんでいた。少し中

高の圓顔はまあ平凡な輪郭だが、白い陶器に薄紅を刷いたような皮膚で、首のつけ根もまだ肉づいていないから、美人というよりもなによりも、清潔だった。

お酌に出たこともある女にしては、こころもち鳩胸だった。

「ほら、いつの間にかこんなに蚋が寄って来ましたわ。」と、女は裾を拂って立ち上った。

このまま靜けさのなかにいては、もう二人の顔が所在なげに白けて来るばかりだった[74]。

そしてその夜の十時頃だったろうか。女が廊下から大声に島村の名を呼んで、ばたりと投げ込まれたように彼の部屋へ入って来た。いきなり机に倒れかかると、その上のものを醉った手つきでつかみ散らして、ごくごく水を飲んだ。

この冬スキイ場でなじみになった男達が[75]夕方山を越えて来たのに出会い、誘われるまま宿屋に寄ると、芸者を呼んで大騒ぎとなって、飲まされてしまったとのことだった。

頭をふらふらさせながら、一人でとりとめなくしゃべり立ててから、

「悪いから行って来るわね。どうしたかと捜してるわ。後でまた来るわね[76]。」と、よろけ出て行った。

一時間ほどすると、また長い廊下にみだれた足音で、あちこちに突きあたったり倒れたりして来るらしく、

「島村さん、島村さん。」と、甲高く叫んだ。

「ああ、見えない。島村さあん。」

それはもうまぎれもなく女の裸の心が自分の男を呼ぶ声であった。島村は思いがけなかった。しかし宿屋中に響き渡るにちがいない金切声だったから、当惑して立ち上ると、女は障子紙に指をつっこんで桟をつかみ、そのまま島村の体へぐらりと倒れた。

「ああ、いたわね。」

女は彼ともつれて坐って、もたれかかった。

「酔ってやしないよ。ううん、酔ってるもんか[77]。苦しい苦。しいだけなのよ。性根は確かだよ。ああっ、水飲みたい。ウイスキイとちゃんぽんに飲んだのがいけなかったの。あいつ頭に来る、痛い。あの人達安壜を買って来たのよ。それ知らないで。」などと言って、掌でしきりに顔をこすっ、てゐた。

外の雨の音が俄に激しくなった

少しでも腕をゆるめると、女はぐたりとした。女の髪

が彼の頬で押しつぶれるほどに首をかかえているので手は懐に入っていた。

彼がもとめる言葉には答えないで、女は両腕を閂のように組んでもとめられたものの上をおさえたが、酔いしびれて力が入らないのか、

「なんだ、こんなもの。畜生。畜生。だるいよ。こんなもの。」と、いきなり自分の肘にかぶりついた。

彼は驚いて離させると、深い歯形がついていた。

しかし、女はもう彼の掌にまかせて、そのまま落書をはじめた。好きな人の名を書いて見せると言って、芝居や映画の役者の名前を二三十も並べてから、今度は島村とばかり無数に書き続けた。

島村の掌のありがたいふくらみはだんだん熱くなって来た。

「ああ、安心した。安心したよ。」と、彼はなごやかに言って、母のやうなものさえ感じた。

女は急に苦しみ出して、身をもがいて立ち上ると、部屋の向うの隅に突っ伏した。

「いけない、いけない。帰る、帰る。」

「歩けるもんか。大雨だよ。」

「跣足で帰る。這って帰る。」

「危いよ。帰るなら送ってやるよ。」

宿は丘の上で、嶮しい坂がある。

「帯をゆるめるか、少し横になって、醒ましたらいいだろう。」

「そんなことだめ。こうすればいいの。慣れてる。」と、女はしゃんと坐って胸を張ったが、息が苦しくなるばかりだった。窓をあけて吐こうとしても出なかった。身をもんで転りたいのを嚙みこらえているありさまが続いて、時時意志を奮い起すように、帰る帰ると繰り返しながら、いつか午前二時を過ぎた。

「あんたは寝なさい。さあ、寝なさいったら。」

「君はどうするんだ。」

「こうやってる。少し醒まして帰る。夜のあけないうちに帰る。」と、いざり寄って島村を引っぱった。

「私にかまわないで寝なさいってば。」

島村が寝床に入ると、女は机に胸を崩して水を飲んだが、

「起きなさい。ねェ、起きなさいったら。」

「どうしろって言うんだ。」

「やっぱり寝なさい。」

「なにを言ってるんだ。」と、島村は立ち上った。

女を引き摺って行った。

やがて、顔をあちらに反向けこちらに隠していた女が、突然激しく唇を突き出した。

しかしその後でも、寧ろ苦痛を訴える譫言のように、

「いけない。いけないの。お友達でいようって、あなたがおっしゃったぢゃないの。」と、幾度繰り返したかしれなかった。

島村はその真剣な響きに打たれ、額に皺立て顔をしかめて懸命に自分を抑へている意志の強さには、味気なく白けるほどで、女との約束を守ろうかとも思った。

「私はなんにも惜しいものはないのよ。決して惜しいんぢゃないのよ。だけど、そういう女ぢゃない。私はそういう女ぢゃないの。きっと長続きしないって、あんた自分で言ったぢゃないの。」

酔いで半ば痺れていた。

「私が悪いんぢゃないわ。あんたが悪いのよ。あんたが負けたのよ。あんたが弱いのよ。私ぢゃないのよ。」などと口走りながら、よろこびにさからうためにそでをかんでいた。

しばらく気が抜けたみたいに静かだったが、ふと思い出して突き刺すように、

「あんた笑ってるわね。私を笑ってるわね。」

「笑ってやしない。」

「心の底で笑ってるでしょう。今笑ってなくても、きっと後で笑うわ。」と、女はうつぶせになってむせび泣いた。

でも直ぐに泣き止むと、自分をあてがうように柔かくして、人なつっこくこまごまと身の上などを話し出した。酔いの苦しさは忘れたように抜けたらしかった。今のことにはひとことも触れなかった。

「あら、お話に夢中になってちっとも知らなかったわ。」と、今度はぼうっと微笑んだ。

夜のあけないうちに帰らねばならないと言って、

「まだ暗いわね。この辺の人はそれは早起きなの。」と、幾度も立ち上って窓をあけてみた。

「まだ人の顔は見えませんわね。今朝は雨だから、誰も田へ出ないから。」

雨のなかに向うの山や麓の屋根の姿が浮び出してからも、女は立ち去りにくそうにしていたが、宿の人の起きる前に髪を直すと、島村が玄関まで送ろうとするのも

人目を恐れて、あわただしく逃げるように、一人で抜け出して行った。そして島村はその日東京に帰ったのだった[78]。

「君はあの時，ああ言ったけれども，あれはやっぱり嘘だよ。そうでなければ，誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。後でも笑やしなかったよ。」

女がふっと顔を上げると，島村の掌に押しあてていた瞼から鼻の両側へかけて赤らんでいるのが，濃い白粉を透して見えた。それはこの雪国の夜の冷たさを思わせながら，髪の色の黒が強いために，温かいものに感じられた。

その顔は眩しげに含み笑いを浮べていたが，そうするうちにも「あの時」を思い出すのか，まるで島村の言葉が彼女の体をだんだん染めて行くかのようだった。女はむっとしてうなだれると，襟をすかしているから，背なかの赤くなっているのまで見え，なまなましく濡れた裸を剝き出したようであった。髪の色との配合のために，尚そう思われるのかもしれない。前髪が細かく生えつまっているというのではないけれども，毛筋が男みたいに太くて，後れ毛一つなく，なにか黒い鉱物の重っ

たいような光だった[79]。

今さっき手に触れて，こんな冷たい髪の毛は初めてだとびっくりしたのは，寒気のせいではなく，こういう髪そのもののせいであったかと思えて，島村が眺め直していると，女は火燵板の上で指を折りはじめた。それがなかなか終らない。

「なにを勘定してるんだ。」と聞いても，黙ってしばらく指折り数えていた。

「五月の二十三日ね。」

「そうか。日数を数えていたのか。七月と八月と大が続くんだよ。」

「ね，百九十九日目だわ。ちょうど百九十九日目だわ。」

「だけど，五月二十三日って，よく覚えてるね。」

「日記を見れば，直ぐ分るわ。」

「日記？ 日記をつけてるの？」

「ええ，古い日記を見るのは楽しみですわ。なんでも隠さずその通りに書いてあるから，ひとりで読んでいても恥かしいわ。」

「いつから。」

「東京でお酌に出る少し前から。その頃はお金が自

由にならないでしょう，自分で買えないの。二銭か三銭の雑記帳にね，定規をあてて，細かい罫を引いて，それが鉛筆を細く削ったとみえて，線がきれいに揃ってるんですの。そうして帳面の上の端から下の端まで，細かい字がぎっしり書いてあるの。自分で買えるようになったら，駄目。物を粗末に使うから。手習だって，元は古新聞に書いてたけれど，この頃は巻紙へぢかでしょう。」

「ずっと缺かさず，日記をつけてるのかい。」

「ええ，十六の時のと今年のとが，一番面白いわ。いつもお座敷から帰って，寝間着に着替えてつけたのね。遅く帰るでしょう。ここまで書いて，中途で眠ってしまったなんて，今読んで分るところがあるの。」

「そうかねえ。」

「だけど，毎日毎日ってんじゃなく，休む日もあるのよ。こんな山の中だし，お座敷へ出たって，きまりきってるでしょう。今年は頁毎に日附の入ったのしか買えなくて，失敗したわ。書き出せばどうしても長くなることがあるもの⑳。」

日記の話よりも尚島村が意外の感に打たれたのは，彼女は十五六の頃から，読んだ小説を一一書き留めてお

き，そのための雑記帳がもう十册にもなったということであった。

「感想を書いとくんだね?」

「感想なんか書けませんわ。題と作者と，それから出て来る人物の名前と，その人達の関係と，それくらいのものですわ。」

「そんなものを書き止めといたって，しようがないじゃないか。」

「しようがありませんわ。」

「徒労だね。」

「そうですわ。」と，女はこともなげに明るく答えて，しかしじっと島村を見つめていた。

全く徒労であると，島村はなぜかもう一度声を強めようとした途端に，雪の鳴るような静けさが身にしみて，それは女に惹きつけられたのであった。彼女にとってはそれが徒労であろうはずかないとは彼も知りながら，頭から徒労だと叩きつけると，なにか反って彼女の存在が純粋に感じられるのであった[87]。

この女の小説の話は，日常使われる文学という言葉とは縁がないもののように聞えた。婦人雑誌を交換して読むくらいしか，この村の人との間にそういう友情は

なく，後は全く孤立して読んでいるらしかった。選択もなく，さほどの理解もなく，宿屋の客間などでも小説本や雑誌を見つける限り，借りて読むという風であるらしかったが，彼女が思い出すままに挙げる新しい作家の名前など，島村の知らないのが少くなかった。しかし彼女の口振りは，まるで外国文学の遠い話をしているようで，無欲な乞食に似た哀れな響きがあった。自分が洋書の写真や文字を頼りに，西洋の舞踊を遥かに夢想しているのもこんなものであろうと，島村は思ってみた。

彼女もまた見もしない映画や芝居の話を，楽しげにしゃべるのだった。こういう話相手に幾月も飢えていた後なのであろう。百九十九日前のあの時も，こういう話に夢中になったことが，自ら進んで島村に身を投げかけてゆくはずみとなったのも忘れてか，またしても自分の言葉の描くもので体まで温まって来る風であった。

しかし，そういう都会的なものへのあこがれも，今はもう素直なあきらめにつつまれて無心な夢のようであったから，都の落人じみた高慢な不平よりも，単純な徒労の感が強かった。彼女自らはそれ寂しがる様子もな

いが，島村の眼には不思議な哀れとも見えた。その思いに溺れたなら，島村自らが生きていることも徒労であるという，遠い感傷に落されて行くであろう。けれども目の前の彼女は山気に染まって生き生きした血色だった[82]。

いずれにしろ，島村は彼女を見直したことにはなるので，相手が芸者というものになった今は反って言い出しにくかった[83]。

あの時彼女は泥酔していて，痺れて役に立たぬ腕を歯痒いがって，

「なんだ，こんなもの。畜生。畜生。だるいよ。こんなもの。」と，肘に激しくかぶりついたほどであった。

足が立たないので，体をごろごろ転がして，

「決して惜しいんじゃないのよ。だけどそういう女じゃない。私はそういう女じゃないの。」と言った言葉も思い出されて来て，島村はためらっていると女は素早く気づいて撥ね返すように，

「零時の上りだわ。」と，ちょうどその時聞えた汽笛に立ち上って，思い切り乱暴に紙障子とガラス戸をあけ，手摺へ体を投げつけざま窓に腰かけた。

冷気が部屋へいちどきに流れ込んだ。汽車の響きは遠ざかるにつれて,夜風のように聞えた。

「おい,寒いじゃないか,馬鹿。」と,島村も立ち上って行くと風はなかった。

一面の雪の凍りつく音が,地の底深く鳴っているような,厳しい夜景であった。月はなかった。嘘のように多い星は,見上げていると,虚しい速さで落ちつつあると思われるほど,あざやかに浮き出ていた。星の群が目へ近づいて来るにつれて,空はいよいよ遠く夜の色を深めた。国境の山山はもう重なりも見分けられず,そのかわりそれだけの厚さがありそうな燻した黒で,星空の裾に重みを垂れていた。すべて冴え静まった調和であった。

島村が近づくのを知ると,女は手摺に胸を突っ伏せた。それは弱弱しさではなく,こういう夜を背景にして,これより頑固なものはないという姿であった。島村はまたかと思った。

しかし,山山の色は黒いにかかわらず,どうしたはずみかそれがまざまざと白雪の色に見えた。そうすると

山山が透明で寂しいものであるかのように感じられて来た。空と山とは調和などしていない。

島村は女の咽佛のあたりを摑んで，

「風邪を引く。こんなに冷たい。」と，ぐいとうしろへ起そうとした。女は手摺にしがみつきながら声をつまらせて，

「私帰るわ。」

「帰れ。」

「もうしばらくこうさしといて。」

「それじゃ僕はお湯に入って来るよ。」

「いやよ。ここにいなさい。」

「窓をしめてくれ。」

「もうしばらくこうさしといて。」

村は鎮守の杉林の陰に半ば隠れているが，自動車で十分足らずの停車場の燈火は，寒さのためぴいんぴいんと音を立てて毀れそうに瞬いていた。

女の頬も，窓のガラスも，自分のどてらの袖も，手に触るものは皆，島村にはこんな冷たさは初めてだと思われた。

足の下の畳までが冷えて来るので，一人で湯に行こうとすると，

「待って下さい。私も行きます。」と，今度は女が素直についで来た。

彼の脱ぎ散らすものを女が乱れ籠に揃えているところへ，男の泊り客が入って来たが，島村の胸の前へすくんで顔を隠した女に気がつくと，

「あっ，失礼しました。」

「いいえ，どうぞ。あっちの湯へ入りますから。」と，島村はとっさに言って，裸のまま乱れ籠を抱えて隣の女湯の方へ行った。女は無論夫婦面でついて来た。島村は黙って後も見ずに温泉へ飛び込んだ。安心して高笑いがこみ上げて来るので，湯口に口をあてて荒っぽく嗽いをした。

部屋に戻ってから，女は横にした首を軽く浮かして鬢を小指で持ち上げながら，

「悲しいわ。」と，ただひとこと言っただけであった。

女が黒い眼を半ば開いているのかと，近近のぞきこんでみると，それは睫毛であった。

神経質な女は一睡もしなかった。

固い女帯をしごく音で，島村は目が覚めたらしかっ

た。

「早く起して悪かったわ。まだ暗いわね。ねえ，見て下さらない?」と，女は電灯を消した。

「私の顔が見える? 見えない?」

「見えないよ。まだ夜が明けないじゃないか。」

「嘘よ。よく見て下さらなければ駄目よ。どう?」と，女は窓を明け放して，

「いけないわ。見えるわね。私帰る。」

明け方の寒さに驚いて，島村が枕から頭を上げると，空はまだ夜の色なのに，山はもう朝であった。

「そう，大丈夫。今は農家が暇だから，こんなに早く出歩く人はないわ。でも山へ行く人があるかしら。」と，ひとりごとを言いながら，女は結びかかった帯をひきずって歩き，

「今の五時の下りでお客がなかったわね。宿の人はまだ起きないわ。」

帯を結び終ってからも，女は立ったり坐ったり，そうしてまた窓の方ばかり見て歩き廻った。それは夜行動物が朝を恐れて，いらいら歩き廻るような落ちつきのなさだった。妖しい野性がたかぶって来るさまであった。

そうするうちに，部屋のなかまで明るんで来たか，女の赤い頬が目立って来た。島村は驚くばかりあざやかな赤い色に見とれて，

「頬っぺたが真赤じゃないか，寒くて。」

「寒いんじゃないわ。白粉を落したからよ。私は「寝床へ入ると直ぐ，足の先までぽっぽして来るの。」と，枕もとの鏡台に向って，

「とうとう明るくなってしまったわ。帰りますわ。」

島村はその方を見て，ひょっと首を縮めた。鏡の奥が真白に光っているのは雪である。その雪のなかに女の真赤な頬が浮んでいる。なんともいえぬ清潔な美しさであった。

もう日が昇るのか，鏡の雪は冷たく燃えるような輝きを増して来た。それにつれて雪に浮ぶ女の髪もあざやかな紫光りの黒を強めた。

雪を積らせぬためであろう。湯槽から溢れる湯を俄づくりの溝で宿の壁沿いにめぐらせてあるが，玄関先では浅い泉水のように拡がっていた。黒く逞しい秋田犬がそこの踏石に乗って，長いこと湯を舐めてい

た。物置から出して来たらしい，客用のスキーが干し並べてある，そのほのかな黴の匂いは湯気で甘くなって，杉の枝から共同湯の屋根に落ちる雪の塊も，温かいもののように形が崩れた[84]。

やがて年の暮から正月になれば，あの道が吹雪で見えなくなる。山袴にゴムの長靴，マントにくるまり，ヴェエルをかぶって，お座敷へ通わねばならぬ。その頃の雪の深さは一丈もある。そう言って，丘の上の宿の窓から，女が夜明け前に見下していた坂道を，島村は今下りて行くのであったけれども，道端に高く干した襁褓の下に，国境の山山が見えて，その雪の輝きものどかであった。青い葱はまだ雪に埋もれてはいなかった。

田圃で村の子供がスキイに乗っていた。

街道の村へ入ると，静かな雨滴のような音が聞えていた。

軒端の小さい氷柱が可愛く光っていた[85]。

屋根の雪を落す男を見上げて，

「ねえ，ついでにうちのも少し落してくれない?」と，湯帰りの女が眩しそうに濡れ手拭で額を拭いた。スキ

イ季節を目指して早くも流れこんで来た女給であろう。隣家はガラス窓の色絵も古び，屋根のゆがんだカフェであった。

たいていの家の屋根は細かい板で葺いて，上に石が置きならべてある。それらの圓い石は日のあたる半面だけ雪のなかに黒い肌を見せているが，その色は湿ったというよりも永の風雪にさらされた黒ずみのようである。そして家家はまたその石の感じに似た姿で，低い屋並みが北国らしくじっと地に伏したようであった[88]。

子供の群が溝の氷を抱き起して来ては，道に投げて遊んでいた。脆く砕け飛ぶ際に光るのが面白いのだろう。日光のなかに立っていると，その氷の厚さが嘘のように思われて，島村はしばらく眺め続けた。

十三四の女の子が一人石垣にもたれて，毛糸を編んでいた。山袴に高下駄を履いていたが，足袋はなく，赤らんだ素足の裏に皹が見えた。傍の粗朶の束に乗せられて，三歳ばかりの女の子が無心に毛糸の玉を持っていた。小さい女の子から大きい女の子へ引っぱられる一筋の灰色の古毛糸も暖かく光っていた。

七八軒先きのスキイ製作所から鉋の音が聞える。その反対側の軒陰に芸者が五六人立話をしていた。今朝になって宿の女中からその芸名を聞いた駒子もそこにいそうだと思うと，やっぱり彼女は彼の歩いて来るのを見ていたらしく，一人生真面目な顔つきであった。きっと真赤になるにきまっている，なにげない風を装ってくれるようにと，島村が考える暇もなく，駒子はもう咽まで染めてしまった。それなら後向きになればいいのに，窮屈そうに眼を伏せながら，しかも彼の歩みにつれて，その方に少しづつ顔を動かして来る。

島村も頬が火照るようで，さっさと通り過ぎると，直ぐに駒子が追っかけて来た。

「困るわ，あんなとこお通りになっちゃ。」

「困るって，こっちこそ困るよ。あんなに勢揃いしてられると，恐ろしくて通れんね。いつもああかい。」

「そうね，おひる過ぎは。」

「顔を赤くしたり，ばたばた追っかけて来たりすれば，なお困るじゃないか。」

「かまやしない。」と，はっきり言いながら駒子はまた赤

くなると，その場に立ち止まってしまって，道端の柿の木につかまった。

「うちへ寄っていただこうと思って，走って来たんですわ。」

「君の家がここか。」

「ええ。」

「日記を見せてくれるなら，寄ってもいいね。」

「あれは焼いてから死ぬの。」

「だって君の家，病人があるんだろう。」

「あら。よく御存じね。」

「昨夜，君も駅へ迎えに出てたじゃないか，濃い青のマントを着て。僕はあの汽車で，病人の直ぐ近くに乗って来たんだよ。実に真剣に，実に親切に，病人の世話をする娘さんが附添ってたけど，あれ細君かね。ここから迎えに行った人？東京の人？まるで母親みたいで，僕は感心して見てたんだ。」

「あんた，そのこと昨夜どうして私に話さなかったの。なぜ黙ってたの。」と駒子は気色ばんだ。

「細君かね。」

「なぜ昨夜話さなかったの。おかしな人。」

島村は女のこういう鋭さを好まなかった。けれども女をこんな風に鋭くするわけは，島村にも駒子にもないはずだと思われるので，それでは駒子の性格の現われかとも見られたが，とにかく繰り返して突っ込まれると，彼は急所をさわられたような気はして来るのであった。今朝山の雪を写した鏡のなかに駒子を見た時も，無論島村は夕暮の汽車の窓ガラスに写っていた娘を思い出したのだったのに，なぜそれを駒子に話さなかったのだろうか[87]。

「病人がいたっていいですわ。私の部屋へは誰も上って来ませんわ。」と，駒子は低い石垣のなかへ入った。

右手は雪をかぶった畑で，左には柿の木が隣家の壁沿いに立ち並んでいた。家の前は花畑らしく，その真中の小さい蓮池の氷は縁に持ち上げてあって，緋鯉が泳いでいた。柿の木の幹のように家も朽ち古びていた。雪の斑らな屋根は板が腐って軒に波を描いていた。

土間へ入ると，しんと寒くて，なにも見えないでいるうちに，梯子を登らせられた。それはほんとうに梯子であった。上の部屋もほんとうに屋根裏であった。

「お蚕さまの部屋だったのよ。驚いたでしょう。」

「これで,酔っ払って帰って,よく梯子を落ちないね。」

「落ちるわ。だけどそんな時は下の火燵に入ると,たいていそのまま眠ってしまいますわ。」と,駒子は火燵蒲団に手を入れてみて,火を取りに立った。

島村は不思議な部屋のありさまを見回した。低い明り窓が南に一つあるきりだけれども,桟の目の細かい障子は新しく貼り替えられ,それに日射しが明るかった。壁にも丹念に半紙が貼ってあるので,古い紙箱に入った心地だが,頭の上は屋根裏がまる出しで,窓の方へ低まって来ているものだから,黒い寂しさがかぶさったようであった。壁の向側はどうなってるのだろうと考えると,この部屋が宙に吊るさっているような気がして来て,なにか不安定であった。しかし,壁や畳は古びていながら,いかにも清潔であった⊗。

蚕のように駒子も透明な体でここに住んでいるかと思われた。

置火燵には山袴とおなじ木綿縞の蒲団がかかっていた。箪笥は古びているが,駒子の東京暮しの名残か,柾

目のみごとな桐だった。それと不似合に粗末な鏡台だった。朱塗の裁縫箱がまた贅沢なつやを見せていた。壁に板を段段に打ちつけたのは，本箱なのだであろう，めりんすのカアテンが垂らしてあった。

昨夜の座敷着が壁にかかって，襦袢の赤い裏を開いていた。

駒子は十能を持って，器用に梯子を上って来ると，

「病人の部屋からだけれど，火は綺麗だって言いますわ。」と，結いたての髪を伏せながら，火燵の灰を掻き起して，病人は腸結核で，もう故郷へ死にに帰ったのだと話した。

故郷とはいえ，息子はここで生れたのではない。ここは母の村なのだ。母は港町で芸者を勤め上げた後も，踊の師匠としてそこにとどまっていたが，まだ五十前で中風をわずらい，療養かたがたこの温泉へ帰って来た。息子は小さい時から機械が好きで，せっかく時計屋に入っていたから，港町に残して置いたところ，間もなく東京に出て，夜学に通っていたらしい。体の無理が重なったのだろう。今年二十六である。

それだけを駒子は一気に話したけれども，息子を連れ帰った娘がなにものであるか，どうして駒子がこの家にいるのかというようなことには，やはり一言も触れなかった。

しかしそれだけでも，宙に吊るされたようなこの部屋の工合では，駒子の声が八方へ洩れそうで，島村は落ちついていられなかった。

門口を出しなに，ほの白いものが眼について振り返ると，桐の三味線箱だった。実際よりも大きく長いものに感じられて，これを座敷へ担いで行くなんて嘘のような気がしていると，煤けた襖があいて，

「駒ちゃん，これを跨いじゃいけないわ?」

澄み上って悲しいほど美しい声だった。どこかから木魂が返って来そうであった。

島村は聞き覚えている，夜汽車の窓から雪のなかの駅長を呼んだ，あの葉子の声である。

「いいわ。」と，駒子が答えると，葉子は山袴でひょいと三味線を跨いだ。ガラスの溲瓶をさげていた。

駅長と知合いらしい昨夜の話振りでも，この山袴でも，葉子がここらあたりの娘なことは明らかだが，派手な

帯が半ば山袴の上に出ているので，山袴の蒲色と黒とのあらい木綿縞はあざやかに引き立ち，めりんすの長い袂も同じわけで艶めかしかった。山袴の股は膝の少し上で割れているから，ゆっくり膨らんで見え，しかも硬い木綿がひきしまって見え，なにか安らかであった。

しかし葉子はちらっと刺すように島村を一目見ただけで，ものも言わずに土間を通り過ぎた。

島村は表に出てからも，葉子の目つきが彼の額の前に燃えていそうでならなかった。それは遠いともし火のように冷たい。なぜならば，汽車の窓ガラスに写る葉子の顔を眺めているうちに，野山のともし火がその彼女の顔の向うを流れ去り，ともし火と瞳とが重なって，ぽうっと明るくなった時，島村はなんともいえぬ美しさに胸が顫えた，その昨夜の印象を思い出すからであろう。それを思い出すと，鏡のなかいっぱいの雪のなかに浮んだ，駒子の赤い頬も思い出されて来る。

そうして足が早くなった。小肥りの白い足にかかわらず，登山を好む島村は山を眺めながら歩くと放心状態となって，知らぬうちに足が早まる。いつでも忽ち

放心状態に入り易い彼にとっては，あの夕景色の鏡や朝雪の鏡が，人工のものとは信じられなかった。自然のものであった。そして遠い世界であった[89]。

今出て来たばかりの駒子の部屋までが，もうその遠い世界のように思われた。そういう自分にさすが驚いて，坂を登りつめると，女按摩が歩いていた。島村はなにかつかまえるように，

「按摩さん，揉んでもらえないかね。」

「そうですね。今何時ですかしら。」と，竹の杖を小脇に抱えると，右手で帯の間から蓋のある懐中時計を出して，左の指先で文字盤をさぐりながら，

「二時三十分過ぎでございますね。三時半に駅の向うへ行かんなりませんけれども，少し後れてもいいかな。」

「よく時計の時間が分るね。」

「はい，ガラスが取ってございますから。」

「さわると字が分るかね。」

「字は分りませんけれども。」と，女持ちには大きい銀時計をもう一度出して蓋をあけると，ここが十二時ここが六時，その真中が三時という風に指で抑えて見せ，

「それから割り出して，一分まで分らなくても，二分と

はまちがいません。」

「そうかね。坂道なんかに滑らないかね。」

「雨が降れば娘が迎えに来てくれます。夜は村の人を揉むで，もうここへは登って来ません。亭主が出さないのだと，宿の女中さんが言うからかないませんわ。」

「子供さんはもう大きいの?」

「はい。上の女は十三になります。」などと話しながら部屋に来てしばらく黙って揉んでいたが，遠い座数の三味線の音に首を傾けた。

「誰かな。」

「君は三味線の音で，どの芸者か分るかい。」

「分る人もあります。分らんのもあります。旦那さん，ずいぶん結構なお身分で，柔かいお体でございます。」

「凝ってないだろう。」

「凝って，首筋が凝っております。ちょうどよい工合に太ってらっしゃいますが，お酒は召し上がりませんね。」

「よく分ろな。」

「ちょうど旦那さまと同じような姿形のお客さまを，三人知っております。」

「至極平凡な体だがね。」

「なんでございますね，お酒を召し上らないと，ほんとうに面白いということがございませんね，なにもかも忘れてしまう。」

「君の旦那さんは飲むんだね[90]。」

「飯んで困ります。」

「誰だか下手な三味線だね。」

「はい。」

「君は弾くんだろう。」

「九つの時から二十まで習いましたけれど，亭主を持ってから，もう十五年も鳴らしません。」

盲は年より若く見えるものであろうかと島村は思いながら，

「小さい時に稽古したのは確かだね。」

「手はすっかり按摩になってしまいましたけれど，耳はあいております。こうやって芸者衆の三味線を聞いてますと，じれったくなったりして，はい，昔の自分のような気がするんでございましょうね。」と，また耳を傾けて，

「井筒屋のふみちゃんかしら。一番上手な子と一番下手な子は，一番よく分りますね。」

「上手な人もいるかい。」

「駒ちゃんという子は，年が若いけれど，この頃達者になりましたね。」

「ふうん。」

「旦那さん，御存じなんですね。そりゃ上手と言っても，こんな山ん中でのことですから。」

「いや知らないけれど，師匠の息子が帰るのと，昨夜同じ汽車でね。」

「おや，よくなって帰りましたか。」

「よくないようだったね。」

「はあ？ あの息子さんが東京で長患いしたために，その駒子という子がこの夏芸者に出てまで，病院の金を送ったそうですが，どうしたんでしょう。」

「その駒子って？」

「でもまあ，尽すだけ尽しておけば，いいなづけだというだけでも，後後までねえ。」

「いいなづけって，ほんとうかね。」

「はい，いいなづけだそうでございますよ。私は知りませんが，そういう噂でございますね。」

温泉宿で女按摩から芸者の身の上を聞くとは，余りに月並で，反って思いがけないことであったが，駒子が

いいなづけのために芸者に出たというのも，余りに月並な筋書で，島村は素直にのみこめぬ心地であった。

彼は話に深入りして聞きたく思いはじめたけれども，按摩は黙ってしまった。

駒子が息子のいいなづけだとして，葉子が息子の新しい恋人だとして，しかし息子はやがて死ぬのだとすれば，島村の頭にはまた徒労という言葉が浮んで来た。駒子がいいなづけの約束を守り通したことも，身を売ってまで療養させたことも，すべてこれ徒労でなくてなんであろう。

駒子に会ったら，頭から徒労だと叩きつけてやろうと考えると，またしても島村にはなにか反って彼女の存在が純粋に感じられて来るのだった。

この虚偽の麻痺には，破廉恥な危険が匂っていて，島村はじっとそれを味わいながら，按摩が帰ってからも寝転んでいると，胸の底まで冷えるように思われたが，気がつけば窓を明け放したままなのであった[91]。

山峡は日陰となるのが早く，もう寒々と夕暮色が垂れていた。そのほの暗さのために，まだ西日が雪に照る遠くの山々は，すうっと近づいて来たようであった。

やがて山それぞれの遠近や高低につれて，さまざまの襞の陰を深めて行き，峰にだけ淡い日向を残す頃になると，頂の雪の上は夕焼空であった。

村の川岸，スキイ場，社など，ところどころに散らばる杉木立が黒黒と目立ち出した。

島村は虚しい切なさに曝されているところへ，温い明りのついたように駒子が入って来た。

スキイ客を迎える準備の相談会がこの宿にある。その後の宴会に呼ばれたと言った。火燵に入ると，いきなり島村の頬を撫で回しながら，

「今夜は白いわ。変だわ。」

そして揉みつぶすように柔かい頬の肉を摑んで，

「あなたは馬鹿だ。」

もう少し酔っているらしかったが，宴会を終えて来た時は，

「知らん。もう知らん。頭痛い。頭痛い。ああ，難儀だわ，難儀。」と，鏡台の前に崩れ折れると，おかしいほど一時に酔いが顔へ出た。

「水飲みたい，水頂戴。」

頭を両手で抑えて，髪の毀れるのもかまわずに倒れていたが，やがて坐り直してクリイムで白粉を落すと，余りに真赤な顔が剝き出しになつたので，駒子も自分ながら楽しげに笑い続けた。面白いほど早く酒が醒めて来た。寒そうに肩を顫わせた。

そして静かな声で，八月いっぱい神經衰弱でぶらぶらしていたなどと話しはじめた。

「気ちがいになるのかと心配だったわ。なにか一生懸命に思いつめてるんだけれども，なにを思いつめてるか，自分によく分らないの。怖いでしょう。ちっとも眠れないし，それでお座敷へ出た時だけしゃんとするのよ。いろんな夢を見たわ。御飯もろくに食べられないものね。畳へね，縫針を突き刺したり抜いたり，そんなこといつまでもしてるのよ。暑い日中にさ。」

「芸者に出たのは何月。」

「六月。もしかしたら私，今頃は浜松へ行ってたかしれないのよ。」

「世帯を持って?」

駒子はうなづいた。浜松の男に結婚してくれと追い回されたが，どうしても男が好きになれないで，ずいぶ

ん迷ったと言った。

「好きでないものを，なにも迷うことないじゃないか。」

「そうはいかないわ。」

「結婚て，そんな力があるかな。」

「いやらしい。そうじゃないけれど，私は身のまわりがきちんとかたづいてないと，いられないの。」

「うん。」

「あんた，いい加減な人ね。」

「だけど，その浜松の人となにかあったのかい。」

「あれば迷うことないじゃないの。」と，駒子は言い放って，

「でも，お前がこの土地にいる間は，誰とも結婚させない。どんなことしても邪魔してやるって言ったわよ。」

「浜松のような遠くにいてね。君はそんなことを気にしてるの。」

駒子はしばらく黙って，自分の体の温かさを味うような風にじっと横たわっていたが，ふいとなにげなく，

「私妊娠していると思っていたのよ。ふふ，今考えるとおかしくって，ふふふ。」と，含み笑しながら，くっと身をすくめると，両の握り拳で島村の襟を子供みた

いに摑んだ。

閉じ合わした濃い睫毛がまた，黒い目を半は開いているように見えた[92]。

翌る朝，島村が目を覚ますと，駒子はもう火鉢へ片肘突いて古雑誌の裏に落書していたが，

「ねえ，帰れないわ。女中さんが火を入れに来て，みっともない，驚いて飛び起きたら，もう障子に日があたってるんですもの。昨夜酔ってたから，とろとろと眠っちゃったらしいね。」

「幾時。」

「もう八時。」

「お湯へ行こうか。」と，島村は起き上った。

「いや，廊下で人に会うから。」と，まるでおとなしい女になってしまって，島村が湯から帰った時は，手拭を器用にかぶって，かいかいしく部屋の掃除をしていた。

机の足や火鉢の縁まで癇性に拭いて，灰を掻きならすのがもの馴れた様子であった。

島村が火燵へ足を入れたままごろごろして烟草の灰を落すと，それを駒子はハンカチでそっと拭き取っては，灰皿をもって来た。島村は朝らしく笑い出した。駒子

も笑った。

「君が家を持ったら，亭主は叱られ通しだね。」

「なにも叱りやしないじゃないの。洗濯するものまで，きちんと畳んでおくって，よく笑われるけれど，性分ね。」

「箪笥のなかを見れば，その女の性質が分るって言うよ。」

部屋いっぱいの朝日に温まって飯を食いながら，

「いいお天気。早く帰って，お稽古をすればよかったわ。こんな日は音がちがう。」

駒子は澄み深まった空を見上げた。

遠い山々は雪が煙ると見えるような柔かい乳色につつまれていた。

島村は按摩の言葉を思い合わせて，ここで稽古をすればいいと言うと，駒子は直ぐに立ち上って，着替えといっしょに長唄の本を届けるように家へ電話をかけた。

昼間見たあの家に電話があるのかと思うと，また島村の頭には葉子の眼が浮んで来て，

「あの娘さんが持って来るの?」

「そうかもしれないわ。」

「君はあの，息子さんのいいなづけだって?」

「あら。いつそんなことを聞いたの。」

「昨日。」

「おかしな人。聞いたら聞いたで，なぜ昨夜そう言わなかったの。」と，しかし今度は昨日の昼間とちがって，駒子は清潔に微笑んでいた。

「君を軽蔑してなければ，言いにくいさ。」

「心にもないこと。東京の人は嘘つきだから嫌い。」

「それ，僕が言い出せば，話をそらすじゃないか。」

「そらしゃしないわ。それで，あんたそれをほんとうにしたの?」

「ほんとうにした。」

「またあんた嘘言うわ。ほんとうにしないくせして。」

「そりゃ，のみこめない気はしたさ。だけど，君がいいなづけのために芸者になって，療養費を稼いでると言うんだからね。」

「いやらしい。そんな新派芝居みたいなこと。いいなづけは嘘よ。そう思ってる人が多いらしいわ。別に誰のために芸者になったってわけじゃないけれど，するだけのことはしなければいけないわ。」

「謎みたいなことばかり言ってる。」

「はっきり言いますわ。お師匠さんがね，息子さんと私といっしょになればいいと，思った時があったかもしれないの。心のなかだけのことで，口には一度も出しやしませんけれどね。そういうお師匠さんの心のうちは，息子さんも私も薄薄知ってたの。だけど，二人は別になんでもなかった。ただそれだけ[13]。」

「幼馴染だね。」

「ええ，でも，別れ別れに暮して来たのよ。東京へ売られて行く時，あの人がたった一人見送ってくれた。一番古い日記の一番初めに，そのことが書いてあるわ。」

「二人ともその港町にいたら，今頃は一緒になってたかもしれないね。」

「そんなことはないと思うわ。」

「そうかねえ。」

「人のこと心配しなくてもいいわよ。もうじき死ぬから。」

「それによそへ泊るのなんかよくないね。」

「あんた，そんなこと言うのがよくないのよ。私の好きなようにするのを，死んで行く人がどうして止められるの?」

島村は返す言葉がなかった。

しかし駒子がやはり葉子のことに一言も触れないのは,なぜであろうか。

また葉子にしても,汽車の中でまで幼い母のように,我を忘れてあんなにいたわりながらつれて帰った男のなにかである駒子のところへ,朝になって着替へを持って来るのは,どういう思いであろうか。

島村が彼らしく遠い空想をしていると,

「駒ちゃん,駒ちゃん。」と,低くても澄み通る,あの葉子の美しい声が聞えた。

「はい。御苦労さま。」と,駒子は次の間の三畳へ立って行って,

「葉子さんが来てくれたの? まあ,こんなにみんな,重かったのに。」

葉子は黙って帰ったらしかった。

駒子は三の糸を指ではじき切って附け替えてから,調子を合わせた。その間にもう彼女の音の冴えは分ったが,火燵の上に嵩張った風呂敷包を開いてみると,普通の稽古本の外に,杵家弥七の文化三味線譜が二十冊ばかり入っていたので,島村は意外そうに手に取っ

て，

「こんなもので稽古したの?」

「だって，ここにはお師匠さんがないんですもの。しかたがないわ。」

「うちにいるじゃないか。」

「中風ですわ。」

「中風だって，口で。」

「その口もきけなかったの。まだ踊は，動く方の左手で直せるけれど，三味線は耳がうるさくなるばっかり。」

「これで分るのかね。」

「よく分るわ。」

「素人ならとにかく芸者が，遠い山のなかで，殊勝な稽古をしてるんだから，音譜屋さんも喜ぶだろう。」

「お酌は踊が主だし，それからも東京で稽古させてもらったのは，踊だったの。三味線はほんの少しうろ覚えですもの，忘れたらもう浚ってくれる人もなし，音譜が頼りですわ。」

「唄は?」

「いや，唄。そう，踊の稽古の時に聞き馴れたのは，どうにかいいけれど，新しいのはラジオや，それからどこか

で聞き覚えて，でもどうだか分らないわ。我流が入ってて，きっとおかしいでしょう。それに馴染みの人の前では，声が出ないの。知らない人だと，大きな声で歌えるけれど。」と，少しはにかんでから，唄を待つ風に，さあと身構えて，島村の顔を見つめた。

島村ははっと気押された。

彼は東京の下町育ちで，幼い時から歌舞伎や日本踊になじむうちに長唄の文句くらいは覚え，自ずと耳慣れているが，自分で習いはしなかった。長唄といえば直ぐ踊の舞台が思い浮び，芸者の座敷を思い出さぬという風である。

「いやだわ。一番肩の張るお客さま。」と，駒子はちらっと下唇を噛んだが，三味線を膝に構えると，それでもう別の人になるか，素直に稽古本を開いて，

「この秋，譜で稽古したのね。」

勧進帳であった[94]。

忽ち島村は肌から鳥肌立ちそうに涼しくなって，腹まで澄み通って来た。たわいなく空にされた頭のなかいっぱいに，三味線の音が鳴り渡った。全く彼は驚

いてしまったと言うよりも叩きのめされてしまったのである。敬虔の念に打たれた，悔恨の思いに洗われた。自分ただもう無力であって，駒子の力に思いのまま押し流されるのを快いと身を捨てて浮ぶよりしかたなかった。

十九や二十の田舎芸者の三味線なんか高が知れているはずだ，お座敷だのにまるで舞台のように弾いてるじゃないか，おれ自身の山の感傷に過ぎんなどと，島村は思ってみようとしたし，駒子はわざと文句を棒読みしたり，ここはゆっくり，面倒臭いと言って飛ばしたりしたが，だんだん憑かれたように声も高まって来ると，撥の音がどこまで強く冴えるのかと，島村はこわくなって，虚勢を張るように肘枕で転がった。

勧進帳が終ると島村はほっとして，ああ，この女おれに惚れているのだと思ったが，それがまた情けなかった。

「こんな日は音がちがう。」と，雪の晴天を見上げて，駒子が言っただけのことはあった。空気がちがうのである。劇場の壁もなければ，聴衆もなければ，都会の塵埃もなければ，音はただ純粋な冬の朝に澄み通って，

遠くの雪の山々まで真直ぐに響いて行った。

いつも山峡の大きい自然を，自らは知らぬながら相手として孤独に稽古するのが彼女の習わしであったゆえ，撥の強くなるは自然である。その孤独は哀愁を踏み破って，野性の意力を宿していた。幾分下地があるとは言え，複雑な曲を音譜で独習し，譜を離れて弾きこなせるまでには，強い意志の努力が重なっているにちがいない。

島村には虚しい徒労とも思われる，遠い憧憬とも哀れまれる，駒子の生き方が，彼女自身への価値で，凛と撥の音に溢れ出るのであろう。

細かい手の器用なさばきは耳に覚えていず，ただ音の感情が分る程度の島村は，駒子にはちょうどよい聞き手なのであろう。

三曲目に都鳥を弾きはじめた頃は，その曲の艶な柔らかさのせいもあって，島村はもう鳥肌立つような思いは消え，温かく安らいで，駒子の顔を見つめた。そうするとしみじみ肉体の親しみが感じられた。

細く高い鼻は少し寂しいはずだけれども，頬が生き

生きと上気しているので，私はここにいますという囁きのように見えた。美しい血の蛭の輪のように滑らかな唇は，小さくつぼめた時も，そこに映る光をぬめぬめ動かしているようで，そのくせ唄につれて大きく開いても，また可憐に直ぐ縮まるという風に，彼女の体の魅力そっくりであった。下り気味の眉の下に，目尻が上りもせず下りもせず，わざと真直ぐ描いたような眼は，どこかおかしいようながら，今は濡れ輝いて，幼なげだった。白粉はなく，都会の水商売で透き通ったところへ，山の色が染めたとでもいう，百合か玉葱みたいな球根を剝いた新しさの皮膚は，首までほんのり血の色が上っていて，なによりも清潔だった⑮。

しゃんと坐り構えているのだが，いつになく娘じみて見えた。

最後に，今稽古中のをと言って，譜を見ながら新曲浦島を弾いてから，駒子は黙って撥を糸の下に挾むと，体を崩した。

急に色気がこぼれて来た。

島村はなんとも言えなかったが，駒子も島村の批評を

気にする風はさらになく，素直に楽しげだった。

「君はここの芸者の三味線を聞いただけで，誰だか皆分るね。」

「そりゃ分りますわ。二十人足らずですもの。都都逸がよく分るわね，一番その人の癖が出るから。」

そしてまた三味線を拾い上げると，右足を折ったままずらせて，そのふくらはぎに三味線の胴を載せ，腰は左に崩し，体は右に傾けて，

「小さい時こうして習ったわ。」と棹を覗き込むと，

「く、ろ、かあ，みい，の…。」と幼なげに歌って，ぽつんぽつん鳴らした。

「黒髪を最初に習ったの?」

「ううん。」と，駒子はその小さい時のように，かぶりを振った⑯。」

それからは泊まることがあっても，駒子はもう強いて夜明け前に帰ろうとはしなくなった。

「駒子ちゃん。」と，尻上がりに廊下の遠くから呼ぶ，宿の女の子を火燵へ抱き入れて余念なく遊んでは，正午近くにその三つの子と湯殿へ行ったりした。

湯上りの髪に櫛を入れてやりながら，

「この子は芸者さえ見れば，駒ちゃんって，尻上りに呼ぶの。写真でも，絵でも，日本髪だと，駒ちゃん，だって。私子供好きだから，よく分るんだわ。きみちゃん，駒子ちゃんの家へ遊びに行こうね。」と，立ち上ったが，また廊下の籐椅子へのどかに落ちついて，

「東京のあわて者だわ。もう辷ってるわ。」

山麓のスキイ場を真横から南に見晴らせる高みに，この部屋はあった。

島村も火燵から振り向いてみると，スロオプは雪が斑らなので，五六人の黒いスキイ服がずっと裾の方の畑の中で辷っていた。その段段の畑の畦は，まだ雪に隠れぬし，余り傾斜もないから一向たわいがなかった。

「学生らしいね。日曜かしら。あんなことで面白いかね。」

「でも，あれはいい姿勢で辷ってるんですわ。」と，駒子はひとりごとのように，

「スキイ場で芸者に挨拶されると，おや，君かいって，お客さんは驚くんですって。真黒に雪焼けしてるから分らないの。夜はお化粧してるでしょう。」

「やっぱりスキイ服を着て。」

「山袴。ああ厭だ，厭だ。お座敷でね，では明日またスキイ場でってことに，もう直ぐなるのね。今年は辷るの止そうかしら。さようなら。さあ，きみちゃん行こうかよ。今夜は雪だわ。雪の降る前の晩は冷えるんですよ。」

島村は駒子の立った後の籐椅子に坐ると，スキイ場のはずれの坂道に，きみ子の手を引いて帰る駒子が見えた。

雲が出て，陰になる山やまだ日光を受けている山が重なり合い，その陰日向がまた刻々に変って行くのは，薄寒い眺めであったが，やがてスキイ場もふうっと陰って来に。窓の下に目を落すと，枯れた菊の籬には寒天のような霜柱が立っていた。しかし，屋根の雪の解ける樋の音は絶え間なかった。

その夜は雪でなく，霰の後は雨になった。

歸る前の月の冴えた夜，空気がきびしく冷えてから島村はもう一度駒子を呼ぶと，十一時近くだのに彼女は散歩をしようと言ってきかなかった。なにか荒荒しく彼を火燵から抱き上げて，無理に連れ出した。

道は凍っていた。村は寒気の底へ寝静まっていた。駒子は裾をからげて帯に挟んだ。月はまるで青い氷のなかの刃のように澄み出ていた。

「駅まで行くのよ。」

「気ちがい。往復一里もある。」

「あんたもう東京へ帰るんでしょう。駅を見に行くの。」

島村は肩から腿まで寒さに痺れた。

部屋へ戻ると急に駒子はしょんぼりして，火燵に深く両腕を入れてうなだれながら，いつになく湯にも入らなかった。

火燵蒲団はそのままに，つまり掛蒲団がそれと重なり，敷蒲団の裾が堀火燵の縁へ届くように，寝床が一つ敷いてあるのだが，駒子は横から火燵にあたって，じっとうなだれていた。

「どうしたんだ。」

「帰るの。」

「馬鹿言え。」

「いいから，あんたお休みなさい。私はこうしていたいから。」

「どうして帰るんだ。」

「帰らないわ。夜が明けるまでここにいるわ。」

「つまらん，意地悪するなよ。」

「意地悪なんかしないわ。意地悪なんかしやしないわ。」

「じゃあ。」

「ううん，難儀なの。」

「なあんだ，そんなこと，ちっともかまやしない。」と，島村は笑い出して，

「どうもしやしないよ。」

「いや。」

「それに馬鹿だね，あんな乱暴に歩いて。」

「帰るの。」

「帰らなくてもいいよ。」

「つらいわ。ねえ，あんたもう東京へ帰んなさい。つらいわ。」と，駒子は火燵の上にそっと顔を伏せた。

つらいとは，旅の人に深填りしてゆきそうな心細さであろうか。またはこういう時に，じっとこらえるやるせなさであろうか。女の心はそんなにまで来ているのかと，島村はしばらく黙り込んだ。

「もう帰んなさい。」

「実は明日帰ろうかと思っている。」

「あら，どうして帰るの?」と，駒子は目が覚めたように

顔を起した。

「いつまでいたって，君をどうしてあげることも，僕には出来ないんじゃないか。」

ぼうっと島村を見つめていたかと思うと，突然激しい口調で，

「それがいけないのよ。あんた，それがいけないのよ。」と，じれったそうに立ち上って来て，いきなり島村の首に縋りついて取り乱しながら，

「あんた，そんなこと言うのがいけないのよ。起きなさい。起きなさいてば。」と，口走りつつ自分が倒れて，物狂わしさに体のことも忘れてしまった。

それから温かく潤んだ目を開くと，

「ほんとうに明日帰りなさいね。」と，静かに言って，髪の毛を拾った。

島村は次の日の午後三時で立つことにして，服に着替えている時に，宿の番頭が駒子をそっと廊下へ呼び出した。そうね，十一時間くらいにしておいて頂戴と駒子の返事が聞えた。十六七時間は余り長過ぎると，番頭が思ってのことかも知れない。

勘定書を見ると，朝の五時に帰ったのは五時まで，翌

日の十二時に帰ったのは十二時まで，すべて時間勘定になっていた[97]。

駒子はコオトに白い襟巻をして，駅まで見送って来た。

またたびの実の漬物やなめこの罐詰など，時間つぶしに土産物を買っても，まだ二十分も余っているので，駅前の小高い広場を歩きながら，四方雪の山の狭い土地だなあと眺めていると，駒子の髪の黒過ぎるのが，日陰の山峡の侘しさのために反ってみじめに見えた。

遠く川下の山腹に，どうしたのか一か処，薄日の射したところがあった。

「僕が来てから，雪が大分消えたじゃないか。」

「でも二日降れば，直ぐ六尺は積るわ。それが続くと，あの電信柱の電燈が雪のなかになってしまうわ。あんたのことなんか考えて歩いてたら，電線に首をひっかけて怪我するわ。」

「そんなに積るの。」

「この先きの町の中学ではね，大雪の朝は，寄宿舎の二階の窓から，裸で雪へ飛びこむんですって。体が雪のなかへすぽっと沈んでしまって見えなくなるの。そうし

て水泳みたいに，雪の底を泳ぎ歩くんですって。ね，あすこにもラッセルがいるわ。」

「雪見に来たいが正月は宿がこむだろうね。汽車は雪崩に埋れやしないか。」

「あんに贅沢な人ねえ。そういう暮しばかりしてるの?」と，駒子は島村の顔を見ていたが，

「どうして髭をお伸しにならないの。」

「うん。伸そうと思ってる。」と，青青と濃い剃刀のあとをなでながら，自分の口の端には一筋みごとな皺が通っていて，柔かい頬をきりっと見せる，駒子もそのために買いかぶっているかもしれないと思ったが，

「君はなんだね。いつでも白粉を落すと，今剃刀をあてたばかりという顔だね。」

「気持ちの悪い烏がに鳴いている。どこで鳴いてる。寒いね。」と，駒子は空を見上げて，両肘で胸脅を抑えた。

「待合室のストオブにあたろうか。」

その時，街道から停車場へ折れる広い道を，あわただしく駈けて来るのは葉子の山袴だった。

「ああっ，駒ちゃん，行男さんが，駒ちゃん。」と，葉子は

息切れしながら，ちょうど恐ろしいものを逃れた子供が母親に縋りつくみたいに，駒子の肩を摑んで，

「早く歸って，様子が変よ。早く。」

駒子は肩の痛さをこらえるかのように目をつぶると，さっと顔色がなくなったが，思いがけなくはっきりかぶりを振った。

「お客さまを送ってるんだから，私歸れないわ。」

島村は驚いて，

「見送りなんて，そんなものいいから。」

「よくないわ。あんたもう二度と来るか来ないか，私には分りやしない。」

「来るよ，来るよ。」

葉子はそんなことなにも聞えぬ風で，急き込みながら，

「今ね，宿へ電話をかけにの，駅だって言うから，飛んで来だ。行男さんが呼んでる。」と，駒子を引っぱるのに，駒子はじっとこらえていたが，急に振り払って，

「いやよ。」

その途端，二三歩よろめいたのは駒子の方であった。そして，げえっと吐気を催したが，口からはなにも出ず，目の縁が湿って，頰が鳥肌立った。

葉子は呆然と鯱張って，駒子を見つめていた。しかし顔付は余りに真剣なので，怒っているのか，驚いているのか，悲しんでいるのか，それが現われず，なにか假面じみて，ひどく単純に見えた。

その顔のまま振り向くと，いきなり島村の手を摑んで，

「ねえ，すみません。この人を歸して下さい。」と，ひたむきな高調子で責め縋って来た。

「ええ，歸します。」と，島村は大きな声を出した。

「早く歸れよ，馬鹿。」

「あんた，なにを言うことあって。」と，駒子は島村に言いながら彼の女の手は葉子を島村から押し退けていた。

島村は駅前の自動車を指そうとすると，葉子に力いっぱい摑まれていた手先が痺れたけれども，

「あの車で，今直ぐ歸しますから，とにかくあんたは先きに行ってたらいいでしょう。ここでそんな，人が見ますよ。」

葉子はこくりとうなずくと，

「早くね，早くね。」と，言うなり後向いて走り出したのは虚みたいにあっけなかったが，遠ざかる後姿を見送っていると，なぜまたあの娘はいつもああ真剣な様子

なのだろうと，この場にあるまじい不審が島村の心を掠めた⑧。

葉子の悲しいほど美しい声は，どこか雪の山から今にも木魂して来そうに，島村の耳に残っていた。

「どこへ行く。」と，駒子は島村が自動車の運転手を見つけに行こうとするのを引き戻して，

「いや，私帰らないわよ。」

ふっと島村は駒子に肉体的な憎悪を感じた。

「君達三人の間に，どういう事情があるかしらんが，息子さんは今死ぬかもしれんのだろう。それで会いたがって，呼びに来たんじゃないか。素直に帰ってやれ。一生後悔するよ。こう言っているうちにも，息が絶えたらどうする。強情張らないでさらりと水に流せ。」

「ちがう。あんた誤解しているわ。」

「君が東京へ売られて行く時，ただ一人見送ってくれた人じゃないか。一番古い日記の，一番初めに書いてある，その人の最後を見送らんという法があるか。その人の命の一番終りの頁に，君を書き行くんだ。」

「いや，人の死ぬのを見るなんか。」

それは冷たい薄情とも，余りに熱い愛情とも聞えるので，島村は迷っていると，

「日記なんかもうつけられない。焼いてしまう。」と駒子は呟くうちになぜか頬が染まって来て，

「ねえ，あんた素直な人ね。素直な人なら，私の日記をすっかり送ってあげてもいいわ。あんた私を笑わないわね。あんた素直な人だと思うけれど。」

島村はわけ分らぬ感動に打たれて，そうだ，自分ほど素直な人間はないのだという気がして来ると，もう駒子に強いて帰れとは言わなかった。駒子も黙ってしまった。

宿屋の出張所から番頭が出て来て，改札を知らせた。

陰気な冬支度の土地の人が四五人，黙って乗り降りしただけであった。

「フオウムへは入らないわ。さよなら。」と，駒子は待合室の窓のなかに立っていた。窓のガラス戸はしまっていた。それは汽車のなかから眺めると，うらぶれた寒村の果物屋の煤けたガラス箱に，不思議な果物がただ一つ置き忘れられたようであった。

汽車が動くと直ぐ待合室のガラスが光って，駒子の顔はその光のなかにぽっと燃え浮ぶかと見る間に消えてしまったが，それはあの朝雪の鏡の時と同じに眞赤な頬であった。またしても島村にとっては，現実というものとの別れ際の色であった。

国境の山を北から登って，長いトンネルを通り抜けてみると，冬の午後の薄光りはその地中の間へ吸い取られてしまったかのように，また古ほけた汽車は明るい殻をトンネルに脱ぎ落して来たかのように，もう峰と峰との重なりの間から暮色の立ちはじめる山峡を下って行くのだった。こちら側にはまだ雪がなかった。

流れに沿うてやがて広野に出ると，頂上は面白く切り刻んだようで，そこからゆるやかに美しい斜線が遠い裾まで伸びている山の端に月が色づいた。野末にただ一つの眺めである。その山の全き姿を，淡い夕映の空がくっきりと濃深縹色に描き出した。月はもう白くはないけれども，まだ薄色で冬の夜の冷たい冴えはなかった。鳥一羽飛ばぬ空であった。山の裾野が遮るものもなく左右に広広と延びて，河岸へ届こうとするところに，水力電気らしい建物が眞白に立っていた。それは冬枯の車窓に暮れ残るものであった[99]。

窓はスチイムの温気に曇りはじめ，外を流れる野のほの暗くなるにつれて，またしても乗客がガラスへ半ば透明に寫るのだった。あの夕景色の鏡の戯れであった。

東海道線などとは別の国の汽車のように使い古して色褪せた舊式の客車が三四輛しか繋がっていないのだろう。電灯も暗い。

島村はなにか非現実的なものに乗って，時間や距離の思いも消え，虚しく体を運ばれて行くような放心状態に落ちると，単調な車輪の響きが，女の言葉に聞えはじめて来た。

それらの言葉はきれぎれに短いながら，女が精いっぱいに生きているしるしで，彼は聞くのがつらかったほどだから忘れずにいるものだったが，こうして遠ざかって行く今の島村には，旅愁を添えるに過ぎないような，もう遠い声であった。

ちょうど今頃は，行男が息を引き取ってしまっただろうか。なぜか頑固に帰らなかったが，そのために駒子は行男の死目にもあえなかっただろうか。

乗客は不気味なほど少なかった。

五十過ぎの男と顔の赤い娘とが向い合って，ひっきりなしに話しこんでいるばかりだった。肉の盛り上った肩に黒い襟巻を巻いて，娘は全く燃えるようにみごとな血色だった。胸を乗り出して一心に聞き，楽しげに受

け答えしていた。長い旅を行く二人のように見えた。

ところが，製糸工場の煙突のある停車場へ来ると，爺さんはあわてて荷物棚の柳行李をおろして，それを窓からプラット・フォウムへ落しながら，

「まあじゃあ，御縁でもってまたいっしょになろう。」

と，娘に言い残して降りて行った。

島村はふっと涙が出そうになって，われながらびっくりした。それで一人，女に別れての帰りだと思った。

偶然乗り合わせただけの二人とは夢にも思っていなかったのである。男は行商人かなにかだろう[100]。

蛾が卵を産みつける季節だから，洋服を衣桁や壁にかけて出しっぱなしにしておかぬようにと，東京の家を出がけに細君が言つた。来てみるといかにも，宿の部屋の軒端に吊るした装飾灯には，玉蜀黍色の大きい蛾が六七匹も吸いついていた。次の間の三畳の衣桁にも，小さいくせに胴の太い蛾がとまっていた。

窓はまだ夏の虫除けの金網が張ったままであった。その網へ貼りつけたように，やはり蛾が一匹じっと静まっていた。檜皮色の小さい羽毛のような触角を突き

出していた。しかし翅は透き通るような薄緑だった。女の指の長さほどある翅だった。その向うに連る国境の山山は夕日を受けて，もう秋に色づいているので，この一點の薄緑は反って死のようであった。前の翅と後の翅との重なっている部分だけは，緑が濃い。秋風が来ると，その翅は薄紙のようにひらひらと揺れた[101]。

生きているのかしらと島村が立ち上って，金網の内側から指で弾いても，蛾は動かなかった。拳でどんと叩くと，木の葉のようにぱらりと落ちて，落ちる途中から軽やかに舞い上った。

よく見ると，その向うの杉林の前には，数知れぬ蜻蛉の群が流れていた。たんぽぽの綿毛が飛んでいるようだった。

山裾の川は杉の梢から流れ出るように見えた。

白萩らしい花が小高い山腹に咲き乱れて銀色に光っているのを，島村はまた飽きずに眺めた。

内湯から出て来ると，ロシア女の物売りが玄関に腰かけていた。こんな田舎まで来るのだろうかと，島村は見に行った。ありふれた日本の化粧品や髪飾などだった。

もう四十を出ているらしく顔は小皺で垢じみていたが，太い首から覗けるあたりが眞白に脂ぎっている。

「あんたどこから来ました。」と，島村が問うと，

「どこから来ました? 私，どこからですか。」と，ロシア女は答えに迷って，店をかたづけながら考える風だった。

不潔な布を巻いたようなスカートは，最早洋装という感じも失せ，日本慣れたもので，大きい風呂敷包を背負って帰って行った。それでも靴を履いていた。

いっしょに見送っていたおかみさんに誘われて，島村も帳場へ行くと，炉端に大柄の女が後向きに，坐っていた。女は裾を取って立ち上った。黒紋附を着ていた。

スキイ場の宣伝寫眞に，座敷着のまま木綿の山袴を穿きスキイに乗って，駒子と並んでいたので，島村も見覚えのある芸者だった。ふっくりと押出しの大様な年増だった。

宿の主人は炉に金火箸を渡して，大きい小判型の饅頭を焼いていた[102]。

「こんなもの，お一ついかがです。祝いものでございますから，お慰みに一口召上ってみたら。」

「今の人が引いたんですか。」

「はい。」

「いい芸者ですね。」

「年期があけて，挨拶回りに来ました。よく売れた子でしたけれども。」

熱い饅頭を吹きながら，島村が噛んでみると，固い皮は古びた匂いで少し酸っぱかった。

窓の外には，眞赤に熟した柿の実に夕日があたって，その光は自在鍵の竹筒にまで射しこんで来るかと思われた⑬。

「あんな長い，薄ですね。」と，島村は驚いて坂路を見た。背負って行く婆さんの身の丈の二倍もある。そして長い穂だ。

「はい。あれは萱でございますよ。」

「萱ですか。萱ですか。」

「鉄道省の温泉展覧会の時に，休憩所ですか，茶室を造りまして，その屋根はここの萱で葺きましてね。なんでも東京の方がその茶室をそっくりそのまお買いになったそうでございますよ。」

「萱ですか。」と，島村はもう一度ひとりごとのように

呟いて,

「山に咲いているのは萱なんですね。荻の花かと思った。」

島村が汽車から降りて眞先に目についたのは,この山の白い花だった。急傾斜の山腹の頂上近く,一面に咲き乱れて銀色に光っている,それは山に降りそそぐ秋の日光そのもののようで,ああと彼は感情を染められたのだった。それを白荻と思ったのだった[104]。

しかし近くに見る萱の猛猛しさは,遠い山に仰ぐ感傷の花とはまるでちがっていた。大きい束はそれを背負う女達の姿をすっかり隠して,坂道の両側の石崖にがさがさ鳴って行った。逞しい穂であった。

部屋へ戻ってみると,十燭灯のほの暗い次の間では,あの胴の太い蛾が黒塗りの衣桁に卵を産んで歩いていた。軒端の蛾も装飾灯にばたばたぶっつかった。

虫は昼間から鳴きしきっていた。

駒子は少し後れて来た。

廊下に立ったまま,眞向きに島村を見つめて,

「あんた,なんしに来た。こんなところへなんしに来

た。」

「君に会いに来た。」

「心にもないこと。東京の人は嘘つきだから嫌い。」

そして坐りながら，声を柔かに沈めると，

「もう送っていくのはいやよ。なんともいえない気持だわ。」

「ああ，今度は黙って帰るよ。」

「いやよ。停車場へは行かないっていうことだわ。」

「あの人はどうなった。」

「無論死にました。」

「君が送りに来てくれた間にか。」

「でも，それとは別よ。送るって，あんなにいやなものとは思わなかったわ。」

「うん。」

「あんた二月十四日はどうしたの。嘘つき。ずいぶん待ったわよ。もうあんなの言うことなんか，あてにしないからいい。」

二月の十四日には鳥追い祭がある。雪国らしい子供の年中行事である。十日も前から，村の子供等は藁沓で雪を踏み固め，その雪の板を二尺平方ぐらいに切り起し，それを積み重ねて，雪の堂を築く。それは三間四方に高さ一丈に余る雪の堂である。十四日の夜は家家の注

連縄をもらい集めて来て，堂の前であかあかと焚火をする。この村の正月は二月の一日だから，注連縄があるのだ。そうして子供等の堂の屋根に上って，押し合い揉み合い鳥追いの歌を歌う。それから子供等は雪の堂に入って灯明をともし，そこで夜明しする。そしてもう一度，十五日の明け方に雪の堂の屋根で，鳥追いの歌を歌うのである。

ちょうどその頃は雪は一番深い時であろうから，島村は鳥追いの祭を見に来ると約束しておいたのだ。

「私二月は実家へ行ったのよ。商売を休んでたのよ。きっといらっしゃると思って，十四日に帰って来たんだわ。もっとゆっくり看病して来ればよかった。」

「誰か病気。」

「お師匠さんが港へ行ってて，肺炎になったんですの。私がちょうど実家にいたところへ電報が来て，看病したんですわ。」

「よんなったの?」

「いいえ。」

「それは悪かったね。」と，島村は約束を守らなかったのを詫びるように，また師匠の死を悔むように言うと，

「ううん。」と，駒子は急におとなしくかぶりを振って，

ハンカチで机を払いながら，

「ひどい虫。」

ちやぶ台から畳の上まで細かい羽虫が一面に落ちて来た。小さい蛾が幾つも電灯を飛び回っていた。

網戸にも外側から幾種類とも知れぬ蛾が点点ととまって，證み渡った月明りに浮んでいた。

「胃が痛い，胃が痛い。」と，駒子は両手を帯の間へぐっと挿し入れると，島村の膝へ突っ伏した。

襟をすかした白粉の濃いその首へも，蚊より小さい虫がたちまち群がり落ちた。見る間に死んで，そこで動かなくなるのもあった。

首のつけ根が去年より太って脂肪が乗っていた。二十一になったのだと，島村は思った。

彼の膝に生温い湿りけが通って来た。

「駒ちゃん，椿の間へ行ってごらんて，帳場でにやにや笑ってるのよ。好かないわ。ねえさんを汽車で送って来て，帰って楽楽寝ようと思ってると，ここからかかって来てるって言うんでしょう。大儀だからよっぽど止そうと思ったわ。昨夜飲み過ぎた。ねえさんの送別会だったの。お帳場で笑ってばかりいて，あんだだった。一年振

りねえ。一年に一度来るんなの?」

「あの饅頭を僕も食ったよ。」

「そう?」と,駒子は胸を起した。島村の膝に押しつけていたところだけが赤らんで,急に幼なじみた顔に見えた。

次の次の停車場の町まで,あの年増芸者を見送って来たのだと言った。

「つまらないわ。前はなんでも直じまとまったけれど,だんだん個人主義になって銘銘がばらばらなの。ここもずいぶん変ったわ。気性の合わない人が殖えるばかりなの。菊勇ねえさんがいなくなると,私は寂しいんです。なんでもあの人が中心だったから。売れることも一番で六百本を缺かすことはないから,うちでも大事にされてたんだけれど[105]。」

その菊勇は年期があけて[106]生れた町へ帰るというが、結婚するのか、ないか水商賣を續けるのかと島村が問うと、

「ねえさんも可哀想な人なの。お嫁入りは前に一度失敗して、ここへ来たのよ。」と、駒子はその後を口籠って、とかくためらってから,月明いの段段畑の下を眺めて、

「あすこの坂の途中に建ったばかりの家があるでしょう。

「菊村って小料理屋?」

「ええ。あの店へ入るはずだったのを、ねえさんの心柄でふいにしちゃったんだわ。騒ぎだったわね,せっかく自分のために家を建てさせておいて、いざ入るばかりになった時に,蹴っちゃったんですもの。好きな人が出来て、その人と結婚するつもりだったんだけれど、騙されてたのね。夢中になると、あんなかしらね。その相手に逃げられたからって、今更元の鞘(さや)におさまって、店を貰いますというわけにもいかないし、みっともなくてこの土地にはいられないし、またよそで稼ぎ直すんですわ。考へると可哀想なんだわ。私達もよく知らなかったけれど、いろんな人があったのね。」

「男がね。五人もあったのかい。」

「そうね。」と、駒子は含み笑いをしたが、ふっと横を向いた。

「ねえさんも弱い人だったんだわ。弱蟲だ。」

「しかたがないさ。」

「だってそうぢゃないの。好かれたって、なんですか。」

うつ向いたまま簪で頭を搔いた。

「今日送って行って、せつなかったわ[107]。」

「それでせっかくの店はどうしたの。」

「本妻が来てやってるわ。」

「本妻が来てやってるとは面白い。」

「だって、開業の支度もすっかり出来てたんですもの。

そうでもするよりしかたがないでしょう。子供もみんなつれて、本妻が移って来たわ。」

「うちはどうしたんだね。」

「お婆さんを一人残してあるんですって。百姓なんですけれど、主人がこんなこと好きなのね。それは面白い人。」

「道樂者だね。もういい年なんだろう。」

「若いのよ。三十二三かしら。」

「へええ。それぢゃ本妻よりお妾さんの方が年上になるところだったね。」

「おない年の二十七ね。」

「菊村というのは、菊勇の菊だろう。それを本妻がやってるのかね。」

「一度出した看板を変えるわけにもいかないからでしょう。

島村が襟を掻き合わせると、駒子は立って行って窓をしめながら、

「ねえさんはあんたのこともよく知ってた。いらしたわねって、今日も言ってくれた。」

「挨拶に来てたのを帳場で見かけたよ。」

「なんか言った。」

「言やしないよ。」

「あんた私の気持分る?」と、駒子は今しめたばかりの障子をさっとあけて、窓に体を投げつけるやうに腰かけた。島村はしばらくしてから、

「星の光が東京とまるでちがうね。いかにも宙に浮いてるね。」

「月夜だからそうでもないわ。今年の雪はひどかったわ。」

「汽車が度々不通だったらしいね。」

「ええ、こわいくらい。自動車の通うのが、例年より一月も後れて、五月だったわ。スキイ場に賣店があるでしょう、あの二階を雪崩が突き抜けて、下にいた人はそんなことを知らなくて、変な音がするから、臺所で鼠が騒いだんだろうと行ってみてなんともないから、二階へあがると雪だらけじゃないの。雨戸もなにも雪に持って行かれちゃってたのよ。表層雪崩なんだけれど、それをラジオで大きく放送したものよ。恐ろしがってスキイ客が来やしないの。今年はもう乗らないつもりで、去年の暮にスキイも人にくれちゃったのよ。それでも二三度すべったかしら。私変ってない?」

「お師匠さんが死んで、どうしてたんだ。」

「ひとのことなんか、ほっときなさい。二月にはちゃんとここへ来て待ってたわ。」

「港へ帰ったんならそうと手紙をよこせばいいじゃないか。」

「いやよ。そんなみじめな、いやよ。奥さんに見られてもいいような手紙なんか書かないわ。みじめだわ。気兼ねして嘘つくことないわ。」

駒子は早口に叩きつけるような激しさだった。島村は

うなづいた。
「あんたそんな蟲のなかに坐ってないで、電燈を消すといいわ。」
女の耳の凹凸もはつきり影をつくるほど月は明るかった。深く射しこんで疊が冷たく青むようであった。
駒子の唇は美しい蛭の輪のように滑らかであった[108]。
「いや、帰して。」
「相変らずだね。」と、島村は首を反って、どこかおかしいようで少し中高な圓顔を、眞近に眺めた。
「十七でここへ来た時とちっとも変らないって、みんなそう言うわ。生活だって、それはおんなしなんですもの。」
北国の少女の赤みがまだ濃く残っている。芸者風な肌理に月光が貝殻じみたつやを出した。
「でも、うちは変ったの御存じ?」
「お師匠さんが死んでね? もうあのお鷺さんの部屋にはいないんだね。今度のうちほんとうの置屋かい?」
「ほんたうの置屋って? そうね、店で駄菓子や煙草を賣ってますわ。やっぱり私一人しかいないの。今度はほんとうの奉公だから、夜晩くなると、蠟燭をともして本を讀むわ。」
島村が肩を抱いて笑うと、
「メエトルだから、電気を無駄づかいしちゃ悪いわ。」
「そうかね。」

「でも、これが奉公かしらと思うことがあるくらい、うちの人はずいぶん大事にしてくれるのよ。子供が泣いたりすると、おかみさんが遠慮して表へ出て行くわ。なんの不足もないけれど，寝床の曲ってるのだけはいやね。帰りがおそいと敷いといてくれるのよ。敷蒲團がきちんと重なってなかったり、敷布がゆがんでたりでしょう。そんなのを見ると、情なくなって来るのよ。そうかって、自分で敷き直すのは悪いわ。親切がありがたいから。」

「君が家を持ったら苦労だね。」

「皆そう言うわ。性分ね。うちに小さい子供が四人あるから散らかって大変なのよ。私はそれを一日かたづけて歩いてるわ。かたづけてる後から、どうせ散らかすのは分ってるんだけれど、気になってほっとけないんです。境遇の許す範囲で、これでも私、きれいに暮したいとは思ってるんですよ。

「そうだね。」

「あんた私の気持分る?」

「分るよ。」

「分るなら言ってごらんなさい。さあ、言ってごらんなさい。」と、駒子は突然思い迫った聲で突っかかって来た。

「それごらんなさい。言えやしないじゃないの。嘘ばっかり。あんた贅澤に暮して、いい加減な人だわ。分りやしない。」

そうして聲を沈ますと、

「悲しいわ。私が馬鹿。あんたもう明日帰んなさい。」

「そう君のように問いつめたって、はっきり言えるもんじゃない。」

「なにが言えないの。あんたそれがいけないのよ。」と、駒子はまだ術なげに聲をつまらせたが、じっと目をつぶると自分というものを島村がなんとなく感じていてくれるのだろうかと、それは分ったらしい素振りを見せて、

「一年に一度でいいからいらっしゃいね。私のここにいる間は、一年に一度、きっといらっしゃいね。」

年期は四年だと言った。

「實家へ行く時は、また商賣に出るなんて夢にも思はなくて、スキイも人にくれて行っちゃったのに、出来たことと言えば、煙草を止めただけだわ。」

「そうそう、前にはずるぶん吸かしてたね。」

「ええ。お座敷でお客さんのくれるのを，そっと袂へ入れるから、歸ると何本も出て来ることがあるわ。」

「四年はしかし長いね。」

「直く経ってしまいますわ。」

「温い。」と、島村は駒子が近づいて来るままに抱き上げた。

「温いのは生れつきよ。」

「もう朝晩は寒くなっているんだね。」

「私がここへ来てから五年だもの。初めは心細くて、こんなところに住むのかと思ったわ。汽車の開通前は寂しかったなあ。あんたが来はじめてからだって、もう三年だわ。」

その三年足らずの間に三度来たが、その度毎に駒子の境遇の変っていることを、島村は思っていた。

轡蟲(くつわむし)が急に幾匹も鳴き出した。

「いやねえ。」と、駒子は彼の膝から立ち上った。

北風が来て網戸の蛾が一斉に飛んだ。

黒い眼を薄く開いていると見えるのは濃い睫毛を閉じ合わせたのだと、島村はもう知っていながら、やはり近々とのぞきこんでみた。

「煙草を止めて、太ったわ。」

腹の脂肪が厚くなっていた。

久しく會わずにいても、離れていてはとらえ難いものも、こうしてみると忽ちその親しみが還って来る。

駒子はそっと掌を胸へやって、

「片方が大きくなったの。」

「馬鹿。その人の癖だね、一方ばかり。」

「あら。いやだわ。嘘、いやな人。」と、駒子は急に変った。これであったと島村は思い出した[109]。

「両方平均にって、今度からそう言え。」

「平均に? 平均にって言うの?」と、駒子は柔かに顔を寄せた。

この部屋は二階であるが、家のぐるりを蟇(がま)が鳴いて迴った。一匹ではなく、二匹も三匹も歩いているらしい。長いこと鳴いていた。

内湯から上って来ると、駒子は安心しきった静かな聲

でまた身上話をはじめた。

ここで初めての検査の時に、半玉の頃と同じだと思って、胸だけ脱ぐと笑われたこと、それから泣き出してしまったこと、そんなことまで言った。島村に問われるままに。

「私は實に正確なの、二日づつきちんと早くなって行くの。」

「だけどさ、お座敷へ出るのに困るというようなことはないだろう。」

「ええ、そんなこと分るの?」

温まるので名高い温泉に毎日入っているし、舊温泉と新温泉との間をお座敷通いすれば一里も歩くわけになるし、夜更しも少ない山暮しだから、健康な固太りだけれども、藝者などにありがちの少うし腰窄まりだった。横に狹くて從に厚い。そのくせ島村が遠く惹かれて来るような女であることなのは、哀れ深いものがあった。

「私のようなのは子供が出来ないのかしらね。」と、駒子は生眞面目にたづねた。一人の人とつきあってれば、夫婦とおなじではないかと言うのだった。

駒子にそういふ人のあるのを島村は初めて知った。十七の年から五年續いていると言う。島村が前から訝しく思っていた,駒子の無知で無警戒なのはそれで分った。

半玉で受け出してくれた人に死に別れて、港へ歸ると直ぐにその話があったためか,駒子は初めから今日までその人が厭で、いつまでも打ちとけられないと言う。

「五年も續けば、上等の方じゃないか。」

「別れる機會は二度もあったのよ。ここで藝者に出る時と、お師匠さんのうちから今のうちへ変る時と。でも、意志が弱いんだわ。ほんとうに意志が弱いんだわ。」

その人は港にいると言う。その町に置くのは都合が悪いので、師匠がこの村へ来るついでに預けてよこしたのだと言う。親切な人だのに、一度も生き身をゆるす気になれないのは、悲しいと言う。年がちがうので、たまにしか来ないと言う。

「どうしたら切れるか、よっぽど不行跡を働こうと時々思うのよ。ほんとうに思ふんですよ。」

「不行跡はよくない。」

「不行跡は出来ない。やっぱり性分でだめだわ。私は自分の生きてる體が可愛いわ。しようとおもえば、四年の年期が二年になるんだけれど、無理をしないの、體が大事だから。無理すれば、ずいぶん線香が出るだらうな。年期だから、主人に損をかけなければいいのよ。元金が月に割って幾ら、利子が幾ら、税金か幾ら、それに自分の食い扶持（ぶち）を勘定に入れて、分ってるでしょう。それ以上あまり無理して働くこともないわ。面倒臭い座敷でいやなら、さっさと歸っちまうし、おなじみの名指しでなければ、宿でも夜おそくかけてよこさないわ。自分で贅澤する分にはきりがないけれども、気随に稼いでいて、それですむんですもの。もう元金を半分以上返したわ。まだ一

年にならないわ。それでもお小遣がなにやかやと月三十圓はかかるわね。」

月に百圓稼げばいいのだと言った。先月一番少い人で三百本の六十圓だと言った。駒子は座敷数が九十幾つで一番多く、一座敷で一本が自分の貰いになるので、主人には損だが、どんどん廻るのだと言った。借金を殖やして年期の延びた人は、この温泉場には一人もないと言った。

翌る朝、駒子はやはり早くて、

「お花のお師匠さんとこのお部屋を掃除している夢を見て、目が覚めちゃったの。」

窓際へ持ち出した鏡臺には紅葉の山が寫っていた。鏡のなかにも秋の日ざしが明るかった。

駄菓子屋の女の子が駒子の着替えを持って来た。

「駒ちゃん。」と、悲しいほど澄み通る聲で襖の陰から呼ぶ、あの葉子ではなかった。

「あの娘さんはどうした。」

駒子はちらっと島村を見て、

「お墓參りばかりしてるわ。スキイ場の裾にほら、蕎麥の畑があるでしょう。白い花の咲いてる。その左に墓が見えるじゃないの?」

駒子が歸ってから島村も村へ散歩に行ってみた。

白壁の軒下で眞新しい朱色のネルの山袴を履いて、女の子がゴム鞠を突いているのは、實に秋であった。

大名が通った頃からであろうと思われる、古風な作りの家が多い。廂が深い。二階の窓障子は高さ一尺ぐらい

しかなくて長細い。軒端に萱簾を垂れている。

土坡(とは)の上に糸薄(いとすすき)を植えた垣があった。糸薄は桑染(しはぞめ)色(いろ)の花盛りであった。その細い葉が一株づつ美しく噴水のような形に擴がっていた。

そうして道端の日向に藁筵を敷いて小豆(あづき)を打っているのは葉子だった。

乾いた豆幹(まめがら)から小豆が小粒の光のように躍り出る。

手拭をかぶっているので島村が見えないのか,葉子は山袴の膝頭を開いて小豆を叩きながら、あの悲しいほど澄み通って木魂しそうな聲で歌っていた。

　　蝶蝶とんぼやきりぎりす
　　お山でさえづる
　　松蟲鈴蟲くつわ蟲

杉の樹をつと離れた、夕風のなかの烏(からす)が大きい、という歌があるが、この窓から見下す杉林の前には、今日も蜻蛉の群が流れている。夕が近づくにつれ、彼等の游泳はあわただしく速力を早めて来るようだった。

島村は出発の前に驛の賣店でここらあたりの山案内書の新刊を見つけて買って来た。それをとりとめなく讀んでいると,この部屋から見晴らす国境の山々、その一つの頂近くは、美しい池沼を縫う小路で、一帯の濕地にいろんな高山植物が花咲亂れ,夏ならば無心に赤蜻蛉が飛び、帽子や人の手や、また時には眼鏡の縁にさえとまるのどか

さ、虐げられた都會の蜻蛉とは雲泥の差であると書いてあった[110]。

しかし目の前の蜻蛉の群は、なにか追ひつめられたもののように見える。暮れるに先立って黒ずむ杉林の色にその姿を消されまいとあせっているもののように見える。

遠い山は西日を受けると、峰から紅葉して来ているのがはっきり分った。

「人間なんて脆いもんね[111]。頭から骨まで、すっかりぐしゃぐしゃにつぶれてたんですって。熊なんか、もっと高い岩棚から落ちたって、體はちっとも傷がつかないそうよ。」と、今朝駒子が言ったのを島村は思い出した。岩場でまた遭難があったという、その山を指ざしながらであった。

熊のように硬く厚い毛皮ならば、人間の官能はよほどちがったものであったにちがいない。人間は薄く滑らかな皮膚を愛し合っているのだ。そんなことを思って夕日の山を眺めていると島村は感傷的に人肌がなつかしくなって来た。

「蝶蝶とんぼやきりぎりす…。」というあの歌を、早い夕飯時に[112]下手な三味線で歌っている芸者かあった。

山の案内書には、登路、日程、宿泊所、費用などが、簡単に書いてあるだけで、反って空想を自由にしたし、島村へ下りて来た時のことだったし、自分の足跡も残っている山を、こうして眺めていると、今は秋の登山の季節である

から、山に心が誘われて行くのだった。無為徒食の彼には、用もないのに難儀して山を歩くなど徒労の見本のように思われるのだったが、それゆえにまた非現實的な魅力もあった。

遠く離れていると、駒子のことがしきりに思われるにかかはらず、さて近くに来てみると、なにか安心してしまうのか、今はもう彼女の肉體も親し過ぎるのか、人肌がなつかしい思いと、山に誘われる思いとは、同じ夢のように感じられるのだった。昨夜駒子が泊って行ったばかりだからでもあろう。しかし静かななかに一人坐っていては、呼ばなくても駒子も来そうなものだと、心待ちするよりしかたがなかったが、ハイキングの女学生達の若々しく騒ぐ声が聞えているうちに眠ろうと思って、島村は早くから寝た。

やがて時雨が通るらしかった。

翌る朝目をあくと、駒子が机の前にきちんと坐って、本を讀んでいた。羽織も銘仙の不斷着だった。

「目が覚めた?」と、彼女は静かに言って、こちらを見た。

「どうしたんだい。」

「目が覚めた?」

知らぬ間に来て泊っていたのかと疑って、島村が自分の寝床を見廻しながら,枕もとの時計を拾うと、まだ六時半だった。

「早いんだね,」

「だって、女中さんがもう火を入れに来たわよ。」

鐵瓶は朝らしい湯気を立てていた。

「起きなさいよ。」と、駒子は立って来て、彼の枕もとに坐った。ひどく家庭の女めいた素振りであった。島村は伸びをしたついでに、女の膝の上の手をつかんで小さい指の撥胼胝（ばちだこ）を弄びながら、

「眠いよ。夜があけたばかりぢゃないか。」

「一人でよく眠れた?」

「ああ。」

「あんた,やっぱり髭をお伸しにならなかったのね。」

「そうそう、この前別れる時、そんなこと言ってたね、髭を生やせって。」

「どうせ忘れてたって、いいわよ。いつも青々ときれいに剃ってらっしゃるのね。」

「君だって、いつでも白粉を落すと、今剃刀をあてたばかりという顔だよ。」

「頬っぺたが、またお太りになったんぢゃないかしら。色が白くて、眠ってらっしゃるところは髭がないと変だわ。圓いわ。」

「柔和でいいだろう[113]。」

「頼りないわ。」

「いやだね。じろじろ見てたんだね。」

「そう。」と、駒子はにっこりうなづいてその微笑から急に火がついたように笑い出すと[114]、知らず識らず彼の指を握る手にまで力が入って、

「押入に、隠れたのよ。女中さんちっとも気がつかないで。」

「いつさ。いつから隠れてたんだ。」

「今じゃないの? 女中さんが火を持って来た時よ。」

そして思い出し笑いが止まらぬ風だったが[115],ふと耳の根まで赤らめると,それをまぎらわすように掛蒲団の端を持って煽ぎながら,

「起きなさい。起きて頂戴。」

「寒いよ。」と、島村は蒲団を抱えこんで、

「宿じゃもう起きてるのかい。」

「知らないわ。裏から上って来たのよ。」

「裏から?」

「杉林のところから掻き登って来たのよ。」

「そんな路があるの?」

「路はないけれど、近いわ。」

島村は驚いて駒子を見た。

「私が来たのを誰も知らないわ。お勝手に音がしてたけれど、玄関はまだしまってるんでしょう。」

「君はまた早起きなんだね。」

「昨夜眠れなかったのよ。」

「時雨があったの知つてる?」

「そう? あすこの熊笹が濡れてたの、それでなのね。帰るわね。もう一寝入り、お休みなさいね。」

「起きるよ。」と、島村は女の手を握ったまま、勢いよく寝床を出た。そのまま窓へ行って,女が掻き登って来た

というあたりを見下すと、灌木類の茂りの裾が猛々しく拡がっていた。それは杉林に續く丘の中腹で，窓の直ぐ下の畑には、大根、薩摩芋、葱、里芋など、平凡な野菜ながら朝の日を受けて、それぞれの葉の色のちがいが初めて見るような気持であった。

湯殿へ行く廊下から、番頭が泉水の緋鯉に餌を投げていた。

「寒くなったとみえて、食いが悪くなりました。」と、番頭は島村に言って、蠶の踊(きなぎ)を干し砕いた餌が水に浮んでいるのを、しばらく眺めていた。

駒子は清潔に坐っていて、湯から上って来た島村に、

「こんな静かなところで、裁縫してたら。」

部屋は掃除したばかりで、少し古びた畳に秋の朝日が深く差しこんでいた。

「裁縫が出来るのか。」

「失礼ね。きょうだいぢゅうで、一番苦労したわ。」と、ひとりごとのようだったが、急に聲をはずませて、

「駒ちゃんいつ来たって、女中さんが変な顔してたわ。二度も三度も押入に隠れることは出来ないし、困っちゃった。帰るわね。いそがしいのよ。眠れなかったから、髪を洗おうと思ったの。朝早く洗っとかないと、乾くのを待って、髪結ひさんへ行って、昼の宴會の間に合わないのよ。ここにも宴會があるけれど、昨夜になってしらせてよこすんだもの。よそを受けちゃった後で、来れやしな

い。土曜日だから、とてもいそがしいのよ。遊びに来れないわ。」

そんなことを言いながら、しかし駒子は立ち上りそうもなかった。

髪を洗うのは止めにして、島村を裏庭へ誘い出した。さっきそこから忍んで来たのか、渡廊下の下に駒子の濡れた下駄と足袋があった。

彼女が掻き登ったという熊笹は通れそうもないので、畑沿いに水音の方へ下りて行くと、川岸は深い崖になっていて，栗の木の上から子供の声が聞えた。足もとの草のなかにも毬(いが)が幾つも落ちていた。駒子は下駄で踏みにじって、實を剝き出した。みんな小粒の栗だった。

向岸の急傾斜の山腹には、萱の穂が一面に咲き揃って、眩しい銀色に揺れていた。眩しい色と言っても、それは秋空を飛んでいる透明な儚さのようであった。

「あすこへ行ってみようか、君のいいなづけの墓が見える。」

駒子はすっと伸び上って島村をまともに見ると，一握りの栗をいきなり彼の顔に投げつけて，

「あんた私を馬鹿にしてんのね。」

島村は避ける間もなかった。額に音がして、痛かった。

「なんの因縁があって、あんた墓を見物するのよ。」

「なにをそう向きになるんだ。」

「あれだって、私には眞面目なことだったんだわ。あん

たみたいに贅澤な気持で生きてる人とちがうわ。」
「誰か贅澤な気持で生きてるもんか。」と、彼は力なく呟いた。
「じゃあ、なぜいいなづけなんて言うの? いいなづけでないってことは,この前よく話したじゃないの? 忘れてんのね。」
島村は忘れていたわけではない。
「お師匠さんがね、息子さんと私といっしょになればいいと、思った時があったかもしれないの。心のなかだけのことで、口には一度も出しやしませんけれどね。そういうお師匠さんの心のうちは、息子さんも私も薄々知ってたの。だけど、二人は別になんでもなかった。別れ別れに暮して来たのよ。東京へ賣られて行く時、あの人がたった一人見送ってくれた。」
駒子がそう言ったのを覚えている。
その男が危篤だというのに、彼女は島村のところへ泊って、
「私の好きなようにするのを、死んで行く人がどうして止められるの?」と、身を投げ出すように言ったこともあった。
まして、駒子がちょうど島村を驛へ見送っていた時に、病人の様子が変ったと、葉子が迎えに来たにかかわらず、駒子は斷じて歸らなかったために、死目にも會えなかったらしいということもあったので、尚更島村はその行男という男が心に残っていた。

駒子はいつも行男の話を避けたがる。いいなづけではなかったにしても、彼の療養費を稼ぐために，ここで藝者に出たというのだから、「眞面目なこと」だったにちがいない。

栗をぶっつけられても、腹を立る風がないので、駒子は束の間訝しそうであったが、ふいと折れ崩れるように縋って来て，

「ねえ、あんた素直な人ね。なにか悲しいんでしょう。」

「木の上で子供が見てるよ。」

「分らないわ、東京の人は複雑で。あたりが騒々しいから、気が散るのね。」

「なにもかも散っちゃってるよ。」

「今に命まで散らすわよ。墓を見に行きませんか。」

「そうだね。」

「それごらんなさい。墓なんかちっとも見たくないんじゃないの?」

「君の方でこだわってるだけだよ[116]。」

「私は一度も参ったことがないから、こだわるのよ、ほんとうよ，一度も。今はお師匠さんもいっしょに埋まってるんですから、お師匠さんにはすまないと思うけれど、今更参れやしない。そんなことしらじらしいわ[117]。」

「君の方がよっぽど複雑だね。」

「どうして? 生きた相手だと、思うようにはっきりも出来ないから、せめて死んだ人にははっきりしとくのよ。」

静けさが冷たい滴（しづく）となって落ちそうな杉林を抜け

て、スキイ場の裾を線路伝いに行くと，直ぐに墓場だった。田の畦の小高い一角に、古びた石碑が十ばかりと地蔵が立っているだけだった。貧しげな裸だった。花はなかった。

しかし、地蔵の裏の低い木陰から，不意に葉子の胸が浮び上った。彼女もとっさに假面じみた例の眞剣な顔をして[118]、刺すように燃える目でこちらを見た。島村にこくんとおじぎをするとそのまま立ち止まった。

「葉子さん早いのね。髪結いさんへ私…。」と、駒子が言いかかった時だった。どっと眞黒な突風に吹き飛ばされたように、彼女も島村も身を竦めた。

貨物列車が轟然と眞近を通ったのだ。

「姉さあん。」と呼ぶ聲が、その荒々しい響きのなかを流れて来た。黒い貨車の扉から、少年が帽子を振っていた。

「佐一郎う、佐一郎う。」と、葉子が呼んだ。

雪の信號所で驛長を呼んだ、あの聲である。聞えもせぬ遠い船の人を呼ぶような、悲しいほど美しい聲であった。

貨物列車が通ってしまうと、目隠しを取ったように、線路向うの蕎麥の花が鮮かに見えた。赤い茎の上に咲き揃って實に静かであった。

思いがけなく葉子に會ったので、二人は汽車の来るのも気がつかなかったほどだったが、そのようななにかも、貨物列車が吹き拂って行ってしまった[119]。

そして後には、車輪の音よりも葉子の聲の餘韻が残っ

ていそうだった。純潔な愛情の木魂が返って来そうだった。

葉子は汽車を見送(みおく)って，

「弟が乗(の)っているから，駅(えき)へ行ってみようかしら。」

「だって，汽車に駅に待(ま)ってやしないわ。」と駒子が笑った。

「そうね。」

「私ね，行男(ゆきお)さんのお墓参(はかまい)りはしないことよ[120]。」

葉子はうなづいて，ちょっとためらっていたが，墓の前にしゃがんで手を合(あ)わせた。

駒子は突(つ)っ立(た)ったままであった。

島村は目をそらして地蔵(じぞう)を見た。長い顔の三面で，胸で合掌(がっしょう)した一組(ひとくみ)の腕(うで)のほかに，右と左に二本づつの手があった。

「髪を結(ゆ)うのよ。」と，駒子は葉子に言って，畦路(あぜみち)を村の方へ行った。

土地の言葉でハッテという，樹木の幹(みき)から幹へ，竹や木の棒を物干竿(ものほしさお)のような工合(ぐあい)に幾段(いくだん)も結(むす)びつけて，稲をかけて干(ほ)す、そして稲の高い屏風(びょうぶ)を立てたように見えるのだが——島村達が通る道ばたにも，百姓がそのハッテを作っていた。

山袴の腰をひょいと捻って⑫,娘が稲の束を投げ上げると,高くのぼった男が器用に受け取って,扱くように振り分けては⑫,竿にかけていった。物慣れて無心の動きが調子よく繰返されていた。

ハッテの垂れ穂を,貴いものの目方を計るように駒子は掌に受けて,ゆさゆさ揺り上げながら,

「いい實り,触っても気持のいい稲だわ。去年とは大変なちがいだわ。」と,稲の感触を樂むように目を細めた。その上の空低く群雀が乱れ飛んだ。

「田植人夫賃金協定。九十銭,一日賃金賄附。女人夫は右の六分。」というような古い貼紙が道端の壁に残っていた。

葉子の家にもハッテがあった。街道から少し凹んだ畑の奥に建っているのだが,その庭の左手、隣家の白壁沿いの柿の並木に,高いハッテが組んであった。そしてまた畑と庭との境にもつまり柿の木のハッテとは直角に,やはりハッテで,その稲の下をくぐる入口が片端に出来ていた。筵ならぬ稲で,ちょうど小屋掛けしたようである⑬。畑は萬れたダリアと薔薇の手前に里

芋が逞しい葉を拡げていた。緋鯉の蓮池はハツテの向うで見えない。

去年駒子がいたあの蚕の部屋の窓も隠れていた。

葉子は怒ったように頭を下げると、稲穂の入口を帰って行った[124]。

「この家に一人でいるのかい」と島村はその少し前屈みの後姿を見送っていたが，

「そうでもないでしょう。」と，駒子は突慳貪に言った。

「ああ厭だ。もう髪を結うのを止めた。あんたがよけいなこと言うから，あの人の墓参りを邪魔しちゃった。」

「墓で会いたくないって，君の意地っ張りだろう。」

「あんたが私の気持を分からないのよ。後で暇があったら，髪を洗いに行きますわ。晩くなるかもしれないけれど，きっと行くわ。」

そして夜なかの三時であった。

障子を押し飛ばすようにあける音で島村目をが覚ますと，胸の上へばったり駒子が長く倒れて，

「来ると言ったら，来たでしょ。ねえ，来ると言ったら来たでしょ。」と，腹まで波打つ荒い息をした。

「ひどく酔ってんだね。」

「ねえ，来ると言ったら来たでしょ。」

「ああ，来たよ。」

「ここへ来る道，見(み)えん。見(み)えん。ふう，苦しい。」

「それでよく坂(さか)が登(のぼ)れたね。」

「知らん，もう知らん。」と，駒子はうんと仰反(のけぞ)って転(ころ)がるものだから，島村は重苦(おもくる)しくなって起き上(あが)ろうとしたが，不意に起されたことゆえふらついて，また倒れると，頭が熱いものに載(の)って驚いた[125]。

「火みたいじゃないか，馬鹿だね。」

「そう？ 火の枕，火傷(やけど)するよ。」

「ほんとだ。」と，目を閉じているとその熱が頭に沁(し)み渡(わた)つて，島村はじかに生(い)きている思いがするのだった[126]。駒子の激(はげ)しい呼吸につれて，現実というものが傳(つた)わって来た[127]。それはなつかしい悔恨に似(に)て，ただもう安(やす)らかになにかの復讐(ふくしゅう)を待つ心のようであった[128]。

「来ると言ったら来たでしょ。」と，駒子はそれを一心に繰返(くりかえ)して，

「これで来たから，歸る。髪を洗うのよ。」

そして這(は)い上がると，水をごくごく飲(の)んだ。

「そんなんで帰れやしないよ。」

「帰る。連れがあんのよ。お湯道具，どこへ行った。」

島村が立ち上がって電灯をつけると，駒子は両手で顔を隠して畳に突っ伏してしまった。

「いやよ。」

元禄袖の派手なめりんすの袷に黒襟のかかった寝間着で伊達巻をしめていた[129]。それで襦袢の襟が見えず，素足の縁まで酔いが出て，隠れるように身を縮めているのは変に可愛く見えた。

湯道具を投げ出したとみえ，石鹸や櫛が散らばっていた。

「切ってよ，鋏持って来たから。」

「なにを切るんだ。」

「これをね。」と，駒子は髪のうしろへ手をやって，

「うちで元結を切ろうとしたんだけれど[130]，手が言うことをきかないのよ。ここへ寄って切ってもらおうと思って。」

島村は女の髪を掻き分けて元結を切った。ひとところが切れる度に，駒子は髪を振り落としながら少し落ちついて，

「今幾時頃なの。」

「もう三時だよ。」

「あら，そんな？ 地髪（じがみ）を切っちゃだめよ。」

「ずいぶん幾（いく）つも縛（しば）ってるんだね。」

彼の掴（つか）み取る髱（かもじ）の根（ね）の方がむっと温かった。

「もう三時なの？ 座敷から帰って，倒れたまま眠ったらしいわ。お友達と約束しといたから誘（さそ）ってくれたのよ。どこへ行ったかと思ってるわ[131]。」

「待ってるのか。」

「共同湯に入ってるわ，三人。六座敷（ろくざしき）あったんだけれど四座敷（よんざしき）しか回（まわ）れなかった。来週は紅葉（もみじ）でいそがしいわ。どうもありがとう。」と，解けた髪を梳（す）きながら顔を上げると，眩（まぶ）しそうに含（ふく）み笑（わら）いをして，

「知らないわ，ふふふ，可笑（おか）しいな[132]。」

そして術（じゅつ）なげに髱（かもじ）を拾った。

「お友達に悪いから行くわね。帰りにはも寄（よ）らないわ。」

「道が見えるか。」

「見える。」

しかし裾（すそ）を踏（ふ）んでよろめいた。

朝の七時と夜なかの三時と，一日に二度も異常な時間に暇（ひま）を盗（ぬす）んで来たのだと思うと，島村はただならぬものが感じられた。

* * *

紅葉を門松のように，宿の番頭達が門口へ飾りつけていた。観楓客の歓迎である。

生意気な口調で指図しているのは，渡り鳥でさと自ら嘲るように言う臨時雇いの番頭だった。新緑から紅葉までの間を，ここらあたりの山の湯で働き，冬は熱海や長岡などの伊豆の温泉場へ稼ぎに行く，そういう男の一人である。毎年同じ宿に働くとは限らない。彼は伊豆の繁華な温泉場の経験を振り回して，ここらの客扱いの陰口ばかりきいていた。[133]揉み手[134]しながらしつっこく客を引くが，いかにも誠意のない物乞いじみた人相が現われていた。

「旦那，あけびの實を御存じですか。召し上るなら取って参りますよ。」と，散歩帰りの島村に言って，彼はその實を蔓のまま紅葉の枝に結びつけた。

紅葉は山から伐って来たらしく軒端につかえる高さ，玄関がぱっと明るむように色あざやかなくれないで，一つ一つの葉も驚くばかり大きかった。

島村はあけびの冷たい実を握ってみながら，ふと帳場の方を見ると，葉子が炉端に坐っていた。

おかみさんが銅壺で燗の番をしている。葉子はそれと向い合って，なにか言われる度にはっきりうなづいていた。山袴も羽織もなしに，洗い張りしたばかりのような銘仙を着ていた。

「手伝いの人?」と，島村がなにげなく番頭に訊くと，

「はあ，お蔭さまで，人手が足りないもんでございますから。」

「君と同じだね。」

「へえ。しかし，村の娘で，なかなか一風変っておりますな。」

葉子は勝手働きをしているとみえ，今まで客座敷へは出ないようだった。客がたてこむと，炊事場の女中達の声も大きくなるのだが，葉子のあの美しい声は聞えなかった。島村の部屋を受け持つ女中の話では，葉子は寝る前に湯槽のなかで歌を歌う癖があるということだったが，彼はそれも聞かなかった。

しかし葉子がこの家にいるのだと思うと，島村は駒子を呼ぶことにもなぜかこだわりを感じた[139]。駒子の愛情は彼に向けられたものであるにもかかわらず，それを美しい徒労であるかのように思う彼自身の虚しさがあって，けれども反ってそれにつれて，駒子の生きようとして

いる命が裸の肌のように触れて来もするのだった[136]。彼は駒子を哀れみながら，自らを哀れんだ。そのようなありさまを無心に刺し透す光に似た目が，葉子にありそうな気がして，島村はこの女にも惹かれるのだった。

島村が呼ばなくとも駒子は無論しげしげと来た。

渓流の奥の紅葉を見に行くので，彼は駒子の家の前を通ったことがあったが，その時彼女は車の音を聞きつけて，今のは島村にちがいないと表へ飛び出てみたのに，彼はうしろを振り返りもしなかったのは薄情者だと言ったほどだから，彼女は宿へ呼ばれさえすれば，島村の部屋へ寄らぬことはなかった。湯に行くにも道寄りした。宴会があると一時間も早く来て，女中が呼ぶまで彼のところで遊んでいた。座敷をよく抜け出しては，鏡台で顔を直して，

「これから働きに行くの，商売氣があるから。さあ，商売、商売。」と，立って行った。

撥入れだとか，羽織だとか，なにかしら持って来たものを，彼の部屋へ置いて帰りたがった。

「昨夜帰ったら，お湯が沸いてないの。お勝手をごそごそやって，朝の味噌汁の残りを掛けて，梅干で食べたの

よ。冷たあい。今朝うちで起こしてくれないのよ。目が覚めてみたら十時半，七時に起きて来ようと思ってたのに，駄目になったわ。」

そんなことや，どの宿からどの宿へ行ったという、座敷の模様をあれこれと報告するのだった。

「また来るわね。」と，水を飲んで立ち上がりながら，

「もう来んかもしれないわ。だって三十人のところへ三人だもの，忙しくて抜けられないの。」

しかし間もなく来て，

「つらいわ。三十人の相手に三人しかいないの。それが一番年寄と一番若い子だから，私がつらいわ。けちな客、きっとなんとか旅行会だわ。三十人なら少なくとも六人はいなければね。飲んでおどかして来るわね。」

毎日がこんな風では，どうなっていくことかと，さすがに駒子は身も心も隠したようであったが，そのどこか孤独の趣きは，反って風情を艶めかすばかりだった。

「廊下が鳴るので恥かしいわ。そっと歩いても分かるのね。お勝手の横を通ると，駒ちゃん椿の間かって，笑うんですよ。こんな気兼ねをするようになろうとは思わなかった。」

「土地が狭いから困るだろう。」

「もうみんな知ってるわよ。」

「そりゃいかんね。」

「そうね。ちょっと悪い評判が立てば，狭い土地はおしまいね。」と言ったが，直ぐ顔を上げて微笑むと、

「ううん，いいのよ。私達はどこへ行ったって働けるから。」

その素直な実感の籠った調子は，親譲りの財産で徒食する島村にはひどく意外だった。

「ほんとうよ。どこで稼ぐのもおんなじよ。くよくよすることない。」

なにげない口振りなのだが，島村は女の響きを聞いた。

「それでいいのよ。ほんとうに人を好きになれるのは，もう女だけなんですから。」と，駒子は少し顔を赤らめてうつ向いた。

襟を透かしているので，背から肩へ白い扇を拡げたようだ。その白粉の濃い肉はなんだか悲しく盛り上って，毛織物じみて見え，また動物じみて見えた。

「今の世のなかではね。」と，島村は呟いて，その言葉の空々しいのに冷っとした。

しかし駒子は単純に，

「いつだってそうよ。」

そして顔を上げると，ぼんやり言い足した。

「あんたそれを知らないの?」

背に吸いついている赤い肌襦袢(はだじゅばん)が隠(かく)れた[137]。

ヴアレリイやアラン,それからまたロシア舞踊の花やかだった頃のフランス文人達の舞踊論を,島村は翻訳しているのだった。少部数の贅沢本(ぜいたくほん)として自費出版するつもりである。今の日本の舞踊界になんの役にも立ちそうでない本であるが,反って彼を安心させると言えば言える。自分の仕事によって自分を冷笑することは,甘(あま)ったれた楽(たの)しみなのだろう。そんなところから彼の哀れな夢幻(ゆめまぼろし)の世界が生まれるのかもしれぬ。旅にまで出て急ぐ必要はさらさらない。

彼は昆虫どもの悶死(もんし)するありさまを,つぶさに観察していた。

秋が冷(ひ)えるにつれて,彼の部屋の畳の上で死んでゆく虫も日毎(ひごと)にあったのだ。翼の堅い虫はひっくりかえると,もう起き直(なお)れなかった。蜂は少し歩いて転び,また歩いて倒れた。季節の移るように自然と亡びてゆく,静かな死であったけれども,近づいて見ると,脚や触覚を顫(ふる)わせて悶(もだ)えているのだった。それらの小さい死の場所として,八畳の畳はたいへん広いもののように眺められた。

島村は死骸を捨てようとして指で拾いながら,家に残

して来た子供達をふと思い出すこともあった。

窓の金網にいつまでもとまっていると思うと，それは死んでいて，枯葉のように散ってゆく蛾もあった。壁から落ちて来るのもあった。手に取ってみては，なぜこんなに美しく出来ているのだろうと，島村は思った。

その虫除けの金罔も取りはづされた。虫の声がめっきり寂れた。

国境の山々は赤錆色が深まって，夕日を受けると少し冷たい鉱石のように鈍く光り[138]，宿は紅葉の客の盛りであった。

「今日は来れないわよ，多分。地の人の宴会だから。」と，その夜も駒子は島村の部屋へ寄って行くと，やがて大広間に太鼓が入って女の金切声も聞えて来たが，その騒々しさの最中に思いがけない近くから，澄み通った声で

「御免下さい。御免下さい。」と，葉子が呼んでいた。

「あの，駒ちゃんがこれよこしました。」

葉子は立ったまま郵便配達のような恰好に手を突き出したが，あわてて膝を突いた[139]。島村がその結び文を拡げていると，葉子はもういなくなった。なにを言う間もなかった。

「今とっても朗らかに騒いでます酒のんで。」と，懐

紙に酔った字で書いてあるだけだった。

しかし十分と経たぬうちに，駒子が乱れた足音で入って来て，

「今あの子がなにか持って来た?」

「来たよ」。

「そう?」と，上機嫌に片目を細めながら，

「ふう，いい気持。お酒を註文しに行く，そう言って，そうっと抜けて来た。番頭さんに見つかって叱られた。お酒はいい，叱られても，足音が気にならん。ああ，いやだわ。ここへ来ると，急に酔いが出る。これから働きに行くの。」

「指の先までいい色だよ。」

「さあ，商売。あの子なんて言った? 恐しいやきもち焼なの，知ってる?」

「誰が?」

「殺されちゃいますよ。」

「あの娘さんも手伝ってるんだね。」

「お銚子を運んで来て，廊下の陰に立って，じいっと見てんのよ、きらきら目を光らして。あんたああいう目が好きなんでしょう。」

「あさましいさまだと思って見てたんだよ。」

「だから，これ持ってらっしゃいって，書いてよこしたんだわ。水飲みたい、水頂戴。どっちがあさましいか，女は口説き落してみないことには，分らないわよ[140]。私酔ってる?」と，倒れるように鏡台の両端をつかまえて覗きこむと，しゃんと裾を捌いて出て行った[141]。

やがて宴会も終ったらしく，急にひっそりして，瀬戸物の音が遠く聞えたりするので，駒子も客に連れられて別の宿の二次会へ廻ったのかと思っていると，葉子がまた駒子の結び文を持って来た。

「山風館やめにしましたこれから梅の間帰りによりますおやすみ。」

島村は少し恥しそうに苦笑して，

「どうもありがとう。手伝いに来てるの?」

「ええ。」と，うなずくはずみに，葉子はあの刺すように美しい目で，島村をちらっと見た。島村はなにか狼狽した。

これまで幾度も見かける度毎に，いつも感動的な印象を残している，この娘がなにごともなくこうして彼の前に坐っているのは，妙に不安であった。彼女の真剣過ぎる素振りは，いつも異常な事件の真中にいるという風に見えるのだった。

「いそがしそうだね。」

「ええ。でも，私はなにも出来ません。」

「君にはずいぶん度々会ったな。初めはあの人を介抱して帰る汽車のなかで，駅長に弟さんのことを頼んでたの，覚えてる？」

「ええ。」

「寝る前にお湯のなかで歌を歌うんだって？」

「あら，お行儀の悪い，いやだわ。」と，その声が驚くほど美しかった。

「君のことはなにもかも知ってるような気がするね。」

「そうですか。駒ちゃんにお聞きになったんですか。」

「あの人はしゃべりやしない。君の話をするのをいやがるくらいだよ。」

「そうですか。」と，葉子はそっと横を向いて，

「駒ちゃんはいいんですけれども，可哀想なんですから，よくしてあげて下さい。」

早口に言う，その声が終りの方は微かに顫えた。

「しかし僕には，なんにもしてやれないんだよ。」

葉子は今に体まで顫えて来そうに見えた。危険な輝きが迫って来るような顔から島村は目をそらせて笑いながら，

「早く東京へ帰った方がいいかもしれないんだけれど

もね。」

「私も東京へ行きますわ。」

「いつ?」

「いつでもいいんですの。」

「それじゃ，帰る時連れて行ってあげようか。」

「ええ，連れて帰って下さい。」と，こともなげに，しかし真剣(しんけん)な声で言うので，島村は驚いた。

「君のうちの人がよければね。」

「うちの人って，鉄道へ出ている第一人ですから，私がきめちゃっていいんです。」

「東京になんかあてがあるの?」

「いいえ。」

「あの人に相談した?」

「駒ちゃんですか。駒ちゃんは憎いから言わないんです。」

そう言って，気のゆるみか，少し濡(ぬ)れた目で彼を見上げた葉子に，島村は奇怪な魅力を感じると，どうしてか反って，駒子に対する愛情が荒々(あらあら)しく燃(も)えて来るようであった。為体(えたい)の知(し)れない娘と駈落(かけお)ちのように帰ってしまうことは，駒子への激(はげ)しい謝罪の方法であるかと思われた。またなにかしら刑罰(けいばつ)のようでもあった。

「君はそんな，男の人と行ってこわくはないのかい。」

「どうしてですか。」

「君が東京でさしづめ落(お)ちつく先(さき)きとか，なにをしたいとかいうことくらいきまってないと，危(あぶな)いじゃないか。」

「人一人くらいどうにでもなりますわ。」と，葉子は言葉(ことば)じりが美しく吊(つ)り上(あが)るように言って，島村を見つめたまま，

「女中に使っていただけませんの?」

「なあんだ，女中にか?」

「女中はいやなんです。」

「この前東京にいた時は，なにをしてたんだ。」

「看護婦です。」

「病院か学校に入ってたの。」

「いいえ，ただなりたいと思っただけですわ。」

島村はまた汽車のなかで師匠の息子(むすこ)を介抱(かいほう)していた葉子の姿を思い出して，あの真剣さのうちには葉子の志望(しぼう)も現(あら)われていたのかと微笑(ほほえ)まれた[14]。

「それじゃ今度も看護婦の勉強がしたいんだね。」

「看護婦にはもうなりません。」

「そんな根(ね)なしじゃいけないね[15]。」

「あら，根(ね)なんて，いやだわ。」と，葉子は弾(はじ)き返(かえ)すように笑った。」

その笑い声も悲しいほど高く澄(す)んでいるので，白痴(はくち)じ

みては聞こえなかった。しかし島村の心の殻を空しく叩いて消えてゆく。

「なにがおかしいんだ。」

「だって,私は一人の人しか看病しないんです。」

「え?」

「もう出来ませんの。」

「そうか。」と,島村はまた不意打ちを食わされて静かに言った。

「毎日君は蕎麦畑の下の墓にばかり参ってるそうだね。」

「ええ。」

「一生のうちに,外の病人を世話することも,外の人の墓に参ることも,もうないと思ってるのか?」

「ないわ。」

「それに墓を離れて,よく東京へ行けるね?」

「あら,すみません。連れて行って下さい。」

「君は恐しいやきもち焼きだって,駒子が言ってたよ。あの人は駒子のいいなずけじゃなかったの?」

「行男さんの? 嘘,嘘ですよ。」

「駒子が憎いつて,どういうわけだ。」

「駒ちゃん?」と,そこにいる人を呼ぶかのように言って,葉子は島村をきらきら睨んだ。

「駒ちゃんをよくしてあげて下さい。」

「僕はなんにもしてやれないんだよ。」

葉子の目頭に涙が溢れて来ると，畳に落ちていた小さい蛾を掴んで泣きじゃくりながら，

「駒ちゃんは私が気ちがいになると言うんです。」と，ふっと部屋を出て行ってしまった。

島村は寒気がした。

葉子の殺した蛾を捨てようとして窓をあけると，酔った駒子が客を追いつめるような中腰になって拳を打っているのが見えた。空は曇っていた。島村は内湯に行った。

隣りの女湯へ葉子が宿の子をつれて入って来た。

着物を脱がせたり，洗ってやったりするのが，いかにも親切なものいいで，初々しい母の甘い声を聞くように好もしかった。

そしてあの声で歌い出した。

……………　……………

裏へ出て見れば　梨の樹が三本

杉の樹が三本　みんなで六本

下から烏が　巣をかける

上から雀が　　　　巣をかける

森の中の螽蟖　　　どういうて囀るや

お杉友達墓参り　　墓参り一丁一丁一丁や

手鞠歌の幼い早口で生き生きとはずんだ調子は，ついさっきの葉子など夢かと島村に思わせた。

葉子が絶え間なく子供にしゃべり立てて上ってからも，その声が笛の音のようにまだそこらに残っていそうで，黒光りに古びた玄関の板敷きに片寄せてある，桐の三味線箱の秋の夜更らしい静まりにも，島村はなんとなく心惹かれて，持主の芸者の名を読んでいると，食器を洗う音の方から駒子が来た。

「なに見て人の?」

「この人泊りかい?」

「誰。ああ，これ? 馬鹿ね、あんた，そんなものいちいち持って歩けやしないじゃないの。幾日も置きっ放しにしとくことがあるのよ。」と笑ったはずみに，苦しい息を吐きながら目をつぶると，褄を放して島村によろけかかった[14]。

「ねえ，送って頂戴。」

「帰ることないじゃないか。」

「だめ，だめ，帰る。地の人の宴会で，みんな二次会へついて行ったのに，私だけ残ったのよ。ここにお座敷があったからいいようなものの，お友達が帰りにお湯へでも誘ってくれて，私が家にいなかったら，あんまりだわ[14]。」

したたか酔っているのに，駒子は険しい坂をしゃんしゃん歩いた。

「あの子をあんた泣かしたのね。」

「そう言えば，確かに少し気ちがいじみてるね。」

「人のことをそんな風に見て，面白いの。」

「君が言ったんじゃないか，気ちがいになりそうだって，君に言われたのを思い出すと，くやしくて泣き出したらしかったよ。」

「それならいいわ。」

「ものの十分もたたぬうちに，お湯に入っていい声で歌ってるんだ。」

「お湯のなかで歌を歌うのは，あの子の癖なのよ。」

「君のことをよくしてあげて下さいって，真剣に頼むんだ。」

「馬鹿ねえ。だけど，そんなこと，あなたが私に吹聴なさらなくってもいいじゃないの。」

「吹聴？ 君はあの娘のことになると，どうしてだか知ら

ないが妙に意地を張るんだね。」

「あんたあの子が欲しいの?」

「それ,そういうことを言う。」

「じょうだんじゃないのよ。あの子を見てると,行末私のつらい荷物になりそうな気がするの。なんとなくそうなの。あんただって仮りにあの子が好きだとして,あの子のことよく見てごらんなさい。きっとそうお思いになってよ。」と,駒子は島村の肩に手をかけてしなだれて来たが,突然首を振ると,

「ちがう。あんたみたいな人の手にかかったら,あの子は気ちがいにならずにすむかもしれないわ。私の荷物を持って行っちゃってくれない?」

「いい加減にしろよ。」

「酔って管を巻いてると思ってらっしゃるわ[146]。あの子があんたの傍で可愛がられてると思って,私はこの山のなかで身を持ち崩すの。しいんといい気持[147]。」

「おい。」

「ほっといて頂戴[148]。」と,小走りに逃げて雨戸にどんとぶっつかると,そこは駒子の家だった。

「もう帰らないと思ってるんだ。」

「ううん,あくのよ。」

枯れ切った音のする戸の裾を抱き上げるように引いて，駒子は囁いた。

「寄って行って。」

「だった今頃。」

「もう家の人は寝ちゃってますわ。」

島村はさすがにしりごみした。

「それじゃ私が送って行きます。」

「いいよもう。」

「いけない。今度の私の部屋まだ見ないじゃないの。」

「勝手口へ入ると，目の前に家の人達の寝姿が乱れていた。ここらあたりの山袴のような木棉の，それも色褪せた固い蒲団を並べて，主人夫婦と十七八の娘を頭に五六人の子供が薄茶けた明りの下に，思い思いの方に顔を向けて眠っているのは，佗しいうちにも逞しい力が籠っていた。

島村は寝息の温みに押し返されるように，思わず表へ出ようとしたけれども，駒子がうしろの戸をがたびししめて，足音の遠慮もなく板の間を踏んで行くので，島村も子供の枕もとを忍ぶように通り抜けると，怪しい快感で胸が顫えた。

「ここで待ってて。二階の明(あか)りをつけますから。」

「いいよ。」と，島村は真暗(まっくら)な梯子段(はしごだん)を昇(のぼ)って上(あ)がった。振(ふ)り返(かえ)ると素朴な寝顔(ねがお)の向(むこ)うに駄菓子(だがし)の店(みせ)が見えた。

百姓家らしい古畳(ふるたたみ)の二階は四間で，

「私一人だから広いことは広いのよ。」と，駒子は言ったが，襖(ふすま)はみな明(あ)け放(はな)して，家の古道具などをあちらの部屋に積み重ね，煤(すす)けた障子(しょうじ)のなかに駒子の寝床(ねどこ)を一つ小さく敷(し)き，壁に座敷着(ざしきぎ)のかかっているのなどは，狐狸(こり)の棲家(すみか)のようであった。

駒子は床(とこ)の上にちょこんと坐ると，一枚しかない座蒲団を島村にすすめて，

「まあ，真赤。」と，鏡を覗(のぞ)いた。

「こんなに酔ってたのかしら?」

そして簞笥(たんす)の上の方を捜(さが)しながら，

「これ，日記。」

「ずいぶんあるんだね。」

その横から千代紙張(ちよがみば)りの小箱(こばこ)を出すと，いろんな煙草がいっぱいつまっていた。

「お客さんのくれるのを袂(たもと)に入れたり帯に挾(はさ)んだりして帰るから，こんなに皺(しわ)になってるけれど，汚(きたな)くはな

いの。そのかわりたいていのものは揃ってるわ。」と，島村の前に手を突いて箱のなかを掻き回して見せた。

「あら，燐寸がないわ。自分が煙草を止めたから，いらないのよ。」

「いいよ。裁縫してたの?」

「ええ。紅葉のお客さんで，ちっとも捗らないの。」と，駒子は振り向いて，箪笥の前に縫物を片寄せた。

駒子が東京暮しの名残であろう，柾目のみごとな箪笥や朱塗の贅沢な裁縫箱は，師匠の家の古い紙箱のような屋根裏にいた時と同じだけれども，この荒れた二階では無慚に見えた[149]。

電灯から細い紐が枕の上へ下っていた。

「本を読んで寝る時に，これを引っぱって消すのよ。」と，駒子はその紐を弄びながら，しかし家庭の女じみた風におとなしく坐って，なにか羞んでいた。

「狐のお嫁入りみたいだね[150]」

「ほんとうですわ。」

「この部屋で四年暮すのかい。」

「でも，もう半年すんだわ。直ぐよ。」

下の人達の寝息が聞えて来るようだし，話の継穂がな

い[151]ので，島村はそそくさと立ち上った。

駒子は戸をしめながら，首を突き出して空を仰ぐと，

「雪催い[152]ね。もう紅葉もおしまいになるわ。」と，表に出て，

「ここらあたりは山家ゆえ，紅葉のあるのに雪が降る。」

「じゃあ，お休み。」

「送って行くわ。宿の玄関までよ。」

ところが島村といっしょに宿へ入って来て，

「お休みなさいね。」と、どこかへ消えて行ったのに，しばらくするとコップに二杯なみなみと冷酒をついで，彼の部屋へ入って来るなり激しく言った。

「さあ，飲みなさい，飲むのよ。」

「宿で寝ちゃってるのに，どこから持って来た[153]。」

「ううん，あるとこ分ってる。」

駒子は樽から出す時にも飲んで来たとみえ，さっきの酔いが涙ったらしく眼を細めてコップから酒のこぼれるのを見据えながら，

「でも，暗がりでひっかけるとおいしくないわ。」

突きつけられたコップの冷酒を島村は無造作に飲んだ。

こればかりの酒で酔うはずはないのに，表を歩いて体が冷えていたせいか，急に胸が悪くなって頭へ来た。顔の青ざめるのが自分に分るようで，目をつぶって横たわると，駒子はあわてて介抱し出したが，やがて島村は女の熱いからだにすっかり幼く安心してしまった。

駒子はなにかきまり悪そうに，例えばまだ子供を産んだことのない娘が人の子を抱くようなしぐさになって来た。首をもたげて子供の眠るのを見ているという風だった。

島村はしばらくしてぽつりと言った。

「君はいい子だね。」

「どうして? どこがいいの。」

「いい子だよ。」

「そう? いやな人ね。なにを言ってるの。しっかりして頂戴[154]。」と，駒子はそっぽを向いて島村を揺すぶりながら，切れ切れに叩くように言うと，じっと黙していた。

そして一人で含み笑いして，

「よくないわ。つらいから帰って頂戴。もう着る着物がないの。あなたのところへ来る度に，お座敷着を変えたいけれど，すっかり種切れで，これお友達の借着なのよ。悪い子でしょう[155]?」

島村は言葉も出なかった。

「そんなの，どこがいい子?」と，駒子は少し声を潤(うる)ませて，

「初めて会った時，あんたなんていやな人だろうと思ったわ。あんな失礼なことを言う人ないわ。ほんとうにいやな気がした。」

島村はうなずいた。

「あら。それを私今まで黙(だま)ってたの。分る? 女にこんなこと言わせるようになったらおしまいじゃないの。」

「いいよ。」

「そう?」と，駒子は自分を振(ふ)り返(かえ)るように，長いこと静かにしていた。その一人の女の生きる感じが温く島村に傳(つた)わって来た。

「君はいい女だね。」

「どういいの?」

「いい女だよ。」

「おかしな人。」と，肩(かた)をくすぐったそうに顔を隠(かく)したが，なんと思ったか，突然むくっと片肘(かたひじ)立(た)てて首を上げると，

「それどういう意味? ねえ，なんのこと?」

島村は驚いて駒子を見た。

「言って頂戴。それで通(かよ)ってらしたの? あんた私を笑ってたのね。やっぱり笑ってらしたのね。」

真赤になって島村を睨みつけながら詰問するうちに，駒子の肩は激しい怒りに顫えて来て，すうっと青ざめると，涙をぽろぽろ落した。

「くやしい，ああっ，くやしい。」と，ごろごろ転がり出て，うしろ向き坐った。

島村は駒子の聞きちがいに思いあたると，はっと胸を突かれた⑮けれど，目を閉じて黙っていた。

「悲しいわ。」

駒子はひとりごとのように呟いて，胴を円く縮める形に突っ伏した。

そうして泣きくたびれたか，ぶすりぶすりと銀の簪を畳に突き刺していたが，不意に部屋を出て行ってしまった。

島村は後を追うことが出来なかった。駒子に言われてみれば，十分に心疚しいものがあった。

しかし直ぐに駒子は足音を忍ばせて戻ったらしく，障子の外から上ずった声で呼んだ。

「ねえ，お湯にいらっしゃいません?」

「ああ。」

「御免なさいね。私考え直して来たの。」

廊下に隠れて立ったまま，部屋へ入って来そうもないので，島村が手拭を持って出て行くと，駒子は目を合わせるのを避けて，少しうつ向きながら先きに立った。罪をあばかれて曳かれて行く人に似た姿であったが，湯で体が温まる頃から変にいたいたしいほどはしゃぎ出して眠るどころでなかった[157]。

その次の朝，島村は謡[158]の声で目が覚めた。

しばらく静かに謡を聞いていると，駒子が鏡台の前から振り返って，にっと微笑みながら，

「梅の間のお客さま。昨夜宴会の後で呼ばれたでしょう。」

「謡の会の団体旅行かね。」

「ええ。」

「雪だろう?」

「ええ。」と，駒子は立ち上って，さっと障子をあけて見せた。

「もう紅葉もおしまいね。」

窓で区切られた灰色の空から大きい牡丹雪がほうっとこちらへ浮び流れて来る。なんだか静かな嘘のようだ。島村は寝足りぬ虚しさで眺めていた。

謡の人々は鼓も打っていた。

島村は去年の暮のあの朝雪を思い出して鏡台の方を見ると，鏡のなかでは牡丹雪の冷たい花びらが尚大きく浮び，襟を開いて首を拭いている駒子のまわりに，白い線を漂わした。

駒子の肌は洗い立てのように清潔で，島村のふとした言葉もあんな風に聞きちがえねばならぬ女とは到底思えないところに，反って逆らい難い悲しみがあるかと見えた。

紅葉の銹色が日毎に暗くなっていた遠い山は，初雪であざやかに生きかえった。

薄く雪をつけた杉林は，その杉の一つ一つがくっきりと目立って，鋭く天を指しながら地の雪に立った。

雪のなかで系をつくり，雪のなかで織り，雪の水に洗い，雪の上に晒す。績み始めてから織り終るまで，すべては雪のなかであった。雪ありて縮あり，雪は縮の親というべしと，昔の人も本に書いている。

村里の女達の長い雪ごもりのあいだの手仕事，この雪国の麻の縮は島村も古着屋であさって夏衣にしていたものだ。踊りの方の縁故から能衣裳の古物などを扱

う店も知っているので，筋のいい縮が出たらいつでも見せてほしいと頼んであるほど，この縮を好んで，一重の襦袢にもした。

雪がこいの簾をあけて，雪解の春ころ[159]，昔は縮の初市が立ったという。はるばる縮を買いに来る三都の呉服問屋の定宿さえあったし，娘達が半年の丹精で織り上げたのもこの初市のためだから，遠近の村里の男女が寄り集まって来て，見世物や物売の店も並び，町の祭のように賑わったという。縮には織子の名と所とを書いた紙札をつけて，その出来栄えを一番二番という風に品定めしたの嫁選びにもなった。子供のうちに織り習って，そうして十五六から二十四五までの女の若さでなければ，品のいい縮は出来なかった。年を取っては機面のつやが失われた[160]。娘達は指折りの織子の数に入ろうとしてわざを磨いただろうし，旧暦の十月から糸を績み始めて明る年の二月半ばに晒し終るという風に，ほかにすることもない雪ごもりの月日の手仕事だから念を入れ，製品には愛着もこもっただろう。

島村が着る縮のうちにも，明治の初めから江戸の末の娘が織ったものはあるかもしれなかった。自分の縮を島

村は今でも「雪晒(ゆきさら)し」に出す。誰が肌につけたかしれない古着を，毎年産地へ晒しに送るなど厄介(やっかい)だけれども，昔の娘の雪ごもりの丹精を思うと，やはりその織子の土地でほんとうの晒し方をしてやりたいのだった。深い雪の上に晒した白麻(しろあさ)に朝日が照(て)って，雪か布かが紅(くれない)に染まるありさまを考えるだけでも，夏のよごれが取れそうだし，わが身をさらされるように気持ちよかった。もっとも東京の古着屋が扱(あつか)ってくれるので，昔通りの晒し方が今に伝(つた)わっているのかどうか，島村は知らない。

晒屋は昔からあった。織子が銘々の家で晒すということは少なく，たいがい晒屋に出した。白縮は織りおろしてから晒し，色のある縮は糸につくったのを桛(かせ)にかけて晒す。白縮は雪へじかにのばして晒す。旧の一月から二月にかけて晒すので，田や畑を埋(う)めつくした雪の上を晒場(さらしば)にすることもあるという。

布にしろ糸にしろ，夜通し灰汁(あく)に浸(ひた)しておいたのを翌(あく)る朝幾度も水で洗っては絞り上げて晒す。これを幾日も繰り返すのだった。そうして白縮をいよいよ晒し終ろうとするところへ朝日が出てあかあかとさす景色はたとえるものがなく，暖国の人に見せたいと，昔の人も書いている[161]。また縮を晒し終るということは雪国が春の近いしらせであったろう。

縮の産地はこの温泉場に近い。山峡(さんきょう)の少しづつひらけてゆく川下(かわしも)の野(の)がそれで，島村の部屋からも見えていそうだった。昔縮の市が立ったという町にはみな汽車の駅が出来て、今も機業地(はたぎょうち)として知られている。

しかし島村は縮を着る真夏にも縮を織る真冬にも，この温泉場に来たことがないので，駒子に縮の話をしてみる折(おり)はなかった。昔の民芸のあとをたずねてみるという柄(がら)でもなかった。

ところが葉子が湯殿(ゆどの)で歌っていた歌を聞いて，この娘も昔生まれていたら，糸車(いとぐるま)や機(はた)にかかって，あんな風に歌ったのかもしれないと，ふと思われた。葉子の歌はいかにもそういう声だった。

毛よりも細い麻糸は天然の雪の湿気(しめりけ)がないとあつかいにくく，陰冷(いんれい)の季節がよいのだそうで，寒中(かんちゅう)に織った麻糸が暑中に着て肌に涼しいのは陰陽の自然だという言い方を昔の人はしている[12]。島村にまつわりついて来る駒子にも，なにか根の涼しさがあるようだった。そのためよけい駒子のみうちのあついひとところが島村にあわれだった[13]。

けれどもこんな愛着は一枚の縮ほどの確かな形を残しもしないだろう。着る布は工芸品のうちで寿命の短い方にしても，大切にあつかえば五十年からもっと前の縮が

色も褪せないで着られるが，こうした人間の身の添い馴れば縮ほどの寿命もないなどとぼんやり考えていると，ほかの男の子供を産んで母親になった駒子の姿が不意に浮んで来たりして，島村ははっとあたりを見まわした。疲れているのかと思った。

妻子のうちへ帰るのも忘れたような長逗留だった。離れられないからでも別れともないからでもないが[164]，駒子のしげしげ会いに来るのを待つ癖になってしまっていた。そうして駒子がせつなく迫って来れば来るほど，島村は自分が生きていないかのよろな苛責がつのった。いわば自分のきびしさを見ながら，ただじっとたたずんでいるのだった。駒子が自分のなかにはまりこんで来るのが，島村は不可解だった。駒子のすべてが通じて来るのに，島村のなにも駒子には通じていそうにない。駒子が虚しい壁に突きあたる木霊に似た音を，島村は自分の胸の底に雪が降りつむように聞いた。このような島村のわがままはいつまでも続けられるものではなかった。

こんど帰ったらもうかりそめにこの温泉へは来れないだろうという気がして，島村は雪の季節が近づく火鉢によりかかっていると，宿の主人が特に出してくれた京出来の古い鉄瓶で，やわらかい松風の音がしていた。銀の花鳥が器用にちりばめてあった。松風の音は二つ重な

って，近くのと遠くのとに聞きわけられたが，その遠くの松風のまた少し向うに小さい鈴がかすかに鳴りつづけているようだった。島村は鉄瓶に耳を寄せてその鈴の音を聞いた。鈴の鳴りしきるあたりの遠くに鈴の音ほど小刻みに歩いて来る駒子の小さい足が，ふと島村に見えた。島村は驚いて，最早ここを去らねばならぬと心立った。

そこで島村は縮の産地へ行ってみることを思いついた。この温泉場から離れるはずみをつけるつもりもあった[165]。

しかし川下に幾つもある町のどれへ行けばよいのか，島村はわからなかった。現在機業地に発展している大きい町が見たいというのではないので，島村はむしろさびしそうな駅に下りた。しばらく歩くと昔の宿場らしい町通口出た。

家々の庇を長く張り出して，その端を支える柱が道路に立ち並んでいた。江戸の町で店下と言ったのに似ているが，この国では昔から雁木というらしく，雪の深いあいだの往来になるわけだ。片側は軒を揃えて，この庇が続いている。

隣りから隣りへ連なっているから，屋根の雪は道の真

中へおろすより捨場がない。実際は大屋根から道の雪の堤へ投げるのだ。向う側へ渡るのには雪の堤をところどころくりぬいてトンネルをつくる。胎内くぐりとこの地方ではいうらしい。

同じ雪国のうちでも駒子のいる温泉村などは軒が続いていないから，島村はこの町で初めて雁木を見るわけだった。もの珍らしさにちょっとそのなかを歩いてみた。古びた庇の陰は暗かった。傾いた柱の根元が朽ちていたりした。先祖代々雪に埋もれたうっとうしい家のなかを覗いてゆくような気がした。

雪の底で手仕事に根をつめた織子達の暮しは[166]，その製作品の縮のように爽かで明るいものではなかった。そう思われるに十分の古町の印象だった。縮のことを書いた昔の本にも唐の秦韜玉の詩などが引かれているが[167]，機織女を抱えてまで織らせる家がなかったのは，一反の縮を織るのにずいぶん手間がかかって，銭勘定では合わないからだという。

そんな辛苦をした無名の工人はとっくに死んで，その美しい縮だけが残っている。夏に爽凉な肌触りで島村らの贅沢な着物となっている。そう不思議でもないことが島村はふと不思議であった。一心こめた愛の所行

はいつかどこかで人を鞭打(むちう)つものだろうか。島村は雁木の下から道へ出た。

宿場の街道筋(がいどうすじ)らしく真直に長い町通(まちどおり)だった[168]。温泉村から続いている古い街道だろう。板葺(いたぶ)きの屋根の算木(さんぎ)や添石(そえいし)も温泉町と変りがなかった。

庇の柱が薄い影を落していた。いつのまにか夕暮近くだった。

なにも見るものがないので，島村はまた汽車に乗って，もう一つの町に下りてみた。前の町と似たものだった。やはりただぶらぶら歩いて，寒さしのぎにうどんを一杯すすっただけだった。

うどん屋は川岸で，これも温泉場から流れて来る川だろう。尼僧(にそう)が二人づれ三人づれと前後して橋を渡って行くのが見えた。わらじ履(ば)きで，なかには饅頭笠(まんじゅうがさ)を背負(せお)ったのもあって，托鉢(たくはち)の帰りのようだった。鳥が塒(ねぐら)に急ぐ感じだった。

「尼さんがだいぶ通るね?」と，島村はうどん屋の女にたずねてみた。

「はい，この奥に尼寺(あまでら)があるんです。そのうち雪になると，山から出歩くのが難渋(なんじゅう)になるんでしょう。」

橋の向うに暮れて行く山はもう白かった。

この国では木の葉が落ちて風が冷たくなるころ，寒々

と曇り日が続く。雪催(ゆきもよ)いである。遠近の高い山が白くなる。これを嶽廻(たけまわ)りという。また海のあるところは海が鳴り，山の深いところは山が鳴る。遠雷のようである。これを胴鳴(どうな)りという。嶽廻りを見，胴鳴りを聞いて，雪が遠くないことを知る。昔の本にそう書かれているのを島村は思い出した。

島村が朝寝の床(とこ)で紅葉見(もみじみ)の客の謡(うたい)を聞いた日に初雪は降った。もう今年も海や山は鳴ったのだろうか。島村は一人旅の温泉で駒子と会いつづけるうちに聴覚などが妙に鋭くなって来ているのか，海や山の鳴る音を思ってみるだけで，その遠鳴(とうなり)が耳の底(そこ)を通るようだった。

「尼さん達もこれから冬籠(ふゆごも)りだね。何人くらいいるの。」

「さあ，大勢でしょうよ。」

「尼さんばかりが寄って，幾月も雪のなかでなにをしてるんだろうね。昔この邊で織った縮でも，尼寺で織ったらどうかな。」

物好きな島村の言葉に，うどん屋の女は薄笑(うすわら)いしただけだった。

島村は駅で帰りの汽車を二時間近く待った。弱い光の日が落ちてからは寒気が星を磨き出すように冴(さ)えて来た[169]。足が冷えた。

なにをしに行ったのかわからずに島村は温泉場に戻った。車がいつもの踏切(ふみきり)を越えて鎮守(ちんじゅ)の杉林の横まで来ると，目の前に明りの出た家が一軒あって，島村はほっとしたが，それは小料理屋の菊村で，門口に芸者が三四人立話(たちばなし)していた。

駒子もいるなと思う間もなく駒子ばかりが見えた。

車の速力が急に落ちた。島村と駒子とのことをもう知っている運転手はなんとなく徐行したらしい。

ふと島村は駒子と逆の方のうしろを振り向いた。乗って来た自動車のわだちのあとが雪の上にはっきり残っていて，星明(ほしあか)りに思いがけなく遠くまで見えた。

車が駒子の前に来た。駒子はふっと目をつぶったかと思うと，ぱっと車に飛びついた。車は止まらないでそのまま静かに坂を登った。駒子は扉の外の足場(あしば)に身をかがめて，扉(とびら)の把手(とって)につかまった。

飛びかかって吸いついたような勢いでありながら，島村はふわりと温いものに寄(よ)り添(そ)われたようで，駒子のしていることに不自然も危険も感じなかった。駒子は窓を抱くように片腕をあげた。袖口が辷(すべ)って長襦袢(ながじゅばん)の色が厚いガラス越しにこぼれ，寒さでこわばった島村の瞼(まぶた)にしみた。

駒子は窓ガラスに額を押しつけながら，

「どこへ行った? ねえ,どこへ行った?」と,甲高(かんだか)く呼んだ。

「危ないじゃないか。無茶をするね。」と,島村も声高(こえだか)に答えたが,甘(あま)い遊(あそ)びだった。

駒子が扉(とびら)をあけて横倒(よこだお)れにはいって来た。しかしその時車はもう止まっているのだった。山の裾に来ていた。

「ねえ,どこへいらしたの?」

「うん,まあ。」

「どこ?」

「どこってこともないが。」

駒子の裾(すそ)を直(なお)す手つきの芸者風(ふう)なのが,島村にふと珍らしいもののように見えたりした。

運転手はじっとしていた。道の行きづまりで止まっている車に,こうして乗っているのはおかしいと気がつくと,

「おりましょう。」と,島村の膝の上に駒子が手を重ねて来たが,

「まあ,冷たい。こんなよ。どうして私を連れて行かなかったの?」

「そうだったね。」

「なによ? おかしなひと。」

駒子は楽しげに笑って,急な石段の小路を登った。

「あんたの出ていらっしゃるところ，私見てたのよ。二時か，三時前だったわね？」

「うん。」

「車の音がするから出てみたの。表に出てみたのよ。あんた，うしろを見なかったでしょう？」

「ええ？」

「見なかったわよ。どうして振り返ってみなかったの？」

島村はおどろいた。

「あんた，私の見送ってたのを知らないじゃない？」

「知らなかったね。」

「それごらんなさい。」と，駒子はやはり楽しそうに含(ふく)み笑(わら)いした。そして肩を寄せて来た。

どうして私を連れて行かないの？ 冷たくなって来て，いやよ。」

突然擦半鐘(すりばんしょう)が鳴(な)り出した[170]。

二人は振り向くなり，

「火事，火事よ！」

「火事だ。」

火の手が下の村の真中にあがっていた。

駒子はなにか二声三声叫んで島村の手をつかんだ。

黒い煙の巻きのぼるなかに炎(ほのお)の舌(した)が見えかくれした。その火は横に這(は)って軒を舐(な)め回(まわ)っているようだ。

「どこだ，君が元(もと)いたお師匠さんの家、近いんじゃない

か。」

「ちがう。」

「どのへんだ。」

「もっと上(かみ)よ。停車場寄(よ)りよ。」

炎が屋根を抜いて立ちあがった。

「あら，繭倉(まゆくら)だわ。繭倉だわ。あら，あら，繭倉が焼けてるのよ。」と，駒子は言い続けて島村の肩に顔を押しつけた。

「繭倉よ、繭倉よ。」

火は燃(も)えさかって来るばかりだが，高みから大きい星空の下に見下すと，おもちゃの火事のように静かだっだ。そのくせすさまじい炎(ほのお)の音が聞えそうな恐ろしさは伝(つた)わって来た。島村は駒子を抱いた。

「こわいことないじゃないか。」

「いやいや，いや。」と，駒子はかぶりを振(ふ)って泣き出した。その顔が島村の掌(てのひら)にいつもより小さく感じられた。固いこめかみが顫(ふる)えていた。

火を見て泣き出したのだが，なにを泣くのかと島村はいぶかりもしないで抱いていた。

駒子は不意に泣きやむと顔を離して，

「あら，そうだった，繭倉に映画があるのよ。今夜だわ。人がいっぱいはいってるのよ，あんた…。」

「そりゃあ大変だ。」

「怪我人が出てよ。焼け死ぬわ。」

二人はあわてて石段を駈け登った。上の方で騒ぐ声が聞えるからだ。見上げると高い宿屋の二階三階も，たいていの部屋が障子をあけて明りの廊下に人が出て火事を見ていた。庭のはずれに並んだ菊の末枯が宿の灯か星明りかで輪郭を浮べ，ふと火事が映っていると思わせたが，その菊のうしろにも人が立っていた。二人の顔の上へ宿の番頭などか三四人ころぶように下りて来た。駒子は声を張りあげて，

「あんた，繭倉あ?」

「繭倉だあ。」

「怪我人は? 怪我人はないの?」

「どんどん助け出してるんだあ。活動のフィルムから，ぼうんといっぺんに燃えついて，火の回りが早いや。電話で聞いたんだ。あれ見ろい。」と，番頭は出会い頭に片腕を振り上げて行った。

「子供なんざあ，二階からぽんぽん投げおろしてるんだってさ⑰。」

「まあ。どうしよう。」と，駒子は番頭を追うように石段を下りた。後から下りて来る人々が駈け抜けて行った。駒子は番頭を追うように石段を下りた。後から下りて来る人々が駈け抜けて行った。駒子も誘われて走り出していた。島村も追っかけた。

石段の下では火事が人家にかくれて焔の頭(かしら)しか見えないところへ，擦半鐘(すりばんしょう)が鳴り渡るので，なお不安が増して走った。

「雪が凍(し)みてるから気をつけてね。滑(すべ)る。」と，駒子は島村を振り向いたが，その拍子に立ち止まって，

「でも，そうよ。あんたはいいのよ。いらっしゃらなくて。私は村の人が心配よ。」

言われてみればそうだった。島村は拍子抜(ひょうしぬ)けがすると足もとに線路が見えた。踏切の前まで来ていた。

「天(あま)の河(かわ)。きれいねえ。」

駒子はつぶやくと，その空を見上げたまま，また走り出した。

ああ，天の河と，島村も振り仰いだとたんに，天の河のなかへ体がふうと浮(う)き上(あが)ってゆくようだった。天の河の明るさが島村を掬(すく)い上げそうに近かった。旅の芭蕉(ばしょう)が荒海(あらうみ)の上に見たのは，このようにあざやかな天の河の大きさであったか[177]。裸の天の河は夜の大地を素肌(すはだ)で巻(ま)こうとして，直ぐそこに降りて来ている。恐ろしい艶(なま)めかしさだ。島村は自分の小さい影が地上から逆に天の河へ写(うつ)っていそうに感じた。天の河にいっぱいの星が一つ一つ見えるばかりでなく，ところどころ光雲の銀砂子(ぎんすなこ)も一(ひと)

粒一粒見えるほど澄み渡り，しかも天の河の底なしの深さが視線を吸い込んで行った。

「おうい。おうい。」

島村は駒子を呼んだ。

「ほうい。来てちょうだあい。」

天の河が乗れさがる暗い山の方へ駒子は走っていた。

褄を取っているらしく，その腕を振るたびに赤い裾が多く出たり縮まったりした。星明りの雪の上に赤い色だとわかった。

島村は一散に追っかけた。

駒子は足をゆるめると，褄をはなして島村の手を取った。

「行くの，あんたも?」

「うん。」

「物好きねえ。」と，雪の上に落ちている裾をつまみ上げて，

「私が笑われるから，帰って頂戴。」

「うん，そこまで。」

「悪いじゃないの? 火事場まであんたを連れて行くなんて，村の人に悪いわ。」

島村はうなずいて止まったのに，駒子が島村の袖に軽くつかまったままゆっくり歩き出した。

「どこかで待ってて頂戴、直ぐ戻って来ます。どこがい

い。」

「どこでもいいよ。」

「そうね。もう少し向う。」と，駒子は島村の顔をのぞきこんだが，急にかぶりを振って，

「いやだ，もう」

どんと駒子は体をぶっつけた。島村は一足よろけた。道端の薄雪のなかに葱の列が立っていた。

「なさけないわ。」

そして駒子は早口に挑みかかった。

「ねえ，あんた，私をいい女だって言ったわね。行っちゃう人が，なぜそんなこと言って，教えとくの?」

駒子が簪をぶすりぶすり畳に突き刺していたのを，島村は思い出した。

「泣いたわ。うちへ帰ってからも泣いたわ。あんたと離れるのこわいわ。だけどもう早く行っちゃいなさい。言われて泣いたこと，私忘れないから。」

駒子の聞きちがえで，かえって女の体の底まで食い入った言葉を思うと，島村は未練に絞めつけられるようだったが，俄かに火事場の人声が聞えて来た。新しい火の手が火の子を噴き上げた。

「あら，また，あんなに燃えて，あんなに火が出たわ。」

二人はほっと救われたように走り出した。

駒子はよく走った。凍りついた雪を下駄で掠めて飛

ぶかと見え，腕も前後に振るというよりも両脇に張った形だった。胸のあたりに固く力をこめた形で，案外小柄だと島村は思った。小太りの島村は駒子の姿を見ながら走っているので，なお早く苦しくなった。しかし，駒子も急に息切れして，島村によろけかかった。

「目玉が寒くて，涙が出るわ。」

頰がほてって目ばかり冷たい。島村も瞼が濡れた。瞬くと天の河が目に満ちた[17]。島村はその涙が落ちそうなのをこらえて，

「毎晩，こんな天の河かい。」

「天の河？ きれいね。毎晩じゃないでしょう。よく晴れてるわ。」

天の河は二人が走って来たうしろから前へ流れおりて，駒子の顔は天の河のなかで照らされるように見えた。

しかし，細く高い鼻の形も明らかでないし，小さい唇の色も消えていた。空をあふれて横切る明りの層が，こんなに暗いのかと島村は信じられなかった。薄月夜よりも淡い星明りなのだろうが，どんな満月の空よりも天の河は明るく，地上になんの影もないほのかさに駒子の顔が古い面のように浮んで，女の匂いのすることが不思議だった。

見上げていると天の河はまたこの大地を抱こうとして

おり来ると思える。

大きい極光のようでもある天の河は島村の身を浸して流れて，地の果てに立っているかのようにも感じさせた。しいんと冷える寂しさでありながら，なにか艶めかしい驚きでもあった。

「あんたが行ったら，私は真面目に暮すの。」と，駒子は言って歩き出すと，ゆるんだ髷に手をやった。五六歩行って振り返った。

「どうしたの。いやよ。」

島村は立ったままでいた。

「そう？ 待っててね。後でいっしょにお部屋へ行かせて。」

駒子はちょっと左手を上げてから走った。後姿が暗い山の底に吸われて行くようだった。天の河はその山波の線で切れるところに裾をひらき，また逆にそこから花やかな大きさで天へひろがっていくようだったから，山はなお暗く沈んでいた。

島村が歩き出すと間もなく駒子の姿は街道の人家でかくれた。

「やっしょ，やっしょ，やっしょ。」と掛声が聞えて、ポンプをひいて行くのが街道に見えた。街道は後から後から人が走っているらしい。島村も急いで街道に出た。二人が来た道は十字形に街道へ突きあたるのだった。

またポンプが来た。島村はやり過して，その後について走った。

古い手押型の木のポンプだった。長い綱を先引きする一隊のほかに，ポンプのまわりも消防が取り巻いている，それがおかしいほどポンプは小さかった。

そのポンプの来るのを，駒子も道端によけていた。島村を見つけていっしょに走った。ポンプをよけて道端に立った人々が，ポンプに吸い寄せられてゆくように後を追って。今は二人も火事場へ駈けつける人の群に過ぎなかった。

「いらしたの？ 物好きに？」

「うん。心細いポンプだね，明治前だ。」

「そうよ。ころばないでね。」

「滑るね。」

「そうよ，これから，地吹雪が一晩中荒れる時に，あんた一度、来てごらんなさい。来れないでしょう。雉や兎が，人家のなかへ逃げ込んで来るわ。」などと駒子が言っても，消防の掛声や人々の足音に調子づいて，明るくはずんだ声だった。島村も身が軽かった。

焰の音が聞えた。眼の前に火の手が立った。駒子は島村の肘をつかんだ。街道の低い黒い屋根が火明りで

ほうっと呼吸するように浮き出して、また薄れた。足もとの道にポンプの水が流れて来た。島村と駒子も人垣に自然立ちどまった。火事の焦臭(こげくさ)さに繭を煮るような臭(にお)いがまじっていた。

映画のフィルムから火が出たとか，見物の子供を二階からぽんぽん投げおろしたとか，怪我人はなかったとか，今は村の繭も米も入っていなくてよかったとか，人々はあちこちで似たこと物を声高にしゃべり合っているのに，みな火に向って無言でいるような，遠近の中心の抜けたような，一つの静かさが火事場を統一していた。火の音とポンプの音とを聞いているという風だった。

時々，おくれて駈けつける村人があって，肉親(にくしん)の名を呼びまわる。答える者があって，喜んで叫び合う。それらの声だけは生き生きと通(とお)った。擦半鐘はもう鳴りやんでいた。

人目もあると思って，島村は駒子からそっと離れると，ひとかたまりの子供のうしろに立った。火照(ほて)りで子供達は後ずさりした。足もとの雪も少しゆるんで来るらしかった。人垣(ひとがき)の前の雪は火と水で溶け，乱れた足形(あしがた)にぬかるんでいた。

そこは繭倉の横の畑地で，島村達といっしょに駈けつけた村人は大方そこにはいったのだった。

火は映写機を据(す)えた入口の方から出たらしく，繭倉の

半ばほどはもう屋根も壁も焼け落ちていたが，柱や梁などの骨組はいぶりながら立っていた。板葺板壁に板の床だけでがらんどうだから，屋内にはそう煙も巻いていないし，たっぷり水を浴びた屋根も燃えていそうには見えないのに，火移りは止まらぬらしく，思いがけないところから焔が出た。三台のポンプの水があわてて消しに向うと，どっと火の子を噴き上げて黒煙が立った。

その火の子は天の河のなかにひろがり散って，島村はまた天の河へ掬い上げられてゆくようだった。煙が天の河を流れるのと逆に天の河がさあっと流れ下りて来た。屋根を外れたポンプの水先が揺れて，水煙となって薄白いのも，天の河の光が映るかのようだった。

いつのまに寄って来たのか，駒子が島村の手を握った。島村は振り向いたが黙っていた。駒子は火の方を見たままで，少し上氣した生真面目な顔に焔の呼吸がゆらめいていた。島村の胸に激しいものがこみ上げて来た。駒子の髷はゆるんで，咽は伸びていた。そこらにつと手をやりそうになって，島村は指先がふるえた。島村の手も温まっていたが，駒子の手はもっと熱かった。なぜか島村は別離が迫っているように感じた。

入口の方の柱かなにかまた火が起きて燃え出し，ポンプの水が一筋消しに向うと，棟や梁がじゅうじゅう湯気

を立てて傾きかかった。

あっと人垣が息を呑んで，女の体が落ちるのを見た。

繭倉は芝居などにも使えるように，形ばかりの二階の客席がつけてある。二階と言っても低い。その二階から落ちたので，地上まではほんの瞬間のはずだが，落ちる姿をはっきり眼で追えたほどの時間があったかのように見えた。人形じみた，不思議な落ち方のせいかもしれない。一目で失心（しっしん）していると分った。下に落ちても音はしなかった。水のかかった場所で，埃も立たなかった。新しく燃え移ってゆく火と古い燃えかすに起きる火との中程に落ちたのだった。

古い燃えかすの火に向って，ポンプが一台斜めに弓形（ゆみなり）の水を立てていたが，その前にふっと女の体が浮んだ。そういう落ち方だった。女の体は空中で水平だった。島村はどきっとしたけれども，とっさに危険も恐怖も感じなかった。非現実的な世界の幻影のようだった。硬直していた体が空中に放（ほお）り落（おと）されて柔軟になり，しかし，人形じみた無抵抗さ，命（いのち）の通（かよ）っていない自由さで，生も死も休止したような姿だった。島村に閃（ひらめ）いた不安と言えば，水平に伸びた女の体で頭の方が下になりはしないか，腰か膝か曲りはしないかということだった。そうなりそうなけはいは見えたが，水平のまま落ちた。

「ああっ。」

駒子が鋭く叫んで両の眼をおさえた。島村は瞬きもせずに見ていた。

落ちた女が葉子だと,島村も分ったのはいつのことだったろう。人垣があっと息を呑んだのも駒子がああっと叫んだのも,実は同じ瞬間のようだった。葉子の腓が地上で痙攣したのも,同じ瞬間のようだった。

駒子の叫びは島村の身うちを貫いた。葉子の腓が痙攣したのといっしょに,島村の足先まで冷たい痙攣が走った。なにかせつない苦痛と悲哀とに打たれて,動悸が激しかった。

葉子の痙攣は目にとまらぬほどかすかなもので,直ぐ止んだ。

その痙攣よりも先きに,島村は葉子の顔と赤い矢絣の着物を見ていた。葉子は仰向けに落ちた。片膝の少し上まで裾がまくれていた。地上にぶっつかっても,腓が痙攣しただけで,失心したままらしかった。島村はやはりなぜか死は感じなかったが,葉子の内生命が変形する,その移り目のようなものを感じた。

葉子を落した二階桟敷から骨組の木が二三本傾いて来て,葉子の顔の上で燃え出した。葉子はあの刺すように美しい目をつぶっていた。あごを突き出して,首の線が伸びていた。火明りが青白い顔の上を揺れ通った。

幾年か前，島村がこの温泉場へ駒子に会いに来る汽車のなかで，葉子の顔のただなかに野山のともし火がともった時のさまをはっと思い出して，島村はまた胸が顫えた。一瞬に駒子との年月が照し出されたようだった，なにかせつない苦痛と悲哀もここにあった。

駒子が島村の傍から飛び出していた。駒子が叫んで眼をおさえたのと，ほとんど同じ瞬間のようだった。人垣があっと息を呑んだままの時だった。

水を浴びて黒い燃屑が落ち散らばったなかに，駒子は芸者の長い裾を曳いてよろけた。葉子を胸に抱えて戻ろうとした。その必死に踏ん張った顔の下に，葉子の昇天しそうにうつろな顔が垂れていた。駒子は自分の犠牲か刑罰かを抱いているように見えた。

人垣が口々に声をあげて崩れ出し，どっと二人を取りからんだ。

「どいて，どいて頂戴。」

駒子の叫びが島村に聞えた。

「この子，気がちがうわ。気がちがうわ。」

そう言う声が物狂わしい駒子に島村は近づこうとして，葉子を駒子から抱き取ろうとする男達に押されてよろめいた。踏みこたえて目を上げた途端，さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。

（昭和九年——昭和二十二年）

[redacted]

穿过边界上的漫长隧道，来到了雪国。夜幕下的大地变成了白色。列车停在信号房的前面。

从对过儿的座位上走过来一位姑娘，把岛村面前的玻璃窗放了下去。雪地上的一股冷气袭进车箱来。姑娘把上半身探出窗外，向远处喊道：

“站长！站长！”

拎着提灯，踏着雪缓缓走过来一个人。他把围巾一直围到鼻子上，皮帽耳扇也耷拉着。

岛村心想：至于那么冷吗？往远处望去，大约是铁路的宿舍，一些简易房冷清清地分布在山脚下。那里的雪已被夜幕吞没，看不见白色了。

“站长！是我呀，您好吗？”

“啊！这不是叶子姑娘吗？回家呀？又是冷天儿了。”

“我弟弟说他调到这儿来了。给您添麻烦了。”

“这个鬼地方，马上他会寂寞得受不了的。年轻轻地，可怜呀。”

“还是个孩子呢。请您多多指导吧。拜托了。”

“没事儿。他干劲儿蛮大的。马上就要忙了。去年雪可大了。老闹雪崩。火车一抛锚，村里人给旅客做饭吃也够忙的呀。”

“您穿得够多呀。我弟弟来信说他连背心还没穿呢。”

“我穿了四件和服。小伙子们冷了就一个劲儿喝酒。完了就在宿舍里躺倒歇工。还闹感冒。”

站长把提灯朝宿舍那边儿晃了一下。

“我弟弟也喝酒吗？”

“不。”

“站长，您这是下班了？”

“我受伤了。正瞧大夫呢。”

“是吗，那太糟糕了。”

在和服上罩了一件大衣的站长，看来是想尽快结束站在寒冷中的谈话，转过身去说：

“那么你就多保重吧！”

“站长！我弟弟现在不在班上吗？”叶子一面用目光扫了一下雪地说：

“站长！请您多关照我弟弟呀！拜托了。”

这嗓音很美，甚至有点悲哀。仿佛这黑夜里的雪地都要激起同样高亢的反响。

火车已经开动，可她没有从车窗缩回身子来。等火车追上了在铁道下面走着的站长时，喊道：

“站长！劳您驾转告我弟弟，叫他下次休息时回家一趟。”

“是了。”站长抬高了嗓音。

叶子关上窗子，捂了捂冻红了的脸。

这是边界上的一座山，为了迎接大雪，已经准备下三辆除雪车。隧道的南北都通上了电力的雪崩报知线。还安排好五千人次的除雪夫和两千人次的消防青年团，随时可以出动。

当岛村得知叶子的弟弟从今冬起在这即将埋在大雪里的铁路信号房上班时，他对这位姑娘越发好奇起来。

不过，这里使用“姑娘”这个字眼儿，是根据岛村的看法。同伴的男人究竟是她什么人，岛村当然无从知晓。两个人的举止虽然有点儿像夫妻，但是男人显然是一个病汉。跟病人打交道，男女之间的界限很容易被冲淡，越是照顾得勤快，就越显得像一对夫妻。一个女子以年轻妈妈的姿态服侍一个比

自己年长的男人，从旁看上去也会以为他们是夫妻呢。

岛村只是孤立地、从她的印象来主观地认为她是个姑娘罢了。不过，这也许是由于在很大程度上带有他自己的多愁善感的缘故。因为他以神秘的眼光凝视这个姑娘实在太久了。

大约三个小时以前，岛村为了解闷，不住地活动着左手的食指，做出种种姿势给自己看。他一边看着，觉得奇怪的是：算来只有这个手指对他正要去找的那个女人还记忆犹新。他越是急着要想起她来，他的记忆就越是模糊得难以捉摸，在这不可靠的记忆中，只有这个手指还保存着那女人的新鲜的触觉。仿佛正是它要把自己吸引到遥远的女人那里去。他一边想着一边把手指放到鼻子上嗅了一下。然后无意中用这个手指在车窗上划了一个道儿。忽然在这条线上浮现出那女人的一只眼睛。他吃惊得几乎喊出声来。然而这是由于他想得出了神，一清醒他就明白了。原来这是旁边那一行座位上的那个姑娘照在窗玻璃上的影子。因为窗外已是暮霭沉沉，而车箱里开着灯，所以窗玻璃变成了一面镜子。不过，由于暖气的温度，使玻璃蒙上了哈气，要不是他用手指抹了一下，这镜子本来是不存在的。

尽管姑娘的眼睛只是一只，反而显得异乎寻常地美，而岛村把脸凑近车窗时，却急忙做出一副为了解闷而要观看傍晚景色的模样，用手掌蹭了几下玻璃。

姑娘把身子向前微倾，全神贯注地俯视着躺在她面前的男人。她那有几分严肃的眼神连眨也不眨，就是她专心致志的标志。这从她的肩膀还吃着力就能看得出来。男人的枕头靠着车窗，把腿卷曲在姑娘的身旁。这是三等车箱。她俩的座位不是正在岛村旁边，而是对着他前排的座位。所以躺在座位上的那男人的脸，在镜子里只能照到耳朵。

姑娘恰好坐在岛村的斜对过儿，岛村满可以直接看到她。但是由于她俩走进车箱时，姑娘有一种清爽而醒目的美，使他吃了一惊，不由得把视线往下一移。这时忽然看见那男人的蜡黄的手紧紧攥住姑娘的手，他便不好意思再朝那边看了。

从镜中看，那男人的脸色已经完全安静了。好像他由于看着姑娘的前胸就放了心似的。尽管是衰弱的体力，却也在微弱的程度上显出一种甜蜜的和谐。把围巾铺在枕头上，一端盖在鼻子下，把嘴捂得严严实实，然后又往上包住了脸颊，仿佛戴上一个面具。但它老是松下来或者盖住鼻子。男人的眼睛刚刚一动，姑娘就轻轻地给他整理好。她俩无意中多次重复这个动作，连旁观的岛村都觉得不耐烦了。还有，裹着男人大腿的大衣下摆也不时地松落下去，姑娘也马上发现，把腿重新裹上。这些动作都是非常自然的。她俩就是这样忘了男女有别，看上去仿佛要走向天涯海角去似的。因此岛村丝毫没有感到观看一场悲剧那种难过的心情，宛如在看着梦幻的西洋景。这也许是因为事情发生在那奇妙的镜子里的缘故。

在镜子的底层流动着傍晚的景色。就是说镜底的景物和镜面的影像如同电影的叠印镜头在流动着。剧中人和背景是互不相干的。尽管如此，人物以其透明的虚幻性，风景以其暮色朦胧的流动性却使两者融合在一起描绘出一个别有洞天的象征世界。尤其是正在姑娘的脸上燃起荒山上的灯火时，那种难以形容的美，使得岛村的心都为之颤动了。

远山上的天空还淡淡地残留着晚霞，透过玻璃窗看去，外面的风景直到很远的地方还看得出景物的形状。不过，它的颜色已经看不出来了。连绵不断的荒山，那平凡的轮廓更加平凡了。由于没有什么东西可以特别引人注目，反而形成了一种模糊而庞大的感情的河流。当然这也是因为姑娘的面庞也浮现在其中的缘故。照出身影的部分，虽然看不见窗外，但

是姑娘的轮廓周围则不断地流动着黄昏的景色。因此姑娘的脸面也有一种透明感。不过是否真地透明，一时还来不及把它看个清楚。因为不断流动在脸面后头的黄昏景色造成错觉，仿佛是在脸前流过去的。

车箱里也并不十分明亮，玻璃窗也没有普通镜子那么亮，没有反射。所以岛村看得入神就渐渐忘了那是镜子，只觉得在流动的黄昏景色中飘浮着一位姑娘了。

灯火就是这时在姑娘的脸上点着了的。这镜中的影像没有足够的亮度去消灭掉点着的灯光；灯光也没有消灭掉影像。于是灯光就从她的脸上流过去了。但是它并没有照亮姑娘的脸。那是远处的一点寒光。当它把小小眸子的周围稍微染红时，也就是眼睛和灯光重叠在一起的一瞬间，她的眼睛简直是黄昏时刻飘荡在海波中的一只妖艳的夜光虫。

叶子当然不会察觉有人这样观看她。她的心专注在病人身上。即使她把脸转向岛村，也看不见照在玻璃窗上的自己，更不会注意到眺望窗外的一个男人。

岛村之所以久久地偷看叶子而并不感到内疚，大概是由于他已被那映着黄昏景色的镜子的幻术吸引住的缘故。

所以，当叶子呼唤站长并且流露出过分迫切的感情时，在岛村心中首先产生的也许就是一种对于传奇故事的兴趣吧。

火车开过那个信号房时，窗外已经一片漆黑了。外面流动的风景一消失，镜子也就失去了吸引力。虽然叶子的美貌仍然照在镜子里，尽管她的动作那么温柔，岛村却在她身上重新发现了一种娴雅的冷漠，也就不再擦拭那镜子又蒙上的水蒸气了。

可是大约半个小时以后，出乎意料的是叶子他们也和岛村在同一个车站下了车。他心想：还会发生什么事？仿佛跟自己有关系似的回了一下头。但他一接触站台上的冷空气，

突然为自己在车箱里的不礼貌感到羞愧。他扭过头来就绕过了机车。

那个男人扶着叶子的肩膀正要走下铁轨，一个铁路人员从这边儿举起手来加以制止。

不一会儿，从黑暗中驶出一列长长的货车遮住了他俩的身影。

旅馆接客人的伙计那身防雪的打扮，有点吓人，活像正在火场上救火。包着耳朵，穿一双高统胶靴。从候车室的窗户向外望着铁轨的女人，也穿一身蓝色斗篷，戴着斗篷上的风帽。

岛村身上带着列车上的暖和气儿，还没感觉到外面的真正寒冷。又因为他是头一次赶上雪国的冬天，见到当地人的那份打扮，一下子使他望而生畏了。

“至于那么冷，非穿这么一身儿不可？”

“哼，已经完全是冬装了。雪后放晴的头天晚上，照例是特别冷的。今晚这大概已经是零度以下了。”

“这就是零度以下吗？”岛村一边望着房檐上那小巧玲珑的冰溜儿，跟伙计一同乘上了小汽车。白雪使低矮的民房显得更加低矮，整个村子静悄悄地仿佛沉没在水底。

“怪不得呢，摸到什么上都凉得厉害！”

“去年最冷达到零下20几度。”

“雪呢？”

“雪嘛，通常是七、八尺，大的时候要有一丈二、三尺吧。”

“大雪还没来吧？”

“快了。上次这场雪下了一尺厚，已经化得差不多了。”

“这里的雪也有化的时候？”

“说不定马上就要下大雪了。”

这是十二月的月初。

岛村有点儿感冒，老也不好，鼻子一直不通气。这时一下子通了气，连脑子也清爽起来。清鼻涕直往下淌，仿佛把污浊的东西冲洗得干干净净似的。

“曲艺师傅家的那个姑娘还在吗?”

“嗯，还在，还在。刚才还在车站里，您没看见？穿一件深蓝色的斗篷。”

“那就是她？——回头能把她叫来吧?”

“今晚?”

“就是今晚。”

“说是曲艺师傅的儿子就坐刚才这趟末班车回来，她是去迎接的。”

原来在夕暮景色的镜子里，叶子精心照顾的那个病人就是岛村要找的那女人家里的少主人。

得知这些以后，有一个念头从岛村的心中一闪而过。但他并不认为命运的这种安排有什么奇怪。他只是觉得不以为怪的自己倒是有点奇怪。

一个是从手指上记得的女人；一个是在眼睛上燃起灯火的女人。在她俩之间有什么情况，将会发生什么纠葛，不知为什么，岛村也仿佛在他心中的某个角落里已经看见了似的。是不是因为他还没有从夕暮景色的镜子中完全清醒过来呢？他不觉嘟哝了这么一句：莫非夕暮景色的流动就象征着时间的流动吗?

滑雪季节到来之前的温泉旅馆是最冷清的时刻。岛村走出旅馆的浴室时，人们已经入睡了，四下里寂静无声。他在这旧房子的走廊上一走，震得玻璃窗门微微作响。在长廊的尽头，帐房的拐角处，那女人直挺挺地站着，衣服的下摆冷森森地拖到擦得黑亮的地板上。

一看到她那长长的下摆，他暗自一惊。心想她终于下水

了？但她既不往这边走过来，也没松开架势做出趋前相迎的动作。从她那一动不动站在那里的样子，老远就看得出一种紧张的空气，他赶紧走了过来。但他站在女人身旁之后，也没开腔。当她那抹得厚厚脂粉的脸刚要微笑的时候，却反而变成要哭的样子，于是两个人就默默地径直走向房间去了。

自从有了那事以后，竟然连信也不来，也不露面了，许诺的舞蹈教材也没寄来。在女人看来，无疑是被他一笑之下抛在脑后了。因此，现在轮到岛村首先道歉或者有所解释了。可是当他看也不看她一直向前走着的时候，她非但未加责备，岛村还发现她浑身都对他感到亲近的样子。这使他越发觉得此时此刻即便说什么，听起来也只会显得自己不够老实了。他沉浸在对她有愧而得到宽恕的一种甜蜜的喜悦之中。走到楼梯前时，他说：

"是它最记得你呀。"把左手伸出食指的拳头冷不丁举到她的眼前。

"是吗？"女人攥住他的手指不放，一直拉着他登上了楼梯。

来到"被炉"前面，她一撒手，刷地满脸绯红了。她为了掩饰她的不好意思，急忙又抓起他的一只手说：

"是它还没忘了我？"

"不是右手，是这只。"说着从她手里抽出右手伸进"被炉"，然后又把左手递过去。她也不在乎地说：

"我知道呀。"

嗓子里格格地笑着，拿开岛村的手，把脸贴了上去。

"是它还没把我忘了？"

"嘀，真凉！没见过这么凉的头发。"

"东京还没下雪吗？"

"你上次虽然那么说，我看那还是撒谎。否则，谁会在大

年底下跑到这个寒冷的地方来?”

上次,那是雪崩的危险期已过,进入初夏的登山季节了。

木通的嫩芽在饭桌上已经快见不到了。

游手好闲、饱食终日的岛村,自然而然连对待自己也往往漫不经心了。为了改变这种情况,他认为最好是上山。所以他常常孤身一人到山里去走。那天夜里就是在国境的群山中呆了七天以后下到温泉村来的。一进旅馆就说给我叫一个艺妓来。可是,据说那天正赶上村里庆祝修筑道路竣工,连村里的茧仓兼演戏棚都用作宴会厅,热闹非凡。村里总共只有十二三个艺妓,陪酒的人手不够,无论如何也怕是叫不来的。不过,曲艺师傅家的那位姑娘,虽说她也去宴会上帮忙,充其量表演两三次舞蹈就走,要是找她,碰巧也许能来。当岛村问起这个姑娘时,据说她住在教三弦和舞蹈的师傅家里,虽然不是艺妓,但有了大的宴会什么的,有时也被请去帮忙。因为这里没有雏妓,而岁数大些的艺妓多半不愿意站起来舞蹈。所以姑娘很吃香。她虽然很少单独到旅馆为旅客陪酒,但也不能说她是完全不干这行儿的。旅馆的女服务员大体上就是这么说的。

岛村以为这话不一定可靠,姑妄听之而已。可是过了个把钟头,女服务员把那女人领来时,他吃了一惊,不由地坐正了身子。女服务员刚要站起来走开,那女人拽住她的袖子,让她又坐了下来。

女人的印象是出乎意料地那么清洁。甚至令人觉得她脚卡巴儿都是干净的。岛村几乎怀疑这是不是由于自己的眼睛刚刚看过初夏群山的缘故?

女人的打扮虽然多少有点艺妓的派头儿,衣服的下摆当然还不是那种拖得老长的。而且她把那软料子的单衣穿得毋宁说整整齐齐。只有那条腰带似乎有点不合身分地高贵,反

而令人觉得何苦呢，看着怪可怜见儿的。

趁着他们谈起登山的事，女服务员走开了。可是那女人就连眼前的一些山叫什么名字都说不大清楚，而岛村又没有兴致喝酒，女人就意外坦率地讲了她的身世，说她也是出生在这个雪国，当她在东京当雏妓时，被人赎了身，准备将来把她培养为日本舞蹈的师傅以图自立，可是刚刚一年半的时光，替她赎身的那个老板就死了云云。不过，她的真正身世，可能是自从那人死后直到现在这一段，但是看来她不会一下子都讲出来的。她说她今年十九岁，如果不是说谎，她这个十九岁看上去倒有二十一二。根据这一点，岛村才觉得对她不必那么拘束，于是跟她谈起“歌舞伎”的事来。她对于演员的艺术风格以及有关他们的消息，比岛村更为灵通。大概她正找不到这样一个谈得来的对手，她谈得起劲儿时，流露出根本就是烟花出身那种女人的对谁都自来熟的样子。看来她对男人的脾气也摸得相当透。尽管如此，岛村硬是把对方当作一个还没下水的女人，又加上他一个星期以来没跟谁正经八百谈过话，怀着一腔对谁都亲切温暖的心情，所以对这个女人一开始就有了一种类似友情的东西。他在山中的孤寂之感一直影响着他对待这个女人的情绪。

那女人第二天下午，把洗澡的用具放在廊子里，顺便走进他的房间来玩儿。

她刚一坐下，岛村突然就说：请你给介绍一个艺妓。

“介绍？”

“那你还不懂？”

“那怎么行！ 做梦也想不到我一来你就叫我干这个。”

女人带着不悦的样子站起来走向窗户去眺望国境上的群山。一会儿脸颊绯红地说：

“这儿可没有那种人。”

“撒谎去吧!”

“真的呀。”蓦地转过身来坐到窗台上说:

“这里绝对没有强迫干那个的。都得随艺妓的自愿。旅馆也一概不介绍那事儿。这是真的呀。这事你自己叫一个来,直接交涉一下看。”

“还是求你给交涉吧。”

“为什么非得我来干这个呢?”

“我是把你当作朋友的嘛。想留着你跟我交朋友。所以不跟你调情。”

“那就叫朋友吗?”女人无形中被引出一句孩子话,跟着就像憋不住似的又说:

“可真有你的! 居然说得出口叫我干这个。”

“这有什么! 我是在山里一呆,身子就壮实起来了,可是有点头昏脑涨。这样子就连跟你也没法胸怀坦荡地畅谈呀!”

女人垂下眼帘不作声了。这么一来,岛村无非暴露了男人的厚脸皮而已,可那女人对此也通情达理地表示接受了。大概她已经习惯成自然了吧。她那俯视着的眼睛,也许是那浓重的睫毛的关系,显得暖融融地,脉脉含情。岛村正在瞧着,她把脸向左右微微摇了摇,又泛起淡淡的红潮。

“喜欢谁你就叫谁呗。”

“我不是在问你吗? 我初来乍到,知道谁好看呢?”

“光说好看,那…”

“年轻的好。年轻的不管怎样总不会出问题。顶好是不要说起话来喋喋不休的。要呆气一点的,不龌龊的。我想聊的时候,就跟你聊。”

“我再也不来了。”

“别胡说。”

“哎呀,我可不来了。还来干什么?”

“我是想跟你作一个清白的朋友，我不是说不跟你调情吗？”

“真新鲜！”

“如果有了那事，说不定明天我就不想再见你了。就没有兴致再跟你聊天儿了。我从山沟里来到这个有人的地方，正渴望有个熟人，所以我才不跟你调情。再说，我是个过路的呀！”

“是呀，那倒是真的呀。”

“一点儿不错。拿你来说，我要是找了一个你讨厌的女人，下次再见到你，你也会觉得恶心吧。如果是你给我选的，岂不是更好些？”

“甭说了！她狠狠地抢白了一句，就把头扭开了。可是马上又说：

“那倒也是啊。”

“有了那事就算完了。没意思了。也长不了吧。”

“是啊。真的都是那样儿啊。我出生在一个码头。这里又是个温泉村。”女人意外坦率地说：

“客人差不多都是过路的嘛。拿我来说，那时虽然还是个孩子，可形形色色的人都是这么说，心里觉得喜欢，可当时并没说出口来，这种人总是叫你怀念，忘不了啊。分手以后大概都是这样。对方有的想起，写信寄来的，多半也都是这么说。”

女人在窗前站起来之后，坐到柔软的踏踏密上。她仿佛回忆着遥远的往事，却又作出急忙坐到岛村身旁的表情。

女人的语调是那么真挚，以至岛村以为他轻易就骗过了她，因而又感到有点内疚了。

然而他说的并非谎话。这女人总还不能说是真正的艺妓。他纵然想搞女的，也用不着在她身上打主意。用简单的、不缺德的方法就可以达到目的。她太清洁了。从一见面起，

他就把那种事同她区别开了。

又加上，他在选择今夏的避暑地这个问题上，正在犹豫不决。所以他也想过是否把家属带到这个温泉村来。那样的话，幸好这女人不是艺妓，还可以请她陪妻子玩儿。为了解闷儿，也可以跟她学学舞蹈呢。他是认真地这么想过。他在这个女人身上虽然感到类似友情的东西，可他还是做了这种程度的试探。

当然，在这里大概也有一面岛村的那映着夕暮景色的镜子吧。他不仅仅是为了避免同现在这个来历不明的女人事后可能发生的麻烦，同时也像对待映在夕暮车窗上那个女人的脸一样，有着他那脱离现实的看法吧。

就拿他对西方舞蹈的爱好来说吧，也同样是脱离现实的。岛村生长在东京的商业区，所以自幼对歌舞伎剧就不陌生。到了学生时代，他的爱好偏重于歌舞伎的舞蹈和舞剧。于是，由于他那什么事都要钻研透彻的脾气，他就涉猎起旧的记录，或者走访各种流派的宗师。不久还结识了日本舞蹈的一些新秀，也能写些类似研究和评论的文章了。这样，他对于日本舞蹈传统的停滞不前和新的自以为是的尝试都感到理所当然的不满。这就促使他产生了这样一个念头：既然如此，下一步就只有亲自投入实际运动中去了。年轻的日本舞蹈家们也是这样怂恿他的。可就在这个当儿，他忽然改了行，去搞西方舞蹈了。从此，他再也不去看日本舞蹈，取而代之的是开始搜集西方舞蹈的书刊和照片，甚至连海报、节目表之类也千方百计从国外弄了来。而这决非完全出于对异国情趣和未知领域的好奇心理。他有了一个新的发现，他认为不能亲眼看见西洋人的舞蹈却是一件令人可喜的事情。他对日本人的西方舞蹈不屑一顾，就证明了这一点。专靠西方的书刊来写有关西方舞蹈的文章，再没有比这更惬意的事了。不必观看的舞蹈，这简

直是神话。没有比这更高明的纸上谈兵了，是天国的诗篇。把随心所欲的想象名之为研究，不是欣赏舞蹈家以其活生生的肉体进行的舞蹈艺术，而是欣赏他自己空想出来的舞蹈的幻影，而这个幻影乃是根据西方的语言和照片所产生出来的。这无异于未见其人而害了相思病。而且，他还常常写文章介绍西方舞蹈，因而也被认为是一个作家了。他虽然也暗自冷笑，但对于一个没有职业的他来说，有时也不失为一个精神上的安慰。

他这种关于舞蹈的话语，在促使这个女人对他的亲近上起了作用，应该说他的知识总算有了现实的用处。但也许还是因为岛村无意中把这个女人也当作搞西方舞蹈的来对待的缘故。

因此，当他看到自己那些带有几分类似旅愁的言词似乎触动了女人的生活要害时，以为把女人给欺骗住了，所以他甚至又感到内疚了。他说：

“这样做的话，下次我把家属带来时，也可以愉快地跟你一块儿玩儿呀。”

“嗯，这我懂了。”女人放低声音微笑着说了。然后又带着艺妓的派头儿快活地说：

“我也喜欢那样。清白的交情才能持久啊。”

“那你就给我找一个吧。”

“现在？”

“嗯。”

“人家会吓一跳的！这大白天儿，你怎么说得出口？”

“剩货我可不要啊！”

“你说这话可错了。你以为这里是那种勒索客人的温泉地呢。只要看看这村子的外貌，你还不明白？”女人好像受了委屈似地，用认真的口吻反复说明这里没有那种女人。她见

到岛村还不相信，就板起面孔争辩说，即使退一步讲，干不干那种事是艺妓的自由，不过，要是跟家里不打招呼就外宿的话，责任要自己负，出了事家里不管。要是打了招呼，那就是老板的责任，他负责到底。这就是不同之点。

“你说责任，是什么责任?”

“有了孩子啦，身体搞出毛病啦什么的。”

岛村对于自己的这个愚蠢的一问不禁苦笑。他想：在这个山村里也许真有这种舒心的事儿。

饱食终日无所事事的岛村，大概自然而然地要给自己找一个保护色吧。所以他对当地人如何看待自己这个外来人，有着本能上的敏感性。他从山上一下来，马上从这个山村的多么朴实的外观中，看出一种舒适闲静的样子。问一问旅馆的人，果然说这个村子在整个雪国中也是生活最富裕的农村之一。几年前还没通火车的时候，主要是农民们到温泉来治病的地方。拥有艺妓的铺子，饭馆啦小吃店啦，都挂着褪了色的门帘。一看那老式的旧格子窗就令人怀疑这样店铺是否会有顾客。有的日用杂货店、粗点心铺也仅仅拥有一个艺妓，可老板们除了照管店铺以外，好像还要下田去干活儿。也许因为她是曲艺师傅家的姑娘，虽然没有许可证也偶尔到宴会上来陪酒。对于这种情况，别的艺妓居然也没有过问的。

“那么一共有多少人?”

“艺妓吗？ 十二三个吧。”

“叫什么名字的好看”岛村站起来按了一下电铃。

“我该走了吧?”

“你可不能走。”

“我不愿意呆下去。”女人仿佛要想保全自己的面子似地说：

“我走了。没关系。我不在乎。还来呢。”

可是她一见女服务员进来，就若无其事地重新坐下了。服务员问了几声叫谁好，可她却没有点名。

不大工夫，来了一个十七八岁的艺妓。岛村一看就把他从山上来到村子时想找女人的兴致一下子败尽了。她的胳膊，皮肤自来黑，肌肉还不丰腴，看上去她倒也憨态可掬，是个老实人。岛村尽量不露出败兴的样子，面对着艺妓，而实际上是她背后窗外的一片新绿的群山过于引人注目了。他看得连话也懒得说了。真是个地地道道的山沟里的艺妓啊。因为他板着脸不说话，女人大概是怕他难为情，默默地站起来就走了。这一下更加冷了场。不过这中间已经有个把钟头了，岛村正想用什么方法把艺妓打发走，忽然想起今天来了电汇，就以邮局的时间为借口，同艺妓一块儿走出了房间。

可是他在旅馆门口一望到嫩叶浓郁的后山，就好像被它吸引住了，冒冒失失地登了上去。

他一个人莫名其妙地笑个不止。

等他感到适当地累了，一转身，掖起单衫的后襟，一溜烟儿跑下山来。只见两只黄蝴蝶从他脚底下飞了起来。

这两只蝴蝶纠缠着翻飞，一会儿工夫飞得比国境上的山还高，黄色逐渐变为白色，越来越远了。

"你怎么了？"

女人站在杉树林的树阴下说：

"笑得真开心啊！"

"吹啦！"岛村那无缘无故的笑又涌上来了。

"吹了呀！"

"是吗？"

女人忽然转过身去，缓步走进杉树林子。他默默地跟在后面。

有一座神社。两旁的石狮子都长了青苔，女人就坐在它

旁边的一块平面的岩石上。

“这里最凉快了。三伏天也有凉风啊。”

“这儿的艺妓都是那德行吗？”

“都不相上下吧。年岁大的倒有好看的。”她低着头，冷淡地说。她的脖子上好像掩映着杉树林的暗绿色。

岛村仰起脸来看了看树梢。

“用不着了。身上的力气一下子全没了。说也奇怪。”

那些杉树很高，必须用手支在身后的岩石上，仰起胸来才能看见树梢。笔直的树干一根挨着一根，因为黑暗的树叶遮住了天空，真是万籁俱寂，鸦雀无声。岛村靠着的那棵树干是其中最古老的一棵杉树，不知为什么，只有朝北的树枝一直枯到树顶。在枯落了枝条的树根上，看上去好像倒栽了一排尖木桩，有点像天神的兵器，怪可怕的。

“原来是我想错了。我从山上下来第一个就看见了你，以为这里的艺妓都好看呢。我太粗心了。”岛村一边笑一边想道：自己要把在山里养了七天的元气简单地拿来开一开心的想法，敢情实际上是因为首先就看见了这个清洁的女子才想出来的呀！直到现在他才意识到这一点。

女人正凝视着远方夕阳下照得通亮的一条河。她有点窘得慌了。

“哟，我给忘了。你想抽烟了吧。”她尽量随便地说：

“刚才回到你的房间，你不在。我想，你干什么去了呢？可你却劲头十足地在爬山。从窗户看见的。太可笑了。烟卷儿你也忘在家里，我就替你拿来了。”

然后从袖子里掏出他的烟卷儿，擦着了火柴。

“很对不起那位姑娘啊。”

“那有什么？什么时候打发她随客人的便嘛。”

从那条多石的溪流不住地传来圆润而甘美的潺潺声。透

过杉树，看得见对面山上的皱襞已经有了阴影。

“要不是跟你差不多美的女人，怎么能对得起你呢？

“甭说了。你这人，真犟。”女人板着脸讽刺地说。然而同未找艺妓以前相比，有一种完全不同的感情在两人之间交流着。

岛村清楚地知道了自己想着的本来就是这个女人，只不过照例又兜了一个圈子而已。于是一方面讨厌自己，一方面觉得她更美了。这个女人自从在杉树林荫下召唤他以后，她的姿态给人以一种清爽俊秀之感。

细高的鼻子虽然显得清瘦些，可是聚拢得很小的嘴唇伸缩自如，活像缩成环形的一只美丽的水蛭，即使不说话，也像在翕动着。所以要是嘴唇上有皱纹或者颜色不正，就会显得很不干净。然而并不是这样，它是湿润而通亮的。她的两只眼睛，外眼角既不吊起也不垂下，仿佛故意画得那么平直。这虽然有点不自然，可是两条眉毛是密绒绒的短毛，眉稍微微下垂，恰好把眼睛包围起来。中间略高的圆脸，不过是一个平淡无奇的轮廓，但它的皮肤如同白色陶瓷，上面薄薄地敷了一层胭脂，脖根也还没有生出赘肉，所以先不说是个美人，给人的印象首先是清洁二字。

作为一个当过侍酒的女人来说，她的缺点是有点鸡胸。

“瞧！什么时候飞来这么多白蛉子啊！”女人拍打一下衣襟站了起来。

如果老在这静悄悄的地方呆着，两个人就只好无聊地窘在那里了。

那天夜里，大约十点来钟吧。女人在廊子里大声吆唤着岛村的名字，像被人推了一把似的，咕咚一声跌进了他的房间。一下子扑到桌子上，醉醺醺地用手把桌上的东西抓了个乱七八糟，咕嘟咕嘟喝起冷水来。

据说她年初在滑雪场上认识的男人们，下午翻山来到这里。相遇之后跟着他们来到旅馆。这些人叫来艺妓饮酒欢闹时把她灌醉了。

她头晕目眩，一个人语无伦次地瞎说了一通之后：

“不行，我还得去露个面儿。他们可能担心，正找我呢。回头我再来。”说着踉踉跄跄地出去了。

约莫一个小时后，长廊里又是一阵零乱的脚步声，大概是东跌西撞地走来。

“岛村，岛村。”尖着嗓子呼唤。

“啊，看不见。岛村！”

这完全是一个女人的赤裸裸毫无顾忌的心在呼唤她男人的声音。这是出乎岛村意料的。不过，这尖锐的呼声一定会响彻整个旅馆，他困惑地站起身来。这时女人的手指捅破了纸门，抓住木格子，一下子朝着岛村瘫倒下去。

“啊，可找着你了！”

女人扯住他坐了下来，靠在他的身上。

“我没醉呀。不，怎么说醉了呢？不好受，只是有点不好受啊。心里不糊涂。啊！想喝水。不该喝了日本酒又喝威士忌，这东西上头，头痛。他们买的是便宜的，我不知道。”边说着，边用手掌一个劲儿搓脸。

外面的雨声顿时大起来了。

他的胳膊只要一松劲儿，女人的身子就瘫软了。他紧紧抱着她的头，他的脸几乎把她的日本发型都压扁了。他的手已经伸在她的怀里。

女人不理他的要求，把两只胳膊像门插关儿似地交抱在他所要求的地方紧紧压住。但她的胳膊大概是已经醉得麻木，使不上劲儿了。

“怎么了？这胳膊！妈的，妈的，没劲儿，这胳膊！”冷不丁

咬住了自己的胳膊肘儿。

他吃惊地给她扳开，已经咬了一排很深的牙印儿。

然而，她不再拒绝他的抚摸，就那样写起字来。她说要把她所喜欢的人名写出来给他看，写了二三十个戏剧和电影的演员名字，然后又把岛村两个字写了又写，写个没完。

岛村手掌下那难得的鼓膨膨的东西渐渐发热了。

“啊，放心了。放心了。”他安详地说，甚至感受到一种类似母亲般的感觉。

女人突然又难受了，挣扎着站起来，一下子趴伏在房间的一个角落里。

“不行，不行。我得走。我得走。”

“走不了啊？下大雨呢！”

“光脚儿走。爬着走。”

“那可危险！要走，我来送你。”

旅馆座落在一个小山上，有一个陡坡。

“我看你把带子松开，或者躺一会儿，醒醒酒儿吧。”

“那不行。就这样就好，习惯了。”女人坐正了，挺起胸。可是她越发喘不过气来了。打开窗子想要呕吐，却什么也吐不出来。恨不得翻滚儿下才好受，可她咬牙忍住了。这个状态一直继续着，她像是要打起精神，不时地喊着要走，要走。不觉已是凌晨两点多钟了。

“你睡你的去吧。去，我叫你去睡。”

“那你怎么办？”

“就这样儿呆会儿，醒醒酒就走。天亮以前走。”她蹭过来拉了一把岛村说：

“我是说，不要管我，你只管睡去吧。”

岛村钻进被窝后，她哈下腰去喝口水说：

“起来。喂，叫你起来。”

"你到底要我干什么?"

"你还是睡吧。"

"你说些什么呀?"岛村站起来了。

他把女人一把拖了过去。

女人来回翻身折腾了一阵之后,突然热烈地把嘴唇伸了过来。

可是在那以后,却像倾诉痛苦的梦话般说:

"不行,不行啊。你不是说要像朋友那样相交吗?"不知她说了多少句。

岛村被她那真挚的语气打动了。她那愁眉苦脸拚命克制自己的强烈意志,甚至使他有些败兴了。他真想对她信守自己的诺言了。

"我没有什么可惜的呀。决不可惜。不过,我可不是那种女人,不是那种女人啊。一定长久不了,这不是你自己说的吗?"

她醉得半麻痹状态了。

"这可不怨我,都怪你。你打败了。是你懦弱,可不是我啊。"一边信口说着这些,一边为了挺住欢悦咬住了衣袖。

好像泄了气似的安静了老半天之后,她突然间如同刺过来一把尖刀般说:

"你在笑吧,笑我呢吧?"

"没笑。"

"你心眼儿里笑呢吧。现在不笑,以后你也一定会笑的。"女人脸朝下趴着抽抽搭搭地哭了。

不过,她马上止住哭泣,把身子温柔地贴过来,亲切而详细地叙述她的身世。看来醉后的那种难受劲儿像忘了似地完全消逝了。刚才的事儿也一句不提了。

"哟,光顾说话儿,什么都忘了。"这次是睡眼蒙胧地微笑

了。

她说必须在天亮以前走才行。

“天还没亮呢。这里的人起得那才早呢。”她三番五次站起来打开窗子往外看。

“人的脸还看不清楚啊。今早因为下雨，还没有人下田，还好。”

在雨中，对面的山和山脚下的房顶都露出轮廓来了。可是女人还是有点舍不得走的样子。等旅馆的人都要起床的时分，她整了整发型，匆匆忙忙像逃跑似地一个人溜走了。连岛村要送她到门口，她也不让，怕是给人家看见。岛村就是在这天回东京去的。

“你上次虽然那么说，我看那还是撒谎。否则，谁会在大年底下跑到这个寒冷的地方来呢？再说，我后来也没笑过你呀！”

女人忽地抬起脸来。她压在岛村手掌上的眼皮连鼻子的两侧都是通红的。透过她抹得很厚的香粉也看得出来。这当然也令人联想到雪国的夜里有多么冷，可是由于她的头发太黑，倒给人以温暖之感。

她羞涩地露出微笑，大概她此时又想起“上次”的事情，宛如岛村的话一字一字地染红了她的身体。当她不悦地垂下头时，因为脖领敞着，连她的脊背都是通红的，活像赤条条裸露的肉体。也许是因为在发色的衬托之下，才越发给人以这种感觉。她的前发并不那么浓密，可是发丝却像男人的头发般粗壮，没有一根短头发，就像一种黑色的矿石沉甸甸地发亮。

岛村刚才摸到她的头发时，以为从来没碰到过这么凉的头发，吃了一惊。现在他又觉得那并不是因为天气寒冷，也许是由于这种头发本身的缘故，他又在重新观察着。这时女人在被炉的盖板上掐着指头在数什么，而且数个没完。问了一

声，

"你在数什么?"可她一声不响又数了一会儿才说，

"那是五月二十三吧?"

"噢，你在算日子。七月和八月可都是大建哪。"

"你看，今天是第一百九十九天呀。整整一百九十九天呀。"

"可是，这个五月二十三，你怎么记得那么清楚啊?"

"一看日记就知道了呗。"

"日记? 你记日记?"

"嗯，读旧日记是一个乐趣儿呀。一切都是如实地记下来，毫不隐瞒，所以自己读着也觉得怪难为情的。"

"从什么时候开始的?"

"在东京当侍酒前不久就开始了。那时，手里没有钱，自己买不起日记。就在两三分钱的杂记本上，用尺子打格儿。现在看来，那时是把铅笔削得尖尖的，格线打得很整齐。而且从一页的上端一直到下端，小字写得密密麻麻的。等到自己买得起，可就不行了，用东西不知节省。就说习字吧，起先是写在旧报纸上，而现在不是直接写在宣纸上吗。"

"一直在记日记吗?"

"嗯，十六岁那年的和今年的最有意思。总是陪酒回来换上睡衣再记的。回来的不是很晚吗，有时候还没记完，半道儿上就睡着了。这种地方，现在一读还看得出来呢。

"是吗?"

"不过，也不是每天都记，也有不记的时候。在这样的山沟儿里，说是出去陪酒，也左不过那么几家。今年只买到一本每页都印着日期的，买坏了。因为有时一记就记得很长嘛。"

使岛村感到意外的还不是日记的事，乃是她从十五、六岁起，每读一本小说就都把它记下来，而且这种笔记本已经记了

十来册。

“你是把感想都记下来的吧?”

“感想我可记不上来。不过是把题目和作者,书里的人物和他们的名字以及他们之间的关系记下来罢了。”

“记那些有什么用?”

“可不是没用嘛。”

“那就是白费力啦?”

“是的呀。”她毫不在乎的样子爽朗地回答,但她却直瞪瞪地瞧着岛村。

他还想大声再说一句“那完全是白费”时,不知为什么却突然感觉到一阵寂静,甚至连积雪冻结的声音都清楚地听得见似的。原来是他被那女子吸引住了。他也知道,对这个女人来说,那决不会是白费力的,可他一开口就拽给她一个“白费力”,这么一来,他又觉得这个女人的天性倒是很纯洁无邪的了。

这个女人谈的小说,听起来仿佛和通常所谓的文学这个词儿不挨边儿似的。她和村子的人们不过是彼此交换着看些妇女杂志,此外完全是各自分别阅读,没什么文学上的交往。既没有选择的余地,也没有较深地理解,好像连在旅馆的客房里看见的一本小说或杂志也要借来看的。然而,她仅凭记忆随便说出的那些作家的名字,有许多还是连岛村也不知道的。不过,她的语气就像谈论遥远的外国文学,听起来有一种毫不贪婪的乞丐般可怜的味道。岛村想道:这跟自己仅凭外国图书上的图片和文字遐想西方的舞蹈,大概也是一样吧。

她也是津津有味地谈论她并没看过的电影和戏剧。这可能因为多少个月以来,她就渴望着能遇到这样一个谈得来的对手的缘故吧。一百九十九天前的那天,她就是因为热衷于谈论这些而使她自愿地投入了岛村的怀抱的;现在她似乎忘

了这些，又一次因为自己用语言所描写出来的东西而兴奋得身上都热乎乎的了。

然而，这种对都市事物的向往，现在已经被温顺地放弃而成为一个天真无邪的梦了。因而，只是单纯的徒劳之感还很强烈，但并没有被都市排挤出来的人的那种高傲的不满了。她本人虽然没有因此而感到惆怅，但在岛村看来却有点说不出来的可怜。如果沉湎于这种思想，连岛村自己也将被抛入活着也是徒劳的那种悠远的伤感之中了。然而面前的这个女人却是沐浴着山间的清新空气，有着活泼而红润的脸色。

不管怎么说，也算岛村对这个女人有了新的看法。目下，对方既然当上了艺妓，这就使他反而有话不好开口了。

上次，她醺醺大醉，恼恨自己的胳膊麻木得不听使唤时说道：

"怎么了？这胳膊！妈的，妈的，没劲儿啊，这胳膊！"她甚至狠狠地把胳膊咬了一口。

因为站不起，她就打着滚儿说：

"决不是有什么可惜的。不过，不是那种人，我不是那种人哪！"岛村连这句话也想起来，正要开口而又踌躇时，女人早就察觉，马上就说：

"这是零时的上行列车呀！"随着这时传来的汽笛声站了起来，非常鲁莽地拉开纸窗和玻璃门，把身子往栏杆上一扑就坐在窗台上了。

冷空气一下子灌进屋子里来。随着火车向远方离去，它的声音听起来好像夜风在呼号着。

"喂，多冷啊！傻子。"当岛村也站起来时，其实并没有风。

满目白雪仿佛从大地深处发出结冻的声音。外面是一片严寒的夜景。天上没有月亮，星星多得令人难以置信。往上一看，似乎以所向无阻的速度往下垂落，清晰地浮现在天空

里。随着星群向眼前接近，天空在远处越发加深了夜色。边境上的群山已经分不清山峦的重叠，只是以差不多的厚度，呈乌黑色沉甸甸地垂落在星空的边际。这一切构成了一个万籁无声的和谐。

当女人察觉到岛村向她凑近时，转过身去，一下子趴在外面的栏杆上了。这不是懦怯的表现，在这种夜晚的背景下，乃是无比顽强的姿态。岛村暗想：又来了？

然而，尽管群山呈现着黑色，但不知什么缘故，看上去却清清楚楚是白雪的颜色。于是，就觉得群山是透明而又寂静的。天空和群山并不和谐。

岛村搬着女人的喉咙说：

“这么冷，你会感冒的。”说着，他想一使劲儿把她向后拉起来。可是女人抓住栏杆不撒手，嘶哑着说：

“我要走了。”

“走吧。”

“让我再这么呆会儿。”

“那我去洗个澡。”

“不，别走。”

“你把窗户关上。”

“让我再这么呆会儿。”

村子被神社的杉树林遮了一半，而乘汽车不需要十分钟的火车站的灯火，因为天气寒冷，吱吱地响着，忽明忽灭，仿佛灯泡就要炸了似的。

那女人的脸蛋、窗玻璃、自己绵袍的袖子，摸到什么都是冰凉的，岛村觉得从来没摸过这么凉的东西。

连脚底下的踏踏密都往上凉，他想一个人洗澡去了。可他刚要走，

“等一下，我也去。”这回是女人温顺地跟来了。

女人正在把他脱得东一件西一件的衣物归置到一个竹篮里时，一个住宿的男客人走了进来。当他发现缩着身子把脸藏在岛村胸前的女人时，

“啊，对不起。”

“没关系，请吧。我们到那边儿的浴池去。”

岛村连忙这样说，光着身子抱起竹篮走向隔壁的女浴池去了。女人当然是装作是夫妻跟了过来。岛村默默地连头也不回就跳进温泉了。放了心之后，不由地要大笑起来。他赶紧把嘴对准了水管子咕噜咕噜地漱起口来。

回到房间以后，女人轻轻地歪着脖子，一边用小姆指往上归拢鬓发，只说了一句：

“真伤心啊！”

女人的黑眼睛好像眯缝着，可凑近一看原来黑的是睫毛。这个神经质的女人一夜也未曾入睡。

大概是女人系腰带的声音惊醒了岛村。

“这么早就吵醒了你，真对不起。天还没亮吧。请你给看一看。”说着把灯关了。

“看得见我的脸吗？看不见？”

“看不见呀，天还没亮呢嘛。”

“不对，你得仔细看呀，这回呢？”说着，她打开了窗户。

“糟了，看得见了。我走了。”

清晨的寒冷使岛村吃了一惊。他从枕头上抬起头来一看，天空还是一片夜色，可是远山已经是早晨了。

“对了，不要紧。现在是农闲，没人这么早就出来的。不过，是不是有人进山啊？”她自言自语，拖着没系完的带子走着，

“刚才那个五点钟的下行列车没有客人来吧，旅馆的人且起不来呢。”

系完了带子，她还是一会儿坐下，一会儿站起来，又老是望着窗户踱来踱去。这如同夜行动物害怕天亮而焦燥地走来走去那种坐立不安一样，是一种奇怪的野性发作的状态。

说话间屋子里越来越亮了，女人那通红的面颊也看得更清楚了。岛村看着那惊人的鲜艳红色，看呆了。

“你脸怎么那么红，冻的。”

“不是冻的，是洗掉了香粉。我一钻进被窝身上就发热，一直热到脚尖儿。”她对着枕边的镜子说：

“这回可真亮了，我走了。”

岛村冲着她那边儿不由得缩了一下脖子。镜子里是通亮的白雪。在雪中浮现着女人的通红的脸。那是无法形容的一尘不染的美丽！

大概是太阳升起来了，镜中的雪更加闪耀，仿佛在燃烧起一股冷光。浮现在雪中的女人的头发也随着加深了它那鲜艳而带紫光的黑色。

为的是不让存雪吧，沿着旅馆的墙把浴池溢出来的热水引进一条临时挖出的沟里，可是在旅馆的门前却泛滥成一片浅浅的泉水。一条粗大的黑毛秋田狗站在踏脚石上一个劲儿在舔水喝。约莫是从仓库里现搬出来的供旅客用的滑雪板成排地晾着。它那轻微的霉气味儿跟水蒸气一混也就不那么呛得慌了。从杉树枝上落到公用浴室房顶上的雪块，也像一块块温暖的东西摔得变了形。

很快，一到了年前年后，那条路就该被暴风雪埋没了。要出去陪酒就得穿上防雪裤和胶靴，披上斗篷，戴上面纱了。那时积雪能有一丈深。这是黎明前，女人从小山上的旅馆里向着窗外俯瞰这条坡道时说的。现在岛村就是顺着这条道路正在下山。可是从路旁晾得高高的尿布底下，看得见边界上的山峦，那里的雪也反射着和煦的阳光。翠绿的大葱还没有被

大雪覆盖。

村子里的孩子们正在田里滑雪玩儿。

一走进村子的街道上，就听见一阵滴滴答答的雨滴声。

垂在屋檐下的小冰柱，玲珑可爱，闪闪发光。

刚从浴池回来的一个女子，望着正在屋顶上扫雪的男人说：

“喂！请你顺手把我们房上的雪也扫两下好吗？”她好像有点晃眼，用湿毛巾擦着脑盖儿。她大概是为了赶上滑雪季节，早早就由别处溜进来的女招待。隔壁就是一家咖啡馆，玻璃窗上的彩画已经旧了，屋顶也凹凸不平。

差不多所有的屋顶都是用板条覆盖，上面压着一排石头。这些圆石头只有朝太阳的一面在白雪中露出它的黑色。这种颜色与其说是湿漉漉的黑，不如说它更为类似积年累月暴露在风雪中的黑炭。不仅如此，就连所有的房子看上去也给人以类似这种石头的感觉。一排排矮小的房子都仿佛静静地趴伏在地面上，的确是北国的样子。

一群孩子在玩儿冰，他们一次又一次把沟里的冰块抱上来抛在道路上。大概是因为很脆的冰块一抛就碎，闪闪发光，所以好玩儿吧。岛村站在阳光下，就觉得冰那么厚，宛如假的一样，他看了好久。

一个十三四岁的小姑娘，独自靠在石头墙下，在织着毛衣。穿一条防雪裤和一双高木屐，光着脚，冻红了的脚心上露着一道皲裂。被放在她旁边的一捆柴火上坐着一个三岁光景的女孩儿，一本正经地捧着一个毛线团。从小女孩手里扯往大女孩手里去的一条灰色的旧毛线也反射着和煦的阳光。

隔着七八家的前方，有一个制造滑雪板的厂子，从那里传来刨削木材的声音。它对过儿的一家房檐下站着五六个艺妓在那聊天儿。他估计驹子——这是那女子的艺名，今儿早晨

刚刚听旅馆的女服务员说的———一定也在其中，一看，果然她正瞧着自己走来，而她的表情和别人不同，比较严肃。他估摸着：她看见我一定会脸红的，她最好是装出无所谓的样子，可是不等他想完，驹子已经是面红过耳了。既然这样何不扭过脸去，还偏要低垂着眼睑，好不自在的样子，死死地盯住我的脚步呢？

岛村也觉得脸上发烧了，急忙走了过去。驹子马上追了上来。

“多尴尬呀，你怎么跑到这儿来了？”

“尴尬？我才尴尬呢。你们那么多人聚拢在一起，吓得我不敢走了。你们总是那样的吗？”

“嗯。一到过晌就…。”

“你红着脸，吧嗒吧嗒地跑着追上来，岂不更叫我尴尬吗？”

“管它呢！”驹子果断地说了之后，脸又红了。于是她站在那里不动了，一手抓住路旁的一棵柿子树。

“我是想请你到我家坐坐才跑过来的。”

“你家就在这儿？”

“嗯。”

“要是给我看看你的日记，我就进去坐坐。”

“那东西等我临死就把它烧了。”

“你家里不是有一个病人吗？”

“哎呀，你怎么知道？”

“昨儿晚上，你不是上站接他去了吗？穿一件深蓝色的斗篷。我就是跟那个病人一趟火车来的呀。而且坐得很近。有一个姑娘认认真真非常亲切地护理着那个病人。那是他的妻子吗？是从这里去接他的还是从东京来的？就像一位母亲伺候孩子一样，那情景真动人哪！”

"你呀，昨儿晚上你怎么没跟我说？为什么？"驹子有了愠色。

"是妻子吗？"

然而她没有回答这个问题，就说：

"为什么昨儿晚上你没说？你这人真奇怪。"

岛村不喜欢女人的这种尖酸劲儿，不过他又想自己和驹子本人都没有使她如此尖酸的原因，所以他以为驹子的性格本来就是如此。可是在她的一再追问之下，毕竟还是觉得被抓住了什么把柄似的。今儿早晨，当他在映着山峦上一片白雪的镜子里看到驹子的脸时，他当然联想起在夕暮的火车中，车窗里映出的那个姑娘，可他为什么没有对驹子讲这些呢？

"有病人也没关系。谁也不上我的房间来呀。"驹子走进了一段矮矮的石头墙。

右首是覆盖着白雪的田地，左首是一行柿子树紧贴着邻家的墙根。房前好象一个花圃，正中央有一个小小的莲花池，池中的冰被搬到池子边上，里边游着红色鲤鱼。房子也象柿子树的树干一般，已经老朽了。房顶上余雪斑斑，屋顶的木板已经腐烂得凹凸不平了。

一走进洋灰地的房间，冷森森的，眼睛还什么也看不出来就被请上了梯子。这是一个真正的梯子，上边的房间也是一个真正的阁楼。

"这儿原来是养蚕的房间。你吃惊了吧。"

"这样，你吃醉了回来，竟然没从梯子上掉下去！"

"当然掉下去过。不过，那时就钻进下边的被炉里，往往就那么睡了。"说着，驹子把手伸进被炉里一试，就站起来出去取火去了。

岛村环视了一下这奇妙的房间。只有朝南的一个矮矮的窗子采光，细格的纸窗是新糊的，窗上日光照得通亮。墙上也

整整齐齐地糊了白纸，有一种走进了一个大的旧纸箱子里的感觉。头顶上没有顶棚，房盖向着窗户这边坡着，因此，就觉得头上静悄悄地一团漆黑。一想到隔壁又是什么情况，就仿佛这个房间是悬在空中，有点晃晃荡荡的。不过，墙壁和蹅蹅密却非常干净，尽管都是旧的。

只觉得，驹子也像一条蚕似的，以其透明的身体居住在这个房子里。

被炉上蒙着一条和防雪裤一样条纹的棉被子。衣柜虽旧，却是纹理很美的桐木制成，保留着驹子在东京居住过的排场。与此不相称的是那简陋的化妆台。红漆的针线箱还闪耀着豪华的光泽。墙壁上钉着一格一格的木板，大概就是书架吧，垂着一幅毛斯绫的幔帐。

墙上挂着昨儿晚上那套见客穿的衣裳，露着衬衣的红里儿。

驹子端着火铲儿灵敏地登梯子上来之后，

"炭火是从病人房间取来的。不过，常言说火这东西是干净的。"一边低下刚做好的发型，扒开被炉里的炭灰，说病人是肠结核，他是回故乡来等死的。

说是故乡，但这个少东家并非这里生的。这里原来是他母亲的村子。母亲在码头上当完了艺妓以后，还留在那里作舞蹈师傅，不到五十岁就患了中风。她是为了疗养才回到这个温泉乡的。儿子小时候喜欢摆弄机器，好容易进入一家钟表店，所以就把他留在码头上了。不久他到了东京，据说是在夜校学习，大概是劳累过度了才得的病。今年二十六岁。

驹子一口气说了这些，可是关于把少东家接回来的那个姑娘是什么人，以及驹子自己又为什么住在这个家里，她仍然只字未提。

尽管只说了这些，可是在这个房间如同吊在半空中一样

的情况下，驹子的语声是会被周围听见的，所以岛村有点坐不住了。

临出门时，只见一个白呲咧的东西放在那里，回头一看，原来是一只装三弦的桐木箱子。这箱子在黑暗中显得又长又大。他想：为了出去陪酒要搬去这么大的箱子简直不可想像。这时，熏得黢黑的纸拉门忽然开了，

"阿驹，从这上跨过去行吧？"

这是那清彻得达到哀戚的声音，仿佛从远方能传回一声反响。

岛村听到过这个声音，而且还记得它。这就是从夜行列车里向着窗外呼叫站长的那个叶子的声音。

"没关系。"驹子答了。叶子的防雪裤噌地跨过了三弦箱子。她手里提着一只玻璃夜壶。

听她昨儿晚上同站长的交谈以及这个防雪裤都清楚地说明叶子是这一带的人。可是因为她那华丽的腰带有一半露在防雪裤的裤腰上，就使茶色间黑色粗条纹的防雪裤显得非常好看，毛斯绫的长袖子也同样显得非常艳丽。防雪裤的裤裆稍稍高于膝盖，膨松宽大，而挺括的棉布看上去又不那么臃肿，有一种舒适之感。

然而叶子只是用锐利的目光扫了岛村一眼，一声没吭就从这个洋灰地房间走过去了。

岛村来到外边以后，硬是觉得叶子的目光还在他的额头前燃烧着似的。那就像远方的灯火，是冷淡的。这大概是因为他想起来昨儿晚上的那个印象。他正在火车上望着玻璃窗中映出叶子的脸，只见远山上的灯火从她脸后流过，当灯火同她的眼睛重叠在一起时，她的脸忽地照得通亮，而这种无法形容的美，使他为之激动了。他一想起这个情景，也就联想起在映着一片白雪的镜子里浮现的驹子的那通红的脸了。

于是他的脚步加快了。他的腿虽然又粗又白，因为他喜欢爬山，当他一边望着山一边行走时，他就陷入一种精神恍惚的状态，不知不觉地加快了步伐。一个随时都能忽然精神恍惚的人，他不可能相信那个照着夕暮景色的镜子和映着一片朝雪的镜子是人为的东西。他认定那是自然的东西，是一个遥远的世界。

就连刚刚走出来的驹子的那个房间，他也觉得已经是遥远的世界了。但他毕竟对这样的自己感到吃惊。当他从坡道走上来时，路遇一个女按摩师。岛村仿佛要一把抓住什么似的说：

"按摩师，能给我按摩一下吗？"

"我想想，不知道现在几点钟了。"说着，把竹子手杖夹在腋下，用右手从怀里掏出一只闷壳的怀表，用左手指摸了一下表盘说：

"现在是两点三十五分多钟吧。三点半我要到火车站后边去按摩，不过迟到一点也许还可以吧。"

"真不简单，你还能摸出表上的钟点儿来。"

"是的，因为表蒙子拿掉了。"

"能摸出表上的字来？"

"字可摸不出来。"说着又拿出表来，打开了表盖——这只表比一般女子用的怀表大一些——用手指摸着说：这是十二点，这是六点，它们中间就是三点。然后说：

"这样就算出来了。虽然不能一分都不差，可是差也差不了两分。"

"是吗。走坡道不会滑倒吗？"

"下雨时，我女儿来接我。夜里给村子里的人按摩，就不上山来了。可是旅馆的女服务员们说：是她当家的不准她来。真拿她们没办法。"

"你孩子已经大了吧。"

"是的，大女儿十三了。"说话之间来到屋子里，默默地按摩了一阵儿，她就侧着头倾听那远处宴席上传来的三弦声。

"这是谁弹的呢?"

"你一听三弦就知道是哪个艺妓弹的吗?"

"有的听得出来，有的听不出来。先生，您福气不小啊，肌肉很柔软啊。"

"没有僵硬的地方吧?"

"发硬的是脖筋。您胖得适中，不喝酒吧。"

"你怎么知道的?"

"恰好同您的体型相仿的客人，我知道的有三位。"

"这个体型可是极其普通的呀。"

"不是说吗，不喝酒就没有真正的乐趣，一醉解千愁嘛。"

"那么你男人一定是喝酒的喽。"

"见了酒就没命!"

"不知是谁弹的，这三弦，不怎么样。"

"是的。"

"你会弹吧。"

"从九岁学弹，学到十二岁。可是嫁了人以后，也有十五年没弹了。"

岛村心想:大概盲人都显得年轻吧，一边说，

"从小儿学的，工夫一定扎实吧。"

"手完全变成按摩的手了。可是耳朵还没瞎，所以到这儿一听艺妓们弹三弦就往往替她们着急呀。是的，大概是觉得自己还是过去的自己呢吧。"说着又侧着耳朵说:

"这大概是井筒屋的阿文吧。弹得最好的和最差的，一听就听得出来。"

"也有弹得好的吗?"

“有个叫阿驹的姑娘，虽然年纪还轻，可是最近弹得好起来了。”

“是吗？”

“先生，您认识她吧。虽说弹得好，也不过是在这样山沟里的话。”

“不，我不认识她。不过我是昨晚上跟师傅的儿子搭一趟火车来的。”

“是吗，病治好了回来的？”

“好像并没有好啊。”

“是吗，这个少东家在东京病了很久，那个叫驹子的姑娘为了给他寄去住医院的钱，甚至当了艺妓。怎么还没好呢。”

“这个叫驹子的…？”

“不过呀，虽说只是订了婚，只要该尽力的都尽了，将来也就…。”

“你说订了婚，那是真的吗？”

“是的，据说是订了婚的。我不知道，可大家都那么说。”

在一个温泉旅馆里，听女按摩师讲艺妓的身世，这过于平常了，因而反而成了意外。驹子为了未婚夫而甘当艺妓这个故事也是过于平常的老套子，因此岛村反而觉得有点不能坦率地相信。这也许是因为心灵中碰到一个道德问题的缘故。

他刚想更深入地听下去时，按摩师却沉默不语了。

就算驹子是少东家的未婚妻，就算叶子是少东家的新情人，然而少东家却是命在旦夕的话，这就使得岛村的心里又浮现出“徒劳”这个词儿了。驹子对于婚约的忠贞，直到为他的治病而卖身，这一切不都是徒劳又是什么呢？

他想，一见到驹子就把“徒劳”二字拽给她。可是不知为什么，岛村又一次反而觉得她的为人是多么天真了。

这种虚伪的麻木不仁散发着危险的道德败坏的味道，岛

村一边悄悄地回味着它，在按摩师走后仍然随便躺在那里。等他察觉到连五脏都发冷时，才发现窗户还在敞着。

山峡里的太阳很快就被遮住，这时早就冷飕飕地暮色苍茫了。由于这里是昏暗的，所以远方在夕阳下映着白雪的群山，仿佛一下子迫近到眼前。

一会儿工夫，群山按照它们的远近高低，在不同程度上加深了皱襞的阴影，只剩下山峰还照在浅淡的日光中。这时，山顶的积雪上呈现出满天的晚霞。

村子里分散在河岸、滑雪场、神社等各处的杉树林开始显得黑压压的了。

正当岛村陷入一种求之不得的苦恼时，驹子走进来了，好像点起一盏明灯。

她说旅馆里开着一个会议，商量准备迎接滑雪客人的事。她是被叫来在会后的这个宴席上陪酒的。她刚把腿伸进被炉就伸手抚摸着岛村的脸说：

"今儿晚上你的脸煞白，真奇怪。"

然后用力揉搓，揪住脸蛋上的肉说：

"你真蠢。"

看来已经有点儿醉了。可是等宴会散了以后又来时喊着：

"不管，不管了。头痛头痛。啊，真难受，难受。"当她瘫软地倒在化妆台前面时，说也奇怪，酒劲儿一下子冲到脸上来了。

"我渴，给点水！"

两手捂着脸，也顾不得弄歪了发型，就躺在那里了。一会儿工夫又坐起来，用冷霜擦掉了脸上的香粉，通红的脸完全露了出来。连她自己也高兴的笑个不停。真有意思，酒劲儿马上消散了。肩膀发抖，大概是觉得冷了。

她又慢条斯理地讲起她在八月里怎么患了神经衰弱，又整整闲呆了一个月着等等。

“我担心是不是要发狂了。总觉得心里有事想不开，但是为什么事想不开，自己也不知道。多么可怕呀。根本睡不着觉。可是出去陪酒时，又什么病也没有了。做了好些个梦。连饭都不好好吃吆。老是拿一根针往踏踏密上扎，扎了又拔，拔了又扎，没完没了。就在这暑热的大白天儿。”

“艺妓是几月当的？”

“六月。要是碰巧儿的话，我现在也许已经到滨松去了呢。”

“成了家？”

驹子点了点头。她说滨松的一个男人，追着要和她结婚。可是她怎么也不爱他，为此很久也拿不定主意。

“既然不爱又有什么犹疑不决的？”

“没那么简单。”

“结婚有那么大的力量？”

“下流！不是那么回事。我这个人自己的事情要是不安排好，硬是不放心！”

“哼。”

“你这个马大哈！”

“可是，你跟那个滨松的人有了？”

“要有还会拿不定主意？”驹子满不在乎地说，

“不过，他还说，只要你在这地方，就不让你跟任何人结婚。一定给你破坏掉，我什么都干得出来。”

“你是说，他在老远的滨松就有这个本领？你还真地担心他那一套？”

驹子沉默了一下，一动不动地躺在那里，好像品味着她已经暖和过来的体温。忽然又仿佛无意识地说：

“当时我以为已经怀了孕呢。哼哼，现在想起来真好笑，哼哼哼。”她一边用鼻子笑着，突然把身子一缩，伸出两只拳头像小孩子似的攥住岛村的衣领。

闭在一起的睫毛，又一次好像眯缝着的一双黑眼睛。

第二天早晨，岛村一睁眼睛，只见驹子已经起床，坐在被炉旁边，一只胳膊肘支在被炉上，往一本旧杂志的背封上乱写些什么。

“喂，我回不去了。刚才女服务员来送火，多么不雅观，吓得我跳起来一看，太阳已经照在窗纸上了。昨儿晚上喝醉了，大概是迷迷糊糊地就睡着了。”

“几点了？”

“八点了。”

“洗澡去吧。”说着，岛村坐起来了。

“不，又该在走廊里给人碰见。”俨然是一个规规矩矩的女人了。岛村洗澡回来时，她头上利落地蒙着布巾，勤勤快快地在打扫房间。

连桌子腿儿、火盆的边缘都神经质地抹了又抹。火盆里的灰也熟练地扒得溜平。

岛村把腿伸进被炉里，懒洋洋地坐在那里吸烟。每当他把烟灰弄到踏踏密上时，驹子就用手帕轻轻地把烟灰擦掉，最后递给他一只烟缸。岛村爽朗地笑起来，驹子也跟着笑了。

“你要是嫁了人，丈夫得老挨你的呲儿。”

“我并没有呲儿你呀。人家常常笑我，连要洗的衣服也叠得整整齐齐。这也是秉性难移呀。”

“人们常说，打开柜子一看就能知道那个女人的性格呀。”

满屋子的阳光，照得暖烘烘地，一边吃着早饭，

“真是个好天儿。我该早点回去练三弦就好了。这样的天儿，音色也不一样啊。”

驹子抬头望了望蔚蓝深邃的晴空。

远处的群山笼罩着一层柔和的乳白色，看上去大概是风雪在弥漫。

岛村联想起按摩师的话，就说：你就在这儿练好了。驹子马上站起来就往家里打电话，叫人把替换的衣服和“长歌”的谱子送来。

岛村心想他白天看见的那个家原来还按着电话，脑子里浮现出叶子的眼睛，说，

“就是那个姑娘给你送来吗？”

“也许是她。”

“不是说你是那个男人的未婚妻吗？”

“哎呀，你是什么时候听说这些的？”

“昨天。”

“你真奇怪。听说了就听说了，为什么昨儿晚上没告诉我？”可是这次不同于昨儿白天，驹子却恬淡地微笑了。

“要不是瞧不起你，就不好跟你说呀。”

“违心的话。东京人净撒谎，所以讨厌。”

“瞧，这不，我一提这个你就打岔么。”

“怎么是打岔呢？那么你相信了？”

“相信了。”

“你又撒谎。你本来并不相信。”

“当然，我也有点纳闷儿。可是人家说你去当艺妓是为了替未婚夫赚医疗费的呀。”

“无聊，这种话剧般的神话。订婚，没那么一回事儿。看来还真有不少人相信呢。我当艺妓并非为了某个人。不过该做的就得做罢了。”

“净跟我打哑迷。”

“那就说清楚了吧。曲艺师傅也许那么想过，希望他的儿

子跟我结婚。这只是心里的想法，可一次也没有说出口来。她的这个想法，少东家和我也多少知道一点儿，可是我们两个人并没往心里去。就是这么点事儿。

"那你们从小儿就认识喽?"

"是啊，不过两个人并没有在一起生活过。当我卖身去东京时，只有他一个人给我送行。这在老的日记的第一页上写着。"

"要是两个人都在那个码头上，说不定现在已是夫妻了。"

"我想不会是那样的。"

"真的吗?"

"别人的事不劳你操心了。他已经快死了。"

"而且你是不该在外边儿过夜的。"

"你这个人，说这话才是不该呢。我想干什么就干什么，一个要死的人怎么管得了?"

岛村没话可说了。

然而，有关叶子的事，驹子仍旧只字未提，这是为什么?

再说叶子吧，她甚至在火车上也像一个年轻母亲般忘我地服伺着那个男人，而且把他接回来了。而现在大清早就要给同这个男子有着特殊关系的驹子送来替换的衣服。试想她的心里又是什么滋味呢?

岛村像往常一样又在如此遐想时，

"阿驹，阿驹!"忽然传来压低了但却很清脆的叶子那美丽的声音。

"噢! 劳驾了。"驹子站起来走向小套间去。

"叶子，是你送来的? 多沉哪，都拿来了!"

可是叶子好像没说话就走了。

驹子用手指把子弦挑断，换上新弦之后，定好了弦。定弦的时候已经听得出她的手音的清亮。她打开放在被炉上的那

个大包袱一看，除了普通的练习谱以外，还有二十来册杵家弥七的改良三弦谱。岛村感到意外，把它拿过来说，

“你就是用这些玩艺儿学的？”

“你知道，此地没有师傅呀，有什么办法呢？”

“你家里不是有一位师傅吗？”

“她中风了。”

“中风，还可以用嘴教嘛。”

“话也说不出来了。要是舞蹈，她还可以用那只能动弹的左手纠正姿势，可三弦，只能使她的耳朵不耐烦。”

“看这种谱子就能看懂？”

“很好懂。”

“要是外行，又当别论。而一个艺妓竟能在这偏远的山沟儿里这么专心致志的学，那个卖乐谱的也一定很高兴呀。”

“雏妓主要是舞蹈，以后我在东京也是继续学舞蹈。三弦我不过是马马虎虎会一点儿，忘了就没人辅导了，只能靠乐谱。”

“小曲呢？”

“我不喜欢唱。不过，学舞蹈时听惯了的小曲还马马虎虎，可是新曲子都是听广播或者从别的地方记下来的，没把握呀。有的地方不正规，一定不怎么样。而且在熟人面前张不开嘴。要是生人才能大声唱出来。”她有点羞怯，然后好像等着要唱，摆好架势，两眼盯住了岛村。

岛村一下子被她的气势压倒了。

他出生在东京的商业区，从小儿就接触了歌舞伎和日本舞蹈。后来也记住一些“长歌”的句子，自然而然听惯了。可是他自己却没有学过。一提起“长歌”，脑子里马上浮现出来的是舞蹈的舞台，而不是艺妓陪酒的宴席。

“真有点发怵！你这个最难伺候的客人。”说着，她轻轻咬

了一下嘴唇，把三弦放在大腿上了。于是她宛如变了另一个人，从容地翻开了练习谱。

"这可是今年秋天照着谱子才学的。"

弹的是《劝进帐》。

岛村忽然感觉到一股凉爽之气直沁心脾，几乎从两颊上生起鸡皮疙瘩。在他那一下子变得茫然的整个脑子里响彻着三弦的声音。与其说他大吃了一惊，不如说他完全被征服了。于是敬佩之念油然而生，悔恨之情有如潮涌。他完全无力抗衡了。只觉得被驹子的力量在任意冲刷着，而且竟然觉这很舒服，只有豁出命去随波荡漾了。

一个不过二十来岁的乡村艺妓的三弦，按说能有什么了不起呢？然而尽管是在一个小小的房间里弹，她却为什么和登台表演毫无二致呢？岛村想把这归咎于自己在爬山中变得多情善感的缘故，可是驹子有时又故意不唱歌词而把它干念一段，或者说这段太慢，太麻烦就把它跳了过去，而她却渐渐地如同神灵附体一般，嗓音越发高亢，拨子的声音也越发清彻得没有止境，把岛村惊呆了，以致他故作镇静枕着胳膊躺了下去。

弹完了《劝进帐》，岛村松了一口气，心想：哎呀这个女人是迷上我了。但是又觉得自己未免太泄气了。

"这种天气，弦音是不同的。"说着，她望了望雪后的晴空。驹子这么说是有道理的。因为空气不同了，既没有剧场四周的墙壁，又没有听众，更没有都市的尘埃。这样，音响就只是在这冬天的纯净的晨光中一直响彻到远方积着白雪的群山上了。

经常不自觉地对着山峡的大自然，一个人孤独地练习，这已经成为她的习惯。所以越练，她的拨子越有力量，这也是自然的。这种孤独破除了哀愁，蕴育了倔强的意志和力量。虽

说她多少有点基础，竟然自学了复杂的乐谱，又能达到撇开乐谱弹熟了曲子的地步，无疑这是凭着坚强的意志，下了一番苦功的。

岛村认为驹子的生活方式是徒劳无益的，是一种可怜而渺茫的憧憬。然而这个生活方式对驹子本人却是有其价值的。它导致了从她的拨子底下迸发出清彻而铿锵的音响。

岛村的耳朵听不出纤细而灵巧的弹拨技巧，他只不过能够多少领略一点弦音的感情而已。对驹子来说，他可能是一个最合适的听众。

等她开始弹奏第三个曲子《都鸟》时，也由于这只曲子华丽而妩媚，岛村已经没有那种不寒而栗的感觉。相反地，他觉得暖融融地非常舒适了。他凝视驹子，产生了一种肉体的亲昵之感。

细高的鼻子本来显得不够丰腴，可是由于两腮上生动地泛起红潮，看上去，仿佛在悄悄地说："我就在这儿呢。"她那美丽而润滑的嘴唇宛如一只缩成环形的血红的水蛭，当它聚拢起来时，照在上面的光线也仿佛在湿漉漉地蠕动。可是当它随着歌声而张开之后，又马上可爱地缩拢回去，这和她肉体的魅力是一模一样的。眉梢略微下垂的眉毛底下，小眼角既不吊起也不下垂，好像有意描画的，两只眼睛形成一条直线。看上去虽然有点不太自然，可现在它闪烁着湿润的亮光，活象小孩儿的眼睛。她的皮肤由于在都会里作过一段接待职业，保养得光滑晶莹，又加上可以说染上了一层山峡中的健康色彩，不施脂粉，也宛如刚刚剥了皮的百合或者洋葱的球根那么新鲜，连脖子上都微微透出血色，显得无比的清洁。

她虽然托着三弦端端正正坐在那里，可是与往常不同，看上去却像一个小姑娘。

最后，她说要弹一下正在练习的曲子，看着乐谱弹了一只

《新曲浦岛》。然后默默地把拨子插在弦下，放松了姿势。

突然散发过来一股诱人的魅力。

岛村没什么可说的，驹子也好像根本不在乎岛村的评论，露出一副恬静而愉快的样子。

"你只要一听这里的艺妓们弹的三弦就能听得出她是谁吗?"

"当然听得出来。总共也不到二十个人嘛。弹《都都逸》最容易听了。这种曲子最能显出每个人的特性来。"

然后又拿起三弦，把弯着的右腿向前一蹭，就把三弦的音箱放在腿肚子上，腰往左边一扭，倾斜着身子说：小时候就是这样子学三弦的。然后瞧着弦子的把位，像小孩儿那样唱道：

"ku, ló, ka—, mi—, no…。"叮咚地弹了几下。

"第一个曲子就学的是这个《黑发》吗?"

"不。"驹子像她幼时那样，摇了摇头。

自那以后，驹子纵然有时留宿，也不一定要在天亮以前走了。

"驹姐!"从走廊的远处提高尾音儿呼唤她的是这旅馆的一个小女孩儿。驹子总是把女孩儿抱进被炉，跟她玩儿起来没完，直到傍午才带着这个三岁的女孩子到浴池去洗个澡。

驹子一边儿替孩子梳理刚洗过的头发，一边儿说：

"这孩子一看见艺妓就提高尾音儿叫驹姐。照片也好，图画也好，一看到是梳着日本发式的，都说她是驹姐。我喜欢小孩儿，所以懂得这心理。"又对着女孩儿说，

"小纪美，到驹姐家去玩儿好吗?"说着她就站起来了。可是她又安详地坐到廊子里的藤椅上了。

"瞧！这些东京来的急性子，已经滑起雪来了。"

这间屋子坐落在高处，从侧面正好望到南边山脚上的滑雪场。

岛村从被炉里转过脸来一看，原来滑雪的坡道上的雪还只是星星点点，所以只有五六个人穿着黑色的滑雪服在老远的山脚下的田地里滑行。那梯田的土埂还没有被雪埋上，坡度又不大，所以滑得一点也不起劲。

"好象是学生。今天星期天吧。那样滑雪有什么意思。"

"可是，滑雪的姿势倒满好啊。"驹子好像自言自语地说，

"据说客人在滑雪场上要是有艺妓跟他打招呼，他就会吃惊地说，原来是你？因为艺妓们在雪地里晒得黢黑，认不出来。她们晚上不都是化了妆的吗。"

"艺妓也穿滑雪服吗？"

"是穿雪裤。唉，真讨厌，真讨厌。在宴席上马上就会有人跟你说，明天在滑雪场上见。今年我可不想滑雪了。再见，来，小纪美，咱们走吧。夜里又要下雪。下雪前的晚上，一定很冷啊。"

驹子走后，岛村坐到她才坐过的藤椅上，一眼看见了沿着滑雪场外的坡道上驹子拉着纪美子回家。

天上有了云，阴影覆盖着的山和照着阳光的山相互重叠起来，它们的阴晴又时刻在变幻，绘制出一幅冷清清的景色。不久，滑雪场也忽然被阴影盖住了。往窗下一看，枯萎的菊花篱笆上垂挂着粉丝般的霜柱。不过，房顶上融化的雪还顺落水管滴滴答答不断地流下去。

当天晚上并没有下雪，先降了一阵霰子，然后变了雨。

岛村临行之前的夜晚，月光皎皎，空气变得十分寒冷之后，他又一次叫来了驹子。时间已是夜里十一点了。可是驹子还坚持要和他出去散步。不知为什么粗暴地把他从被炉里拥起来，硬是拉到户外。

道路已经结冻。村子沉睡在严寒之中。驹子撩起衣襟掖在腰带里。月亮出来了，宛如放在蓝冰中的一把钢刀，闪铄着

寒光。

“咱们到火车站去。”

“疯子！来回有三公里呀。”

“你不是要回东京了吗？咱们去看看车站。”

岛村从肩上到腿部冻得发麻了。

回到房间之后，驹子突然无精打彩，把手伸进被炉，垂头坐着。和往常不同，连澡也不去洗了。

房间里就着被炉的被子铺好了一个被窝。就是说，被子边儿搭在蒙着被炉的被子边儿上，褥子的一端紧接着固定的被炉。驹子坐在被炉旁烤火，一动不动地垂着头。

“怎么了?”

“我想走了。”

“别胡说了。”

“甭管我，你睡你的。我想就这么呆会儿。”

“为什么要走?”

“不走，我在这儿呆到天亮。”

“无聊，别折磨人。”

“我不是折磨人，我可不折磨谁。”

“那么你就…。”

“不行，我难受。”

“那又有什么了不起。毫无关系么。”岛村笑起来说，

“我又不动你。”

“不。”

“再说，你真傻，那么乱跑。”

“我要走。”

“别走了。”

“我难受啊。你呀，你就回东京好了。我真受不了。”驹子把脸轻轻地俯在被炉上。

受不了，是指跟一个过路人眼睁睁越陷越深而心里没底呢？还是指这种时刻硬挺着的难以排遣的心情呢？想到女人的心已经达到这种地步时，岛村一时默默无语了。

"你就回东京吧。"

"我原想明天回去的。"

"那，你为什么要回去了？"驹子仿佛刚睡醒的样子抬起了头。

"呆到多久我不是也帮不了你什么忙吗？"

驹子正茫然瞅着岛村，一下子厉声厉色地说，

"这么想就不对了。你这么想就不对了"驹子忙不迭地站起身来，一下子搂住岛村的脖子，失去常态地说，

"你说这个可不对呀。起来，我叫你起来。"冲口而出地说着，她自己却倒了下去，在一阵疯狂中，也顾不得自己的肉体了。

然后，睁开温情而含泪的眼睛说，

"真地，明天你就走吧。"静静地说完，理了理头发。

第二天岛村决定搭下午三点的车走，正在换穿西装的时候，旅馆的管帐的悄悄把驹子叫到走廊。这时听到驹子说，是啊，你就算十一个小时吧。这也许是因为管帐的认为十六七个小时太多了的缘故。

后来一看帐单，早晨五点钟走的就算五点以前，第二天十二点走的就算十二点以前，一切都是按整的钟点计算的。

驹子穿上大衣，围上白色的围巾来到车站送行。

为了消磨时间，买了一些带回去的土产——木天蓼的酱菜和蘑菇罐头之后，离开车还有二十分钟，就在站前地势较高的广场上一边四下里眺望着一边闲蹓。岛村心想这真是个四面环着雪山的一块狭小的土地呀。驹子那过于乌黑的头发，由于这照不到阳光的山峡偏僻荒凉，反而显得可怜了。位于

下游远方的一个山腹上，不知怎地照射着一块淡淡的阳光。

“我来之后，雪不是化了许多吗？”

“不过再下两天，雪就会积到两米呀。如果接着下下去，那电线杆上的电灯就埋到雪里去了。要是一边儿想着你一边儿走路，就会让电线把脖子剐破的。”

“雪能积那么厚？”

“听说下大雪的早晨，前边那个镇上的中学就有人光着身子从宿舍楼的窗户往雪里跳。身子就整个沉到雪里无影无踪了。说是就像游泳一样在雪底下游着走啊。瞧，那边儿还停着除雪车呢。”

“正月里我想赏雪来，旅馆挤得很吧。火车会不会给雪崩埋上呢？”

“你这个人太阔气了。净过这种生活吗？”驹子正瞧着岛村的脸，又说，

“你怎么不留胡子呢？”

“是啊，我正想留呢。”岛村一边摸着刚刚刮过的青青的胡子茬儿，口角上有一条好看的皱纹，把他那肥软的双颊勾画得十分英俊。他想，驹子大概也是因为这个看上自己的。

“可你呢，总是一下了装，脸上就像刚刚刮过似的。”

“讨厌的乌鸦在叫。不知在哪儿叫呢。好冷。”驹子望着天空，把胳膊肘紧扣在两肋上。

“到候车室去烤烤火吧。”

这时，从大道拐向停车场的宽广的道路上，慌里慌张跑来一个人，是穿着雪裤的叶子。

“唉呀，驹姐！行男他…，驹姐！”叶子上气不接下气，就像被个可怕的东西追赶着的孩子揪住母亲，抓住了驹子的肩膀。

“快回去吧！看样子不妙，快！”

驹子仿佛忍着肩膀的疼痛，闭上了眼睛。脸色顿时变得

煞白。然而意外的是她却清楚地摇了摇头说，

“我正在送客人，回不去。”

岛村吃了一惊，

“送什么客人，没关系嘛！”

“有关系。你下次还来不来，我怎么知道！”

“来的，来的。”

叶子仿佛根本没听见他们的话，急促地说，

“刚才呀，往旅馆打了电话，说是你们在车站，就跑来了。行男叫你呢。”说着就伸手去拉驹子。驹子先是耐着性子，然而一下子甩开叶子的手说，

“不回去！”

这时跟跄了两三步的却是驹子。然后哇地一声就要呕吐，但什么也没吐出来，她的眼边儿湿了，脸上起了鸡皮疙瘩。

叶子呆若木鸡，僵着身子盯着驹子。不过，她的表情过于真挚，看不出是生气了、吃惊了还是伤心了。有点儿像个假面具，显得非常平静。

带着这种表情转过身来，一把抓住岛村的手说，

“求求你，叫她回去吧。”恳切地大声央求着。

“好吧，我让她回去。”岛村放大了嗓门。

“快回去吧，傻瓜！”

“你插什么嘴？”驹子一边儿对岛村这么说着，用手把叶子推离岛村。

岛村要把站前的汽车指给叶子看，尽管他的手被她攥得发麻了。

“马上让那个车送她回去，你就先走着吧。尽自这样，人们会瞧热闹的。”

叶子使劲儿点了一个头说，

“那就快点儿吧，快点。”然后转身就跑了，干脆得令人难

以置信。望着她越去越远的影子，一个在这种场合不应有的疑念掠过了岛村的脑际——这姑娘为什么老是真真挚挚？

叶子那凄婉而美丽的声音仍然留在岛村的耳底，似乎要从雪山上荡来它的回声。

“你往哪儿去?”驹子看见岛村要去找司机，就把他拉了回来说，

“不，我不回去。”

岛村一下子对驹子产生了肉体上的憎恶感。

“你们三个人之间有什么纠葛我不知道，可是少东家不是眼看就要死了吗？他是想见到你才来叫你的呀。老老实实回去吧。不然，你会后悔一辈子的。我们说话之间，他要是断了气怎么办？不要闹别扭，把一切都忘掉吧。”

“不对，你误会了。”

“你被卖到东京去时，他不是唯一送过你的人吗？这在你最老的日记一开头写着呢。这个人的临终你怎能不去送送呢？要在他生命的最后一页上把你自己写上去才是呀。”

“临死的人，我可不愿意看。”

这句话听起来既像冷酷无情，又像炽烈的热爱，岛村正在困惑不解，

“日记再也记不下去了，把它烧掉”驹子这样自言自语，不知为什么，脸上泛起了红潮，

“你呀，你是个老实人，要是老实人我可以把日记全都寄给你。你不会笑我吧，我倒认为你是个老实人。”

岛村受到一种莫名其妙的感动，觉得：是的，再没有比自己更老实的人了。于是他就不再硬逼着驹子回去了。驹子也不说话了。

旅馆派到车站接送客人的伙计走出来告知已经开始剪票了。

站台上只有四五个穿着暗色冬装的当地人默默地上车下车而已。

"我不进站台去了。再见吧。"驹子站在候车室的窗子里面说。玻璃窗是关着的。从火车上望去，好像一只出奇的水果孤零零丢在这个荒村的一家水果店的旧玻璃箱里。

火车一开动，候车室的玻璃窗随着一亮，驹子的脸在亮光中忽地闪现出来，马上又不见了。这就像那天早晨照在映着白雪的镜中时一样，她的双颊是通红的。对岛村来说，是他又一次离开现实时的那种颜色。

列车从北侧开上边界的山，一钻出漫长的隧道，冬天下午暗淡的阳光仿佛全被吸入隧道的黑暗的地里边去，又仿佛那老旧的列车已把它光亮的外壳脱到隧道里，顺着峡谷向山下驶去。重叠的山峦里暮色已经降临。山的这一侧还没有降雪。

列车沿着溪流不久驶入旷野。只见山顶有如刀砍斧剁，嶙峋起伏错落有致。从山顶起，一条优美的斜线缓缓伸延到老远的山脚。山脚的尽头上，一轮初升的月亮依稀可见。这座山是空旷原野尽头的唯一景观。余辉淡淡的天空，清楚地衬托出全山的黛色。月亮虽然已经发出淡光，但还没有冬夜里那么清寒皎洁。天空里看不到一只飞鸟。山脚下的原野空旷地向左右阔展开去。在接近河岸处耸立着一座洁白的建筑物，可能是一个水电站。它没有被暮色吞没掉，从这严冬的车窗里还可以望得到。

由于车箱内供暖，车窗开始蒙上了一层哈气。随着窗外流动的原野越来越暗，乘客的身影又半透明地映在玻璃窗上，于是夕暮的景色照在镜中的那种幻境又复出现了。这个列车同东海道线的不同，仿佛是别的国家的火车，估计也只有三四节老旧褪色的旧式车箱，电灯也是昏暗的。

岛村宛如乘在一个什么虚幻的东西里，连时间和距离的感觉也都消失，陷入一种精神恍惚的状态，仿佛身子毫无目的地被它拉着走。那单调的车轮声听起来渐渐像那女人在说话。

这些话语尽管断断续续地很短，却标志着她在生活中的拚命挣扎。因为听起来很痛苦，所以至今也不能忘怀。而现在岛村离她越来越远，那已是遥远的声音了。仿佛充其量只能给他添加一点旅愁而已。

此刻是不是行男已经咽气了呢？由于执意不肯回去，她是不是没有赶上行男的临终呢？

车箱中乘客少得可怕。

只有一个五十多岁的男人和一个脸色通红的姑娘相对而座，聊起来没完。那姑娘肌肉发达的肩膀上披着一条黑色的围巾，气色好得如同一团火。她向前倾着身子仔细听着，愉快地同那男人应答。看上去两个人是长途旅行的。

可是列车开到一个耸立着缫丝厂烟筒的火车站时，那老头儿慌忙从行李架上取下一个柳条箱从车窗扔到站台上，

“那就再见了，但愿有缘再一次遇见你。”对姑娘说完就下车了。

岛村忽然要掉下泪来，他暗自一惊。岛村心想自己这是在离别驹子后的归途之上啊。

万没想到那两个人不过是偶然坐到一起的。男人看样子是一个商贩。

从东京家里出来时，妻子说，正是蛾子产卵的季节，不要把西服老是挂在衣架上或是墙壁上。他一来到这里，果然在旅馆房间屋檐下吊着的装饰灯上吸附着六七只玉蜀黍色的大蛾子。铺三块席的套间里，衣架上也落着蛾了，虽然很小，肚子却挺大。

窗户上还装着夏天防虫的铁纱。这铁纱上也有一只蛾子一动不动落着，仿佛被粘在那里。它还伸出树皮色小羽毛般的触角。不过它的翅膀是透明的淡绿色。那翅膀有那女人的手指般长。蛾子后面，远处边界上的群山在夕阳的照射下已经是红黄斑斓的秋色，因而这绿色的小点反而显得死气沉沉。只有前翅和后翅相重叠的部分绿色浓一些。秋风一吹，那翅膀像薄纸一般轻轻摇晃。

岛村想：这蛾子是不是还活着？他站起来用手指从铁纱内侧弹了一下，可蛾子一动也不动。用拳头咚地敲了一下，它才像树叶似的掉了下去，在掉落中间又轻轻地飞起。

仔细往远处的杉树林一看，它前面有无数蜻蜓成群地流动，就像蒲公英的白色软毛随风飘舞。

山脚下的河，看上去仿佛是从杉树的梢上流出来的。

类似胡枝子的白花，在一个较高的山腰上盛开，闪烁着白光。岛村又眺望了好久。

从旅馆的浴池一出来，只见一个卖东西的俄罗斯妇女坐在旅馆的门厅里。岛村好奇地去看她，心想她竟然来到这样偏僻地方。卖的是一些普通的日本化妆品和妇女戴在头上的饰物之类的东西。

估计已有四十多岁，脸上有些小皱纹，显得不干净。从粗脖子根可以看到雪白油亮的胖肉。

“你是从哪儿来的？”岛村一问，

“从哪来的？是问我从哪儿来的？”这个俄罗斯女人不知怎么回答才好，却一边儿收拾摊子一边在寻思的样子。

她的裙子就像裹了一块肮脏的旧布，已经不像个西装。她很熟悉日本习惯，背起大包袱就走了。可脚底下穿的总还是一双皮鞋。

岛村跟着送走俄罗斯女人的老板娘一起来到帐房。炉旁

有一个身材高大的女子背着脸坐在那里。她拉起和服的下摆站起身来。穿的是一件黑绸子礼服。

岛村认识这个艺妓，因为滑雪场的宣传画就是她穿一身陪客时的衣服，下身穿着雪裤，脚登滑雪板和驹子并肩站着的照片。她是一个体态丰盈态度大方的大姐。

旅馆的老板在火炉上搭了两根火筷子在烤着一个椭圆形的澄沙包儿。

“请您尝尝，这是喜庆点心。吃一口解解闷儿。”

“是刚才这个人送的吗？”

“是的。”

“这个艺妓蛮漂亮啊。”

“因为满期了，今天来辞行的。她原是一位红姑娘。”

岛村一边吹气一边咬了一口烤热的澄沙包儿。皮子有点硬，有一股陈味儿，还有点发酸。

窗外的柿子熟透了，被夕阳一照，那红通通的光线仿佛一直射到屋里火炉上自在钩的竹筒上。

“那么长，那是芒草吧。”岛村惊讶地望着坡道。那草有背着它的老妪的两倍高，穗子也老长老长的。

“啊，那是萱草呀。”

“萱草？是萱草？”

“铁道部举办温泉展览会时，盖了一个休息厅或者叫茶室，就是用萱草苫的屋顶。据说一位来自东京的客人把这个茶室原封不动地买去了。”

“原来是萱草啊。”岛村又一次自言自语地念叨着。

“那么说山上开花的就是萱草喽。我还以为是荻花呢。”

岛村一下火车，头一眼就看见了这山上的白花。这花在陡峭的山腰接近山顶处盛开着，闪烁着银色的光芒，简直就是秋天照射在山上的阳光，使岛村感动得发出一声长叹。当时

他还以为那是荻花呢。

然而在近处看到的萱草非常茁壮，它和远山上令人伤感的花完全不同。一大捆萱草把背着它的女人们遮了起来，把坡道两侧的石崖擦得沙沙作响。它的穗子又粗又大。

回到房间来一看，开着十度灯光的昏暗的套间里，大肚子飞蛾正在黑漆的衣架上爬着产卵。屋檐下的蛾子也吧哒吧哒往装饰灯上乱撞。

虫声从晌午就一直叫个不停。

过了一会儿驹子来了。

她伫立在走廊里，面对面凝视着岛村说，

"你，干什么来了？到这个地方来干什么？"

"来看你呀。"

"违心的话。东京人净撒谎，所以讨厌。"

然后坐下来，用柔和的语声低沉地说，

"我可不想再去送你了。那滋味可没法说啊。"

"好了，下次我就不辞而别。"

"别价，我是说不到车站去送你。"

"他怎么了？"

"还用说，死了呗。"

"就在你送我的当儿？"

"不过，跟那没关系。我是说送别，想不到那么难受。"

"噢。"

"二月十四那天你干嘛去了？净撒谎。让我好等呀。行了，你的话我再也不信了。"

二月十四是农村的驱鸟节，是一个有雪国特色的儿童节日。从头十天起，村子里的孩子们就穿上稻草鞋把地上积雪踩固，然后把它切成二尺见方的方块，一块一块抠起来砌成一座雪殿。那是四面各六尺，高一丈的雪筑的宫殿。十四的夜

里把装饰新年的稻草绳挨家收集来，在雪殿前燃起熊熊的篝火。这个村子的新年是二月一日，所以这种稻草绳还都挂在家家的门上。这时，孩子们爬上雪殿的屋顶拥拥挤挤唱起驱鸟歌。然后孩子们进入雪殿，燃起灯火，就在那里过夜。十五的清晨再一次爬上屋顶，歌唱驱鸟的歌。

每年一到这个日子，估计都是积雪最深的时候，所以岛村约定要在这时来观看驱鸟节。

"我在二月里回娘家去了。我歇了工。以为你一定会来，十四那天就赶回来了。还不如多呆几天看护病人了。"

"谁病了？"

"师傅去码头，闹了肺炎。我正在娘家，打来电报，我就去看她的。"

"好了吗？"

"没有。"

"那太糟糕了。"岛村好像为自己的失约道歉，又像为师傅致哀似的说。

"不。"驹子突然温顺地摇了摇头，拿手帕抹着桌子说，

"虫子太多了。"

从饭桌到踏踏密，落着黑压压一片带翅膀的小虫子。还有好几只小蛾子围着电灯飞着。

纱窗外边也落着不知有几种的蛾子，给皎洁的月光照得清清楚楚。

"胃疼！胃疼！"驹子把两只手深深插入带子里，把脸俯到岛村的膝盖上。

从敞着后脖领露出来抹了挺厚香粉的脖子上也马上成群地落了比蚊子还小的虫子。有的眼看着就死，一动也不动了。

她的脖根比去年粗了，有了脂肪。岛村心想：她已经二十一岁了。

一股热乎乎的湿气传到他的膝盖上。

"帐房的人笑眯眯打趣说，驹子姑娘，快到山茶间去吧。多讨厌。坐火车刚把大姐送走，正想着回来舒舒服服躺一会儿，就说这里来叫我了。不爱动弹，差点儿不想来了。昨儿晚上喝多了，是给大姐送行。帐房的人都在笑，原来是你。一年没来了。你这个人，一年就来一次？"

"我也吃了那澄沙包儿呀。"

"是吗？"驹子抬起前胸，她的脸压在岛村膝盖上的地方红了一块，看上去像个娃娃。

驹子说她是把那位艺妓大姐送到相隔两站的镇上回来的。

"没意思了。以前什么事都好办，可现在都变得自己顾自己，成了一盘散沙。这里大变样了，合不来的人越来越多了。菊勇姐一走，我真觉得孤单。以前她是中心人物。她陪酒的次数也最多，没少过六百次，所以她的下处也把她当作摇钱树。"

这个菊勇说是满期回到出生的镇上去了，那么是结婚？还是继续做接客的生意呢？岛村这么一问，

"大姐也怪可怜的。结婚曾经失败过一次，才来到这儿的。"驹子说到这里就停住了，沉吟了一会儿，望着月光下的梯田说，

"那个坡道的中间不是一个新盖的房子吗。"

"是那个叫菊村的小饭馆？"

"是的，大姐本来是想搞这个饭馆的，可是她后来出于自己的心愿又打了退堂鼓。事情就闹大了。人家好容易替她盖了房子，就等着她搬进去的时候，她给撂了挑子。因为有了意中人，她是打算同这个人结婚的，可是受了骗。是不是因为迷上了，才那样了呢？被人家甩了之后，也就没脸再和给她盖房

子的人言归于好，再说要接受那个饭馆了。弄得狼狈不堪，在这个地方也就呆不下去了。她是想换个地方重操旧业。想来也真可怜。我们也不知详情，可能有好多人都追过她。”

“追她的人那么多吗。成群吗？”

“也许吧。”驹子要笑没笑把脸转开说，

“大姐是个心软的人，窝囊啊。”

“她是没办法呀。”

“当然是窝囊。有人爱，有什么了不起？”

她低下头去，拔下簪子搔头。

“今天去送她心里真难过。”

“那么，那个饭馆怎么办了？”

“由那个人的大婆子来搞了。”

“大婆子来搞可真有意思。”

“一切都准备好，就等着开张了嘛。又有什么办法？把孩子也全带着，大婆子搬进去了。”

“家里怎么办？”

“据说是留下老太太一个人在家。虽然是庄户人家，可是男人喜欢搞这种事。这个人很有意思。”

“是个不务正业的，年纪也不小了吧。”

“还年轻，大概三十二三岁。”

“嚯，那么说小婆子要比大婆子岁数还大几岁。”

“是同岁，都是二十七呀。”

“菊村这个字号的菊字就是菊勇的菊吧。这个店就是由大婆子来搞了？”

“因为字号已经宣布出来就不好再改了吧。”

岛村把和服的领子拢了拢时，驹子站起来一边关窗户一边说，

“大姐也知道你，今天还跟我说，他又来了吧。”

“我在帐房看见她来告别。”

“说话了吗?”

“没有。”

“你知道我的心情吗?”驹子将刚刚关上的纸窗拉开,把身子往窗户上一贴就坐在窗台上了。岛村沉默了一会儿说,

“星光和东京的完全不同。真是悬浮在太空中。”

“今儿晚上有月亮,还不算特别好看。今年的雪可太大了。”

“好像火车也常常不通啊。”

“是的,真有点儿可怕。汽车的通行也比例年晚了一个月,五月才通。滑雪场不是有个小卖店吗? 发生雪崩时,大雪把楼上给冲毁了,底下的人们还不晓得,有了奇怪的声响,他们以为厨房里闹耗子,到厨房去一看,什么也没有。可是上楼一看,满都是雪,防雨窗什么的都给大雪冲跑了。虽然只是表层的雪崩,可电台也大肆广播了一番。滑雪的客人害了怕,谁也不来了。我今年不想滑雪,去年年底把滑雪板也送给人了。不过,也滑过两三次,我这个人奇怪吗?”

“师傅死后又怎么了?”

“闲事你就甭管了。二月我就准时到这儿等你来了。”

“你既然回到码头去了,就该写信告诉我回码头了呀。”

“我不愿意那么可怜,不愿意。我不能写那种给你太太也可以看的信。那太可怜了。用不着有所顾忌而撒谎。”

驹子这串珠炮似地抢白,语气激烈。岛村点了点头。

“你别那么坐在虫子堆里,该把灯关上。”

月光明亮,连女人耳廓的凹凸都看得清清楚楚。月光深深射入室内,踏踏密也照成寒冷的青色。

驹子的嘴唇像美丽的环形的水蛭那么滑润。

“不,让我走吧。”

“又是你那老一套。”岛村把头向后稍仰了一下，从近处瞅了一眼她那中间稍鼓仿佛有些不太匀整的园脸。

“人家都说，我和十七岁来到这里时一点也没变样儿，就说生活吧，也是完全一样嘛。”

北国少女的红肤色还很浓地保存着，月光给艺妓所特有的细腻皮肤上添了一层贝壳般的光泽。

“不过，你知道我搬家了吗？”

“因为师傅死？不住在那个养蚕的房间了吧。这个家是真正的艺妓下处吗？”

“真正的艺妓下处？怎么说呢，铺子是卖粗点心和香烟的。我还是一个人。这回是真正的佣工了，所以夜里看书就点上蜡烛。”

岛村抱着肩一笑。驹子说，

“因是有电表，不能浪费电哪。”

“是吗。”

“不过，这家人对我很好，我常想这到底算不算佣工呢？孩子要是一哭，老板娘怕吵了我，就把孩子背到街上去。我简直没意见。只是被窝铺歪了我可受不了。我晚上回去晚了，就给我把被窝铺上了。有时候被子和褥子铺得不齐，或者被单铺歪了。这样被窝我一看心里就凉了，可又不好意思自己来重铺一下。人家是一片好心啊。”

“你要是成了家可就够你操劳的了。”

“都那么说。秉性难移嘛。这家有四个小孩儿，把家里搞得乱七八糟。我一天归置到晚。明知道归置完了还是得搞乱，可是总觉得不能不管。在环境许可的范围内，我还是想把生活搞得干干净净的呀。”

“那倒是啊。”

“你理解我的心情吗？”

“当然理解。”

“那你就说说怎么理解法?”驹子突然迫不及待地顶了一句。

“瞧,你还不是什么也说不上来吗? 净撒谎。你养尊处优的,是个马大哈,听不懂我的话。”

然后声音低沉地说,

“真伤心。我是个傻瓜。你明天就走吧。”

“你那么追问,我也是答不清楚啊。”

“有什么答不清的,你这就不对呀。”驹子毫无办法的样子说不下去了。她闭上了眼睛,心想:岛村一定会体会出自己的意思吧,于是表现出和解的姿态说,

“那怕是一年一次,你可要来呀。只要我还在这儿,一年一次,你一定要来。”

她说她的合同是四年。

“回娘家时,根本不想再操旧业了,所以临走把滑雪板也送给人了。可是我能做到的仅仅是戒了烟。”

“对了,你以前吸得满多的。”

“是啊,陪酒时客人给我的烟就悄悄放进袖子里,回家后,就能找出好几支来。”

“四年可太长了。”

“很快就过去的。”

“你身上真暖!”岛村把凑过来的驹子一把搂过去了。

“我生来就暖。”

“天气一早一晚已经冷了。”

“我来到这儿五年了。起初心里没底,觉得怎么来到这么个鬼地方。没通火车那儿会,真寂寞呀。自从你头一次来,已经三年了。”

岛村心想:在这不到三年中,每来一次,驹子的境遇都有

所变化。

突然，有几只纺织娘叫起来。

“真讨厌！”驹子从他的膝上站起来。

一阵北风，窗纱上的蛾子忽地飞走。

她的眼睛好像眯缝着，其实是闭着，看上去漆黑是因为她那浓密的睫毛合在一起。岛村虽然早就知道，他还是凑近看了一眼。

“戒了烟，我胖了。”

她腹部的脂肪加厚了。

尽管很久没见面，阔别两地时捉摸不到的东西，一见面也就马上恢复了亲密。

驹子把手掌往胸部一贴，

“一边儿大一边儿小。”

“傻瓜，有的人就是这样，光是一边儿大。”

“真讨厌！瞎说，讨厌的人。”驹子马上现出艳然的样子。有了，岛村想起一句话来：

“两边要均匀，下次你就这么说说。”

“均匀？是说均匀？”驹子温柔地把脸贴近他。

这个房间在二楼上，蛤蟆围着房子的周围在叫。好像不是一只，而是两只、三只在围着房子趴，叫个不停。

从浴室出来，驹子用十分放心的静静的语声又谈起她的身世。

她甚至谈到，在这里第一次接受体检时，以为和雏妓时一样，只脱了上身衣服，闹了一个笑话。还说了她为此而哭了起来的事情。她还应声回答岛村的提问说，

“我的月经很准，每月都一定是提前两天。”

“可是，这对于你到宴会上陪酒，没什么不方便吧？”

“嗯，这事谁会知道？”

因为可以暖身子，就每天都在这有名的温泉里洗澡，又因为出来陪酒要从旧温泉到新温泉往返走上几乎四公里的路，同时这山沟里又很少熬夜，所以她的身体健康，胖而不虚。不过体形却和艺妓所常见的那样髋骨较小，是一个横里窄纵里厚的体形。尽管如此，她又是能从遥远的地方把岛村吸引到这里来的那样一个女性。这件事说来也是很可悲的。

"像我这样的人是生不了孩子的吗?"驹子一本正经地问道。她的意思是说，"只跟一个人相好，不是和夫妻一个样吗?"

岛村第一次得知驹子有那样一个人。据说打十七岁那年起，已经相好五年了。岛村以前就觉得有点奇怪，这一下才知道驹子为什么那么幼稚，那么没有警惕。她说，当雏妓时替她赎身的那个人死后，大概是因为她一回到码头马上就有人为她撮合，所以从第一天起就讨厌这个对象，始终跟这个人合不来。

"能持续了五年，不是很好了吗?"

"有过两次跟他脱离关系的机会。一次是到这里来当艺妓时，一次从师傅的家搬到现在这儿来时。可是我太不果断了。优柔寡断呀。"

她说这个人住在码头，因故不能让她也住在那里，当师傅来到这个村子时，顺便把她托付给师傅，打发到这儿来了。又说他为人倒挺热诚，可是她硬是不肯把身子许给他，这是很可悲的。因为年龄不配，他只是偶尔到这里来。

"怎么才能脱离关系呢? 我有时真想跟男人乱搞，真是这么想过。"

"乱搞可不好。"

"乱搞我也搞不来，还是因为我的性格呀。我自己可怜自己的身体，只要我想做，四年的合同就能就成两年，可是我不

想拚命，身子是宝贵的。如果拚的话，收入肯定会多的。因为合同是论年的，不能让老板吃亏呀。押金用月除每月该多少，利息多少，再加上自己的伙食，这都是明摆着的。所以也用不着拚命地干。不好伺侍的宴会，可以一走了之，不是熟客点名，夜里旅馆也不来电话叫。本金已经还上了一多半，还不到一年。不过，零花什么的，一个月也要三十元呢。”

她说一个月挣上一百元就够了。又说上个月挣的最少的人是三百分，合六十元。驹子陪酒的次数最多九十多次。陪一桌酒可以拿一分，尽管老板吃亏，一个晚上也要尽量多跑几个宴席。温泉里，没有一个是欠债增加，因而年限也随着延长的人。

第二天早晨，驹子照例起得很早，

“我梦见正和插花师傅打扫这个房间，就醒了。”

挪到窗边的化妆镜里映着满是红叶的山岗。照在镜子里的秋阳也是灿烂耀眼的。

粗点心铺的女孩子给驹子送来替换的衣服。

“驹姐！”这回可不是那个从纸格扇外面用悲感而透亮的声音吆喝她的叶子了。

“那个姑娘怎么了？”

驹子瞥了岛村一眼说，

“老是上坟去。瞧！滑雪场边儿上不是荞麦地吗？开着白花。那左边不就是坟墓吗？”

驹子走后，岛村也到村子里散步去了。

在白墙的屋檐下，穿着朱红法兰绒雪裤的女孩子正在拍球，完全是一幅秋天的景象。

这里古代建筑的房屋很多，大概是诸侯参见幕府从这里经过的年代遗留下来的。房檐很深。楼上的纸窗只有一尺左右高，是细长的。房檐下挂着萱草编的帘子。

土堤上有一条种着细芒草的篱笆。细芒草盛开着淡黄色的花。它每一株的细叶都像美丽的喷泉般挖挲着。

这时，在道旁铺着稻草席打小豆的正是叶子。

红小豆从干枯的豆茎上，如同小小的光珠般迸了出来。

因为头上蒙着手巾，大概是没看见岛村，叶子叉着腿一边叩打小豆一边用她那悲感通彻几乎引起反响的声音歌唱着：

蝴蝶蜻蜓和蟋蟀

唧唧鸣唱在山岗

金琵琶、金钟儿还有纺织娘

有这么一首歌："杉树上忽地飞出一只乌鸦，飘在晚风中显得很大。"从这个窗户望到的杉树前边，今天有成群的蜻蜓在空中流动。随着夕暮的来临，它们在空中的游泳似乎越来越加快了速度。

岛村出发前，在车站的小卖店里发现了有关这一带的登山导游的新书，就买来了一册。随便翻阅时遇到这样一段文字：从现在这个房间可以望见的边界上的群山中，其中有一座山顶附近有一条沿着池沼的蜿蜒小路，那里盛开着各种高山植物的花朵。到了夏天，红蜻蜓自由自在地飞舞，它们敢于落到行人的帽子上和手上，有时竟然落到人们的眼镜架上。这种无忧无虑，比起城市中受尽虐待的蜻蜓来，不啻天壤之别。

然而，眼前的这群蜻蜓，好像被什么东西驱赶着，仿佛在天黑以前，惟恐被变成黑色的杉树林吞没了它们的影子那么焦急万分地飞着。

远山在夕阳的照射下，清楚地看得出树木从山峰往下逐渐地变红了的红叶。

"人是禁不起磕碰的。连头部和骨头都摔得稀巴烂。要是熊可就不同了。从更高的岩板上掉下来，一点也不会受伤。"岛村想起今天早晨驹子说的话。说是石砬子上又发生了

惨祸，就是指这座山说的。

人要是有和熊一样的又硬又厚的毛皮，他的器官功能就大不一样了。人是互相爱抚那又嫩又滑的皮肤的。他一边想着这些，一边眺望着夕阳下的山峦，一阵伤感，想亲一亲人的皮肤了。

“蝴蝶蜻蜓和蟋蟀…。”在早班的晚饭时，有个艺妓在不高明的三弦伴奏下唱起这只歌来。

在“登山导游”里只是简单地写着登山路线日程、住宿处、费用等，反而使他可以自由地空想一番。而且岛村初次接触驹子也是在山中跋涉之后来到这个温泉村的时候，那时山中还有残雪，但已萌发着新绿。现在是秋天的登山季节，他这样望着留下自己足迹的山，他的心已被这山吸引去了。饱食终日无所事事的他，何苦花费偌大力气在山中跋涉呢，他简直是一个“徒劳”的活样本，但对他说来，也有一种非现实的魅力呢。

尽管远离开驹子的时候，老是想念她，可来到近处，又好像就放了心。现在觉得她的肉体已经过于熟悉，跟异性接触的念头和山的吸引力觉得都是梦幻。也许因为昨天驹子刚刚同他过夜的缘故，他一个人坐在这寂静之中，觉得即使不叫她来，她也应该自己来，只有耐心等待而已。从外面传来徒步旅行的女学生们那青年活泼的嘈杂声，他听着听着感到睡意，岛村很早就睡下了。

不久，模糊地听到一阵秋雨的声音。

第二天早晨他一醒，就见驹子端端正正坐在桌前看书。身上的罩褂也是平常穿的绸褂。

“你醒了？”她静静地问着，瞧了他一眼。

“你怎么来了？”

“你醒了吗？”

岛村怀疑她是否悄悄地来这儿过了夜，环视了一下自己的被窝，拿起枕边的表一看，才六点半钟。

"你来的真早啊。"

"可服务员已经添过火了呀。"

火盆上的水壶冒着水蒸汽，一派早晨的气氛。

"起来吧。"驹子走过来坐在他的枕边。那举止非常像一个良家妇女。岛村伸了伸懒腰，顺便抓住她放在膝上的手，拨弄着那纤纤的指上弹三弦磨出来的茧子说，

"我还困呢，天不是刚刚亮吗？"

"一个人睡得好吗？"

"啊"。

"你还是没留胡须呀。"

"对了，上次分手时，你说过叫我留的。"

"反正你不会放在心里也没关系。老是刮得青魆魆的。"

"你不也一样吗？洗了脸，就像刚刚刮过一样。"

"你的腮好像又胖了。脸白白的，睡觉时没有胡子不好看。圆圆的。"

"很柔和，不好吗？"

"看起来不够老成。"

"真难为情，你是盯盯地看着来吧。"

"是的。"驹子含着笑点了点头，然后突然大笑起来，随着下意识地使劲捏住了岛村的手指，

"我藏在壁橱里了。服务员根本不知道。"

"什么时候，从什么时候藏的？"

"还不是刚才吗。就是服务员送火那时候。"

她刚才的笑好像还没止住的样子，可是突然连耳根子都红了。她想岔开岛村的注意，用被子的一角扇忽着说：

"起来吧，请你起来！"

"冷啊!"岛村抱住被子问,

"旅馆的人都起来了吗?"

"不知道,我是从后门进来的。"

"从后门?"

"从杉树林那儿,攀着爬上来的。"

"那儿有路吗?"

"没路,可是近啊。"

岛村吃惊地看着驹子。

"谁也不知道我来了。厨房里已经有了动静,可是正门还关着呢。"

"你真能起早啊。"

"夜里没睡着嘛。"

"夜里下雨了你知道吗?"

"是吗? 怪不得那边的山白竹湿漉漉的。那么我就走了。你再睡一会儿。"

"这就起来。"岛村握着她的手,一下子跳出了被窝儿。马上走到窗边,往下看驹子说她爬上来的那地方。灌木类的树丛繁茂地向外伸展着,一直蔓延到山丘的中腹。接下去就是杉树林。窗户底下的菜地上种着萝卜、葱、山芋。虽是普通的蔬菜,在朝阳下每种叶子的颜色不同,仿佛从来没见过。

从通往浴池的走廊看到一个伙计在给泉水中的红鲤鱼撒鱼食。

"看来天冷了,鱼也不爱吃食了。"伙计对岛村说,好久望着飘在水上的把蚕蛹晒干磨碎的鱼食。

驹子整洁地坐着,对从浴池回来的岛村说,

"在这样闲静的地方做点针线活儿才好呢。"

房间里刚刚打扫过,黄旧了的踏踏密上,射进来秋天的朝阳。

“你会针线活儿?”

“不要把人看扁了。姊妹中我是最能干活儿的。想起来,我长大了之后,正是家里穷苦的时候呀。”仿佛自言自语,然后突然兴奋地说:

“服务员感到奇怪地问我,说驹姐你什么时候来的? 也不能老往壁橱里藏呀,真不好意思。好了,我走了。忙着呢。没睡好,我还想洗头发呢。要不是早晨早早洗,等它干了再去梳日本式发型,就赶不上午间的宴会了。这个旅馆里也有宴会,可他们昨儿夜里才通知我。这样到别处陪酒之后,这里就来不了了。今天是星期六,忙得很。没时间来玩儿了。”

她虽然这么说,但还是没有站起来就走的样子。

她又决定不去洗发,领着岛村到后院走了一走。可以看出她来时就是偷偷从这里来的,走廊下有她的木履和湿袜子。

她拨开草木爬上来的那里的白山竹,看来是无法走过去的。于是沿着草地,向着水流潺潺的方向走去一看,河岸是很高的悬崖,栗子树上传来了孩子们的话声。脚下的草地上也落着几个带刺壳的栗子。驹子用木履碾破了刺壳剥出栗子来,都是小个的栗子。

对岸陡坡的山腹上萱草开着一片花穗,耀眼的银色随风摇摆。虽说金色耀眼,但它好像透明的梦幻一般,飘在秋天的阳光之下。

“到那边儿去看看吧,那不是你未婚夫的坟墓吗?”

驹子突然踮起脚来,把手里的栗子劈面掷了过来,

“你在嘲弄我!”

岛村躲闪不及,吧嗒一声打在额上,好疼。

“你无缘无故看的什么坟?”

“干吗那么认真?”

“对我来说那可不是开玩笑的事啊。跟你这样骄傲放纵

的人不一样。”

“谁那么骄傲放纵?”他有气无力的嘟哝了一句。

“那你为什么用未婚夫这个词儿？他不是未婚夫，我上次不是跟你说了吗？你忘了?”

岛村何尝忘了。

“师傅也许想过让他儿子跟我结婚。不过那只是心里的话，一次也没说出来过。师傅的想法，她儿子和我也都多少知道一点儿。我被卖到东京去时，送我的只有他一个人。”

岛村记得驹子是这么说过的。

而且当那个人病危那天，她在岛村那里过夜时，

“我自己爱作什么，快死了的人怎么管得了?”她也曾急燥地说过这样的话。

又加上，驹子正在车站为岛村送行时，尽管叶子来找她，说病人已经垂危，而驹子仍然执意不回去，因而没有赶上他的临终，此后岛村的心里更加忘不了叫行男的这个人了。

驹子对于行男总是避而不谈。即使不是她的未婚夫，既然为了帮他赚疗养费而当了艺妓，这说明对她来说，这的确“不是开玩笑的事”了。

尽管栗子打中了他的脸，他也面无怒色，所以驹子愣了一下之后，就像肢体瘫软了一般扶住了岛村，

“我说，你真是老实人。你有什么伤心的事吧。”

“树上的孩子瞧着呢。”

“真摸不透，东京人太复杂了。周围这么一吵，你的心就跑了。”

“一切都跑了。”

“连命也要跑了。看坟去吧。”

“等一下。”

“瞧你根本不想看坟吆。”

“是你自己，心里有疙瘩。”

“我一次也没上过坟，所以心里有疙瘩。真的，一次也没去。现在师傅也葬在这里，所以觉得对不起师傅，可是又不好意思特意地再上坟去，显得假惺惺的。”

“你的思想太复杂了。”

“指什么？对于活着的人就没法搞得清清楚楚，至少对死了的人要搞清楚。”

走出静悄悄的杉树林，那里的静谧得仿佛要变成冰冷的滴水，洒落下来。从滑雪场边儿上，顺着铁轨，很快就来到了墓地。在田埂高处的一个角落里，只有十来个墓碑和一尊地藏菩萨的石像。因为没有栽树墓地显得寒酸。也没有花朵。

可是，从地藏菩萨后面的矮树丛里突然露出来叶子的上半身。也因为事出突然，她又把脸一下子绷得如同假面具一样，用刺人的炯炯目光往这边儿瞧着。冲着岛村点了点头，她就伫立在那儿不动了。

“叶子，你真早啊！我是想去做头发…。”驹子正在说时，突然刮起一阵黑风，仿佛要把他们吹跑似的。她和岛村都缩着身子止住了脚步。

那是一列货车从近处隆隆驶过。

呼叫“姐姐”！的声音从这猛烈的轰响中传了过来。从黑色的货车门里闪出一个少年正在挥动着帽子。

“佐一郎！佐一郎！”叶子在呼叫。

这是在大雪的信号房吆喝站长的那个声音。好象吆喝一个坐在已经走远了的船上，根本听不见的人那种近乎悲哀的凄婉的声音。

货车驶过去后，仿佛去掉了蒙眼布那样，钢轨那边的荞麦花很醒目地映入眼帘。荞麦花在红色的茎上，十分静静地开放着。

因是意外地碰上了叶子，两个人甚至没注意到火车开过来。可他们心中的一切芥蒂都给货车一股脑儿冲走了。

之后，仿佛不是车轮声而是叶子的呼声留下了余韵，似乎要泛起一声纯洁的、爱情的回响。

叶子目送着火车说，

“弟弟在车上，我该到车站去一下吧。”

“可火车不会在站上等着你呀。”驹子笑了。

“也是。”

“我呀，可不是给行男上坟的呀。”

叶子点了点头，踌躇了一下，蹲在坟前合掌行礼。

驹子依旧站着不动。

岛村挪开视线，望着地藏菩萨。在它一个头三个长脸，每一面都有一双手，正面的一双手是在合十。

“我是去做发型的。”驹子对叶子说完顺着田埂上的小路走向村子。

有一种晾稻谷的架子，当地人叫作“稻架”。就是在树干和树干之间绑上一层一层的竹竿或木杆，把割下来的稻捆挂在架上晾干的。看上去好像一座座稻子屏风。岛村们路过的路旁，农民们也正在绑这种稻架。

穿着防雪裤的姑娘们，把腰一扭，就把稻梱扔上去，攀登在高处的男人灵巧地接过去，把稻梱一拧劈成双叉，就搭在杆子上。这种娴熟的、专心致志而有节奏的动作在反复地进行着。

驹子把架上倒垂着的稻穗托在手心，仿佛掂量什么珠宝似地晃了晃说：

“颗粒真饱满，摸一摸也挺舒服的好稻子啊。跟去年可大不相同了。”她眯缝着眼睛，好像在品味这稻子的触感。一群麻雀乱哄哄地从头上低飞过去。

路旁的墙上贴着一个旧纸条，上面写道："插秧工的工资协定。一天0.9日元，供给伙食。女工为前者的60%"

叶子家里也有这种稻架。设在离街道较远的菜地后边，搭在院子的左边，沿着邻家白墙的一排柿子树。架子搭得挺高。另外在菜地和院子交界处，也就是和柿树上的架子成直角，也搭着稻架，下面有一个门可以钻过去。这完全像搭了一个棚子，只不过不是用席子而是用稻子搭的。菜地上，开败了的西番莲和蔷薇前面，青芋披散着茂盛的叶子。养着红鲤鱼的莲池被稻架挡着看不见。

去年驹子居住的那间蚕房的窗户也给挡上了。

叶子仿佛带着怒气点了点头，钻过稻穗的门回家去了。

"她一个人住在这儿？"岛村望着她那向前稍微弯下腰去的后影。

"那可不一定吧。"驹子抢白了一句。

"真讨厌。发型不作了。都是你多事，打搅了人家上坟。"

"不愿意在坟上碰见她，那是你在意气用事。"

"我的心你不懂。过会儿有空儿我去旅馆洗头。也许很晚，但我一定去。"

那已经是凌晨三点了。

格子门都快要被推掉的声音惊醒了岛村。驹子咕咚一下子倒在他的身上。

"我说来就来了吧。是不是，说来就来了吧。"气喘吁吁，连腹部都忽闪忽闪的。

"你醉得厉害呀。"

"是不是，说来就来了吧。"

"是啊，你来了。"

"往这儿来，连道儿也看不清，看不清，啊，好难受。"

"坡道，你怎么爬上来的？"

“不知道，不知道嘛。”因为驹子使劲仰着身子乱滚，压得岛村喘不过气，想挣起来，又因为突然被吵醒，身子打晃儿，要站起来又倒下去，脑袋垫在热烘烘的东西上，吓了一跳。

“你简直像一团火！傻瓜。”

“是吗？火枕头，你可别烫着！”

“可不是吗。”一闭眼，那股热劲儿传遍了脑子里，他马上发现自己还活着。随着驹子那急促的呼吸，他完全回到现实中来了。这个现实是一种令人怀念的悔恨，仿佛只有安然地等待某种东西的复仇。

“我说来就来了吧。”驹子一个劲儿重复这句话，又说，

“我既然来了可就要走了。我得洗头发。”

她爬起来，咕嘟咕嘟喝了几口凉水。

“你这样子怎么回得去？”

“得回去，有伴儿。洗澡的用具放到哪儿去了？”

岛村站起来，一开灯，驹子就用两只手捂着脸俯在踏踏密上。

“别看！”

她穿了一身短袖华丽的毛斯绫夹睡衣，镶着黑缎子衣领，系一条细带子。因此看不见汗衫的领子。可是两只脚都喝得红红的。她蜷曲着身子仿佛要把自己藏起来的样子十分可爱。

看来她进房时是把洗澡的用具抛掉，浴皂梳子什么的散落在一旁。

“劳驾给我剪开，我带来剪刀了。”

“剪什么？”

“这个。”驹子用手摸着脑后说，

“我本想在家里把头发绳儿剪开，可是手不听使唤，才想来这儿求你的。”

岛村分开头发，把头绳儿剪断。每剪断一股头绳，驹子就把那股头发散开，情绪也安定下来了。

“现在几点了？”

“已经三点了。”

“呀！已经这么晚了？你可别剪了头发呀。”

“怎么系了这么多股儿？”

他一摸到絮在头发里的假发根，便感到一股热气。

“已经三点了？从宴席上回来，大概是一倒下就睡着了。我跟女友们约会过，她们会找我的。不知道我到哪里去了。”

“她们等着你吧？”

“在共同浴池里，三个人。今天六个宴会，我们就陪了四个，其他来不及了。下星期观赏红叶，那就忙了。谢谢你。”说着，一边梳理散开的头发，一抬头，仿佛怕光的样子含笑说，

“活该了，嘻嘻，真可笑。”

说着，无奈地捡起那些拿下来的假发。

“不去对不起那些女友们，回头我就不到这儿来了。”

“看得清道儿吗？”

“看得清。”

可是一脚踩在下摆上，身子打了一个晃儿。

岛村一想到她是早晨七点和凌晨三点，在不寻常的时间她偷闲来了两次，他感到这可是非同小可啊。

旅馆的伙计们把红叶像新年时的“门松”那样，装饰在门口。这是对前来观赏红叶的旅客表示欢迎。

语气高傲，指挥别人装饰红叶的是一个临时工。他自嘲地说：我是个流浪汉。有些人从新绿萌发的初春到红叶似锦的秋季在这一带山中温泉干活儿，到了冬天流浪到热海或者长冈等伊豆半岛的温泉去打工。他是其中的一个。每年都不

一定在一个温泉干活儿。他卖弄他在伊豆的繁华温泉打工的经验，对这里招待客人的情况总是冷嘲热讽。他以毕恭毕敬的架势死乞白赖地拉客人，却完全露出一副毫无诚意、乞丐一般的面孔。

"先生，您见过木通果吗？您要是吃，我就给您取来。"他对散步回来的岛村这样说，把木通果连蔓儿扎在一枝红叶上。

红叶大概是从山上砍来的，比房檐还高，门口被它照得通红，十分耀眼。每一片红叶之大也是罕见的。

岛村用手攥了一下冰凉的木通果，无意中往帐房里一看，只见火炉旁边坐的是叶子。

老板娘用铜壶在烫酒。叶子对着她，一边儿听她说话，一边不住诚恳地点头。叶子没穿雪裤也没穿大褂，只穿一件拆洗过的绸子便衣。

"那是帮工的吧?"岛村随便问了一句。

"是的，多亏她来帮忙。人手不够啊。"

"和你一样喽?"

"是的。不过她是本村的姑娘，人还有点特别。"

看来叶子是在厨房帮工，还没有到过宴席上陪酒。客人一多，厨房里的女服务员也吵吵嚷嚷。可是还没听见叶子那美丽的声音。据担任岛村房间的女服务员说，叶子在睡觉前习惯在澡塘里唱歌。可是岛村还没听见过。

然而一想到叶子也在这个旅馆里，不知为什么，岛村对于叫驹子到旅馆来，心存顾忌了。虽然驹子对他怀有爱情，但是由于他自己的虚无主义，认为这种爱情是一种美丽的徒劳。同时也正由于他的虚无主义，反而使得驹子旺盛的生命，像赤裸裸的肌肤向他贴近过来。他可怜驹子，同时也可怜自己。他觉得叶子的一双眼睛如同一道光束能把这种情形天真无邪地照穿。于是岛村的心也被叶子吸引住了。

尽管岛村不叫驹子，可她当然还是常来。

有一次，他到溪流深处去看红叶，车子从驹子的门前经过。这时，驹子听见了汽车声，认为那一定是岛村，便急忙跑出门来，可他却连头也没回。因此驹子甚至说他是个薄情汉。只要旅馆叫她，她就一定要到岛村的房间去看他。洗澡去的时候，也顺便到他的房间去。如果是被旅馆叫去陪酒，她头一个小时就到岛村这里来玩儿，服务员不来招唤，她是不走的。而且常常从宴席上溜出来，到他房间的镜子前整理化妆。

“现在我要去赚钱去了。要有生意经啊，生意！生意！”说着就走出去了。

临走她常常要把带来的三弦的拨子袋、罩褂什么的留在他的房间里。

“昨儿晚上回家时，家里没有开水。在厨房摸寻些剩饭浇上早晨剩的酱汤，就着淹的酸梅吃的。那个凉啊！今儿早晨家里没人叫醒我，一睁眼已是十点半了。本想七点钟起来，办不到了。”

她把这些事，以及从哪个旅馆到哪个旅馆的宴席上的情况什么的都说给他听。

“我还来呢。”喝了一口冷水站起来又说，

“也许不来了。三十个客人的宴席只叫三个艺妓，太忙，脱不开身啊。”

可是，一会儿工夫又来了。说：

“真够受的，要陪三十个客人，而只有三个人。而且是一老一小，真够我受的。吝啬的客人，一定是什么旅游团。按理说，三十个人至少也得叫六个人陪酒。等会儿我喝醉了吓唬吓唬他们。”

天天如此，结果将是什么下场呢？驹子仿佛要把自己的身心都隐藏起来才好，可她那显得孤独的样子反而给她添了

风韵。

“这廊子一走就响，真不好意思。悄悄走也听得出来。要是从厨房那边绕过来，就有人喊‘驹姐，又是山茶厅吧’，然后就是一阵笑声。想不到让人这么难为情。”

“这么个小地方，真没有办法。”

“现在大家都知道了。”

“那可太糟了。”

“可不是嘛。在这狭小的地方，一有人说长论短就糟糕了。”她虽然这么说，可马上抬起头来微笑着说，

“不，没关系。我们作艺妓的到哪儿去也是一样干。”

她那种爽直而带着真实感的语调，对于仅靠父母遗产而饱食终日无事可做的岛村来说，是非常意外的。

“真的，在哪儿干也是一样。没什么想不开的。”

她这无所谓的口吻，却使岛村听出了这女子暗含讽刺的弦外之音。她又说，

“这有什么办法。能真正爱上一个人，只有女人才做得到。”驹子的脸红了，把头低下去。

因为后脖领是敞着的，露出了脊背，从两肩到脊背形成一把打开的折扇型。敷着厚厚一层香粉的肌肤非常丰腴，看上去怪可怜的。好像白色的呢绒，又像某种动物。

“如今的世道就是这样嘛。”岛村小声说完，又觉得这话过于虚伪，暗自一惊。

然而驹子却憨厚地说，

“什么世道还不是一样。”

她抬起头来茫然地补充说，

“这你还不知道？”

紧贴在她脊背上的红衬衫看不见了。

岛村当时正在翻译瓦莱里或是阿兰，还有俄罗斯舞蹈昌

盛时期的法国文人们的舞蹈论。他准备做为部数不多的豪华版自费出版。这种书对于当前日本舞蹈界根本不会有什么用处。也可以说，这样反而能够使他心安理得。用自己的工作来冷笑自己，可以说是一种宽纵自己的乐趣吧。他的那个可怜的梦幻世界也许就是因此而产生的。所以他在旅途中毫无着急的必要。

他正在仔细观察着昆虫们苦闷而死的情况。

随着秋凉的到来，他房间里每天都有昆虫死在踏踏密上。硬翅的虫子，一翻身就站不起来了。蜂子是爬几步就翻倒，或者爬着爬着就死了。就像季节的推移，自然地死去。死得虽然是静悄悄的，但他细看上去，它们的腿和触觉还是在苦闷地颤动着。做为渺小的虫类之死亡之所，八叠的踏踏密，看来是非常宽敞的。

岛村在捏起死虫子想扔到外边去时，有时忽然想起他留在家里的孩子们。

有的蛾子，只见它老是在窗纱上落着不动，可它却已经死了，像枯叶一般掉落下去。有的还从墙上掉落下来。拾起来一看，岛村觉得它们为什么长得这么美丽？

窗上防虫的纱也已经拿掉，虫声也顿时消歇了。

边境上群山的赤褐色越来越深，夕阳下有点像冷冰冰的矿石闪着钝光。旅馆里观赏红叶的旅客正熙熙攘攘。

“我今天可来不了啊。大概，本地人有宴会呢。”可是这天晚上驹子照例还是来到岛村的房间。她去后不久就从大宴会厅里传来鼓声和女人的尖嗓子。在这一片喧嚣中，意外地在身旁听到一个清彻的声音说，

“对不起，对不起。”这是叶子在叫他。

“驹姐打发我送来的。”

叶子先是站着，像邮递员般的架势伸出一只手来，然后又

赶快跪着坐下。当岛村打开那个把纸叠成一个结的信时，叶子不等他说什么就不见了。

"现在大家欢闹地喝酒呢。"在她随身带着的白纸上只写了这么一句话，七扭八歪地，显然是喝醉了写的。

可是不到十分钟工夫，驹子就踉跄地走了进来。

"刚才她送来什么没有?"

"送来了。"

"是吗。"高兴地眯缝着一只眼睛说，

"哼，真痛快！我说叫酒去就溜出来了。可是给伙计瞧见，他还数落我几句呢。酒真是好东西，数落我也不怕走出脚步声来。啊，真讨厌，一到这儿就醉起来了，还得干活儿去呢。"

"你连手指头尖儿都喝红了。"

"好了，得做生意去了。那姑娘说了些什么？她最爱嫉妒了。你知道吗?"

"谁?"

"你会被她害死的。"

"那姑娘也在帮忙吧?"

"端来酒壶就躲在廊子里死盯盯地瞧着。眼睛里闪着光。你不是喜欢那种眼睛吗?"

"她是认为那种喝酒的样子太下流才瞧着的。"

"所以我才写纸条叫她送来。真渴，给点水喝。不把女人笼络到手，究竟谁下流，还不好说呢。我醉了吗?"说着倒下身子两手抓在镜架上去照了一下，又利落地拖着下摆走了出去。

不久，好像宴会已经散了，一下子静了下来，只听得收拾盘碗声，从远处传来。以为驹子也被客人们领到别的旅馆再接着喝酒去了，可是叶子又送来驹子的纸条。

"山风馆我不去了，现在到梅花厅，临走再去看你，睡吧。"

岛村有点羞涩地苦笑说，

“谢谢你，你是来帮忙的？”

“是的。”叶子在点头时，用她那刺人而美丽的眼睛瞥了他一眼。岛村有点慌了神。

迄今为止，多次看到她，每次她都留下动人的印象，当这个姑娘泰然地坐在他面前时，不知为什么，他却有点着慌了。她那过于严肃的样子，看上去总是好像处在异常的事态之中。

“看来你挺忙啊。”

“是的，不过，我什么也干不了。”

“咱们见过多次面了。第一次是你护理着那个男人在回家的火车上，你还对站长托付你的弟弟，这事你还记得吗？”

“嗯。”

“听说你睡觉前总是在澡塘里唱歌，是吗？”

“哎呀，我真没规矩，别提了。”她的声音惊人地美丽。

“我觉得，你的事我什么都知道似的。”

“是吗，听驹子说的吧。”

“她什么也不讲，甚至不愿意提起你来。”

“是吗？”叶子悄悄地转过脸去说，

“驹子很好，不过怪可怜的，请你好好待她。”

说得很快，她话音落时有些发颤。

“可是我，什么也做不到呀。”

看上去，叶子好像要浑身发抖了。她脸上仿佛有一股危险的表情压了过来，岛村把视线挪开笑着说，

“看样子我应该回东京了。”

“我也要去东京啊。”

“什么时候去？”

“什么时候都行。”

“那么我回去时带上你吧。”

“好的，带上我。”她轻松地，然而用认真的口气说，使岛村吃了一惊。

“只要你家里人同意。”

“家里人？我只有一个弟弟在铁路上，什么事我都可以自己决定。”

“到东京你有去处吗？”

“没有。”

“跟她商量过吗？”

“你说的是驹姐？驹子怪可恨的不跟她说。”

她说完了这话，大概是松了一口气，用脉脉的目光看了他一眼。当岛村一感到那奇怪的魅力之后，不知为什么反而热烈地燃烧起对驹子的爱情。带着一个不知底细的姑娘，像私奔一样跑回东京，这也许是对驹子的过分的谢罪方法，同时又有点像是一种惩罚。

“你这样跟着一个男人走了不害怕吗？”

“为什么？”

“到东京你有暂时落脚的地方吗？连要做些什么都没有一定，那不是很危险吗？”

“一个女人作什么还不行？”叶子把语尾美丽地抬高这么说着，眼睛凝视着岛村。

“用我当保姆好吗？”

“原来是这样，要当保姆？”

“我并不愿意当保姆。”

“上次你在东京是干什么？”

“当护士。”

“是在医院还是在学校？”

“不，只是想着要当。”

岛村又回忆起在火车上护理师傅的儿子时叶子的身影，

现在才知道她那股严肃认真劲儿，还表示着她的志望，不由得微笑了。

“那么说，你这次去东京也是为了学习护士喽。”

“不想当护士了。”

“那么无根草似的可不行。”

“哎呀，讲什么根不根的。”叶子立刻大笑起来。

她的笑声也高亢地有一种悲感，所起来倒不像个傻子，不过，并没有敲动岛村的心扉，就白白地消逝了。

“有什么可笑？”

“要知道，我只给一个人护理呀。”

“什么？”

“再也不干那事儿了。”

“是吗？”岛村又一次感到突然，就静静地说，

“听说你每天都到荞麦地下面去上坟？”

“是的。”

“你以为一辈子也不会再护理病人，也不给别人上坟了吗？”

“不了。”

“那你离得开那个坟跑到东京去吗？”

“啊，对不起。一定带我去吧。”

“驹子说你嫉妒得令人可怕。那个人原来不是驹子的未婚夫吗？”

“你说行男？没那事儿，没那事儿？”

“那你为什么说驹子可恨？”

“驹姐？”仿佛在呼唤一个就在身旁的人，叶子说着就睁大了眼睛瞪了岛村一眼。

“请你多多照顾驹姐吧。”

“可我为她什么也做不了啊。”

叶子的眼角落下了泪水，捏起落在踏踏密上的一只蛾子，一边哭泣着说，

"驹子说我一定变成疯子。"说着就忽然走出房去。

岛村打了一个寒噤。

要把叶子捏死的蛾子扔出去，一开窗子，只见喝醉了的驹子抬起腰来，对客人穷追不舍地在划拳。天空阴着，岛村到澡塘洗澡去了。

叶子带着旅馆的小孩走进了隔壁的女浴池。

她给孩子脱衣服和洗澡时的温柔的话语，听起来仿佛是一个刚刚当了母亲的那样甜蜜，给人一种好感。

然后用她那美丽的声音唱起歌来。

…………　　…………

来到后院看看吧！　三棵梨树长得大，

还有杉树也三棵，　一共六棵谁栽下。

乌鸦从下来搭窝，　麻雀从上把窝搭。

林中蟋蟀叫沙沙，　不知说的什么话。

杉树朋友来上坟，　一棵一棵又一棵。

这是一首拍球歌，从幼儿的伶牙利齿、生动活泼的调子唱出来的。岛村觉得这同刚才的叶子判若两人。

叶子不停地和孩子闲谈，由浴池里上来以后，那声音宛如笛声，仿佛依旧留在那里回荡着。在门口擦得又黑又亮的地板上，有一个桐木的三弦箱放在角落里，平添了秋夜的寂静，也引起了岛村的好奇。他正在细看三弦箱上的名字时，从洗碗声那边走出来驹子。

"你在看什么？"

"这个人是在这儿过夜的？"

"谁？哦，是她？傻瓜，这东西能天天抱过来抱过去？有时候，好几天都放在这儿啊。"她刚一笑，就难过地闭上眼睛喘

了一口气，撒开手里提着的下摆，把身子栽歪到岛村身上。

“喂，你送送我好吗？”

“何必还回去呢？”

“不行，不行，一定得回去。今天是本地人的宴会，大家都跟着搞二次会去，只有我一个人留下了。还好这里还有个宴会，不然女友们回去时找我一起洗澡，而我不在家，那太不像话了。”

驹子虽然醉得很厉害，她还挺着腰走下了陡坡。

“你把叶子给搞哭了吧。”

“要说，她确实有点像疯子。”

“你那样看一个人，觉得有趣？”

“不是你说的吗，她要变成疯子？她大概是想起你说过这话，才气哭了啊。”

“那就没关系了。”

“不到十分钟工夫，她就在浴池用那美丽的声音唱歌了。”

“在浴池里唱是她的毛病。”

“她还认真地求我好好照应你呢。”

“她真傻。不过，这话你干吗对我来吹嘘一番呢？”

“吹嘘？我真不明白，为什么一提到她，你就这么意气用事？”

“你想得到她吗？”

“瞧，又说这样话。”

“我可不是说着玩儿的。我一看到她，就觉得将来要成为我的沉重负担。不知为什么总是这么想。就算你真的喜欢她，你仔细观察吧，也一定会这么想。”说着，驹子把手放在岛村的肩上偎依过来，可是突然又摇摇头说，

“不，到了你这样人手里，她也许疯不了。你就把我这个负担接过去吧，行不行？”

“别瞎说了?”

“你以为我是喝多了醉言醉语吗? 我一想她能在你身边受到疼爱,我就可以在这山沟里胡作非为了,那才痛快呢”。

“喂!”

“别理我。”紧走几步咕咚撞在防雨的板门上,那里正是驹子的家。

“人家以为你不会回来了。”

“不,打得开。”

她抱住板门的下部往上一提,风干的板门哗啦一声拉开了。她小声说,

“进来坐会儿。”

“可是,黑灯半夜的。”

“家里人都睡了。”

岛村确实踌躇不前了。

“那么,我送你回去。”

“行了。”

“不行。你还没看过我这个房间呢。”

从厨房门一进去,眼前就是家里人横躺竖卧地睡着。如同本地做雪裤用的那种褪了色的挺硬的棉被铺满了一屋子。家主人夫妻和以十七八岁的姑娘为首的五六个孩子,在暗黄色的灯光下,一个朝东一个朝西地睡着。在这贫寒的光景中,却显得颇有生气。一股许多人睡觉的热气冲了过来。

岛村很想退出屋去,可是驹子喊哩喀喳从后边把门关上,也不放轻脚步,踏着地板就往前走,岛村也就从孩子们枕边蹑手蹑脚地走过来,一种奇怪的快感使他心跳。

“你在这儿等一等,我去打开楼上的电灯。”

“不用了。”岛村蹬着漆黑的楼梯爬了上去。回头一看,原来在这些朴素的睡脸前方是一个卖粗点心的铺子。

农家气派的二楼上有四个铺着旧踏踏密的房间。

“我一个人住，宽敞倒也宽敞。”驹子说。四个房间的槅扇全部打开，那边的房间里堆满了旧家具。在熏黑了的格子窗里，铺着驹子的一个小小的铺盖，墙上挂着陪酒时的衣服，活像一个狐狸窝。

驹子坐在铺盖上，把仅有的一块座垫让给了岛村，

“哎哟，满脸通红了。”她看了看镜子，又说：

“怎么醉成这个样子！”

然后往衣柜上摸了摸说，

“这是我的日记。”

“真不少啊！”

她从身旁拿出一个糊着花纸的匣子，盛满了各色各样的纸烟。

“都是客人给的，我装在袖子里或者挟在带子里拿回来的。有的褶皱了，可并不脏。却是什么牌子的都有。”说着推到岛村的面前，用手翻来翻去给他看。

“呀，没有火柴。我自己忌烟了，所以用不着火柴了。”

“没关系。你在缝衣服？”

“嗯。观赏红叶的客人一来，就顾不上缝了。”驹子回过头去，把缝的衣服推到柜子旁边儿。

大概是驹子住在东京时的家当儿吧，木纹美丽的柜子和名贵的朱漆针线盒，虽然和她住在师傅家纸糊一般的阁楼一样，但摆在这个荒凉的二楼上显得大大地减色了。

电灯上的一条细绳，一直下垂到枕头上。

“晚上临睡看书时，就拉它闭灯。”驹子一边摆弄着灯绳，像一个家庭妇女，规矩地坐在那里，面上略带羞涩。

“好像鬼火一般自明自灭呀。”

“可不是吗。”

“你在这里要住上四年啊。”

“那也很快，不是已经过去半年了吗。”

仿佛从楼下传上来人们的鼾声，又兼没有话题，岛村匆匆地站起来就走了。

在关门时，驹子探出头来望了望天空说，

“要下雪了，红叶也快完了。”然后又走出门来，

“这一带都是山村，所以红叶季节没完就下雪呀。”

“那么，再见。”

“送你去，送到旅馆门前。”

她虽然这么说，却又跟着岛村走进了旅馆，说声，

“你睡吧。”然后不知道跑到哪里去，过一会儿端着满满两杯冷酒走进屋来，厉声说道：

“来，把它喝了。喝！”

“旅馆的人们都睡下了，哪儿来的酒？”

“不，我知道酒在哪儿。”

看来驹子在打开酒桶往杯里灌酒时已经喝了，刚才那股醉劲儿又来了。她眯缝着眼睛盯视着酒从杯子里溢出来。

“不过，黑咕隆咚地喝，酒也不香啊。”

岛村把她伸过来的酒咕嘟咕嘟喝了下去。

这么点酒本来不会醉的，也许是在外头走时着了凉，觉得心里不好受，酒上了头。自己也觉得脸一定变得苍白，闭上眼睛往下一躺，驹子马上过来服侍。过了一会，岛村感觉到女人灼热的身体，像幼儿一般，完全放了心。

驹子有点难为情的样子，她的动作仿佛一个没生过孩子的女人抱着别人的孩子。她抬起头来就像瞧着孩子在睡觉一般。

过了一会儿，岛村没头没尾地说，

“你真是个好女人。”

"为什么，哪点好？"

"就是好。"

"是吗！你这人真怪，说些什么呀。别说傻话。"驹子把脸一扭，一边推摇着岛村，一边一字一句地厉声说完就不作声了。

然后独自含笑地说，

"我一点也不好。我很为难，你走吧。我已经没有衣服可换了。我本想每次来见你，都穿一套新衣服，可是全穿过了。现在这身衣服是跟朋友借的。我这人够坏的吧？"

岛村也没话可说了。

"这样，我又好在哪里？"驹子有些呜咽了。

"第一次见到你，我觉得这个人多讨厌？说话那么不礼貌。真觉得讨厌了。"

岛村点了点头。

"知道吗？我可一直没说出口来，给女人说出这样话，多没出息？"

"没关系。"

"没关系？"驹子仿佛在回顾自己，老半天默默无语。岛村感觉到一个活生生的女人，把她的体温暖烘烘地传到自己的身上。

"你真是个好女人。"

"怎么个好法？"

"好女人呀。"

"怪人。"她端起肩膀把脸挡上了，不知为什么，突然支起胳膊一抬头，

"那是什么意思？你说，什么意思？"

岛村吃惊地看了驹子一眼。

"你说呀，就是因为这个你才老往这儿来？你是在笑我

呀。果然是在笑我呀。”

满脸通红瞪着岛村在追问时，突然驹子的肩膀气愤得颤抖起来，脸色变得苍白，簌簌地落下眼泪。

“真气人，啊，太气人了。”说着就滚出被窝，背过身去坐着。

岛村察觉到驹子的误会，心中暗自一惊，但仍然默不作声。

“真寒心啊。”

驹子自言自语地，弯下上身，把脸伏在踏踏密上。

她大概是哭累了，用头上的银簪噗哧噗哧乱穿踏踏密，然后突然走出了房间。

岛村无法去追她。被驹子这么一说，心里确实感到了内疚。

可是驹子马上蹑着脚步走了回来，在格子窗外面尖着嗓子说：“喂！洗澡去不?”

“噢。”

“对不起，我改了主意。”

看样子她是藏在走廊里站着，不会走进房间的，岛村拿起毛巾走了出去。驹子避开他的视线，略微低着头，走在前头。她宛如被人揭发了罪行而被逮走的罪人一般，可是洗完澡身体暖和了以后，又怪可怜地欢畅起来，顾不得睡觉了。

第二天早晨，岛村被一阵谣曲声吵醒了。

正在静静地听着谣曲，驹子从镜架前回过头来，笑了一下说：

“那是梅花厅的客人们。昨天晚上宴会以后不是叫过我吗?”

“谣曲会的团体旅游吧。”

“是的。”

“下雪了吧。”

“嗯。”驹子站起来唰地打开了纸窗给他看。又说，

“红叶也甭看了。”

透过纸窗的方框看去，灰色的天空向这边飘扬着鹅毛大雪。一片令人难以置信的寂静。岛村睡眼朦胧地望着天空。

唱谣曲的人们也在敲着鼓伴奏。

岛村联想起去年年底的一个降雪的早晨，往镜架那边一看，镜中的鹅毛大雪还在纷纷扬扬，敞开领子擦脖子的驹子的周围漂荡着白色的无数线条。

驹子的皮肤，像刚刚洗过那样清洁，岛村怎么也想不到，她会是由于偶然的一句话就引起误会的女子。这的确是一种难以抗拒的悲哀。

远山上的红叶，一天天暗了下去的赤褐色，在这初雪中，又鲜艳地复苏了。

挂了一层薄雪的杉树林，每一根杉树都轮廓分明，树稍朝着天空，挺立在雪地上。

在雪中绩麻，在雪中织布，在雪水里洗，用雪水漂晒。从绩麻开始，到织完为止，这一切都是在雪中进行的。因为有雪才能使麻布产生褶皱，因此古人也在书上写道，雪可称为皱纱之母。

这是村里的女人们在漫长的避雪中的手工艺，岛村也曾在估衣铺里物色过这种雪国的绉纱来作夏衣。由于他搞日本舞蹈的关系，认识经营“能乐”服装的估衣铺，甚至托付过他们有了正宗的绉纱就送给他看。他如此喜欢绉纱，也曾用它做过汗衫穿。

据说从前到了雪上晒纱的帘子被撤掉，积雪开始融化的春天，绉纱便上市了。听说那时候还设有专门招待三大城市远来客商的下处。姑娘们花了半年时间，精心织出的绉纱，就

是为了拿到这市上来卖的。所以远近各个村子的男女云集而来，卖艺的卖杂货的摊子一家挨一家，像节日一般，热闹非常。绉纱上贴上纺织者的名字和住所，来评定哪是一等哪是二等。也成了男青年选对象的依据。要想织出雅致的绉纱，必须从孩童时代开始学习，到了十五六到二十四五岁的大姑娘时才能做得到。岁数再大了，纱面上就织不出光泽来了。姑娘们大概是为了作为一个织纱者名列前茅而勤学苦练。从旧历十月开始绩麻，直到第二年二月中旬才结束晒漂，这期间是无事可做的过冬时期，所以能在织纱上下功夫，对于织成的纱大概也是有爱情的。

岛村穿的绉纱，有的也许就是江户末期到明治初年的姑娘所织成的呢。直到现在，岛村仍旧把自己的绉纱送到雪地里去晒漂。把不知何许人穿过的旧衣服，每年都送到产地去晒漂，当然是很麻烦的，可是一想到这纱是旧时的姑娘辛勤织出来的，就觉得还是送到织纱者的土地上正式的晒漂一下是应该的。一想到在深深的积雪上晒漂的白麻纱，被朝阳一照，分不清是雪是布染成了红色的光景，就觉得夏日的污垢消失干净，仿佛自己的肉体也晒得舒适了。当然办这事的是东京的估衣店，古时的晒漂法是否传到了今天，岛村是无从知道的。

经营晒漂的铺子，自古就有。织纱的人很少是自己晒漂，多半送给铺子去做。白色的麻纱是织成去晒，带色的绉纱，是染了线以后绕在框子上晒漂。白麻纱直接摊在雪地里晒。因为是在旧历正二月晒，有时就在积满了白雪的田地里晒。

织成的麻纱也好，未织的麻线也好，先在灰水里浸泡一夜，第二天早晨再用清水涮洗几次拧干后去晒。要这样重复洗晒上好几天。等白麻纱快晒完时，早晨的阳光照在上面，呈现出美妙的景色，是无法形容的，也是暖国的人看不到的。古

书里就是这么写的。同时，晒完了白纱，也意味着春天的即将到来。

绉纱的产地就靠近这个温泉。山峡逐次开阔的，河水的下游便是，仿佛从岛村的房间就能看见。旧时有绉纱集市的镇子现在都有火车站，现在作为纺织业的地方也是有名的。

然而岛村，不论在穿绉纱的三伏天，还是织绉纱的三九天，他都没有来过这个温泉，所以他没有机会跟驹子谈起过绉纱的事。他也不是那种有闲情逸致的人去访问一下这种旧时的民间工艺。

可是当他听到叶子在浴池里唱的歌时，他觉得这个姑娘如果生在古时，一定会在纱车上或者织机上也那么唱歌的。叶子的歌声是完全合适的。

比毛还细的麻丝，没有天然的湿气就不好处理，据说最好是阴冷的季节。古时的人说，三九天织的麻纱，到三伏天穿在身上就有凉爽之感，这乃是阴阳自然之理。死缠着岛村的驹子仿佛也有一种从本质上说的凉爽劲儿。因此岛村越发觉得驹子身上某一个发热的地方是可怜的。

然而这种挚爱是不会像一块绉纱那样留下确凿的形态的。他模糊地想道：穿在身上的布，在工艺品中算是短命的东西，可是如果珍惜地使用，五十年或者更多年的绉纱也可以不褪颜色。但是人体在一起的厮混，连绉纱那样的寿命也不会有。他忽然联想到驹子生了别人的孩子，作了母亲的身影，他吃惊地环视了一下周围。他觉得自己大概是疲劳了。

他在这里逗留得太久了，甚至忘了回到妻子的身边。他并非离不开驹子，也不是不想离开她，只是不断地等着她来幽会已经成了习惯。驹子越是迫不及待地追他，他苛责之感也越发增大，仿佛自己已经是麻木不仁了似的。可以说，眼看着自己的严峻处境，而在那里止步不前。驹子为什么陷入自己

的情网，在岛村看来是不可思议的。驹子的一切岛村都洞察无遗，而岛村的一切，驹子却无所察觉。驹子好比碰到虚无的墙壁上的回响，在岛村的心底像越下越多的积雪一般，是听得见的。岛村的这种自鸣得意是不能再继续下去了。

岛村觉得，这次要是回了家，就轻易不可能再到温泉来了。在这大雪的季节即将到来时，他坐在火盆旁边，倾听着店主人特意为他拿出来的古旧的铁壶发出松籁一般的丝丝声。在壶上精巧地镶嵌着银质的花鸟。铁壶发出的松籁声，听得出有远有近。在那小的松籁声更远的地方还可以听到小银铃不断地微微作响。岛村把耳朵凑近铁壶倾听铃声。在铃声不断响着的更远处，他看见了像铃声那么急促走来的驹子的小脚。岛村吃了一惊，他下定决心一定要走开这个地方了。

这时，他想起来要到绉纱的产地去看看。这样便可以促使他更容易离开这个温泉。

然而，在河的下游有好多这样的村镇，究竟到哪一个村镇去呢，他茫然了。因为他并非要到纺织业发达的大镇去观光，所以岛村就选了一个偏僻的小站，下了火车。走不多远就来到类似古时驿站般的镇街上了。

家家的房檐都修得很长，它的支柱成排地立在街道上。它们类似江户街道上的“游廊”，这地方自古叫它“雁木”，在积雪很深的季节就成为行人的通路。在街道的一侧，家家的长檐都连在一起。

因为每家的房檐都是连着的，所以房顶上的积雪就只能扫到街道上去。实际上就是把屋顶上的雪抛到道路上，在那里形成一条雪堤。为了从街道的一侧到另一侧去，就在雪堤上挖出许多洞来。本地人把它叫作“胎里钻”。

同样是雪国，而驹子居住的温泉村，房檐并不连在一起，所以岛村在这里头一次见到“雁木”。因为这是一个新鲜事

物，岛村就故意在里边走了一程。这旧房檐底下怪阴暗的。有的柱子从根上已经朽了。他好像在窥探这祖祖辈辈埋在雪里的阴郁的人家。

埋在雪底下还孜孜不息做手工的女子们，其生活可不像她们的产品那样爽朗明快呀。这个旧镇的印象充分地令人作此遐想。在有关绉纱的古书上，也引用了唐朝秦韬玉的诗："苦恨年年压金线，为他人作嫁衣裳"。之所以没有人专门雇一个织女在家里为他们织纱，是因为织一匹纱很费工却值不了多少钱，在经济上是划不来的。

那种历尽辛苦而不留名的工人早已死去，他们只留下了美丽的绉纱。这纱因为在夏天给人一种凉爽之感，就给岛村这样人作成奢侈的衣服了。这并非什么奇怪的事，可岛村却忽然奇怪起来。这也许是满腔挚爱的行为，归根结蒂是会在某时某地给人以感召的吧。岛村从"雁木"底下走到街道上来了。

镇上的街道果然像古时驿站的大道，又直又长。大概是和温泉村连着的大道吧。木板房盖上钉的木条和镇石也和温泉街完全一样。

房檐下的柱子投下的影子已经淡了。不觉已是靠近黄昏的时分。

因为没有什么可看的东西，岛村再一次登上火车来到另一个镇子。同前一个镇子一模一样。照例遛遛达达，只是为了暖暖身子，吃了一碗汤面。

卖汤面的店在河岸上，这河大概也是从温泉村流过来的。只见一些尼姑三三两两由桥上走过河去。她们都是脚穿草鞋，有的背着斗笠，看来是化缘回来的。有一种宿鸟归巢的样子。

"这里尼姑蛮多啊。"岛村向汤面店的女人问了一下。

“是的，在山里头有个尼庵呢。不久一下大雪，从山里再出来就不容易了。”

桥那边，薄暮中的山峦已经是白色了。

在这雪国里，一到树叶枯落刮起寒风，就每天都是冷森森的阴天了。这是要降大雪的先兆。到了远近的山峦都变成白色，当地人叫作“巡岳”。同时，有海的地方发生海鸣，深山里发生山鸣，宛如远雷的声音。这就叫“胴鸣”。一看到“巡岳”，一听到“胴鸣”，就知道要下雪了。岛村想起来一本古书上就是这么写的。

岛村躺在被窝里睡早觉，听到观赏红叶的客人唱谣曲那天，就降了第一次的雪了。是否今年山和海也都鸣响了呢，他不得而知。岛村只身来到温泉和驹子不断相会的期间，好像他的听觉也敏锐起来，只要心里一想到海山鸣动，就仿佛这远处的声音在耳朵里作响了。

“尼姑们也要闭门过冬了吧。她们有多少人？”

“是啊，大概很多吧。”

“全是尼姑们集在一起，好几个月都在大雪中，净干些什么呢？她们也在尼庵里织一些过去这一带织的绉纱好不好呢？”

听了岛村这好奇的话，汤面店的女人只是微笑了一下。

岛村在火车站等候归途的火车，等了两个小时。惨淡的太阳落下去以后，寒气越发凛烈，天上的星星也闪着寒光。他的脚冻得冰凉。

岛村回到了温泉，他自己也不知道他干什么去了。汽车越过那熟悉的铁路口来到神社的杉树林旁，眼前有一家点着灯光的房子，岛村松了一口气。那里就是小酒馆“菊村”，门口站着三四个艺妓在闲聊。

他正想着驹子也许在其内，目光就落到驹子一个人身上

了。

汽车的速度一下子慢了下来。大概是司机晓得岛村同驹子的关系，自然而然把车开慢了的。

岛村突然回过头去，朝着与驹子相反的方向看了一眼。只见汽车留下的车辙清晰可见，借着星光还可以看得很远。

驹子来到了车前。只见她眨了眨眼就跳到车上。汽车并未停车，就那样慢慢地登上了坡道。驹子在车门外的踏板上弯着腰，抓住了车门的把手。

驹子跳上车来的势头，仿佛是往上一跳就被车子吸住，可是岛村却觉得一股热气贴到他的身旁，并未感到什么意外或危险。驹子举起一只胳膊好像要抱住车窗。她的袖口往下一滑，隔着老厚的玻璃窗露出红色汗衫，给岛村冻得发僵的眼帘留下很深的印象。

驹子把上额贴到玻璃窗上用尖嗓子问道，

"你上哪儿去了。啊？上哪儿去了？"

"多危险啊，不要命了？"岛村虽用大声回答了，但简直是甜蜜的儿戏。

驹子打开车门，横着身子就倒了进来。不过，这时车子已经停下，来到山脚下了。

"我说，你上哪儿去了？"

"嗯。这…。"

"哪里？"

"没上哪儿去呀。"

驹子整理衣服下摆的姿势完全是艺妓的风度，岛村忽然觉得十分新奇。

司机坐在那里一动不动。车子来到了道路的尽头不能再往前开，岛村发现这样坐在车上有点不对头，说道，

"下车吧。"驹子的双手按到岛村的膝盖，说，

“呀，真凉！这么凉，为什么不带我去？”

“可不是吗。”

“你说什么？奇怪的人。”

驹子高兴地笑着登上了石头台阶的小路。

“你走的时候我瞧见了。是两三点以前吧。”

“嗯。”

“听见汽车声我出来瞧了。到街上来瞧的。你没有回头看吧？”

“没注意。”

“瞧你。”驹子仍旧高兴地含着笑。然后把肩膀靠了过来。

“你为什么不带我去？冻得这样子回来，象话吗？”

这时突然响起了火警的钟声。

两个人回头一看。

“着火了，火！”

“着火了！”

在山下的村子里冒着火焰。

驹子不知喊什么喊了两三声，抓住了岛村的手。

只见滚滚黑烟中的火舌时隐时现。大火好像在顺着房檐向两方横扫过去。

“这是哪儿？你原来住的师傅家不是很近吗？”

“不是。”

“那么是哪儿？”

“在那右边儿，接近火车站。”

火焰烧穿了房顶直往上冒。

“哎呀，是茧仓，是茧仓啊。哎呀茧仓着火了。”驹子连连说着，把脸压到岛村的肩上。

“是茧仓，是茧仓！”

火势越烧越旺，可是在星空下从高处往下一看，宛如玩具

着了火，静静地燃烧着。不过仿佛连烈火的燃烧声都听得见似的，那么可怕。岛村抱住了驹子。

“不要怕！”

“不，不，不！”驹子摇着头哭起来了。岛村用手托住驹子的脸，觉得她的脸比平常好像小多了。硬邦邦的太阳穴在颤动着。

她是看见大火而哭的，可是岛村并没问她为什么哭，就一直抱着她。

驹子忽然不哭了，挪开脸说，

“呀，是的。茧仓里在演电影啊。就是今晚儿，挤满了人，你知道吗…。”

“那可了不得！”

“一定有受伤的，还会有烧死的。”

两个人仓皇地跑上石阶。因为听见了上边的人声吵嚷，往上一看，旅馆的二楼三楼，差不多都推开房间的纸窗，在明亮的廊子下观看着大火。在庭园的边上开败了的菊花，也不知道是旅馆的灯光还是星光照得轮廓分明。有时好像是大火映照在菊花上，看得见那后边有人站着。有三四个旅馆的伙计从他们头上连滚带爬地跑了下来。驹子提高了嗓门儿问道，

“是茧仓吗？”

“是茧仓！”

“伤人了没有？有没有受伤的？”

“一直往外救呢。电影的胶片一下子着了火，延烧得快极了。是打电话问的，往那儿瞧！”一个伙计当面举起一只手来走了过去。

“据说，不住地从二楼往下扔孩子呢。”

“哎呀，这可怎么好。”驹子像追赶伙计们似的，跑下了石

阶。从后面下来的人把他们超了过去。驹子也跟着跑起来。岛村也在后面跟着。

来到石阶之下，大火被房子挡上，只能看见一点火苗，而这时火警的钟声响彻云宵，越发增加了人们的不安。

“雪都冻了，加小心，滑！”驹子回过头来对岛村说，就势站住说：

“不过，对了，你甭去了。我是担心村子的人啊。”

岛村觉得她说的也有道理。他松了一口气，看见脚下的钢轨，已经来到了铁路的道口。

“看，天河多美！”驹子自言自语地望着天空，继续跑了下去。

啊！天河！岛村往上一看，仿佛自己的身体飘飘摇摇地要浮向天河一般。

天河的亮光就是那么近，近得像能把他捞上去似的。诗人芭蕉在狂风大浪的海上所见到的天河难道也同这个鲜明的天河一样大吗！赤裸裸的天河，想要用它的裸体卷住大地而降到近在咫尺的地方来了。这是一种可怕的艳丽。岛村觉得自己这渺小的身影反倒要从地上照入天河了。天河里无数的星星，不仅历历可见，有些地方光云的银砂也一粒一粒地非常清楚，而且把视线吸进了天河的无底深渊。

“喂！喂！”

岛村在呼唤驹子。

“哎！你来一下！”

驹子也一边呼唤他，朝着天河垂到深山里的方向跑去了。

大概是手里提着下摆，她每一招手，就看见红色的下摆一隐一现。这是在星光下的雪地上，才看出是红色的。

岛村飞跑着赶了上来。

驹子一放慢脚步，就撒开了下摆，拉住岛村的手。

"你也去吗?"

"嗯。"

"你真好事。"说着抓起落在雪上的下摆。

"人们会笑话的。你回去吧。"

"不,再走近点儿。"

"那怎么行?把你带到火场去,村子里的人会说三道四的。"

岛村点了点头停住了脚步,可是驹子却轻轻抓住岛村的袖子缓步前进。

"找个地方等我,我马上就回来。那儿好?"

"哪儿都行。"

"那么,再走几步。"驹子望着岛村的脸,突然摇起头来,"算了吧!够了!"

驹子用身子咕咚一声撞了过来,岛村打了一个踉跄。路旁的薄雪中是成排的大葱。

"太失望了!"

然后驹子的话像连珠炮一般打将过来。

"我问你,你说我是好女人了吧。马上要走的人,干吗用那话告诉我?"

岛村想起驹子用簪子扑哧扑哧扎踏踏密的事。

"我哭了,回到家后还哭呢。我是怕跟你分手的。不过,你走吧。你把我说哭了的事,我是不会忘的。"

岛村一想到由于自己的言词被驹子误会,反而深深地印入了她的脑海,便觉得有一种难以割舍的感情在折磨着自己。忽然听到火场上传来人声嘈杂,火势又延烧到了另外一处,正在喷起火星子。

"瞧啊,又着起了,这么大的火。"

两个人得救了一般松了一口气,又向前跑。

驹子真能跑。她的木屐在冻雪上一沾就起来，像飞得一样。两只胳膊也不是前后摆动而是仿佛伸向两侧。她浑身的力气仿佛都用到胸部上，在岛村眼里她的身材显得特小。发胖了的岛村一边跑着一边还要望着驹子，所以早就上气不接下气，可是驹子也一下子喘不过气来，踉跄着倒向岛村的身上。

"眼珠子冻得直流泪！"

两颊发烧，只有眼睛冻得荒。岛村也眼泪盈眶了。一眨眼，只见天河填满了视野。他忍着眼泪说，

"每天夜里天河都是这样的吗？"

"天河？真美呀，不是每天夜里都这样吧。天晴得很。"

天河是从他们俩的背后向前方流过去的，看上去，驹子的脸好像是在天河里照得通亮似的。

不过，她那细高的鼻子既看不分明，小嘴唇的红色也消失不见了。横空而过的满天的光层，其实是这样黑暗，这使岛村难以置信了。这大概是因为星光比朦胧的月夜更为微弱的缘故。可是，天河的亮度比任何明月的天空要更加明亮，在这地面上没有任何阴影的微光中，露着驹子的面容如同旧时木雕的假面一般，还散发着女人的气味，这太离奇了。

往天空一看，天河又垂了下来，仿佛要把大地紧紧抱住。

令人感觉到天河又像巨大的极光，从岛村的身上冲了过去，站立在大地的尽头。这是一种寒冷的寂静，却又冶艳得令人吃惊。

"你走了，我就规规矩矩地过日子了。"驹子一边说着往前走，用手扶了扶松了的发髻。走了五六步回过头来说。

"怎么了？快来呀！"

岛村站在那里不动。

"是吗？那你等着我。完事儿一块儿到你房间去。"

驹子举了举左手跑了起来，她的身影仿佛被吸进了黑暗的山底下。天河在它被山峦的轮廓遮断处展开它的下摆，并从那里反过来以其华丽的宏伟朝着天上舒展开去，山就越发显得黑暗阴沉了。

岛村没走几步，驹子的身影就被街道的民房挡住看不见了。

“嗨哟嗨！嗨哟嗨！”一阵号子声传来，一群拉着水泵的人来到大街上。大街上的人，一个个都往前跑。岛村也急忙来到大街。他俩走过来的道路同大街成丁字形。

又来了一架水泵。岛村把它让过去，跟在后面走。

这是一架老旧的手推式木制水泵。消防员除了一队在前头拉牵外，还有一些人围在水泵的周围，而水泵却显得小的可怜。

为了让水泵过去，驹子也躲在路旁。她发现了岛村，两个人就一块儿向前跑去。躲在路旁给水泵让路的人们，等水泵一过去，像被水泵吸住了一样，跟在水泵后面。现在岛村和驹子也混到往火场跑的人群之中了。

“你到底来了。真好事！”

“嗯。这水泵可太小了。明治以前的。”

“可不是吗。小心别摔倒了！”

“真滑。”

“是呀，等多咱正式的暴风雪一夜也不停的时候，你来这里试试，你根本来不了。那时连兔子，野鸡都逃进人家的房子里去。”驹子说得虽然蛮可怕的，但由于消防的号子声和人们的脚步声所配合，她的话声却显得是明朗快活的。岛村的身上也满轻快。

听到火焰声了。眼前就窜起了火苗子。驹子抓住岛村的胳膊时，街道上又低又黑的屋顶，被火光一照，像呼吸一般出

现之后又消失了。脚底下流过来水泵的水。岛村和驹子也自然在人墙之外止了步。开始嗅到了火场的焦糊味加杂着煮蚕茧的气味。

人们到处在高谈阔论，说什么电影胶片引起的火，什么从楼上往下扔看电影的小孩儿，什么今年村子里的蚕茧和米都没放进那里真是万幸等等。可是火场上的人却都是面对着火而默默无言，仿佛分不清哪是远处哪是近处，呈现出统一的一片寂静。大家都好像在静听着烈火声和水泵声。

不时地有些后来的村里人，到处呼唤着亲人的名字。有人一回答，就高声地欢呼起来，只有这些人的声音生动地响彻着，警钟已经不响了。

为了避开人们的视线，岛村悄悄离开驹子，站到了一群孩子的后面。孩子们为了躲避火烤，向后退，大概脚下的雪已经松动了。围观者前面的雪由于火和水而融化。踏出零乱的脚印，泥泞不堪。

这里是茧仓旁的菜地，跟岛村们一起跑来的村里人大都进入到那里。

看来是从安放着放映机的门口起的火。茧仓的一半屋顶和墙壁都烧掉了，柱子和房梁的骨架带着火还在立着。屋子里头除了木板的天棚，木板的墙壁和地板以外空荡荡的没什么东西，所以也没冒烟，屋顶也浇了好多的水不会燃烧，可是仍旧延烧不止，从想不到的地方冒出火来。三架水泵慌忙赶过去一浇水，就一下子喷出火星，冒起黑烟来。

那火星在天河中扩散后便消失了，岛村好像再一次被捞到天河中去。黑烟流入了天河，而天河却相反地倾泻下来。水泵没射中房盖而摇摆着的水花，变成白色，仿佛也是天河的光映照出来的。

不知什么时候凑过来的，驹子握住了岛村的手。岛村回

过头去看了一下而没有说话。驹子依旧脸朝着火，在她那有点紧张而认真的脸上，火光像呼吸一般在摇荡。岛村的胸中有一股激情涌了上来。驹子的发髻也歪了，脖子也无力了。他差一点儿没把手伸过去，他的手尖发颤了。岛村的手已经不冷了，驹子的手是热的。不知为什么岛村预感到离别已经临近了。

在门口处，不知是柱子还是什么又着起火来，水泵还放出一股水来浇它，只见大梁和横梁吱吱地冒着白汽就倾塌下来了。

人们倒吸了一口凉气，眼瞧着一个女人的身体跌落下来。

茧仓为了也能用于演戏，有一个有名无实的二楼看台。虽说是二楼，但实际上是很低的。从这个楼掉下来应该是一瞬之间的事情，可又仿佛有足够的时间清楚地看见了她的跌落。也许是因为她落下来的姿势奇怪，不像个活人，而像一个偶娃的缘故。一眼就可以看出，她是神志不清的。掉在地上时也没有声响。因为满地是水，自然也没有尘土飞扬。她落在刚刚燃烧起来的新火和余烬上的旧火的中间。

一架水泵正朝着余烬上的火射出一道弧形的水时，在那前面浮现出一个女人的身体。她的跌落就是这样的。女人的身体在空中是水平的。岛村吃了一惊，但因事出突然，并没感觉到有什么危险和恐怖。如同非现实世界中的一个幻影。僵直的身体被抛到空中而变为柔软，并且如同偶娃一般毫无抵抗，又如同没有生命一般的自由，是生和死同时停止了的姿势。闪现在岛村脑中的不安，只不过是女人那水平的身体会不会变为头朝下，腰和膝会不会弯曲。看样子本来有那种可能，然而终于是水平地跌落在地上。

“哎呀！”

驹子尖叫了一声，捂住了两眼。岛村直瞪瞪地看着。

不知道是在什么时候，岛村也认出来那跌下来的女子就是叶子。围观的人们倒吸一口凉气和驹子的尖叫都像是同一瞬间发生的。也就在叶子的腿肚子在地上痉挛的同时。

驹子的叫声穿透了岛村的肉体。在叶子的腿肚子发生痉挛的同时，岛村也感觉到一阵寒冷的痉挛一直通到脚尖。他受到一种难忍的痛苦和悲哀的冲击，心跳得剧烈了。

叶子的痉挛只是一瞬间的事情，马上就停止了。

在她的痉挛之前，岛村只注视着叶子的脸和她那红色箭花的衣服。叶子是仰面坠落下来，一条腿是露在衣服外的。坠到地上也只是腿肚子痉挛了一下，人是不省人事的。岛村不知为什么并未感觉到她的死，只是觉得这是一个转折点，是她内在生命的一个变形。

从叶子跌落下来的二楼看台上，有两三根木柱倾斜下来，就在叶子的脸的上方燃烧着。叶子已经闭上了她那目光刺人的美丽的眼睛。下巴朝上，显得脖子挺长。落下来的火，从她苍白的脸上划过。

岛村清楚地想起来，几年前他搭乘火车到这个温泉来时，在叶子的脸上燃着山上的灯火时的光景，他的心突然一颤。仿佛一下子照亮了他和驹子这几年的事情。同时也有一种难忍的痛苦和悲哀。

驹子离开了岛村的身边，这仿佛是和驹子呼喊着捂上眼睛同时发生的。围观的人被吓呆了也是这时。

在散落着被水冲下来的黑色木屑中，驹子拖着艺妓穿的长下摆踉踉跄跄地走过去，想把叶子抱回来。在她那拚命挣扎的脸底下，垂着升了天的，毫无表情的脸。看上去驹子抱的仿佛是她自己的牺牲品或者刑罚。

围观的人们都喊叫着乱跑，一下子把她俩围住了。

“闪开，请闪开！”

岛村听到了驹子的喊声。

"她疯了，疯了！"

岛村想要靠近疯狂喊着的驹子，却被那些想要从驹子手中接过叶子的人们挤得踉跄到一旁。当他站稳脚跟往上方一看，那天河仿佛唰地一声流进了他的体内。

（昭和九年——昭和二十二年）

① 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

开篇第一句是一个无主语句。接续助词と前边的从句也好,后边的主句也好;都没有主语。但是读者对此并不感到奇怪。因为穿过隧道的肯定是说列车,而雪国就是列车开到的地方。这里需要解释的是"国境"和"雪国"。这两个词中的"国"字都不是现代国家的"国",而是日本从古代到近代的一种行政区划。根据这种行政区划,旧时的日本(不包括北海道)共分为五畿、七道、73国。有的国相当于现在的一个县,有的两三个国相当于一个县。这里的"雪国"是指冬季降雪量大的地区,即现在的东北地方,如"陸奥"(むつ)(现在的青森县)、"羽後"(うご)(现在的秋田县)、"陸中"(りくちゅう)(现在的岩手县)、"陸前"(りくぜん)(现在的宫城县)、"羽前"(うぜん)(现在的山形县)、"岩代"(いわしろ)、"磐城"(いわき)(现在的福岛县)等都是东北地方的旧国名。

夜の底が白くなった。

句中的"夜の底"是一种比喻。从火车上眺望窗外的夜景时,车窗是四方的,能望见的景色当然也是四方的,而它的底边当然就是大地了。谓语"白くなった。"指的是当火车没有开进隧道以前,大地还是黑色的,而火车穿出隧道进入雪国时,大地就变成白色的了。这是描写小说主人公岛村在视觉上的感受。即所谓"新感觉派"的手法。

② もうそんな寒さかと島村は外を眺めると,鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒寒と散らばっているだけで,雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた。

这个句子较长，也是通过岛村的视觉所作的描述。“もうそんな寒さか”是指岛村见到站长把围巾围到鼻子上，皮帽子的耳扇也放下来那种装束而产生的联想和疑问。这是他坐在开着暖气的列车里对站长的打扮产生怀疑，所以译为“至于那么冷吗?”。“散らばっているたけで”的で是助动词だ的连用形表示中顿，“闇に呑まれていた”的ていた是ている的过去时，是一个结果态，表示状态。说的是位于山脚的宿舍那里的雪，在夜色的笼罩下看不见白色，而是灰兰色了。

③ 「こんなところ，今に寂しくて参るだろうよ。若いのに可哀想だな。」「ほんの子供ですから，駅長さんからよく教えてやっていただいて，よろしくお願いいたしますわ。」

这是两句对话。第一句的“こんなところ”这个词组带有贬义，发音时“こんな”用强声(ストレス)。译文加了一个“鬼”字，译为“这个鬼地方”就是为了突出这个贬义。“寂しくて参る”的“参る”是“閉口する，たまらなくなる(受不了)”的意思。“寂しくて”的て是接续助词表示原因，相当于汉语的“得·de”字。第二句严格说是一个病句。因为以“お願いします”为谓语的祈使句，只能前承“名詞＋を”、“…することを”或者“…するよう(に)”来表达祈使的内容，而不能前承“…て”。因此这个句子作为一个完整的祈使句可以说：

「駅長さんからよく教えてやっていただくようにお願いいたします。」不过这也觉得太绕，有点罗嗦。不如说：

「駅長さんからよく教えてくださるよう(に)お願いいたします。」如果把前半句“駅長さんからよく教えてやっていただいて”作为一句，“お願いいたします”作为另一句补充来看，“いただいて”的て可以看作表示某种要求的终助词用法。例如：“速く行って”、“それを取って”、“お土産を買ってよ”等等，这时的て都是“てくれ”的简略说法。

在口语中是常见的。然而即使这样，也是不妥的。因为这时的“やっていただいて”是“…やってもらいなさい”的意思，是一种祈使句。那么祈使谁呢？祈使“駅長さん”吗？不对。祈使“弟弟”吗？也不行，因为他并不在场，听话人是站长。祈使说话人自己吗？也不象话。要作为两句话就得说：

「駅長さんからよく教えてやってください。お願いします。」

如果一定要使用いただく这个词时，就得说：

「駅長さんからよく教えていただきます。」

然后再说一句：

「よろしくお願いいたします。」

在使用敬语上，说话人出于过分地表达敬意，日本人也常常搞过了头，造成讲不通的句子。这在实际的语言生活中屡见不鲜。作者在这里也许是要故意描写剧中人在使用敬语上的不规范。

④ 「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでいるよ。それであすこにぶっ倒れてるのさ，風邪をひいてね。」

駅長は官舎の方へ手の明りを振り向けた。

句中的“着物を四枚重ねだ”是“着物を四枚重ねている”的意思。“四枚重ね”是由“数量词＋动词连用形”构成的词组再加助动词だ构成谓语。这种形式和“僕はうなぎだ”的所谓“うなぎ文”颇有类似之点。“うなぎ文”是把宾语或对象语加だ作为名词谓语的句子。这时的だ代替“…が好きだ、を食べる、を釣る”等等。试比较：

僕はうなぎだ
- ＝僕はうなぎを食べた。（或：食べる）
- ＝僕はうなぎを注文する。
- ＝僕はうなぎを釣る。
- ＝僕はうなぎが嫌いだ。（或：好きだ）

私は着物を四枚重ねだ { =私は着物を四枚重ねている。
=私は着物を四枚重ねて着ている。

这种句子是用だ代替了一部分谓语。根据语言环境可以作不同的解释。

“それでごろごろあすこにぶっ倒れている。”的“ごろごろ”本来是一个象声词,表现物体的滚动声,义近汉语的“轱辘”。例如:

ボーリング場の入り口に近づくと,ごろごろという音が,もう聞こえてくる。/一走近地滚球场的门口就听到轱辘轱辘的声音。

但是在这里用的是它的转义,是什么也不干,闲呆着的意思。例如:

高校を卒業しても職が見つからず,家にごろごろしている。/高中毕业了,可是找不着工作,在家里闲着。

“ごろごろ”还有人或物数量多,到处皆是,令人看着碍眼、碍事的意思。例如:

会社の仕事以外なにも出来ず,家にごろごろしている親父は粗大ごみだ。/除了公司的工作什么也不会,在家里闲着的父亲简直是一个大垃圾。这是对于退休以后在家里闲着的父亲的说法。表示说话人对不干活的人觉得碍事又碍眼的不快之感。所以把父亲也当作垃圾看待。并非父亲真地在家里滚来滚去。

“ぶっ倒れている”是“倒れている”的贬义说法,表示一种厌恶感。下边的“のさ”等于“のだ”,表示说明情况。

“風邪をひいてね”是补充说明,可能是说喝了酒就躺下来歇工,往往因此而伤风感冒;也可能是因为喝了酒而伤风感冒而躺下来歇工。“あすこ”(=あそこ)指宿舍。站长用提灯朝着宿舍晃了一下就是这个意思。

⑤ 「駅長さん,弟は今出ておりませんの?」と,葉子は雪の上を目捜しして,

「駅長さん，弟をよく見てやって，お願いです。」

这是叶子对站长说的两句话。第一句的“出ておりません”有两个意思。一个是“出去了，不在”。这时的“おりません”是本动词，“出て”是状语。另一个是“没上班”。在这里就是后者的意思。这时的“出る”是本动词；“おりません”是补助动词。“出る”是“勤めに出る”即上班的意思。既然有两种意思，我们凭什么肯定它是后者呢？这是因为前面站长谈到年轻人一喝酒就歇工。所以叶子在这里问他弟弟是否没上班是因为她担心弟弟也常喝酒，唯恐弟弟也因为喝酒而没上班。而现在她没有看到弟弟，所以说完了还用眼睛在四下里扫视。正确地理解一个词、一句话的含义，总离不开语境。

下面的“弟をよく見てやって”应当作为一句看待。（参看③）句中的“見る”是“面倒を見る”（照顾）的意思，不是“看”的意思。这句等于“弟の面倒をよく見てやってください”。下一句“お願いです”比“お願いします”的语气更为恳切，是一种哀告的语气。例如要说“请你饶了我这条命吧”就是说“助けてください。お願いです”，而不能说“助けてください。お願いします”。

⑥ 悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうだった。

用“悲しいほど”来形容叶子的声音之美，首先由于前边叶子这句话是一种哀求的语调，它表现在“よく見てやって”的最后一个“て”字上。如③中所说它是一个表示恳求的终助词用法，发音时必然要扬声而且要拉长。同时“お願いです”也如前述是一个表示哀求的句子。其次是由于日本人经常从审美的角度来看待悲哀。日本的歌曲中常常出现“涙、泣く、悲しい、寂しい、せつない、はかない”这类词，就可以说明这一点。因此岛村（或者说作者）就把美丽的声音同悲哀联系在一起了。又由于说话人在列车上，听话人在站台上，声调自然要比一般面对

面讲话的调子要高。所以用“高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうだ”来补充一句。句中的“夜の雪”，前一个词指时间，后一个词指被激起反响的物体。因为这里是雪国，山上、建筑物上、树上、地上都是雪，声音只能由洁白的雪上发出反响。但实际上并没有反响，只是形容声音的高亢和美而已。“高い響きのまま”是“こだまして来る”的状语。但也间接形容叶子的声音高亢，补充前一句的“悲しいほど美しい”这个定语。这表现在“まま”这个形式名词上。也可以用“ままに”，等于“…の通りに”。“高い響き”本来可以用在“声”的定语上，作为“響きの高い悲しいほど美しい声”，但这样把三个形容词叠用在一起就显得有点啰嗦。作者没有这样做，而是把它用在下一句来作为反响的状语，这是一个写文章的技巧。

⑦ そのような，やがて雪に埋れる鉄道信号所に，葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分かると，島村は一層彼女に興味を強めた。

句首的“そのような”指的是前面几行叙述这个边境上的小站一到冬天就大力防备雪崩的情况。而这个小站的信号房一到这时候就将被大雪埋上。

“と分かると”的前边的“と”表示得知的内容，是格助词；后边的“と”是把这个从句同后面的主句连接起来的接续助词，表示前后两个分句的关系。“彼女に興味を強めた”的“に”下面可以补上“対して”或“対する”来理解。

⑧ 二人のしぐさは夫婦じみていたけれども，男は明らかに病人だった。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ，まめまめしく世話すればするほど，夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上の男をいたわる女の幼い母ぶりは，遠目に夫婦とも思われよう。

上面三个句子中的第一句是用けれども连接的两个分句。孤立地看，这个表示转折的接续词けれども有些特别。因为前一个分句并不构成逆接下句的确定条件。按理けれども后面的分句应该是“実は夫婦ではないのだ”这样的句子。因为“男は病人だ”并不能说明就不是夫妇。但是再往下读，就知道要说的是病人和照顾病人的女子容易令人对他们的举止发生错觉，误认为他们是夫妇。

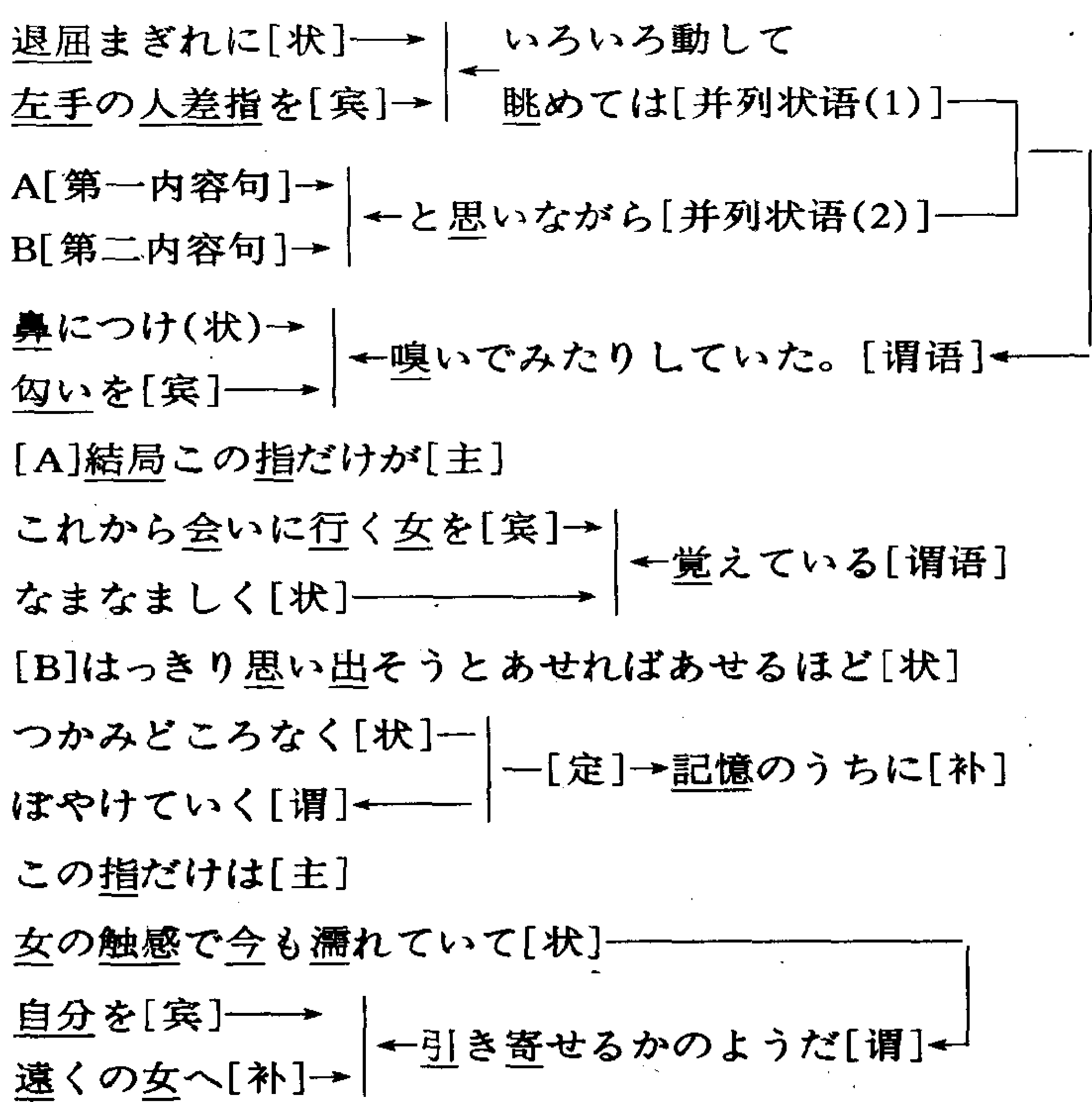
“幼ない母ぶり”年轻母亲在日本人的心目中有一种勤快地照料孩子的形象，前面的“まめまめしく世話する”就指的是这一点。

⑨　でもそれには，彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果，彼自らの感傷が多分に加わってのことかも知れない。

句首的“それには”的“それ”指的是前一句说岛村主观地认为叶子是个姑娘。“には”的“に”和下面的“加わって”有关，句型是“XにYが加わっている”（在X上附带着Y），而“加わってのこと”等于“加わっているから（说明原因）”，直译是“…是由于…而造成的”。

⑩　もう三時間も前のこと，島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては，結局この指だけが，これから会いに行く女をなまなましく覚えている，はっきり思い出そうとあせればあせるほど，つかみどころなくぼやけていく記憶の頼りなさのうちに，この指だけは女の触感で今も濡れていて，自分を遠くの女へ引き寄せるかのようだと，不思議に思いながら，鼻につけて匂いを嗅いでみたりしていたが，ふとその指で窓ガラスに線を引くと，そこに女の片眼がはっきり浮き出たのだった。

这是一个很长的句子。造成这个长句子的原因在于"眺めては"和"不思議に思いながら"的中间包孕着两个表示内容的子句。还有"嗅いでたりしていたが"后面的可以看做另一个句子。另外,句首是一个表示时间的孤立成分。把这些搞清楚了,这个长句子也并不难。现在不妨掐头去尾,把中间的包孕句划一个分析图:



句中的"動かして眺めては"是一个连动式的状语。它和后面的"思いながら"又是一个连动式。"连动式"是汉语语法的一个术语,指的是这种句子:去银行取存款买东西。去、取、买三个动词分别带有宾语,是相继而起的动作。这种句子,要说前面两个动宾结构是修饰"买

东西"的也未必不可。日语语法里没有连动式的说法，一般把"动词连用形＋て"的句节作为状语处理。这里值得注意的是"ては"的用法。"ては"是一个接续助词，在这里表示动作的重复，有"一再如何如何"的含义。因此"動かして眺めては"本身既是一个连动式，它又和下面的"と思いながら"构成连动式，表示每做一次前面的动作，就要做一次后面的动作。因为译文要按汉语习惯把这个长句子尽量破开来译，只好用"一边看着"来表达"…ては"的意思。

句中的"退屈まぎれに"（为了解闷）的"に"表示目的。"不思議に思う"（觉得奇怪）是说不知什么原因总是这么想。仿佛不是自己要去找那个女人，而是手指头在吸引他。

句中的"女の触感"是"女に対する触感"的意思。"で"表示原因。"今も濡れている"是夸张的说法，表示手指的触感尚未消失，如同手指沾上了水至今未干，仍有濡湿的感觉。

⑪ しかしそれは彼が心を遠くへやっていたからのことで，気がついてみればなんでもない。

句中的"心を遠くへやっていた"是遐想的意思。"それは…からのことだ"是一个句型，说明原因、理由是什么。"気がついてみれば"的"気がつく"在这里是由朦胧的状态清醒过来。"…てみれば"是补助动词，合起来是"当他一清醒。""なんでもない"是没什么奇怪的意思，不是"什么也没有"。"什么也没有"是"なにもない"。有的译本把它译作"他定神一看，什么也没有"，欠酌。

⑫ 肩に力が入っているところから，少しいかつい眼も瞬きさえしないほどの眞劍さのしるしだと知れた。

句首的"肩に力が入っているところから"是一个状语成分，修饰"…と知れた"。这个句型是"AからBがCだと知れる"。"と"前面是一

个判断句，表示得知的内容。“少しいかつい眼も”是这个内容句的主语，“眞剣さのしるしだ”是谓语，它前面的“瞬きさえしないほどの”是它的定语，表示程度。这个句子也可以译为：从她的肩膀还吃着力，就知道她那连眨也不眨的多少有点严肃的目光就是她专心致志的标志。那么肩膀为什么吃着力呢？这同前一句有关。一个人把上半身向前微倾，又要全神贯注地俯视，肩膀上必然吃力，否则是支持不久的。

⑬　彼女等が汽車に乗り込んだ時，なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端，…

句中的“涼しく刺すような美しさ”怎么理解呢？为了形容姑娘的美，作者使用了“涼しく”和“刺すような”这两个词的偏正结构，是从感觉上形容那姑娘的美的，这也是所谓新感觉派的作家经常使用的手法。“涼しい”是一种清凉的感觉；“刺すような”是一种刺激的感觉。这种清凉而刺激的感觉类似擦上了清凉油的感觉。这正是冬天的三等车厢里坐满了乘客、空气十分混浊这样的背景中突然出现一朵水仙花一般美丽的姑娘给人的感觉。正因为这样，才使得岛村感到惊讶，以致有点不敢正视了。

⑭　鏡の中の男の顔色は，ただもう娘の胸のあたりを見ているゆえに安らかだという風に落ちついていた。弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた。

第一个句子需要注意的是“ただもう”这个副词连语。它是修饰“安らかだ”的状语，而不是修饰“見ている”的。为什么？如果把句中用“ゆえに”表示理由的成分提出来放在句首便清楚了。

“娘の胸のあたりを見ている ゆえに，鏡の中の男の顔色はただもう安らかだという風に落ちついていた。”

状语“ただもう”表达的是那个男人现在已经放心(やすらかだ)，

而且只是放心，没有其他任何紧张情绪了。它的修饰关系如下：ただもう安らかだ这就是说，在他躺到座位以前，紧紧攥住姑娘的手登上火车走进车箱时的那种一个病弱的人所感到的紧张情绪已经消失，只剩下放心了。如果把“ただもう”作为“見ている”的状语来理解，就表达不出上述的意思。日语中的状语的位置往往提到前面，离开它要修饰的成分很远。需要联系上下文来全面理解，如果随便同首先出现的用言接合起来，就会偏离原意。有的译本把这个句子译为“镜中的男人，只有望着姑娘胸脯的时候，脸上才显得安祥而平静”恐怕是出于这样的误解。

第二句要注意的是“弱いながらに”这个状语成分。在这里是说“在微弱的程度上”显出一点甜蜜的和谐。“弱いながらに”在句法上是修饰谓语动词“漂わせていた”的。这是格助词“に”的职能。但它又和主语“弱い体力が”有关。这是“ながら”这个连续助词的职能。所以在翻译时要考虑如何照顾这两个方面。这里译作：“尽管是衰弱的体力，却也在微弱程度上显出一种甜蜜的和谐”。这个“甜蜜的和谐”指的是一对夫妻或者情侣的和谐状态，或者说两个人很般配。在这里当然是那个姑娘和那个病汉。一个病汉配一个美女当然谈不上什么和谐的。只是因为躺在姑娘身旁的那个男人的脸色非常安静，才在微弱的程度上显出一点点和谐。

另一方面，作者为了使用“甘い調和”这个词，在后面还有很长一段描绘男女之间一些动作的补充说明。这也是很重要的。我们说搞翻译的首要条件是吃透原文。对于原文中个别词汇的理解，也必须在上下文中寻找答案。如果一句一句，一个词一个词孤立地去理解，那就永远吃不透原文了。

⑮　男が目を動かすか動かさぬうちに，娘はやさしい手つきで直してやっていた。

前半句的“動かすか動かさぬうちに”是说“眼睛刚一动，马上就…。”“…するかしないうちに”这个惯用型不等于单单一个“…しないうちに”，不能理解为“还没…就…”。后半句的“やさしい手つき”是说手的动作很轻。这里“やさしい”是“あらあらしい”的反义词，指的是动作不粗暴，是体贴入微的意思。

⑯　このようにして距離というものを忘れながら，二人は果てしなく遠くへ行くものの姿のように思われたほどだった。

句首的“このようにして”指的是前面有关姑娘服侍病人的那段叙述，因此，下面的“距离”这个词并非指路程的距离，而是指男女之间的距离，亦即男女有别。如果不是忘了男女之间应保持的距离，他们之间就不会有前面那种亲密无间的情况了。

⑰　しかも人物は透明のはかなさで，風景は夕闇のおぼろな流れで，その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。

句首的“しかも”在这里是“それでもなお；それにかかわらず”的意思。不能作“その上に；おまけに”的意思来理解。说的是尽管剧中人和背景互不相干，但它们却融为一体描绘出一个象征世界。“透明のはかなさで”和“夕闇のおぼろな流れで”中的两个“で”都是格助词。“はかなさ”是文言形容词“はかなし”的名词形，是“短暂”、“转眼即逝”的意思。“おぼろな”是“虚幻”，“朦胧”的意思。人物和风景这两者融合起来描绘出的世界当然是不可捉摸的、虚无缥渺的非实现的象征世界了。

⑱　しかしほんとうに透明かどうかは，顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのように錯覚され

て，見極める時がつかめないのだった。

这个句子的主题是“ほんとうに透明かどうか”，是一个选择问句，“錯覚されて”是状语，“見極める時がつかめないのだった”是谓语。“錯覚されて”前面的“…ように”也是一个状语成分修饰“錯覚されて”，“ように”前面是一个定语子句。这里应该注意的是这个句子的逻辑主语乃是“島村”。因为这一段所有的叙述都是通过主人公岛村的视点来写的。这就是新感觉派作家的手法，前面已经提到，这种手法有一种迫使读者进入角色的力量。

⑲ 汽車のなかもさほど明るくはなし，普通の鏡のように強くはなかった。

这是一个并列句，前半句的主语是“汽車のなか”，句中的“なし”一词是文言形容词“なし”的终止形，口语应当用“なく”或者用“ないし”，即“ない”加上接续助词“し”。看来作者是用“なし”代替了“ないし”。后半句没有主语，不能理解为“汽車のなかも鏡のように強くはなかった”。后半句的主语应该是“窓ガラスも”，这虽是自明之理，但严格地说这个句子属于病句，日语叫作“不整表現”。这个句子主要是为了说明下面岛村为什么看着镜子却逐渐把镜子忘了的原因。而整个这一段落是为了说明为什么姑娘照在镜中的脸上点着了灯火。

⑳ 小さな瞳のまわりをぼうっと明るくしながら，つまり娘の眼と火とが重なった瞬間，彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ，妖しく美しい夜光虫であった。

这个句子较长，它的主语是“彼女の眼”，前边是一个时间状语成分。状语的中心词是“瞬间”，它前边是一个无主语的并列谓语结构作为它的定语。那么它的主语是什么呢？那就是这一段文字一再重复的“ともし火”，特别是前三句的“そうしてともし火は彼女の顔のなかを

流れて通るのだった"中的"ともし火は"。这个主题一直贯彻到这一段文字的末尾。这就是《象ハ鼻ガ長イ》的作者三上章所说的"は"的"ピリオド越え"(は跳过句号)。这是日文的一个特点。夏目漱石的名著"吾輩は猫である"的一开头就出现主题跳过句号的现象。例如:"吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生まれたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニヤーニヤー泣いて居た事丈は記憶しる。"在这里,"吾輩は"的"は"就一连跳了三个句号。这是日文的特点。如果不注意这一点,把每个句子都当做孤立的句子来译,就要出毛病。

句中的夜光虫是一种原生动物,浮游在海洋上,能放出磷光,大量出现时能使海水变为红色,即所谓"赤潮"(あかしお)。"ぼうっと"在这里是形容面颊变为红色。例如:"恥かしそうにぼうっと頬をあからめた"(羞得面颊上泛出红晕)。这是同形容她的眼睛是妖艳的夜光虫相呼应的。

㉑ 島村が葉子を長い間盗見しながら,彼女に悪いということを忘れていたのは,夕景色の鏡の非現実な力にとらえられていたからだろう。

这个句子说的是一个男人长时间偷看一个姑娘,这种事本来就是不礼貌的,因而也是对不起她的。而岛村却并未感到内疚,其原因是那映着黄昏景色的镜子有一种超现实的力量把他俘虏了的缘故。句中的"ながら"是连接两个不相称的事物的接续助词和表示两个动作并行的ながら不同。这个"ながら"等于"…にもかかわらず"。"彼女にわるい"是"对不起她"的意思。

㉒ だから彼女が駅長に呼びかけて,ここでもなにか眞剣過ぎるものを見せた時にも,物語めいた興味が先きに立ったのかもしれない。

这一句针对前一句，也就是说到了三小时以后，岛村看见叶子把站长叫住一再询问她弟弟，并且一再托付站长照顾弟弟时的那种过分恳切关怀的情况，更加引起了岛村的好奇心。原文中的“なにか眞剣過ぎるもの”(一种过于迫切的心情)就指的是这个。“物語めいた興味”的“めいた”是接尾词“めく”加在名词后面构成五段活用的动词。表示“看起来像…、类似…”的意思。例如“皮肉めいた言葉”(类似讽刺的语言)。也有接在副词下的用法。例如:“わざとめく”(看起来有些矫柔造作)。

㉓ 葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども，その温かいしぐさにかかわらず，島村は彼女のうちになにか澄んだ冷たさを新しく見つけて，鏡の曇って来るのを拭おうともしなかった。

这一句说的是黄昏已过，窗外夜色沉沉，已经看不见流动的风景以后的事情。句中的“その温かいしぐさ”指叶子的亲切的举止。这里的“温かい”和下面的“冷たさ”是相对的。尽管举止亲切，但她的内心(彼女のうちに)有一种娴静而高雅的冷漠(澄んだ冷たさ)。“澄む”这个动词有形容人的举止高雅、孤芳自赏的意思。

㉔ ところがそれから半時間ばかり後に，葉子達も思いがけなく島村と同じ駅に下りたので，彼はまたなにか起こるかと自分にかかわりがあるかのように振り返ったが，プラット・フォームの寒さに触れると，急に汽車のなかの非礼が恥しくなって，後も見ずに機関車の前を渡った。

这是个很长的句子。不过它的文脉比较清楚，很容易断成若干个句子。其中的“またなにか起こるかと”的下面可以补充“思って”来理解，亦即“と”前面是岛村的思想活动。下面的“自分にかかわりがある

かのように"是"振り返った"(回头)的状语。这是说无论发生什么事都肯定不会与自己(岛村)有什么相干,而他却偏要回过头去看,那种迫切要看的心情,就仿佛发生了什么事都和自己有瓜葛似的。这是强调岛村对叶子他们的过分好奇。

"プラット・フォームの寒さに触れると,急に汽車のなかの非礼が恥しくなって,後も見ずに機関車の前を渡った。"说的是当岛村从温度较高的火车中走下站台时,一接触外边的冷空气,马上头脑清醒过来,发现自己在车箱里从玻璃窗中一直偷看一个姑娘是不礼貌的,从而感到羞愧,于是不愿意再张望,扭头就走了。"機関車の前を渡った"是说下了站台,车站的出口在火车的另一侧,而小车站没有天桥或地道,着急出站就得从车头或车尾绕过火车才能出站。"渡る"这个词就有这个意思。过桥(橋を渡る)、横过马路(車道を渡る)都叫"渡る"。

㉕ △宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうにものものしい雪装束だった。

"宿屋の客引き"是旅馆派到车站去揽客或接客人的人。"番頭"是商店佣人的第一把手,"番頭"两个字就是这个意思。这里译为伙计。"火事場の消防"是在火灾的现场上救火,所以不等于消防员。"ものものしい"在这里有小题大作的意思,指"雪装束"(防雪的打扮)有些过火。另外,常说"警戒がものものしい"时是"戒备森严"。这里译作"有点吓人"就是兼顾这两种含义。在"雪国"下大雪的时候,通常达到三尺多厚,连房子都埋在雪里。人们必须在雪中挖出通路或洞,才能外出。雪后还要把积在房顶上的雪扫下去。这时穿一般的服装,特别是和服,是办不到的。所以从东京来,初次赶上这个季节的人,看见这种装束是会吓一跳的。

㉖ 这一段是会话,进一步渲染冬季十二月雪国的寒冷天气。

△島村は軒端の可愛い氷柱を眺めながら…。

句中的“可愛い”是“小”的意思。如说:“かわいい花(小花)、かわいい犬(小狗)、かわいい電池(小小的电池)”等都是小而好玩儿的意思。但首先必须小,大东西不能用“かわいい”来形容。

△「お師匠さんとこの娘はまだゐるかい。」

句中的“お師匠さん”是徐娘半老的艺妓,赎了身以后,就以教习弹拉歌舞为业的人。小说的女主人公驹子就是寄居在这样一个女人的家里。所以称为“お師匠さんとこの娘”,这里的“とこ”是“ところ”。

㉗ △さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じた…。

句中的“さう”指代前句话的内容。“なにかが”是“通り過ぎたやうに”这个状语句的主语,指的是某种念头或想法,那么是什么念头或想法呢? 从后半句的“このめぐりあはせ”可以想象出来。那就是叶子和驹子、以及这两个姑娘同岛村和曲艺师傅的儿子,这两对男女之间的复杂关系。这里把“めぐりあはせ”译为“命运的安排”。

△さほど…ない。是一个句型,通常译为“并不怎么…”或“没有多 么…”

△指で覚えてゐる女と眼にともし火をつけてゐた女との間に、なにがあるのか…

这个句子中的“なにがあるのかなにが起きるのか”是两个疑问句构成的词组,是这个句子的主题,后面的“島村はなぜかそれが…”中的“それが”就是这两个疑问句组的代词,是“見える”这个可能动词的对象语。这个疑问句组的前面是一个补语“間に”,它前面有一个并列词组的定语,把它简化一下就是“…女と…女の間に”。整个句子如果按原意的词序作为一句来译就会显得啰嗦而且不够清楚。这里把“…

の間に"的定语作为一个并列的句子译出,然后在下一句的句首用"在她俩之间…"加以总括。

△あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徴であったかと、彼はふとそんなことを呟いた。

句中的"さては"是一个感叹词的用法,表示对于事物发生的原因有所察觉。结合这个状语句句尾的"か",这里译为"莫非…"。例如:"さては泥棒に入られたか。"(莫非进来小偷了?)

这个句子的含义,从字面看,不大好理解。因为任何运动都离不开空间和时间这两个要素,谈不上哪个象征哪个。看来可能指的是在夕暮景色中,叶子和那个病人的亲密关系由于时间的流逝已经代替了那个男人同驹子的婚约关系。

㉘ △スキイの季節前の温泉宿は最も客の少ない時で、島村が内湯から上がって来ると、もう全く寝静まってゐた。

句中的"内湯"是设在温泉旅馆里的室内公共浴池。这个"湯"字就是温泉的意思。针对"内湯"而言的叫"外湯"(そとゆ),是设在露天的温泉公共浴池。"湯から上がる"是洗完澡从浴池里出来的意思。凡是从水中出来都叫"上がる"。这里的"内湯から上がって来ると"是说洗完澡穿上衣服从浴室走出来的意思。不可以简单地理解为"从温泉上来"。

△…裾を冷え冷えと黒光りの板の上へ擴げて、女は高く立ってゐた。

句中的"冷え冷えと"是一个状语,修饰"擴げて",不能修饰名词"黒光りの板"。因此不能译为"冰冷而黑亮的地板"。"黒光り"是地板旧了,木头变成黑色,但却是擦得通亮。"高く立ってゐた"在这里不是

站在什么高处，也不是亭亭玉立，而是站得笔直，是一种傲慢的态度。

△たうとう芸者に出たのであらうかと、その裾を見て…。

“芸者に出る”是以艺妓身份工作的意思。如同“工場に出る”(进工厂当工人)一样，也就是“当了…”的意思。当艺妓在旧社会俗语叫作“下水”。艺妓在原则上卖艺而不卖身，这与娼妓(しょうぎ)相反。所谓卖艺就是在酒席宴前弹唱歌舞和为客人陪酒助兴。艺妓都是取得公安机关的许可证的。这种许可证叫“鑑札”(かんさつ)。小说中“素人”一词指没有这种许可证，并非正式艺妓，但也为客人陪酒的。与此相对，有时称艺妓为“玄人”(くろうと)。这两个词这时不是一般所说的内行、外行。是“下水”、“没下水”的意思。因为这种“素人”并不等于汉语的“良家妇女”，更不等于”良家闺秀”。后面还要出现的“半玉”和“お酌”这两个词都是“雏妓”的意思。年龄在十八岁以下，歌舞、弹的艺术还未学好，不能献艺，只能侍酒。“お酌”就是给客斟酒的意思。所谓“半玉”是只拿艺妓的一半的报酬。艺妓的报酬叫“玉”(ぎょく)，或“玉代”(ぎょくだい)。艺妓被叫去陪酒，因为要演节目所以都穿上下摆拖得很长的衣服，一般妇女除非举行婚礼等特别的场合一般不穿这种衣服，所以一望即知是艺妓。当岛村第一次来到这个温泉村时，驹子还没有下水，而现在她穿上了长下摆的衣服了，所以岛村心想“她终于当了艺妓”，从而吃了一惊。

这里还应指出的是：日语的一个特点就是句子的主语常常被省略，而且一个句子里的主语常常出现交替的现象。以“たうとう芸者に出たのであらうか”起的这个长句就是这种省略主语和主语多次交替的典型例句。对于这种句子只有根据谓语逐一判断出它的主语，才能得到完全的理解。现在把句中的每一个主语填在括号之内，就会看得清楚：

△(彼女は)たうとう芸者に出たのであらうか

と(島村は)その裾を見てはっとしたけれども、

(彼女は)こちらへ歩いて来るでもない、

(彼女は)体のどこかを崩して迎へるしなを作るでもない、

じっと動かぬ(彼女の)その立ち姿から、彼は遠目にも

眞面目なものを受け取って、急いで行ったが、

女の傍に立っても(彼は)默ってゐた。

上面这些潜在的主语，必要时需要在译文中补上去，才能使译文看得清楚。

△体のどこかを崩して迎へるしなを作る…

“しなを作る”是一个惯用搭配，是做出某种动作、姿态的意思。“しな”这个词汉字用“科”，即西厢记里的“莺莺不语科”那个“科”字。他的定语是把身体的某个关节松开，亦即把“高く立っている”(直挺挺站着)的架势松开的意思。

△遠目にも眞面目なものを受け取って…。

“眞面目なもの”在这里的意思是严肃的气氛，必须认真对待的形势。指的是下面那段叙述的女人对岛村的不满，憋着要跟他算帐的那种表情。

㉙ △あんなことがあったのに…詫びかいひわけを言わねばならない順序だった。

“あんなこと”指的是岛村上次到这里来时，同驹子发生的一切。下文即将倒叙出来。这里说的是岛村对待驹子于理(礼)有亏，不够意思。所以下面有“轮到岛村该有所交待了。”…する順序だ就是“…する

番だ”，所以译为“轮到…”，亦即应该采取主动如何如何的意思。

△彼女は彼を責めるどころか、体いっぱいになつかしさを感じてゐることが知れる。

句中的“どころか”是否定前项，强调后项的接续助词，相当于汉语的“不仅不…而且…”。“感じてゐる”的主语是“彼女”，“知れる”的主语是“彼”(即岛村)，这又是一个有主语交替的句子。“知れる”下接“ので”，表示这是一个原因从句，下面才是主句。

△…なにか彼女に気押される甘い喜びにつつまれてゐた。

句中的“気押される”不是一个词，是“気を押される”，直译是“心情受到压抑”。上面提到“自从有了那事，连信都不来…等等”那女人露出一副要有所指责的态度，岛村感到理亏；于是心里感到压抑。这就是“気押される”的意思。然而在两个人并肩走着的时候，她非但没有责难，甚至可以察觉出她却有一种跟亲人久别重逢的那种浑身上下都对他感到亲切的样子。这就使得本来有愧的岛村感到莫大的温暖，以至于沉浸在一种甜蜜的喜悦之中。这一段只能这样理解，如果把它译为“他仿佛被她慑服，沉浸在美妙的喜悦之中”便令人莫名其妙了。

㉚　△火燵の前で手を離すと…。

“火燵”(こたつ)是日本房屋取暖用的火盆。把燃有少量木炭的火盆放在たたみ上，罩上一个四方的木架，架上蒙盖一个被子。被子的四周垂在たたみ上。人坐在四周把腿盖在被子里(当然也可以把手伸进去)取暖。

△ふふと含み笑いしながら、島村の掌を擴げて、その上に顔を押しあてた。

句中的“含み笑い”是不张嘴的笑，笑声含在嗓子里。“ふふ”是从鼻子出气声。实际上就是在嗓子里笑。

△「君はあの時、ああ言ってたけれども、あれはやっぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。

句中用了三个带“あ”字的指代词：あの（连体词），ああ（副词），あれ（代词）。都属于所谓コソアド系。在指示非眼前事物时，ア系和ソ系的用法上有一个有趣的现象。在对话中，ア和ソ的区别如下：

ア一系列： 只用于它所指示的对象为说话人和听话人所共知的场合。

ソ一系列： 它所指示的对象，说话人知道，而听话人并不知道或者说话人以为他不知道，或者说话人自己也不甚知道时才用。

例(1) 甲：「花子さんには、二年前、東京で会いました。あなたもご一緒でしたね。」

乙：「あの（＊その）時は、花子さんもまだ元気でしたね。」

（乙之不能使用“その時”是因为甲和花子见面时，乙也在场）

例(2) 甲：「花子さんには、二年前、東京で会いました。」

乙：「その（＊あの）時は、花子さんは一人でしたか。」

（乙之不能使用“あの時”是因为甲和花子见面时，乙并不在场，关于他们的会见一无所知。所以必须用“その時”）

句中所用的“あの時”“ああ言っていた”“あれは”都是岛村和驹子所共知，一说就懂的。所以都用あ一系列词。

㉛ あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる。

“あけびの新芽”是木通的嫩芽，春天把它采来可以当菜吃。这一段的第一句已经点出时间是初夏季节，“新绿”就指的是初夏。“間もな

く食膳に見られなくなる”是说春天长出的嫩芽到了初夏已经长老了，很快就不能吃了的意思。木通是一种蔓生植物，也称通脱木，其茎中的髓叫作通草，是中药。

㉜ 無為徒食の島村は自然と自身に対する眞面目さも失ひがちなので。

句中的“自身に対する眞面目さ”是对自己的认真态度，也就是在思想上、道德上、健康上严肃对待自己，不能玩世不恭的意思。“失ひがち”是动词うしなう的连用形后加接尾词がち构成的形容动词。がち表示有某种倾向，一来就如何如何。なので的な是がち的连体形，ので表示原因。下面的“それを呼び戻す”直译是“把它叫回来”，在这里是形象的说法，意思是恢复对待自己的认真态度。それ指的是“眞面目さ”。

㉝ 島村が聞き返すと、…

这是说旅馆的服务员在话中提到一个曲艺师傅家的姑娘，她是何许人，岛村觉得奇怪，于是问了一句。那是在服务员说到“碰巧也许叫得来”时，岛村就插嘴说：“師匠さんの家の娘というと?”。这个というと就是“聞き返す”。那下面的话就是这一问的回答。

㉞ 怪しい話だとたかをくくってゐたが。

“怪しい话”是荒唐、不足凭信的话，“たかをくくる”是“見くびる”的意思，即瞧不起、不予重视的意思。だと下面可以补上“思って”来理解。

㉟ 島村はおやと居住ひを直した。

这个“居住ひをなおした”通常说“居住いをただした”，有“正襟危坐”的意思。这里当然不是那种“肃然起敬”，而是对待一般的生人那

样，把坐在踏踏密上随便伸出的腿盘起来，坐正了而已。

㊱ 山々の初夏を見てきた自分の眼のせゐかと、島村は疑ったほどだった。

初夏的山中一片新绿，给人以清新之感，这是可以理解的。按说在这种草木欣欣向荣，结冻的泉水也特别清澈的环境中呆了一个星期之后，来到一个老旧的小旅馆来，应该是看什么都不干净。而作者仿佛是把这女人给人的清洁之感归结为岛村看惯了山中的清新的缘故，这岂非有悖于常理呢？然而，不是这样的。这里要注意的是开头的一句："女の印象の不思議なくらひ清潔であった。"这个"不思議なくらひ"包含的意思就是岛村从山里来到这里以后，在他眼里一切都是污浊的，只有这个女人给人以清洁之感，所以"达到了出奇的程度"。

㊲ 着つけにどこか藝者風なところがあったが。

这个"着つけ"在这里是"着こなしかた"即穿衣的技术，"着こなす"是"会穿"的意思。所以无论把它译作"衣服、装束、打扮"都不能完全表达原意。一样衣服，会穿的人穿起来就好看，不会穿的人穿起来就不好看。特别是日本女子的和服。腰上要系一条装饰性的一尺来宽的带子。它底下要先系一条细带子，会穿不会穿，这条细带子起着很重要的作用。比如说领子是紧贴在脖颈上呢，还是向后拉开露出脖子，甚至连脊背的一部分都露出来呢？那宽宽的装饰性的腰带是系得靠上还是靠下呢？衣服的下摆是留得长长的还是适可而止呢？这里大有分寸。所以年轻女子出嫁要穿盛装时，往往要有专门会穿衣服的人来帮忙（这叫"花嫁の着つけをする"，靠自己是办不到的。句中说"どこか（有点儿）藝者風なところがあった"就是指艺妓的独特的穿法。其中之一就是衣领要尽量往后拉，甚至要露出一部分脊背，而良家妇女就不是这样的。所以一望而知女人的打扮是艺妓的派头。当然还不止于这一点。

㊳ 帯だけは不似合に高価なものらしく、それが反ってなにかいたましく見えた。

句中的いたましい是"かわいそうで、見ていられない"的意思。这里译为"怪可怜见儿的"。这是因为那条带子是不合身分地高贵，一个在村镇上混事的青年女子，买那么贵的腰带来打扮自己，要花上多长的时间才能攒下这笔钱呀，所以引起了岛村的同情。

㊴ 山の話などはじめたのをしほに…。

しほ等于しおどき，原是涨潮落潮的时刻，在这里是"机会"的意思。"…をしほに"就是"趁着…的机会"。

㊵ この十九が二十一二に見えることに島村ははじめてくつろぎを見つけ出して…。

句中的くつろぎ是自动词くつろぐ的名词形，在这里是"无所拘束，可以随便谈话"的意思。汉字写"寛ぐ"，全句是说，女人虽然自己说是十九岁，可是看起来也有二十出头了，有一定社会经验，跟她可以什么都聊，不必拘束的意思。所以接下去就谈起"歌舞伎"的事情来。"歌舞伎"是日本的一种旧剧，自江户时代一直流传至今，犹如我国的京剧。

㊶ 根が花柳界出の女らしいうちとけやうを示して来た。

うちとける是したしくなる(亲密起来)的意思。前面的"根が花柳界出の女らしい"(根本就是烟花出身的女子那样)，因为烟花出身的人以跟男人打交道为业，接触的人多，跟谁都谈得来。这里的うちとけよう是一个名词性的宾语，所以译为"自来熟"。不是"坦率"，更非什么"天性"，乃是职业上的习惯。下面所说的"男の気心を一通り知ってゐる"也是从这种职业中得来的经验。

㊷ 山の感傷が女の上にまで尾をひいて来た。

“尾を引く”是一个成语，字面是拖着尾巴，意思是“留下影响”，亦即某种影响在继续起着作用。句子的主语“感傷”指的是孤身一人在山中呆了七八天所产生的“孤独之感”，是前一句所说“人なつかしさ”（对任何人，只要是人，都感到亲切）的感情。而这种感情的影响一直作用到对待这个女人的关系上。这也就是为什么岛村一见到这个女人就首先感到了友情的缘故。这个句子不是“他从山上带来的伤感也沾到了女子的身上”的意思。

㊸ 「世話するって?」

这个“世話”原意是“帮忙”或“帮着办什么事”。“藝者を世話する”就是帮忙介绍一个艺妓。他这个请求对这个女人来说是非常突然的。因为她自己就是作为艺妓被找来的。所以问道：“介绍?”当岛村答她“分ってるぢゃないか”，她这才明白过来。脱口而出的便是いやあねえ。即是把いやね的や字和ね字拖长发音，表示一种鄙夷之感，但语气没有“真讨厌!”那么重，把いや拉长为いやあ就是为了缓和语气的。所以这里译为“那怎么行!”。接下去她说：“ここにはそんな人ありませんわよ。”（这里可没有那种人哪）含义是没有卖淫的艺妓。わよ两个终助词连用，使得语气比较坚决，言外有“你要知道，这可是真话”的含义。但岛村并不相信，说了一句“嘘をつけ”。“嘘をつく”是撒谎，つけ是它的命令形，语气比较重。这句话很重要，以“あの時は…”开始的这段倒叙就是它引起的。就是说，岛村第一次来时说的这个“嘘をつけ”（他不相信这里没有那种人），第二次来再一次肯定他的看法，并且加上一个理由，“そうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。”

㊹ 「友だちだと思ってるんだ。友だちにしときたいから、君は口説かないんだよ。」

しときたい是しておきたい的约音，意思是“留着你，作为朋友”。“君は”是“君を”的意思，“口説く”用于女人时，是用甜言蜜语使之就范的意思。这个句子是说“要跟你作朋友，所以不想跟你发生关系”。

㊺ 女はつい誘われて子供っぽく言ったが。

这是针对女人说“朋友就得这样吗？”这句话说的。含有“朋友就得给你介绍女人吗”的意思。这话当然有点蠢，所以说“子供っぽく言った”。

㊻ 「えらいと思ふわ。」直译是“你真了不起”。下面的“よくそんなことが私にお頼めになれますわ。”是个病句，一个谓语出现了两个可能态——“頼める”和“なれる”。标准说法应是“お頼みになれます”。

㊼ 山で丈夫になって来たんだよ。頭がさっぱりしないんだ。君とだって、からっとした気持ちで話が出来やしない。

这是说在山里锻炼了一个星期，身体壮起来了。可是上焦有火。前两句都是用のだ结句，是解释理由的语气。理由当然是要找女人。因此，如果这个问题不解决，就“君とだって、からっとした気持ちで話ができやしない。”（跟你也不能没有邪念地畅谈）。からっとした的からっと是个拟态词，是からりと的加重语气。原意是“胸怀坦荡，没有邪念”，就是说以朋友相待，超越男女性别的意思。

㊽ 島村はかうなればもう男の厚かましさをさらけ出してゐるだけなのに…。

句中的かうなれば指前边岛村说的那几句话,"男の厚かましさ"指岛村赤裸裸地说出他急着要找女人的理由,而这只能说是男人的厚颜无耻了。

㊾ [その伏目は(濃い睫毛のせゐか)ぽうっと温かく艶めく]と島村が眺めてゐるうちに‖女の顔はほんの少し左右に揺れて、また薄赤らんだ。

这个句子比较复杂,必须弄清句法关系才能正确地理解。句子的‖前面是一个以うちに为中心词的时间补语成分。‖后面是主句,比较简单,这里不谈。[]内是一个主谓结构,后加と构成状语,修饰"眺める",亦即岛村望见的内容。()内是一个插入语。它后边的"ぽうっと温かく"是一个偏正结构的状语,修饰"艶めく"。"艶めく"是"色気が感じられる"的意思。这里译为"脉脉含情"。

㊿ 「知らないっ。」と、強く投げつけてそっぽを向いたものの。

这个"知らないっ"的最后一个促音,表示语气的强烈。这是针对前一句岛村讲些言不由衷的歪理表示不耐烦的语气。"知らない"这个词组,除了"不知道"的意思外,有时有"不管"或"管不着"的意思。在这里是"我不要再听了"的意思。因为她对岛村在前面又提出什么你自己给我选等等的话,是她最不爱听的。因此"強く投げつけて"(像拽过去一块石头)这里译为狠狠地抢白了一句,然后"そっぽを向いた"(把脸扭向一旁)。

51 私なんかまだ子供ですけれど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は好きだとも言はなかった人の方が、いつまでもなつかしいのね。忘れないのね。

句中的"人の方が"是いつまでもなつかしい的对象语，意思是这种人老是令人怀念。"人の方が"前面的"なんとなく…"看上去好像是它的定语句。一般说来定语句的中心词就是这个定语句的主语。例如"大学入試にすべった太郎がかわいそうだ"中的太郎就是没考上大学的。但是这里的"人の方が"却不能这样理解，因为说"言わなかった"的并不是他而是人家没对他说。如果弄不清这一点，按照一般定语句和中心词的关系来翻译，就会是这样："心里觉得喜欢你而当面又不说喜欢你的人，总使你依依不舍。"这样在逻辑上就讲不通了。试想一个人只是心里喜欢你，但他并没对你说出来，你怎么会知道他喜欢你，从而使你依依不舍呢？这个句子所以不好理解是因为原文中有省略，主要是对象语和指代词。如果把它补上去再看，就清楚了。下面()内就是补充：

(ある人が)なんとなく好きで，その時は(その人に)好きだとも言わなかった。(その)人の方がいつまでもなつかしい。

由此可见，句中"言わなかった"的主语并非"その人"，它只是なつかしい的对象语，而なつかしい的主语才是"言わなかった"的主语，而它在句中被省略了。为什么？首先要注意到前面的"いろんな人の話を聞いてみても"就会明白，"なんとなく…"以下，是"いろんな人"的共同意见，是作为一个大道理讲的，对任何人都适用，所以只能是一个无主句。另外还有一个问题，那就是为什么说"人の方が"而不说"人が"呢？这是因为这句话言外的意思是说有两种人：一种人是自己喜欢他，并且也向他表示过；另一种人是自己喜欢他但并未向他表示过。这两种人相比之下，令人久久怀念的是后一种人。再补充一句，这句话是针对前面岛村说"なにしたらおしまひさ。味気ないよ。長続きしないだらう。"说的，是同意他那个"長続きしない"的说法，并且举出许多人(当然也包括她本人)的意见，从反面来证明"長読きする"的例子。

52 女に友情のやうなものを感じたといっても、彼はその程度の浅瀬を渡ってゐたのだった。

句中的“浅瀬を渡る”如果直译为“渡过浅滩”就会令人莫名其妙。从上文看就可以知道，岛村虽然嘴里说他要和她以朋友相交，不想跟她发生关系，但骨子里还是想勾引这个年轻的、不明来历的女子。他的那些话不过是项庄舞剑、意在沛公，就是日本话的“敵は本能寺にあり”。大家知道，日语里有“瀬踏”(せぶみ)这个词，意思是“川を渡る前に瀬に入って水の深さをしらべることから、物ごとをする前にためしてみること”(蹚水过河时，先下到浅处调查一下水的深浅，转为要做什么之前，先试探一下)。这里的“浅瀬を渡ってゐた”就是这个意思。当然，任何试探都是带有一定危险的。

53 今の身の上が曖昧な女の後腐れを嫌ふばかりでなく…。

句中的“身の上が曖昧な女”指驹子，是一个来历、身份都不明的女子，她究竟是不是艺妓呢？她住在曲艺师傅家里，同这家的少东家是什么关系呢？同叶子又是什么关系呢？同她发生关系，事后是否能不带来麻烦呢？岛村是顾虑重重的。这个句子没有主语，逻辑上当然说的是岛村。如果把“身の上が”当做主语去理解，就莫名其妙了。

54 彼の西洋舞踊趣味にしてもそうだった。

句中的…にしても是表示举例、假定或让步的成分，相当于汉语的介词成分。后边的そう是副词，指代前一句的谓语“非現実的な見方をしていた”，是说岛村对西方舞蹈的看法也是脱离现实的。下边一大段文字讲的就是怎么个脱离现实法儿。

“下町育ち”的“下町”是指都市中地势较低而平坦的商业地区，等于英语的 down town 这个词，与“山の手”相对而言。后者是都市周围

接近山区而地势较高的地区。拿东京来说是住宅区。"下町育ち"是自幼生长在商业区的意思。

"歌舞伎"是一种旧剧，是江户时代商人文化的产物，剧院设在商业区。所以说岛村自幼就熟悉(なじんでいる)它。

55 気持に狩り立てられる。

这是个补谓结构，"狩り立てる"在这里是"驱使(做什么)"的意思，"狩り立てられる"是被使役态。这个谓语也可以带を格宾语，例如说"…という気持を狩り立てられる"。两者的不同在于：用に格时指本来没有这种心情受到外部的影响而产生了这种心情；用を格时指本来就有这种心情，但不够热烈，受到外部影响变得热烈了。

56 "ここに新しく見つけた喜びは"

句中的ここに指的是前两句所说的搜集西方舞蹈的书刊和照片，以及千方百计从国外弄来舞蹈的海报、节目表的事，岛村就是在这件事情中发现了一个乐趣。这种乐趣就在于看不见西洋人舞蹈这件事情之中。这当然是作者对岛村的一种讽刺。而更大的一个讽刺则是下面的：

57 "見ぬ恋にあこがれる"直译是"憧憬着尚未看见的恋爱"。这里译为：未见其人而害了相思病。

58 だから、自分の淡い旅愁じみた言葉が…。

句中"名词＋じみた"是一个复合动词，上一段活用。じみる是一个接尾词，表示含有贬义的类似。

59 「私もそんなのが大好き、あっさりしたのが長続きするわ。」

句中的两个の都是形式名词，指代他们俩的交际关系。そんなの

指前边岛村说的情况，即他的妻子到这儿来时还可以愉快地在一块儿玩儿。あっさり本是副词，表示清爽、清洁，心里没有什么不愉快的意思。あっさり在这里是下接する构成サ变动词，这里指的是“清白的男女交往”。

⑥⓪「驚きますわ。こんな眞昼間になんにもおっしゃれないでしょう。」

小说中的对话，可能是初学翻译小说者的一个难关。这主要是由于对话中往往省略了主语。这个句子就是一个很好的例子。这种句子首先要理解好上下文，根据它的谓语来判断出主语来，必要时在译文中把它补上去。这样，读者才能读得明白。这个译句，作为汉语来读，“吃惊的和不好意思开口的”主语就都成为说话人自己了。那就完全拧了。要注意“驚きますわ”用的是现在时制，表达的时态是现在或最近的将来。要说自己吃惊则必须说“驚きました”。原文用“驚きます”是指大白天去叫艺妓，而又不是有什么宴会去陪酒，所以那个艺妓必定大吃一惊。下边的“なんにもおっしゃれないでしょう”的主语很明显是指岛村，因为用的是敬语。意思是说“大白天儿地你很难说出口(叫人家陪你睡觉)吧”。

⑥①「屑が残るといやだよ。」

句中的“屑”本意是“役に立たぬもの”或“つまらないもの”，即“无用的人或物，不好的人或物”。这里是指没人叫的艺妓，“屑が残る”指剩下的，没人问津的艺妓。所以译为“剩货我可不要”。有的译本把这个句子译为“我不愿意留下孽种”，是不正确的。

⑥② 島村が疑うと、女はむきになって、

「しかし一歩譲って、それはどうしようと芸者の勝手だけれども、ただ、うちへことわらずに泊れば芸者の

責任で、どうなろうとかまってはくれないが、うちへことわつとけば抱主の責任で、どこまでも後を見てくれる、それだけのちがいだ」と言う。

这个句子很长,「」内是一个间接引语。“しかし一歩譲って”是引语的一部分,不能理解为“…と言う”的状语。句中的“抱主”是雇用汽车司机、艺妓等的雇主,这里译为“老板”,被雇用者可以称作“抱え”,与“抱主”相对。如说“お抱えの運転手”(私人雇用的司机)。

⑥③ 「厭なの。」と、女は屈辱を振り払うように

句中的“屈辱”指的是当着她(駒子)的面,不向她求爱而硬要令她另外找一个艺妓,因而产生的心理状态。“屈辱を振り払うように”是说这个女人(原文一直用“女”这个词代替“駒子”)装出一副满不在乎的样子。

⑥④ 島村がむっつりしているので、女は気をきかせたつもりらしく默って立ち上って行ってしまうと、一層座が白けて,それでももう一時間くらいは経っただろうから…。

句中的“女は”照例指的是驹子。“気をきかせる”是一个惯用词组,是替别人着想,为了别人的方便的意思。つもりらしく表示推测。“…行ってしまうと”的と,在这里是表示既定条件,而不是假定条件,因而不是“如果…”的意思。这一点必须注意。它表示既定还是假定要由下面一句的谓语的时态来决定。在这个句子中是由下面的“一時間くらいは経った”的た来决定。如果把と以前以后的两个句子分开,作为两个句子处理,就是:“…行ってしまった。すると…”。と和たら这两个接续助词的不同之点,就在于たら只能表示既定条件,而と则既可以表示既定条件也可以表示假定条件,关键在于后半句动词的时态如

何来决定。

⑥⑤ なにがおかしいのか、一人で笑いが止まらなった。

前半句是一个状语，意思是"什么东西那么可笑"，后半句的"笑いが止まらなかった"的主语仍是前一句的"島村は"。

⑥⑥ くるっと振り向きざま浴衣の尻からげして…

句中的ざま是一个接尾词，接在动词连用形下面，表示与动作的同时，例如：振り返りざま切りつけた。/转过身来就是一刀。"尻からげ"是把和服的正后面的底襟拉起来掖进腰带的后腰里，为了是行路方便，省得下摆绊脚。"尻からげ"本身是个名词，可以后加する作为サ变动词用。

⑥⑦ 苔のついた狛犬の傍の平な岩に女は腰をおろした。

"狛犬"是类似狮子的一对兽像，摆在神社的门前或殿前。据说是从古代朝鲜传入日本的，读音为こまいぬ的こま即是"高丽"的读音。

⑥⑧ 暗い葉が空をふさいでいるので、しいんと静けさが鳴っていた。

句中的"静けさが鳴っていた"按字面不好理解。这里是强调寂静得很，甚至能听到自己耳朵里有铮铮之声。

⑥⑨ 七日間の山の健康を簡単に洗濯しようと思いついたのも…

这个"洗濯する"是"命の洗濯"的意思，时髦的话叫作"レクリエーション"。

⑦⓪ 「あら忘れてたわ。お煙草でしょう。」

这个“お煙草でしょう。”是“お草煙がほしくなったでしょう。”的简略说法。这是女人表示对岛村的无微不至的关怀。要是理解为“这是你的香烟吧?”就错了。有“你要抽烟了吧?”的意思。

⑦1 「君とそう見劣りしない女でないと、後で君と会った時心外じゃないか。」

句中的“君とそう見劣りしない”在“君と”下面省略了“比べて”,可以把它补上来理解。“心外”是事出意外而感到遗憾的意思。这半句也有省略,说完全了应是“後で君と会った時、君が心外に思うじゃないか”。

⑦2 なにかすっと抜けたように涼しい姿だった。

这个“すっと抜けたように”是修饰“涼しい”的状语,表示某种堵塞在胸中的东西一下子去掉而产生的畅快之感,结合“涼しい”,来形容驹子的姿态。

⑦3 目尻が上がりも下がりもせず、わざと眞直ぐに描いたような眼はどこかおかしいようながら…

最后的おかしいようながら一般要说おかしいようでありながら。どこか和前条的なにか都是副词性的词组,是表示不肯定的疑问词。どこかおかしい是说有点不正常,但是究竟哪里不正常却也说不出来。下面的接续助词ながら在这里表示逆接。这个おかしい在这里并非“可笑”的意思,和日语的“変だ”同义。

⑦4 もう二人の顔が所在なげに白けて来るばかりだった。

句末的“…(する)ばかりだ”是一个惯用型,表示“只能(会)如何如何,别无他法”。“所在なげ”是一个形容动词,由形容词“所在ない”的词干加接尾词げ构成。“所在ない”是无事可做而感到无聊的意思。

げ是表露出来的样子、神情。"顔が白けて来る"是说脸上露出来不高兴(败兴)的神色。指某一种场合而言时,就是彼此都发窘,因而造成一种冷场的局面。

⑮ この冬スキイ場でなじみになった男達が…。

句中的"この冬"指的是去年12到今年1、2月这三个月。なじみ是名词,是动词なじむ的连用形,意思是"熟识",说"なじみの客"是老主顾的意思。

⑯ 「悪いから行って来るわね。どうしたかと捜してるわ。後でまた来るわね。」

这一连串三句话的首尾两句都用わね结尾,表示的是一种商量的语气。わ表示决心,ね表示征求同意。"悪いから"的"悪い"是"对不起",等于すまない。要表示对不起谁时,就用に格助词,如说"田中君に悪い"(对不起田中)。这里是说对不起那些请她来陪酒的人们。どうしたかと下面省略了"思って"是状语,表示寻找的理由。

⑰ 「酔ってやしないよ。ううん、酔ってるもんか…」

…てやしない是…ていはしない中的いは缩成や,…ていはしない是…ていない的强调说法,口语中常见。ううん的发音类似汉语的第三声,而不是第四声。这个ううん是把表示肯定的感叹词うん拉长,用上述声调表示否定的。例如:「これはお前がやったんだろう?」—「ううん,違うよ」/"这是你干的吧?"——"不,不是。"

⑱ そして島村はその日東京に帰ったのだった。

这个句子要注意结尾的…のだった。这是所谓のだ句的过去时,有一种说明和解释的语气,这同没有のだ的单纯叙述句不同。所以不能仅仅译为"岛村在当天回到了东京"。须知,这个句子前面,从「あの

時は、——雪崩の危険期が過ぎて、新緑の登山季節に入った頃だった」起，直到这一句为止是一段很长的倒叙，说明了岛村再一次到雪国来的原因。所以这个句子使用了のだ句，而这个のだ的语气在这里是很重要的，在译文中必须反映出来。

⑲ 开头一段话是岛村说的，也是本篇第14页的一句话重复。文章中的第15页第一行—37页第三行是倒叙岛村第一次来到雪国这个温泉和女主人公驹子的相逢。

「女がふっと顔を上げると…」这个ふっと是副词ふと的加强语势的说法，表示动作的突然发生。

「その顔は眩しげに含み笑いを浮べていたが，そうするにも…」そうする指代"含み笑いを浮べていた"这个宾谓词组。

「…なまなましく濡れた裸を剝き出したようであった。」"濡れた裸"不能按字面理解为"濡湿了的裸体"。"濡れる"这个词有性交的意思。在日本的旧剧中常常出现"濡れかかる"，"濡れごと"，"濡れ話"等词中的"濡れ"都是这个意思。句中的"剝き出す"这个动词通常用其连用形"剝き出し"，如："不快の感情を剝き出しにする"(毫不掩饰地露出不快的感情)；"剝き出しの肌"(光着的身子)；"剝き出しの不信任感"(露骨的不信任感)。这里把"なまなましく…のようだ"这个句型译为"活象…"。

「後れ毛一つなく」"後れ毛"指鬓角上梳不拢的短发。

⑳△[東京でお酌に出る少し前から]这是说这个女人在东京当侍酒前不久。"お酌"在这里是职业名称，也叫"半玉"。这里译为"侍酒"。这些请参看前面的注解。"出る"就是"当侍酒"的"当"，是从事这个职业，不是"出去侍酒"。

「お金が自由にならない」就是“お金が不自由だ”，是手头紧，没钱的意思。

「この頃は巻紙へぢかでしょう」“巻紙”与汉语的“卷纸”不同，不是卫生纸，是作信纸用的成卷儿的高级纸，以楮树皮为原料，楮皮也是中国宣纸的原料，所以两种纸相似。ぢかでしょう的ぢか(直接)下面省略了“に書く”。でしょう发音时扬声，表示征求对方同意。以下这类以でしょう结句的句子大都是这种用法。从“手習だって”起的这个句子是证明前一句“物を粗末にする”。

「ずっと缺かさず，日記をつけてるのかい」“ずっと缺かさず”(一直不断)是一个副谓结构，在这里作状语，是“一次不落”的意思。如：“毎朝缺かさずラジオ体操をする”(每天早晨一次不落做广播操)。“缺かさず”是“缺かさない”的終止形，作谓语时常用“缺かすことができない”。如：“米は一日も缺かすことができない”(一天没米也不行)。

[いつもお座敷から帰って…]句中的“お座敷”虽然有“宴席”的意思，但对一个艺妓来说，乃是指她的工作，也就是陪酒，并非出席宴会作客。哪里有宴会找艺妓陪酒，在她们的立场上说，就叫“お座敷がかかる”，艺妓出去陪酒叫“お座敷に出る”，所以这里译作“陪酒”。因此下面的“お座敷へ出たってきまりきってるでしょう。”也可以说“お座敷がかかったってきまりきってるでしょう”。这个きまりきっている或きまりきった是惯用词组，有“千篇一律”、“左不过那么回事”的意思。

这一段对话中有许多简略的说法，都是在实际会话中常用的说法。如：“毎日毎日ってんじゃなく”的ってんじゃなく是というのではなく；きまりきってる是きまりきっている；“書いとく”是“書いてお

く"。

⑧① [「そうですわ。」と,女はこともなげに明るく答えて…]句中的こともなげ是一个惯用词组,由"こと＋も＋な＋げ"构成,其中なげ是ない的词干な加构成形容动词词干的げ,表示某种样子。如:"うれしげ"(高兴的样子);わけありげ(好像有什么原因似的);腹立たしげ(生气的样子)。"

[全く徒労であると,島村はなぜかもう一度声を強めようとした途端に,雪の鳴るような静けさが身にしみて,それは女に惹きつけられたのであった。]这个句子有几点需要理解清楚。什么是"雪の鳴るような静けさ",乍一看仿佛有些矛盾,既然雪在发出声响,就不能说"寂静"二字。其实不然,在严寒的时刻,积雪就常常发出冻结的声音,而这种声音非常微弱,若不是寂静得鸦雀无声,就听不到这种声响。因此,这个"雪の鳴るような"是极言其寂静的一个修饰语。所以这个词组不能直译。

另外需要注意的是なぜか这个副词(状语),它修饰的是"静けさが身にしみて",而不是"声を強めようとした"。要记住,日语的连用修饰语(状语)在句子中往往提前,不一定紧接被修饰成分,尤其是两个连用修饰成分并列的时候。这个句子就是这样。なぜか和"途端に"都是修饰成分,它们都是"身にしみて"的しみる这一个动词的状语。并列成分一般是可以调换位置的。就这个句子而言,既可以把它放在句首,说:"なぜか全く徒労であると島村はもう一度声を強めようとした途端に…,"又可以移后,说"全く徒労であると,島村はもう一度声を強めようとした途端に,なぜか雪の鳴るような静けさが身にしみて…"。最后的"それは女に惹きつけられたのであった"就是对なぜか的回答。因此,这个句子完全可以分为如下两个句子来理解:

"全く徒労であると,島村はもう一度声を強めようとした途端

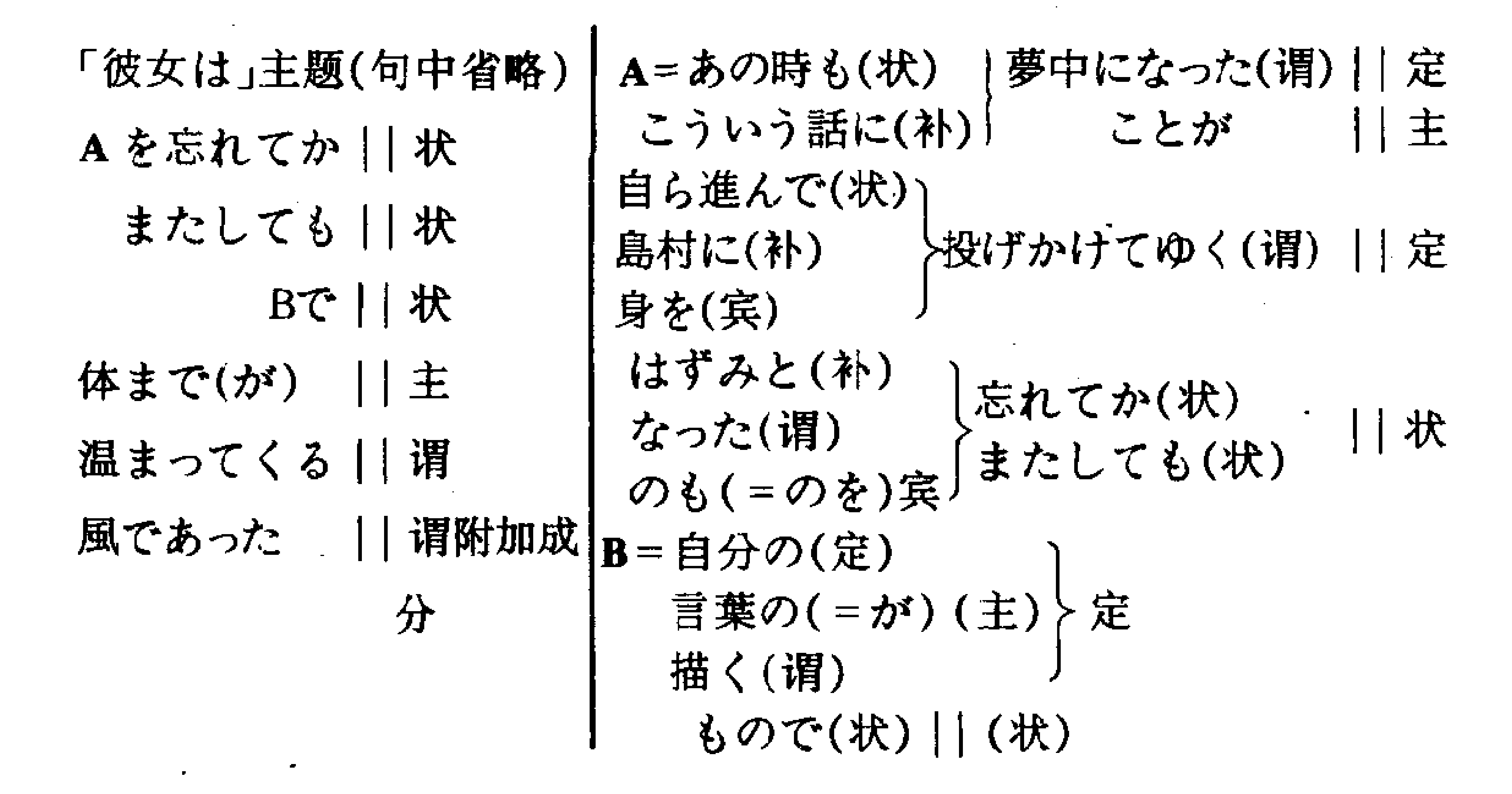
に,雪の鳴るような静けさが身にしみたのはなぜか”

“それは(島村が)女に惹きつけられたのであった”

[…なにか反って彼女の存在が純粋に感じられるのであった。]句中的“存在”是英语 being 或德语 Zein 的译词,在哲学中有“客观存在,实在,有”等意思。用于人时,是“为人、天性、本性”的意思。在这里指的是“她的为人”,不能直接用“存在”两个字。“感じられる”的られる当然是表示自发,不是被动态。

㉜ [しかし彼女の口振りは,まるで外国文学の遠い話をしているようで,無欲な乞食に似た哀れな響きがあった。]句中“外国文学の遠い話”的の不是所有格助词,而是同格助词。因此这个词组可以改为“外国文学である遠い話”或者“遠い話である外国文学”。就是说,外国文学和本国文学不同,跟自己的关系是遥远的,没有亲近感。如同外国人读《红楼梦》,中国人读《源氏物语》,再好的翻译,对读者来说,也是遥远的故事。她本来是爱好日本文学的,但却是浅尝辄止,不能深入。这就如同身入宝山却空手而出。所以说她的语气听起来有一种类似一个毫无贪心的乞丐般可怜的味道。乞丐本来应该是贪得无厌的,而现在却出来一个安于现状的乞丐,岂非天下最大的可怜虫?

△[百九十九日前のあの時も,こういう話に夢中になったことが,自ら進んで島村に身を投げかけてゆくはずみとなったのも忘れてか,またしても自分の言葉の描くもので体まで温まって来る風であった。]这个句子比较复杂,可以简化一下,搞清楚各个成分的关系:



句中的はずみ是名词，意为“势头、情势”，如：“その場のはずみで”(以当时的情势为转移)。句中的“…はずみで…となる”是“由于…而造成…原因”的意思。如：“どうしたはずみか，そういう結果になった”(不知怎么搞的落了个那样的结果)。

[都会的なものへのあこがれも，今はもう素直なあきらめにつつまれて無心な夢のようであったから，都の落人じみた高慢な不平よりも，単純な徒労の感が強かった。]句中的“都会的なもの”指的是山村里所没有的或者少有的事物，特别是文艺性的、娱乐性的东西，如电影、演剧、音乐等等。あこがれ就是对这些东西的向往。一个人既然一旦离开都市，定居在山村，对这些就得死了心，不再追求，但又不能完全死心，只能表面上暂且放弃。所以说“素直なあきらめに包まれて”，也就是把对都市的向往无可奈何地包上一层甘愿放弃的外衣。然而一般说来，被迫从都市流落出来的人，亦即“都の落人”(也叫“都落ちした人”)对于自己的遭遇往往是心怀不满的。另一方面，对于乡村和乡村人是瞧不起的。所以说“高慢な不平”。而这个女人的不满并不强烈，有一种安分守己的样子。但她对文学的爱好以及那么辛勤地记日记，对她是无用的。

句中的"都の落人じみた"的じみる是一个接尾词，接在名词下面，构成上一段活用动词，表示"类似"的意思。例如："あの人はまだ若いのに，どうも年寄じみている"(那个人年纪轻轻的却像一个老人)。

⑧③ [いずれにしろ，島村は彼女を見直したことにはなるので，相手が芸者というものになった今は反って言い出しにくかった。]いずれにしろ(无论如何，总之)指的是岛村心里对女人的评价。不管这些评价如何，他总算对她有了新的看法，亦即另眼看待。再加上女人现在正式当上了艺妓，和上次来时还是一个しろうと有所不同了。而艺妓的たてまえ(表面上的原则)是卖艺而不卖身，所以岛村这时觉得有话却不好开口了。就在他这样迟疑不决的当儿，女人是敏感的，早已有所察觉，趁着这时听到的汽笛声说了一句"零時の上りだわ"，意思是告诉岛村现在已是半夜，有什么话快说吧。

⑧④ 女は手摺にしがみつきながら声をつまらせて。

句中的しがみつく是抱住、抓住不撒手。つまらせる虽是つまる的使役态，但并非有意识的动作，乃是"声がつまって"的又一种说法，同样表示不由自主的动作。如同"顔を赤らめる"虽是"顔が赤らむ"的使役态，但也是不由自主的一样。

从"私帰るわ"起的几句对话，可以看出那女人对岛村的眷恋。她口里虽然说要走，但岛村让她走时，她又不走了。而且当岛村要去浴池洗澡去，她竟然乖乖地跟去了。这里要交代的是，日本的一些温泉浴池，特别是战前，有的根本不分男女，有的虽然分为おとこゆ(男浴池)和おんなゆ(女浴池)，但都是可以男女混浴的。如果是夫妻就更是平常的事情。另外，凡是公共浴池即"銭湯(せんとう)"浴室前面都有一个脱衣间，放着很多竹筐箩，每人把自己的衣服放进一个筐箩里。

△女は横にした首を軽く浮かして…句中的"横にした首"是歪着

的脖子，“浮かして”是“悬空着”，亦即不依靠着什么，也没有什么东西支撑着的意思。“軽く”修饰“浮かす”，是说脖子歪得并不那么吃力的样子。

固い女帯をしごく音で，島村は目が覚めたらしかった。句中的“固い女帯”是一种织得质地致密、非常板实的材料，多半是叫作“博多織”(はかたおり)的丝织物缝制的女子用衣带。因为带子很长，往身上系时，要用手捋着(しごく)它一圈一圈地往腰上缠，因而就发出窸窣的摩擦声。

「嘘よ。よく見て下さらなければ駄目よ。どう?」这个“嘘よ”不是撒谎，是说“你说的不对”。当然更不是“胡说”的意思。例如：“この映画を見なければ嘘だ”(要不看这个电影，那就错了)。

秋田犬(あきたいぬ)是产于日本秋田县的一种大狗，性情凶猛，适于看守或作斗狗。

そのほのかな黴の匂いは湯気で甘くなって…是说晒着的滑雪板散出的发霉味儿，和温泉水的蒸汽混起来冲淡了刺鼻的气味，不是变甜了。“甘い”这个词除了“甜”以外还有“不咸”或“口轻 ”的意思。如：“塩がきいていなくて甘い”(盐放少了，口淡)。另外还有“不严”的意思。如：“李先生は点が甘い”(李老师打分儿打得宽)以及其他。

㉟ 从「やがて」起的前三句都是驹子说的话。第一句：

△やがて年の暮から正月になれば，あの道が吹雪で見えなくなる。

此句的前半句是一个时间状语，“年の暮から正月になれば”是指从年末到年初这一段时间，等于“年の暮から正月にかけて”，正是降大雪的季节。第二句的“お座敷へ通う”是说她被叫去到宴会上去陪酒。“通う”是一个继续动词，指的是经常往返。例如：“学校に通う”(上学)、“会社に通う”(上下班)。“お座敷”在这里是艺妓的行话。有人叫

艺妓去陪酒，从艺妓的角度来说，叫做“お座敷がかかる”。艺妓的职业就是经常从家里(或下处)到宴会上去，所以用“通う”这个词儿。因此不能把“お座敷へ通う”理解为“赴宴”。因为“赴宴”的是客人，而艺妓是陪客人喝酒，以歌舞助兴的。“赴宴”用日语说，是“宴会に出席する”。

第四句用“そう言って”把前边的三句话概括起来，和“丘の上の宿の窓から”一起作为“女が夜明け前に見下していた”的并列状语。而“そう言って”到“女が…見下していた”这一段是“坂道”的定语句。“坂道を”是“島村が今下りて行く”的宾语。这一段文字，笔法简练，写得很巧妙。けれども以下是逆接，表达的是现在还没到大雪的季节，虽然已经下过雪，但是天气还比较暖和。这要从：

△その雪の輝きものどかであった。青い葱はまだ雪に埋もれてはいなかった。

这个句中的も、まだ…てはいない这些字眼儿来体会。も是和道旁还晒着尿布相呼应。严寒的天气是无法在外头晒尿布的。绿色的大葱还没有被大雪盖掉也是表达还没有降大雪的。房檐下的小冰柱滴滴答答融化也是烘托这个气氛的。

△軒端の小さい氷柱が可愛く光っていた。

是一个特殊的句子。“可愛く”如果按常规理解为“光っている”的状语，便在逻辑上讲不通。因为“可愛い”这个词在这里是对小巧的东西、纤弱的东西、年幼的人或动物一种爱惜之感。在这个句子里就是“小さい氷柱”的小巧可爱之感。所以这个“可愛く光っている”应该理解为“可愛く，光っている”，也就是理解为并列的谓语，等于“小さい氷柱が可愛くて，光っている”，所以本文译作“玲珑可爱，闪闪发光”。

⑱ 湯帰りの女が眩しそうに濡れ手拭で額を拭いた。

句中的"湯帰り"是"洗过澡回来"的意思，她仰起头来跟房顶上扫雪的人说话，可能是朝着太阳，所以晃眼，而刚刚洗了温泉，身上是温暖的，同时天气又不冷，所以额头上有了汗。

△スキイ季節を目指して早くも流れこんで来た女給であろう。

句中的"目指す"是"以…为目标"的意思。因为一到了滑雪季节，这个雪国的温泉乡就将招来大批滑雪的人，因而对这个山村来说也就是咖啡馆等娱乐场所的旺季。咖啡馆因为平时没有什么生意，一直是关门的，到了旺季要开门自然人手不够，所以有些女招待从外地赶来。

△低い屋並みが北国らしくじっと地に伏したようであった。

句中的"屋並み"是一排一排的房子。"北国らしい"中的らしい是接在名词下构成形容词的接尾词，表示"不愧是…"。因此不能同表示推测的助动词らしい混为一谈。

⑰ 子供の群が溝の氷を抱き起して来ては，道に投げて遊んでいた。

这个句子要注意的是"抱き起して来ては"的は字。它表示动作的反复实现。因此孩子们从沟里抱出冰来就往路上一摔，并非一次，而是多次。这就是孩子们游戏的内容，并不是什么"嬉戏打闹。

△今朝になって宿の女中からその芸名を聞いた駒子もそこにいそうだと思うと…。

句中的"今朝になって"是一个状语，修饰动词"聞いた"。意思是过去一直不知道，直到今儿早晨才听说的。"芸名"原是妓女的花名，也叫「源氏名」(げんじな)，不是真名。现在艺妓、女招待也都使用艺名。

そこにいそうだ的いそうだ是“居る”的词干加推量助动词そうだ，表示推测的断定。是“十有八九在那里”的意思。

△なにげない風を装ってくれるように…。

其中的“なにげない風”是一个惯用词组，是“若无其事的样子”或者“并非有意的样子”，“装ってくれるように”是从说话人着想，希望对方替他作出这种样子的意思。

△それなら，後向きになればいいのに，

“それなら…ばいいのに”是一个惯用型，表示“要是那样的话就应该如何如何”的意思。それ指代前一句的情况。例如：

△タクシーがないって？ それなら，バスで行けばいい/没有出租汽车吗？ 那就搭公共汽车去好了。

△しかも彼の歩みにつれて，その方へ少しづつ顔を動かして来る。

这个句子直译就是“而且随着他的脚步把脸一点一点转过来”。

△困るわ，あんなとこお通りになっちゃ。

这是个倒装句。正常的说法是“そんなところをお通りになっては困るわ”。为了着重“困るわ”，所以把它提到句首。这个“困るわ”当然是“わたし困るわ”。

△いつもああかい。

是“いつもああいうふうに勢揃いして，そこで立話をするのか”的意思。

△かまやしない。

是かまいはしない，即かまわない或かまうことはない，“没关

系”的意思。

△島村は女のこういう鋭さを好まなかった。

句中的“鋭さ”一般是“锋利”、“敏锐”、“尖锐”(以及它们的程度)的意思。在这里指的是驹子追问岛村时的那种可能带有醋意的锋芒。这种醋意可以从下面的句子里体会出来:

△とにかく繰り返して突っこまれると,彼は急所をさわられたような気はして来るのであった。

句首的とにかく这个副词并非修饰前半句的“突っこまれる”,前半句是一个条件分句,とにかく修饰的是“…気はして来る”,这里译为“毕竟”。另外,“気はしてくる”的は字在这里有「至少是」的意思。本文把とにかく和は译为“毕竟还是”。

△急所をさわられる。

是一个惯用词组,也说“急所をつかまれる”即被碰到(抓住)要害。这个“要害”指什么呢? 这在下面一句里可以找出答案。

△今朝山の雪を写した鏡のなかに駒子を見た時も,無論島村は夕暮の汽車の窓ガラスに写っていた娘を思い出したのだったのに,なぜそれを駒子に話さなかったのだろうか。

这个句子在形式上是作者的设问,实际上是岛村自己的心理活动。它清楚地说明岛村是有意对驹子隐瞒了在他心里占有很大地位的叶子的事,他心中有鬼,所以才觉被驹子抓住了把柄。作者是在写一段三角恋爱,这是很清楚的。

㊳ △土間へ入ると,しんと寒くて,なにも見えないでいるうちに,梯子を登らせられた。

句中的“しんと寒くて”的しんと通常说じんと，しんと是表示静悄悄的拟态词，不能修饰“寒い”。じんと是表示寒冷彻骨的拟态词。“土間”是日本式房屋中不铺踏踏密的房间，亦即不住人的房间，一般是三和土或者洋灰铺地。“屋根里”有两个意思：一个指房盖底下；一个指在较高的房屋的顶棚上架起的一层矮小的楼，这里译为“阁楼”。“なにも見えないでいるうちに”是说刚一走进黑洞洞的房间里，眼睛还不适应，还什么也看不清的时候。“登らせられた”是一个被使役态。せ表示使役，れ表示被动。

△それはほんとうに梯子であった。上の部屋もほんとうに屋根裏であった。

这句表达的是上阁楼的梯子不是一般的楼梯，而是可以搬动的临时搭上的梯子；阁楼也是在顶棚上架起的一个矮小的房间。两句中的ほんとう等于“货真价实”，都可以用“文字通り”代替。

△「お蚕さまの部屋だったのよ。驚いたでしょう。」

这个“お蚕さま”是养蚕人对蚕的称呼，是表示珍爱的爱称。“驚いたでしょう”是说把蚕房改作了住人的房间，你想不到吧。

△壁にも丹念に半紙が貼ってあるので，古い紙箱に入った心地だが，頭の上は屋根裏がまる出しで…。

墙上糊的不是墙纸而是“半紙”，这种纸是以楮皮为原料的洁白的、写毛笔字用的日本纸，原料和中国的宣纸一样，但是表面是比较光滑的。通常是长 24 公分，宽 34 公分的长方形。

“頭の上は屋根裏がまる出しで…”的“屋根裏”是前面提到的两种意思中的前一种，汉语叫“房箔”，不过日本房子不用箔，是木板。“まる出し”是一个名词，意思是完全露着。

⑱ △置火燵には山袴とおなじ木綿縞の蒲団がかかっていた。

“火燵”本文译为“被炉”是因为用被子盖着的炭火炉。是家庭中冬季取暖的工具。一般的被炉是把居室中的踏踏密割掉一块，大约二三尺平方，修一个池子，燃起炭火，上面罩一个四方的木架，架上蒙一个被子。人坐在旁边把腿伸入被子取暖。而这里的“置火燵”乃是在四方的木笼里放一盆炭火，也盖上被子。它可以随便移动。这里说的是阁楼里，又是把蚕房改造为居室的，所以使用这种被炉。

木綿縞の蒲団がかかっていた。

句中的“木綿縞”是用染了色的棉线织出条纹的布。“蒲団”也写作“布団”，就是棉被。かかっている就是“盖着”或“蒙着”的意思。かかる是自动词，与之成对的他动词是かける。因此这个句子也可以说“布団がかけてある”。从这里可以看出，用自动词时，使用“自动词＋ている”，用他动词时，使用“他动词＋てある”，两者都表示动作的结果状态。下面的句子是使“他动词＋てある”的例子。

△本箱なのであろう，めりんすのカアテンが垂らしてあった。

句中的“垂らす”就是与自动词“垂れる”成对的他动词。不过“垂れる”这个词是一个例外，它既是自动词也是他动词。这个区别在于“名詞＋が＋垂れる”时是自动词；“名詞＋を＋垂れる”时是他动词。

句首的“本箱なのであろう”是“本箱なのだ”的推量形。以のだ结尾的句子是根据上文或眼前的情况说明理由或原因的句型。它和没有のだ以及单纯的“名詞＋だ”不同。这里是根据墙上钉着一格一格的木板，说话人心想这是干什么的呢？然后推测那大概就是作书架用的吧。

△昨夜の座敷着が壁にかかって，襦袢の赤い裏を開

いていた。

句中的"座敷着"是艺妓出去陪酒时穿的华丽的民族服装,大都是下摆拖得很长的。"襦袢"是贴身的内衣。陪酒回来,换上家常的衣服,即"ふだん着"时两件一起脱下来挂在墙上,所以露出红裹儿。

△病人の部屋からだけれど,火は綺麗だって言います。

句中的"部屋からだ"是"部屋から取ってきたのだ"的意思。"綺麗だって"等于"綺麗だと"。"言います"不是病人说,也不是病房里的什么人说,在这里等于"言われます",即谁都那么说,亦即"常言说"。

△母は港町で芸者を勤め上げた…。

句中的"勤め上げる"是一个复合动词,"上げる"是"完成"的意思,在这里就是当完了艺妓。怎么叫当完了艺妓呢? 这是因为艺妓一般是因为某种原因,例如家境困难,向妓院老板借一笔钱,为了抵偿约定一定年限去当艺妓。到期以前如果没人替她赎身,就得到了年限才能恢复自由。当艺妓当到了这个年限并且恢复了自由,就叫"勤め上げた"。

△澄み上がって悲しいほど美しい声だった。

这个"澄み上がる"也是一个复合动词,"澄む"是清纯、清亮;"上がる"是达到极点。由于声音的清彻达到极点,就给人一种凄切哀戚之感。这就是小说中对叶子声音的描写。前文已经出现过。

⑩ △そういう自分にさすが驚いて,坂を登りつめると,女按摩が歩いていた。

句中的"そういう自分"指的是岛村的这样的自己,就是上文说他把镜中的景物和驹子的房间都看做"遠い世界",亦即陌生的,与自己的

现实生活毫无关系的世界。这是一种玩世不恭的，漠视一切的极端的个人主义。因此连他自己也为之惊愕。

△坂を登りつめる。

是爬完了坡道来到顶上之意，不是爬上坡道(的中间)。这里要注意的是助词を和被助动词つめる。而“爬上坡道”用日语说是“坂に登る”，而这种说法是很少的，只有比如说为了登上一个高处瞭望什么，这时才能使用。表达的是登上坡道中间的某一点，而不是爬到坡道的顶点。“名词+を+移动动词”和“名词+に+移动动词”是有区别的。这种句子中的を表示移动的全过程；而に则表示移动的目的地。例如：

「山を登る」的を表示「登る」这个移动动词的全过程；而「山に登る」则表示「登る」的目的地，即“登上山顶”。

△女按摩が歩いていた。

中的「女按摩」是女子按摩师，替人推拿肌肉促进血液循环以医治疲劳或疾病的，一般都是盲人。

△「そうですね」。

这个そうです不是表示肯定回答的“是”，而是表示沉吟和犹疑不决的语气词。在这里是按摩师要计算一下时间是否来得及替他按摩。

△…三時半に駅の向うへ行かんなりませんけれども，少し後れてもいいかな。

中的「行かんなりません」就是「行かなければなりません」。「かな」也是表示犹疑的语气。因为前面已经说“三点半”必须到火车站后边去为别人按摩，而现在已经是两点三十五分多钟了，包括行路只有不到半小时就到了跟别人约定的时间，如果再给岛村按摩，势必迟到。

△「…夜は村の人を揉むで，もうここへは登って来ません。亭主が出さないのだと，宿の女中さんが言うからかないません。」

句中的「揉むで」是「揉むので」，表示原因。「亭主が出さない」的「亭主」是丈夫的意思。但要注意的是「亭主」这个词是第三者使用，说别人的丈夫的。女人称自己的丈夫要说「主人」。这里的「亭主が出さない」是直接引语，是旅馆的女服务员说的，所以用了「亭主」这个词。如果是间接引语，就得用「主人」。

△「凝ってないだろう」就是「凝っていないだろう」省略了一个「い」字。「凝る」在这里指肌肉由于血液停滞而造成的肌肉僵硬状态。这就是需要特别按摩的部位。

△「よく分るな」中的よく这一副词在这里是「能く」而不是「好く」。它与句末的表示感叹的终助词な相呼应，表达一种出乎意料的意味是「居然能够如何如何」的意思。

△「なんでございますね」。

句中的「なん」即「なに」，原是疑问代词。但在这里并不表示疑问，而是在想要说一句话时，而它的内容复杂，一下子不知怎么表达为好时用的一个惯用语。

△「君の旦那さんは飲むんだね」。

的「君の旦那さん」指按摩师的丈夫，但不是敬语。用敬语指对方的丈夫要说「御主人」。

㉛ 「手はすっかり按摩になってしまいましたけれども，耳はあいております。」

前半句说的是她的手已经十五年不弹三弦，专作按摩工作，所以完全变成按摩师的手了。后半句是一个俏皮的说法，直译是「耳朵还睁

着」。本来应该说「耳はまだよく聞こえます」。她所以这样说是有言外之意的，那就是“眼睛虽然瞎了但耳朵并不聋”。这里译为“耳朵还不瞎”。就是为了表达原话的语气。

△「駒ちゃんという子は，年が若いけれども，ての頃達者になりました」。「ふうん。」

第二句的ふうん。是岛村对女按摩夸驹子弹得好的回答。这个ふうん和「ふん」不同，不是简单的拉长，而语尾要扬声↑。这样的ふうん表示半信半疑的佩服。正因为是半信半疑的语气，所以女按摩就问了一声「旦那さん，御存じですね」。因为如果他不认识驹子，就不可使用这种半信半疑的语气。

△「その駒子って？」

这个句子不完整，只是一个主题。「名词＋って」等于「名词というのは」。句子的谓语没有说出来，或者有意地省略了。那么省略了什么呢？根据上下文判断，可能是

△「その駒子って，そんなにまでして，その息子に尽したんですか。」之类的话。这个「その駒子って。」是一种表示惊奇和怀疑的语气。于是女按摩就解释说：

「でもまあ，尽すだけ尽しておけば，いいなづけだというだけでも，後後までねえ。」

句首的「でも」同下面的「尽しておけば」相呼应，表示既定条件。まあ是针对岛村的惊奇的回答。下面是对此的解释。最后的「後後までねえ。」的「まで」下面省略了「悔いを残さないから」之类的话。

△駒子が…芸者に出たというのも，余りに月並な筋書で，島村は素直にのみこめぬ心地であった。

句中的「素直にのみこめぬ」是不能毫无成见地相信，亦即难以置信的意思。这也就是岛村感到惊奇的原因。

△それは道徳的な思いに突き当ったせいかもしれなかった。

这一句进一步说明了难以置信的心理状态。「道徳的な思いに突き当る」是“在道德观念上，碰到了难以逾越的问题”。这就是说，驹子已经订了婚，叶子又是她未婚夫的情人，而岛村自己对前者已经发生了关系，对后者又想染指，这当然是一个道德问题，而驹子、叶子和少东家的关系也是一个道德问题。由于这些问题，就使他没有勇气承认驹子和少东家的订婚这个事实。然而事实终归是事实，不以他个人的意志为转移。于是他就产生了一个托词，以少东家命在旦夕为理由，把这些错综的道德关系，以及驹子对婚约的忠贞统统说成是徒劳无益的，而作者（亦即公正的旁观者），却看穿了这一点，因此说：

△この虚僞の麻痺には，破廉恥な危険が匂っていて…。

句中的「虚僞の麻痺」就是说岛村故意不去面对事实，是一种虚伪的麻木不仁，而这种麻木不仁却有着道德败坏的味道，这当然是危险的。「破廉恥」这个词在这里主要是指不正常的男女关系。

㉒ △島村は虚しい切なさに曝されているところへ，温い明りのついたように駒子が入って来た。

句中的「切なさ」是形容词「切ない」的名词形。「切」这个字同汉语的“急切”的“切”相通，是内心的一种焦急痛苦的状态。「虚しい」是“徒然，白白地”的意思。这里把「虚しい切なさ」译作“求之不得的苦恼”。

△「そうはいかないわ。」

直译是“那样可行不通”，亦即“那可办不到。”为什么办不到呢？下面的一个句子说出了这个道理。

△私妊娠していると思っていたのよ。…

这个句子要注时态。子句“妊娠している”是现在进行式表示状态。主句“と思っていた”是过去进行式，是说当时她怎么以为的。因此“妊娠している”是她当时以为自己处于怀孕状态。这个句子也暗中说明，使她以为自己怀孕的并非滨松的那个人，而是岛村。她之所以对于滨松的那个人的求婚犹豫不决，是因为她以为怀了岛村的孩子，而岛村对她却是玩世不恭，若即若离，从未表示过明确的态度。她骂岛村是马大哈（“あんた，いい加減な人ね”。）的原因也就在于这一点。

⑬ ねえ，帰れないわ。女中さんが火を入れに来て，みっともない，驚いて飛び起きたら，もう障子に日があたってるんですもの。…

第二句有省略，有飞越，又有插入成分。句中的三个逗号是句子的三个断层，把整个句子分为四段。第二段的「みっともない」是插入成分。整个句子清楚完整地说就是：

女中さんが火を入れに来て，（私は）みっともない（と思ったから，）驚いて飛び起きた。（気がついたら）もう障子に日があたっているんですもの。

句中的みっともない是指日上三竿而一对男女还没有起床，给服务员看见太不雅观。结尾的んです等于のだ，表示说明原因。もの是表示辨护语气的终助词。二者加在一起说明前一句“帰れないわ。”的理由，一方面也与みっともない相呼应。

句中的“火を入れる”是说当时这种旅馆里的取暖设备是一个炭火

盆，而炭火在夜里已经燃尽，按旅馆的规矩，早晨必须送来烧着了的炭火加在火盆里，作为一天取暖的火种。

「帰れないわ。」是说已经早晨九点多钟，旅馆的人们都早已起床，驹子害怕给别人看见她在这里过夜。下面岛村要和她一起去浴池洗澡她说“いや，廊下で人に会うから。”也是这个意思。

△朝らしく笑い出した。

早晨人们起床之后精神愉快，笑声自然愉快，爽朗。说“朝らしく”就是指这种气氛。

△君が家を持ったら，亭主は叱られ通しだね。

句中的「家を持つ。」等于「所帯を持つ。」即结婚的意思。「叱られどおしだね。」的どおし是一个接尾词，接在动词、助动词连体形下构成名词，表示那个动作的继续不断。

△島村は按摩の言葉を思い合わせて…

句中的「思い合わせる」是联想的意思，具体地说就是岛村联想起按摩师对他说的「駒ちゃんという子は，年が若いけれど，ての頃達者になりました。」这句话。因此他想要听听驹子的三弦究竟弹得怎么样。而驹子也正好不愿意回家，所以马上打电话叫人把“長唄”的练习谱送来。

“長唄”是歌舞伎剧（日本旧剧）伴奏用的三弦琴谱的名字。“長唄”的创始人是元禄时期姓“杵屋”的这个家族，代代是三弦技艺的宗师，直至现在。后文出现的“杵屋弥七”就是为三弦创造了改良乐谱的人，所谓文化三弦谱就是把旧的用文字记录的乐谱改良为使用阿拉伯数字1、2、3、4、5、6、7做为音符的简谱。

△おかしな人。聞いたら聞いたで，…

“动词＋たら＋同一动词＋たで”（前后两个动词相同）是一个惯用型。即したらしたで表示承认这个动词所表达的事实，在这个基础上如何如何的意思。所以“聞いたら聞いたで”是“听见了就听见了吧”或“听见了也罢”的意思。例如：“失敗したらしたで別の方法でもう一度やってみたらいい。/失败就是失败了，可以用别的方法再来一次。”

△だけど二人は別になんでもなかった。…

这句话表示并不因为前面所说的情况使二人之间的关系有了任何变化。「別に…ない」是一个惯用型，表示「并不怎么…」，例如：「別に行こうと思わない」等于「并不想去。」「別に痛くない」等于「并不怎么疼」。也可以用「別に」单独回答问题。例如：「寒いですか？——いや，別に」等于「你冷吗？——不，不冷。」与「別になんともない」不同，后者表示无关痛痒，等于“不在乎”，两者不可混同。

ただそれだけ是“如此而已，岂有他哉”。

⑭　△駒子は三の系を指ではじき切って附け替えてから…

“三味線”和中国唱大鼓时作伴奏用的“弦子”一样，都是三根弦。不同的是弦子用蛇皮蒙音箱，三味弦用猫皮蒙音箱。另外一个不同之点是弦子用手指戴上假指甲弹，而三味弦用拨子弹。顺便说说，日本的琵琶（びわ）也用拨子弹，而中国的琵琶在古代用拨子，现代也用手指弹。弦子和三味弦都是三根弦，最细的弦发高音，中国称子弦，日本称“三の系”；最粗的弦，中国称老弦，日本称“一の系”中间的弦中国称三弦，日本称“二の系”。因为子弦（三の系）最细，不耐用，弹旧了弦的音色不佳，所以驹子用手指把它用力弹断或拉断，换上新弦。然后才定弦（調子を合わせる），准备弹奏。

△お酌は踊が主だし，それからも東京で稽古させて

もらったのは，踊だったの。三味線はほんの少しうろ覚えですもの，忘れたらもう浚ってくれる人もなし，音譜が頼りですわ。

句中的“お酌”也说“酌婦(しゃくふ)，半玉(はんぎょく)”，与艺妓不同，是在宴席上斟酒的女子，不会演奏三弦，至多在三弦的伴奏下跳日本舞蹈，或者唱几句通俗的日本小调。也可以译为“侍酒”。“稽古させてもらった”按字面是“得到练习的许可”但实际上等于“稽古をした”。“うろ覚え”是模糊记得的意思，下面的“浚ってくれる”是对练习加以辅导的意思。

△「唄」和「唄長」都是指以三弦伴奏的纯日本歌曲。長唄是长篇的三弦歌曲，类似中国的弹词，大鼓书等。

△「いやだわ。一番肩の張るお客さま。」

第二句容易理解错误。首先是“肩か張る”在这里是“精神紧张”的意思。其次“肩の張るお客さま”是一个特殊的偏正结构，修饰语并非直接修饰被修饰语，如同“頭の痛くなる問題”，它不等于“その問題は頭が痛くなる”而是等于“その問題には頭が痛くなる”。也就是说头痛的是人而不是问题本身。所以“肩の張るお客さま”实际上是“そのお客さまには肩が張る”亦即“对这个客人感觉紧张，所以感觉紧张的是说话人驹子而不是岛村。这种偏正词组很多，如“気の許せない人”是“不可掉以轻心的人”，也就是“その人には気が許せない”对这个人必须加以注意。那么为什么驹子在岛村面前弹奏三弦会感到紧张呢？前文已经交待过，因为岛村是研究日本舞蹈的，驹子认为他是一内行，所以给他弹三弦听是不能马虎从事的。

△『勸進帳』

是一出歌舞伎剧名，以十二世纪的源氏武将義経(よしつね)带领

以弁慶(べんけい)为首的一些仆从乔装为山僧伪称化缘混过安宅関(あたけのせき)的故事为题材，是歌舞伎剧十八出保留节目中的最红的节目之一。

㉟ △たわいなく空にされた頭

句中的たわいない有昏昏沉沉(地睡)或没有抵抗之力(不堪一击)的意思。前者如："たわなく眠ってしまう"；后者如："たわなく負ける"。

△敬虔の念に打たれた，悔恨の思いに洗われた。

这是两个被动句中间没连接词而并列的重复句。所谓敬佩之念和悔恨之情都是岛村听到驹子的高超演奏出乎意料而产生的内心活动，这个场面多少有点类似白居易的《琵琶行》。所谓悔恨之情是指他不应该小看了驹子，他原以为一个山沟的年轻艺妓不会有什么本领，可是听了她的演奏之后，大有"曲罢常教善才服，…如听仙乐耳暂明"之慨，所以敬佩之念油然而生了。

△「こんな日は音がちがう。」と，雪の晴天を見上げて，駒子が言っただけのことはあった。

句中的「言っただけのことはあった。」是一个惯用型。「する(した)+だけのことはある(あった)」是作得对，不白作的意思。这里的だけ表示相应的结果，与表示限定的だけ不同。也可以用だけあって作状语表示原因。如："勉強しただけあって，成績がぐんと上がった。"意思是没有白用功，成绩提高了很多。

△劇場の壁もなければ，聽衆もなければ，都会の塵埃もなければ…

句中的三个なければ表示并列成分，是"既没有…，也没有…，更

没有…"的意思，不能当作假定理解。

△島村には虚しい徒労とも思われる，遠い憧憬とも哀れまれる，駒子の生き方が，彼女自身への価値で，凜と撥の音に溢れ出るのであろう。

句中的「思われる」和「哀れまれる」，这两个被动态都表示自发，都是「駒子の生き方」的定语。「凜と」是一个副词，形容清澈而响亮的琴音。

△細かい手の器用なさばきは耳に覚えていず，…。

句中的「細かい」和「手の器用な」是并列的定语，修饰さばき，而さばき等于说「撥のさばき」，即弹拨的技巧。「耳に覚えていず」是听不出来的意思。"覚える"在这里是感觉的意思，不是记忆。

△細く高い鼻は少し寂しいはずだけれども，頬が生き生きと上気しているので，私はここにいますという囁きのように見えた。

句中的"私はここにいますという囁きのように見えた"是说：在岛村看来，驹子那泛起红潮的脸是很诱人的，因而仿佛在回答他在前面的幻想："しみじみ肉体の親しみが感じられた"，因而说"私はここにいます"。

△美しい血し蛭の輪のように滑らかな唇は…。

句中的「唇」前面有两个并列的修饰语：①美しい；②…滑らかな。「滑らかな」前面有一个状语部分：血の蛭の輪のように。「血の蛭の輪」的「血」是比喻红色，因为实际上水蛭是灰黑色的，用它来比喻嘴唇，如果不加上「血の」就会被误解为嘴唇是黑色的。其次水蛭又是吸血的虫子，所以这个「血」字是双关的「蛭の輪」是水蛭缩成一团的形状，这个

形状恰恰和聚拢的嘴唇一样也有褶皱，把嘴唇形容得活灵活现。另外水蛭生在水里，所以又湿又滑。下面的ぬめぬめ是拟态词，形容又粘又滑。

△下り気味の眉の下に，目尻が上りもせず下りもせず，わざと真直ぐ描いたような眼は，どこかおかしいようながら，今は濡れ輝いて，幼なげだった。

这个句子较长，主要成分是"眼は幼なげだった"。说的是成年人的眼睛看上去却像小孩的眼睛。眼睛前面有一个很长的定语，说的是：眉梢有点下垂，然而眼梢(即小眼角)并不下垂，大小四个眼角成一条直线，因而仿佛是人工画成的。这虽然有点不自然(どこかおかしいようながら)，但是因为现在眼睛水灵灵地闪光，所以看上去好像小孩儿的眼睛。

△白粉はなく，都会の水商売で透き通ったところへ，山の色が染めたとでもいう，百合か玉葱みたいな球根を剝いた新しさの皮膚は，首までほんのり血の色が上っていて，なによりも清潔だった。

句子的主语(皮肤)前面有一个很长的定语。其中「水商売で」是状语，说明皮肤为什么晶莹透亮。「都会の水商売」指都市里以接待客人为目的的商业，如酒馆、饭馆、咖啡馆、吃茶店等营业，等于现在的「風俗営業」(ふうぞくえいぎょう)。艺妓当然也属于这种职业。这种女人不在日光下从事体力劳动，又特别注意美容，所以他们的皮肤是光滑透亮的。

「山の色が染めたとでもいう」是说驹子来到这山沟里的温泉地，染上大自然的健康色彩。

⑯ △しゃんと坐り構えているのだが，いつになく娘

じみて見えた。

句中的“坐り構える”是个临时搭配的复合动词。“坐る”当然是跪坐在踏踏密之上，“構える”是拉起架式，这里就是把三弦的音箱放在右腿上，左手托着弦子把，右手拿着拨子，准备弹奏。しゃんと是个副词，指端正的姿势。

《都都逸》是一种通俗的纯日本小曲，由七、七、七、五的音节构成，即前三句各七个假名。最后一句五个假名。例如：

憎(にく)いようじゃが，水差(みずさ)す人がなけりゃ開(ひら)かぬ床(とこ)の梅(むめ)

大意是：看来怪可恨的；可是没有浇水的人，插在壁厨的梅花就开不了。

句中的“水差す”即“水を差す”是双关语，第一意是“浇水”，第二意是离间别人的关系。壁厨里装饰着梅花是新春吉祥的象征，也隐喻着男女之间恋爱的开花结果。所以这个曲子的另一个意思就是男女的恋爱关系，越是有人想破坏，就越发紧密起来，有情人终于成了眷属。

「黒髪」是「長唄」中的一个曲名，最初出现于歌舞伎剧中。

㉗ 尻上がりに…呼ぶ。

这是呼唤人时，把最后的几个音节依次提高语调。在这里就是把「駒ちゃん」的「ちゃん」用汉语声调的第二声发音，类似“强”qiáng 字拉长了的音。

△余念なく遊んでは…

“动词连用形＋ては”是一个惯用型，表示这个动作的习惯性，即反复多次进行。

△髪に櫛を入れる。

就是“梳头”的意思，和“髪をすく”，“髪をくしけずる”，“髪をと

かす”等等说法相同。

△「…日本髪だと，駒ちゃんだって。…」

「日本髪」是指日本的民族发式，艺妓的发式叫作「島田くずし」，是「島田まげ」(未婚妇女梳的)的一种变形。与「日本髪」相对，西方发式叫「洋髪」(ようはつ)。句中的「駒子ちゃんだって」等于「駒子ちゃんだと言う」

△「スキイ場で芸者に挨拶されると，おや，君かいって，お客さんは驚くんですって。…」

这个句子的主语是「お客さん」即熟识的游客，这个句子的正常说法是：「お客さんは，スキイ場で芸者に挨拶されると，おや君かいといって驚くんだそうです。」

引号中的最后一句「夜はお化粧してるでしょう。」是补充说明为什么客人一下子认出是谁的原因。客人在宴席上认识的艺妓是化了妆的，亦即脸上抹上厚厚一层脂粉的，而白天去滑雪时，已经洗掉了脂粉，露出晒得黢黑的本来面目。这个句子的句尾要提高声调说，亦即前面所说的「尻り上り」，表示征求听话人的同意或提请注意。

△「山袴。ああ厭だ，厭だ，お座敷でね，では明日またスキイ場でってことに，もう直ぐなるのね。…雪の降る前の晩は冷えるんですよ。」

这个句子有省略也有词序的颠倒，这在会话中是常见的。「山袴」是回答岛村问「やっぱりスキイ服を着て」，等于说「いいえ，山袴を着るの」。「お座敷でね」是主题，等于「お座敷ではね」「ね」是间投助词。谓语是「ことになる」，意思是“发生…的事”。用平常的说法，这个句子是：『お座敷では，すぐ「では明日またスキイ場で会いましょう」ということになる』。这个「ことになる」的「こと」是形式名词，指客人约她

明天还去滑雪。

最后一句「雪の降る前の晩は冷えるんですよ。」看上去似有歧义，既可以理解为下雪当天的晚上，好像也可以理解为下雪头一天的晚上。然而后一种理解是错误的。因为要表达后一种理解时就得说「雪の降る日の前の晩は冷えるんです。」

△寒天のような霜柱が立っていた。

「寒天」是一种食品，中国人俗称"洋粉"，是用琼脂冻制的一种白色的粉丝。

△なにか荒荒しく彼を火燵から抱き上げて…

句中的「なにか」是副词，等于「なにかしら」，表示不明原因。

△駒子は裾をからげて帯に挟んだ。

「からげる」是把和服的底襟撩起来，为的是行路方便，免得裹腿。

△火燵蒲団はそのままに，つまり掛蒲団がそれと重なり，敷蒲団の裾が掘火燵の縁へ届くように，寝床が一つ敷いてあるのだが，駒子は横から火燵にあたって，じっとうなだれていた。

这是由两个分句组成的一个较长的复句。前一个分句比较复杂，需要说明一下。这个分句的中心是「寝床が一つ敷いてある」。它前面有双层的状语成分，说明这个「寝床」是怎么铺的。第一层是「火燵蒲団はそのままに」，第二层是「つまり…届くように」，后者是对前者的补充说明。这是因为第一层的状语不好理解。

句中的「掘火燵」是被炉的一种，是在踏踏密上挖一个二三尺见方的窟窿，修成炭火池，上面放一个二尺高的四方木架，蒙上被子的取暖设备，它和「置火燵」不同，不能移动。这里译为固定被炉。

△「いつまでいたって，君をどうしてあげることも，
僕には出来ないんじゃないか。」

句中的「どうして上げることも出来ない」是说对于这个在山沟里的温泉当艺妓的处境爱莫能助，具体说就是不能跟她结婚或者替她赎身。而驹子所需要的乃是爱情，因此她说「それがいけないのよ。」这是指岛村说这话的想法（それが）不对头，亦即不希望得到他的什么同情，是她对岛村的这句话表示恼火。

△取りみだす。

是失去理性的节制，不顾体统的意思。

△物狂わしさに体のことも忘れてしまった。

指的是疯狂的性爱场面。

△静かに言って，髪の毛を拾った。

是用手整理蓬乱了的头发，把短头发往上拢一拢。

△島村は次の日の午後三時で立つ…

句中的助词「で」字要注意。这个「で」表示工具，「午後三時」下面要补上「の列車」来理解，不是说出发的时间。要是说时间，就得用「に」。

△十六七時間は余り長過ぎると，番頭が思ってのこと…

句中的「思ってのこと」等于「思ったから」，表示原因。

△朝の五時に帰ったのは五時まで，翌日の十二時に
帰ったのは十二時まで，すべて時間勘定になって

いる。

首先,「時間勘定」就是按整个一小时计算,不满一小时不计的意思。知道这一点,「五時に帰ったのは五時まで」的意思就好明白了。因为「まで」在这里是指四点到五点以前这一段时间,所以算帐时不计算在内。

⑱ △駒子の髪の黒過ぎるのが,日陰の山峡の侘しさのために反ってみじめに見えた。

“头上乌云如墨染”本是形容女人之美的,因此头发越黑应该是越美。然而这必须放在富丽堂皇的背景中才相得益彰。而现在是放在一个照不到阳光、阴沉而荒凉的山沟儿里,犹如明珠投暗,自然就反而令人产生一种怜悯同情之感了。

△「…電線に首をひっかけて怪我するわ。」

这里的「首をひっかける」是一个他动词带宾语的动宾结构。「ひっかける」虽然属于有意志的动词,但不能理解为有意把脖子钩在电线上。这是习惯上的用法,例如要说“不小心手上拉了个口子”就说「うっかり手を切った。」;“头碰在门上碰了个大包”就说「頭をドアにぶっつけてこぶが出来た。」。

△「ああっ,駒ちゃん,行男さんが,駒ちゃん。」

句中的「行男さんが」是急切中说的一个省略句。因为行男在病中是驹子所知道的。所以不必把谓语说出来,驹子也会懂得的。如果要把话说全,那就是「行男の容体がおかしいよ。」或者「行男が重態よ。」或者是下面叶子抓住驹子说的那句「行男さんの様子が変よ。」

△「あんたなにを言うことあって。」

这是一个表示反诘的问句。「言うことがある」是有意见的意思。

△嘘みたいにあっけなかった。

「あっけない」是一个形容词，但「あっけ」又是一个名词，常写作「呆気」，是吃惊的意思，如：「あっけに取られる」惊得目瞪口呆，或吓得发楞。因此「あっけない」就是与此相反的意思，即没有什么值得大惊小怪的意思，用来表示事情的收场非常简单，不费什么事就完了的意思。

△この場にあるまじい不審が島村の心を掠めた。

句中的「まじ」是一个文言助动词，用于否定的推量。它的连体形应作「まじき」，这里用了「まじい」是口语中通俗用法。「あるまじき」是一个惯用型。如：「これは学生としてあるまじき行為だ」这是作为一个学生所不应有的行为。

⑲ 开头是一个很长的句子。乍看好像没有主题（或主语），但读完句子之后就会发现在两个较长的状语成分下边出现了「また古ぼけた汽車は」这个句子的主题。而且不仅仅这个句子，就连下一段开头的一个分句也是以「汽車は」为主题的。这两段文字都是以坐在车箱里的男主人公岛村的视点来描述车外的景色。

△…頂上は面白く切り刻んだようで，…

这是说山顶好像是用刀砍斧剁的一般，而且很有趣儿。这不是说什么"精工的雕刻"，更不是什么鬼斧神工，而是说山顶上奇峰重叠，高低不平，错落有致。

△…山の端に月が色づいた。

这个句子不能简单地理解为"月亮有了颜色",更不是什么"山头上罩满了月色"。因为很显然"山の端に"是表示月亮的位置,说的是月亮既不在山的上边,也不在原野上,而是在接近平原的山脚上。"色づく"这个词后边还要讲到,这里是说薄暮时月亮还没有发光,但它和天空的颜色不同,因此一眼望去已经可以辨认出来。

△淡い夕映の空がくっきりと濃深縹色に描き出した。

句中的「縹色」(はなだいろ)也可以写「花田色」,是一种浅蓝色,加上「濃深」就是深蓝色,这里说的是远山的颜色,所以就是黛色或者"寒山一带伤心碧"的碧色。

△月はもう白くはないけれども,まだ薄色で…。

这是说月亮已经发光,不再是依稀可见,但它的光还很淡。

△それは冬枯の車窓に暮れ残るものであった。

句中的「それ」指代上一句的「建物」。「車窓に暮れ残る」是说从车窗还可以看得见,还没有被暮色吞没。

⑩⓪ △あの夕景色の鏡の戯れであった。

句中的「あの夕景色」指小说开头岛村第一次去温泉时在车窗上发现的那"奇异"的景色。因为这是作者和读者都已经知道的,所以用「あの」指代。「鏡の戯れ」是说车窗因哈气而变成一面镜子,既映出车内的人物,又透露出车外的景色,宛如在变戏法,是一种幻镜。

△「まあじゃあ,御縁でもってまたいっしょになろう。」

句中的「まあじゃあ」等于「それでは」;「でもって」等于一个助词

「で」是老人语;「またいっしょになろう」在这里等于「またお会いしましょう」,不是“结婚”的意思。整个句子有方言的色彩。

△それで一入,女に別れての帰りだと思った。

首先要注意的是句中「女」这个词。在这里并非泛指一切女人,而是专指岛村的心上人,亦即驹子。上文两次出现的「女」,也都是这个意思。例如:

△単調な車輪の響きが,女の言葉に聞えはじめて来た。

△女が精いっぱいに生きているしるしで…。

本译文有的译为“那女人”,有的译为“她”,都是专指。上面这个句子中的,

△…女に別れての帰りだと思った。

为了避免与同车的那个姑娘混淆就直接译为驹子。如果把这几个「女」通通理解为“女子”“女人”,就出现这样的译文:“此情此景越发使他觉得老人是同这个女人分手后才回家去的。”读者会莫名其妙,因为既然是老人同那姑娘分手,岛村干吗“眼泪都快夺眶而出”呢? 须知,岛村之所以几乎掉泪,是对那老人所说「…御縁でもってまたいっしょになろう。」这句话所包含的“人有悲欢离合”的令人伤感的意思,所以岛村联想自己同驹子的离别而几乎落泪。读者读到下一句就会更清楚,那老头和姑娘以及岛村完全都是偶然乘在一个车箱的陌路人。根本没有谁为谁落泪的原由。句中的「一入」(ひとしお)是一个副词,等于「いっそう」,是更加的意思。

⑩ △檜皮色の小さい羽毛のような触角…

这个「檜皮色」读音为「ひわだいろ」是赤褐色,是柏树、杉树等的

树皮颜色。这种树的树皮过去高级建筑物用它苫房顶。

△女の指の長さほどある翅だった。

这个「女」和前文出现的「女」一样，也是指驹子而言，不可理解为泛指。

△その向うに連る国境の山々は夕日を受けて，もう秋に色づいているので…。

句中的「秋に色づく」是秋天山上的草木、果实都变成红色或黄色的意思。这个「色づく」一词不可理解为单纯的有了什么颜色，也不能简单译为"秋色"，因为汉语的秋色是秋天景色的意思，不表示任何颜色。而「色づく」如上所述是有了一定的颜色，是红色和黄色，属于绘画艺术中所说的暖色。这样就可以理解下一句为什么说，

△「この一点の薄緑は反って死のようであった。」

这是因为在暖色红黄的背景中出现属于冷色的绿的一个点，相比之下给人以死亡之感，或者说这位新感觉派作家有了这种感觉的。

⑩② △女は裾を取って立ち上った。

因为艺妓陪客时穿的衣服都是拖着很长下摆的，所以站起来行走时，必须拉起下摆。

△黒紋附を着ていた。

这个「黒紋附」是「黒い紋章が附いている着物」的意思，这是和服的礼服。「紋章」也说「紋所」(もんどころ)，是代表一个家族或团体的图案。这种图案通常是把动植物、器物、文字等加以图案化，绘制为直径4厘米左右的圆形或与此差不多的方形、多角形的一个标志，用在黑色的长衣或大褂(即「羽織」はおり)上，纹章是白色的。正式的为五个，即后背上方正中一个，前胸大襟上方左右各一个，衣袖前方左右各一

个。

△大きい小判型の饅頭を焼いていた。

句中的「小判型」的「小判」是日本古时的金币，为椭圆形。「饅頭」(まんじゅう)即中国的澄沙包儿，古代传入日本，成为一种点心。「焼く」是把凉了的澄沙包儿烤热了。

⑩ △「今の人が引いたんですか。」

句中的「引く」一词是个多义词，在这里是“送礼”的意思。日语中有一个名词「引出物」(ひきでもの)就是从「引く」一词发展而成的。日本人宴请客人时，常常予备一些礼物(多数是点心类)，在散席时每位客人拿走一份。这就叫「引出物」，即礼品的意思。有的译本把「引いた」这个词当作「引く」的另一意思“引退”而译为“刚才那个人已经不再操旧业了?”这当然是错误的。因为要表达这句汉语的意思，在小说中那个语言环境下就必须用「今の人は…」而不能用「今の人が…」。这是日语助词「が」和「は」的妙用。要知道这个句子指的是「饅頭」，句首省略了「これは」或「この饅頭は」。

△「年期があけて…。」

这是说艺妓借钱卖身时所约订的服务年限已经到期。也就是说她给下处(置き屋)的老板赚够了钱之后换取了自由。以后当不当艺妓，随她的便。

△ふっくりと押出しの大様な年増だった。

句中的「ふっくりと」形容身体丰满;「押出し」是人的仪表;「大様」是落落大方;「年増」是在艺妓中年岁较大的，但并非徐娘半老。大约过了二十五岁就算「年増」了。

△「…よく売れた子でしたけれども。」

句中的「売れる」在这里是“受欢迎”“走红”的意思。用于商品就是“畅销”。

△…その自在鍵の竹筒にまで射しこんで来るかと思われた。

句中的「自在键」的「键」字是一个白字，应该用「钩」字。这两个字都读作「かぎ」。这种自在钩是为了烧水、做饭在火炉上吊壶、锅等用的。钩子有一尺来长，上边有一个竹筒从天棚上吊下来。竹筒里有一个消息儿，可使钩子随意调高调低，所以叫自由钩。这也是古时由中国传入日本的。笔者在湖北干校时，在农村里就见过这种钩子。

⑩④ ああと彼は感情を染められたのだった。それを荻と思ったのだ。

这里的「ああ」是感叹声。「感情を染められた」是说感情受到感染。他为什么感叹呢？因为荻花是所谓「秋の七草」中的第一种，看到满山上开的这种花，既很吃惊，也感到秋天的到来。秋天的七种草是：荻（はぎ），尾花（おばな），葛（くず），撫子（なでしこ），女郎花（おみなえし），藤袴（ふじばかま），桔梗（ききょう）。

⑩⑤ △虫は昼間から鳴きしきっていた。

句中的「鳴きしきる」等于「しきりに鳴く」。

△「…ここからかかって来てるって言うんでしょう。…」

句中的「かかる」一词是个多义词。在这里是艺妓这一行当的行话。通常「座敷がかかっている」就是有人叫她去陪客的意思。所以在这里不是「電話がかかる」的那个「かかる」，与是否打电话无关。

△「…，うちでも大事にされてたんだけれど。」

句中的「うち」不是「家」,是指菊勇的下处,即「置き屋」。「大事にされる」是受到重视。

⑯ 年期があけて…。

是艺妓做满了约定的年限,还清了借债,成为自由的人。

△ねえさんの心柄でふいにしちゃった…

句中的「心柄」是"心愿"的意思。「ふいにする」是"使之成为泡影",这里译为"打退堂鼓"。

△蹴っちゃった…

是"拒绝",这里译"撂挑子"。

△夢中になると,あんなかしらね。

「かしらね」是「か知らん」加终助词「ね」。
「あんなかしら」是「あんなになるのかしら」的省略,口语中用。

△元の鞘におさまる

是一个成语,专指夫妻的复婚,言归于好。把夫妻比做宝剑和剑鞘。

△いろんな人があったのね。

是指菊勇有好多追她的男人。

⑰ 「今日送って行って,せつなかったわ。」

句中的「せつない」是一个形容词,是"心中苦闷"或"痛苦"的意思。

△「道楽者だね…」

「道楽者」是不务正业，嗜好酒色赌博的人。

△「おない年の二十七ね」

句中的「おない年」等于「おなじ年」，即同岁。

△「菊村というのは，菊勇の菊だろう…」

是说这个小饭馆的字号“菊村”这两个字中的“菊”字就是用了菊勇的那个菊字起的。而现在经营它的不是菊勇而是那个男子的妻子。

△島村が襟を掻き合わせると…。

岛村把他身上的和服领子左右拉在一起，是表示他感觉冷了的信号，所以驹子很有眼力见儿，过去关上了窗户。

△「ええ，こわいくらい。…。」

是说火车的阻塞达到可怕的程度。而公共汽车也比往年迟了一个月才开通。

△今年はもう乗らないつもりで，…

句中的「乗らないつもり」是不想滑雪。穿滑雪板叫「スキーに乗る」。

△「…私変っていない?」

句中的「変っていない」是「変っている」的否定式。说人「変っている」是说这个人古怪，与众不同，不是说这个人变了或者没变。

⑱ 駒子の唇は美しい蛭の輪のように滑めらかであった。

句中的“美しい蛭の輪”前文已经出现，作者认为水蛭缩成环形是美丽的，所以又用它来形容嘴唇之美，主要是形容唇的形象。要注意的

是这里的「滑めらか」这个形容动词，说的是接吻给他的感觉。所以她说「不，让我走吧。」再从下一句「島村は首を反って，…」来看，可以知道，岛村把头向后一仰，也说明原来是接了吻。

△気になってほっとけないんです。

这「ほっとけない」是「ほっておけない」不能不管。

△「あんた私の気持分る?」

驹子问岛村理解她的什么心情吗？当然是她很希望有一个家庭，作岛村的妾，而不再操这种职业。但岛村嘴说理解而不敢作出收她为妾的正面答复。暴露了岛村的虚情假意。

△じつと目をつぶると自分というものを島村がなんとなく感じていてくれるだろうかと，それは分かったらしい素振りを見せて…

句中的「自分というものを島村がなんとなく感じていてくれる」是说岛村虽然未能正面答复自己的提问，但他会自然而然(なんとなく)感觉出来自己的眷恋之情，因而不必再叮问了，姑且算作他已经会意了。

前面的「なにが言えないの。あんたそれがいけないのよ。」中的「それがいけない」的「それ」代的是岛村说的「言えない」，指岛村不敢正面回答。下面的「術なげ」的「ない」是「ない」的词干，「げ」是接在形容后面的构成形容动词词干的接词，表示形容词所表达的样子。如「危なげ」「嬉しげ」等等。说「危なげに」就是没把握的样子，危险的样子，是状语。

⑩ これであったと島村は思い出した。

句中的「これであった」是想起什么来，或心生一计的意思。也是

有了什么主意时的口头语儿。

△ここで初めての検査の時に…そんなことまで言った。

句中的「検査」是对接客行业的女子进行的体检，主要是检查性病。艺妓要检查下体，驹子还以为和雏妓一样简单的一般性检查。她觉得受到屈辱，所以哭了。

△半玉で受け出してくれた人に死に別れて，港へ帰ると直ぐにその話があったためか…。

句中的“その話”就提亲的事情。因为替驹子赎身的人一死就有人来提亲，她在思想上一下子接受不了，所以既使订了婚，也和这个人和不来。

△親切な人だのに，一度も生き身をゆるす気になれないのは，悲しいと言う。

句中的「生き身をゆるす」就是同男子同床。

△主人には損だが，どんどん廻るのだと言った。

这是因为陪一桌酒，不论时间长短，艺妓也是拿一分，时间长对老板有利，对艺者不利，多陪几次酒，对艺妓有利。

⑩ それをとりとめなく読んでいると…と書いてあった。

这是一个很长的句子。主要的部分是引述导游书中的一段文字。其中「池沼を縫う小路」是曲曲弯弯绕着池沼而穿行的小路。

⑪ 「人間なんて脆いもんね。…」

这个句子是驹子曾告知岛村有人从岩石上坠落身亡的传闻。其

中「人間なんて」等于「人間というものは」与下面的「熊なんか」相对比,「熊なんか」等于「熊などは」。

⑫ 「早い夕飯時に」是比一般较早的晚饭。

△「残雪の肌に新緑の萌える山…」

是说早春季节,山上的残雪已经大部分融化,在山的表面上见阳光的地方,草木已经萌发出来,有了绿色。句中的「残雪の肌」是「残雪のある山肌」,说的是处处还有残雪的山的表面,不能理解为「残雪的表面」。

⑬ 「柔和でいいだろう。」
「頼りないわ。」

这是关于留不留胡子的对话。岛村说的「柔和」是指不留胡子,免得胡子拉碴显得别扭,即不柔和。后一句驹子说的是不留胡子显得不够老成,亦即俗话说的脸上无毛,做事不牢。

⑭ 「そう。」と,駒子はにっこりうなづいてその微笑から急に火がついたように笑い出すと,…。

这是说驹子潜入他的房间,看了半天岛村的那没有胡子的滚圆的脸,而他却在那里傻睡,越看越觉得可笑,所以突然大笑出来。句中的「火がついたように」是一个惯用词组,形容哭或笑的激烈、突然。常说「火のついたよう泣き出す」(忽地大哭起来)。

⑮ そして思い出し笑いが止まらぬ風だった。

这是指的前面的突然大笑,是想起岛村的没有胡子的圆脸而笑,所以叫「思い出し笑い」。

⑯ 「君の方でこだわってるだけだよ」

句中的「こだわる」有拘泥、固执的意思，也有心存芥蒂或有所顾忌的意思。

⑪⑦ 「…お師匠さんにはすまないと思うけれど，今更参れやしない。そんなことしらじらしいわ。」

因为现在这个墓地不仅葬着行男，也葬着他的母亲，即驹子的师傅，所以驹子说不去上坟对不起师傅。然而因为不愿意被人认为是给“未婚夫”上坟，所以连师傅的坟也不能上了。句中的「しらじらしい」是「显然是假的」的意思。

⑪⑧ 彼女もとっさに假面じみた例の真剣な顔をして…

句中「假面じみた」的「じみる」是接在各词下构成动词的接尾词，是类似的意思。说「学生じみた」就是类似学生。说「あの人は若いのに老人じみたところがある」就是“那个人年轻轻地倒有些类似老人。”

句中的「例の」在这里等于「いつもの」，在本译文中是用「又」字来表达的。「真剣な顔」是郑重的，紧张的面孔或表情。

⑪⑨ 思いがけなく葉子に会ったので，二人は汽車の来るのも気がつかなかったほどだったが，そのようななにかも，貨物列車が吹き拂って行ってしまった。

句中的「そのようななにかも」下面省略了格助词を。指的是岛村和驹子在「いいなづけ」的问题以及“上坟”的问题上双方各有芥蒂，耿耿于怀的一切一切。

⑫⓪ “私ね，行男さんのお墓参りはしないことよ。”

句中的こと是一个终助词，在这里用以缓和否定的语气。

⑫① “山袴の腰をひょいと捻って…”

这里说的是穿着“雪裤”的人的腰。

⑫ “扱くように振り分けては…”

“扱く”是搓、拧。这里是接过稻捆用手一拧，“振り分ける”是劈成两叉，好往稻架上挂。小女孩的头发向左右分开，就叫“振り分ける”。这种发型叫“振り分け髪”。

⑬ “筵ならぬ稲で，ちょうど小屋掛けしたようである。”

句中的ならぬ是文言ならず的连体型，等于ではない。“小屋掛け”是搭棚子。因为这个棚子不是用席子而是用稻捆，所以这样说。

⑭ “葉子は怒ったように頭を下げると，稲穂の入口を帰って行った。”

“頭を下げる”是点头，行礼。“入口を”的を表示动作所经过的场所。

⑮ 頭が熱いものに載って驚いた。

这里的“熱いもの”指的是喝醉了浑身发烧的驹子的肉体。“載って”是说岛村的头部枕在驹子的身上。

⑯ “島村はじかに生きている思いがするのだった。”

句中的じかに是副词，修饰“思いがする”。“生きている”是“思い”的定语。

⑰ “現実というものが傳わって来た。”

直译是“现实传过来了”。作为汉语不好理解，实际含义就是苏醒过来。

⑱ “それはなつかしい悔恨に似て、ただもう安らかに

なにかの復讐を待つ心のようであった。”

それは指代上句的“現実”。这个现实就指岛村从东京跑到这个偏僻的温泉地来和一个艺妓鬼混。他觉得这种鬼混还值得怀念，但这是不应该的，必然遭到某种报应。

⑲ “元禄袖の派手なめりんすの袷に黒襟のかかった寝間着で伊達巻をしめていた。”

这里说的是驹子穿一件睡衣，它是毛斯绫的料子，是一件夹衣，镶着黑缎子衣领，系着一条较细的带子。不能理解为穿一件夹衣又套上一件睡衣。“寝間着”前面都是它的定语，这件睡衣里面还穿了一件汗衫，但是看不见它的领子。

⑳ “うちで元結を切ろうとしたんだけれど…”

句中的もとゆい是女人梳髻时绑的辫根儿。艺妓梳的头要扎很多的辫根，夹入假发(即かもじ)梳出前后左右以及头顶的髻。

㉑ “…。どこへ行ったかと思ってるわ。”

这句话是驹子推测女友们在想什么。详细说就得说“彼女たちは，私がどこへ行ったかと思っているわ。”

㉒ “知らないわ，ふふふ，可笑しいな。”

句中的“知らないわ”是说女友等她，活该了。

㉓ “ここらの客扱いの蔭口ばかりきいていた。”

“口をきく”是一个惯用词组，就说话的意思。这きく有时写作“利く”，不是“聞く”。

㉔ “揉手”是搓手，两手掌相对而搓，是道歉或者请求时的动作。

⑬⑤ “しかし葉子がこの家にいるのだと思うと，島村は駒子を呼ぶことにもなぜかこだわりを感じた。”

句中的こだわり是心存芥蒂或顾忌。由于岛村的心越来越倾向于叶子，不愿意叫叶子看到他和驹子的过从甚密，所以不好意思再叫驹子到旅馆里来。

⑬⑥ “駒子の愛情は彼に向けられたものであるにもかかわらず，それを美しい徒労であるかのように思う彼自身の虚しさがあって，けれども反ってそれにつれて，駒子の生きようとしている命が裸の肌のように触れて来もするのだった。”

这个句子很长，而且中间有插入的成分，显得整个句子有点晦涩。可以先把插入的成分“けれども反ってそれにつれて”拿掉来理解原文。然后把这个成分中的代词それ改为“その虚しさ”来理解，整个句子的意思就通顺了。

其次，句中的“駒子の生きようとしている命”指的是驹子的旺盛的精力。

⑬⑦ “背に吸いついている赤い肌襦絆が隠れた。”这是因为驹子抬起了头，所以红色的汗衫从脖子后头看不见了。

⑬⑧ “…夕日を受けると少し冷たい鉱石のように鈍く光り…”

句中的“少し”这个副词修饰“鈍く光り”，不能理解为“少し冷たい”。那样逻辑上讲不通。因为这里说的是远山上的红叶是赤褐色的，稍微发光。

⑬⑨ “あわてて膝を突いた。”

因为服务员在日本式房屋不能站着同客人说话，那样就算不礼貌。所以叶子注意到了这一点，就慌忙地跪坐下去。

⑭ “女は口説き落してみないことには，分らないわよ。”

句中的“口説き落す”是用花言巧语笼络女人就范的意思。

⑭ “しゃんと裾を捌いて出て行った。”

句中的しゃんと形容姿势正确。“裾を捌く”说的是艺妓穿的衣服下摆很长，走路时要注意，不能让下摆绊脚。“捌く”是处理的意思。

⑭ “あの真剣さのうちには葉子の志望も現われていたのかと微笑まれた。”

句中的“微笑まれる”不是被动态，是表示感情的自发。

⑭ “そんな根なしじゃいけないね。”

句中的“根なし”是名词，表示流浪不定。

⑭ “苦しい息を吐きながら目をつぶると，褄を放して島村によろけかかった。”

句中的“褄”是艺妓们穿的衣服的长下摆，平常拖在踏踏密上，出了屋子就得用手提起下摆来走路。有一个成语，“褄を取る”就是当艺妓的意思。这时是驹子由屋子里出来，走下玄关，就得把下摆提着。当她把身子贴到岛村身上去时，一撒手放下了下摆。

⑭ “…みんな二次会へついて行ったのに…私が家にいなかったら，あんまりだわ。”

句中的“二次会”是正式宴会结束后，兴犹未尽，换个地方，接着再喝一次。有个成语叫“はしこ酒（梯子酒）”就是这样多次换地方喝酒。

“私が家にいなかったら，あんまりだわ”是说别的艺妓都跟着陪二次会的酒，自己没有去，也不在家，而是住在旅馆里，同男人鬼混，太不成样子。

⑯ “酔って管を巻いてると思ってらっしゃるわ。”

句中的“管を巻く”是一个成语，是喝醉了说起话来没完没了，啰啰唆唆。

⑰ “…私はこの山のなかで身を持ち崩すの。しいんといい気持。”

句中的“身を持ち崩す”是堕落的意思。在这里指贪恋酒色，不正经。しいんと是方言，等于じいんと，是拟态词，表示感受之深。

⑱ “ほっといて頂戴。”是“ほうっておいて頂戴”的口头语，“别管”的意思。

⑲ “この荒れた二階では無慚に見えた。”

句中的「無慚」也写作「无惨」，是太惨了的意思。指挺好的家具摆在一间破旧的房间里，看上去那家具太可怜了。

⑳ “狐の嫁入りみたいだね”

句中的“狐の嫁入り”是个成语，有两个意思。其一指东边下雨西边晴的现象；其二是夜间旷野中的鬼火一明一灭。这里是第二个意思，指驹子房间里的电灯。

㉑ “話の継穂がない。”

这里是两个人的话语接不上茬儿。

㉒ “雪催い”是要下雪的天气。要下雨时说“雨催い”。

㉓ “宿で寝ちゃってるのに，どこから持って来た。”

句首的"宿で"应作"宿では"理解，指的是旅馆（里的人）本身，不是"在旅馆"。

⑭ "そう？いやな人ね。なにを言ってるの。しっかりして頂戴。"

句中的しっかり在这里是ぼんやり（神志不清）的反义词。しっかりしろ就是"你要清醒"。

⑮ "…すっかり種切れで，これお友達の借着なのよ。悪い子でしょう？"

句中的"種切れ"是名词，是"东西用尽，着数使完，无以为继"等等的意思。"これお友達の借着なのよ"应作"これお友達からの借着"理解，即不是朋友借穿，而是从朋友那里借来穿。

⑯ "島村は駒子の聞きちがいに思いあたると，はっと胸を突かれた…。"

句中的"聞きちがい"，这里译为"误会"。驹子误会的是什么呢？岛村明明是在夸她好，为什么还误会呢？这是因为驹子心中想的是岛村所谓"好女人"，指的是前文驹子第一次同他相识，就把肉体许给了他这件事。所以岛村才暗自一惊。

⑰ "…眠るどころでなかった。"

句中的どころ是一个副助词，用在否定句中，加强否定意义。也说"どころの騒ぎではない。"都是"顾不得"的意思。

⑱ "謡（うたい）"

这个うたい又说"謡曲（ようきょく）"，但不是汉语所谓的歌谣。是一种古代戏剧，即"能楽"中的词章，用来朗诵或者歌唱。日本人认为一种高尚的娱乐。可以一人独唱或多数人合唱，用于拍鼓伴奏。

⑲ “雪がこいの簾をあけて，雪解の春ころ…。”

句中的こい也说こぎ是长野县方言，意思就是麻布。从这个句子可以知道，麻纱并非直接摊在雪上，而是晒在铺在雪上的帘子上。

⑯ “年を取っては機面のつやが失われた。”

“機面”指布的正面。

⑯ “…暖国の人に見せたいと，昔の人も書いている。”

这里的…ている从语态上讲，是表示动作的结果，不表示动作的进行。表达古人写的书，现在还存在。

⑯ “…陰陽の自然だという言い方を昔の人はしている。”

句中的…ている同前，也是结果态。

⑯ “そのためよけい駒子のみうちのあついひとところが島村にあわれだった。”

句中的“島村にあわれだった”等于“島村にあわれだと思われた。“島村に”是逻辑主语。

⑯ “離れられないからでも別れともないからでもないが…”

句中的“別れともない”的とも不是助词，是“別れたくもない”的口语说法。

⑯ “この温泉場から離れるはずみをつけるつもりもあった。”

句中的はずみをつける是“促进”的意思。另外常见的用法有は

ずみがつく，是做什么越来越起劲儿的意思。

⑯ “雪の底で手仕事に根をつめた織子達の暮しは，…。”

句中的“根をつめる”是专心致志于某种工作，是一个成语。

⑯ “縮のことを書いた昔の本にも唐の秦韜玉の詩などが引かれているが。”

这里所说秦韬玉的诗，指的就是译文中的那两句。虽然一个是织布，一个是做嫁衣，两者的专心致志(根をつめる)是一致的。

⑱ “宿場の街道筋らしく真直に長い町通だった。”

句中的“宿場”是古时的驿站，“街道”是连接城市和驿站的主要交通大道。“町通”是镇上的街道。

⑲ “弱い光の日が落ちてからは寒気が星を磨き出すように冴えて来た。”

句中的“弱い光の日が落ちてから”和“星を磨き出すように”都是副词成分，都修饰“冴えて来た”，整个句子的主语是“寒気”。

⑰ “突然擦半鐘が鳴り出した。”

句中的“擦半鐘”是连击不停，表示近处火警的钟声。

⑰ “子供なんざあ，二階からぽんぽん投げおろしてるんだってさ。”

句中的なんざあ等于などは是なんぞは在口语中的发音。

⑰ “旅の芭蕉が荒海の上に見たのは，このようにあざやかな天の河の大きさであったか。”

句中暗引了江户前期有名俳句诗人芭蕉的一首俳句：

荒海や佐渡に横たう天の川

意思是“波涛汹涌的大海上，横跨着佐渡岛的天河”。这首俳句以其景观宏伟壮丽而脍炙人口。句中的“佐渡”是日本海中的一个海岛，归新泻县管辖。句中的“横たう”本是文言他动词，在这里作自动词用，等于“横たわる”。

(173) 島村も瞼が濡れた。瞬くと天の河が目に満ちた。”

后一句说的是一眨眼，天河就充满了视野。这是说眼中含有泪水，起一种凸透镜的作用，把天河放大了的缘故。这种描写就是所谓新感觉派的有代表性的笔法，在原作中到处可见。

［Ｇｅｎｅｒａｌ Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ］
书名＝日语注释读物
作者＝
页数＝３６８
ＳＳ号＝０
出版日期＝